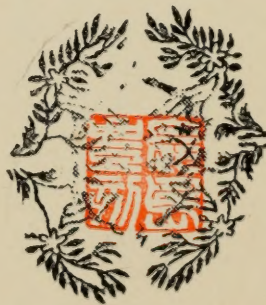
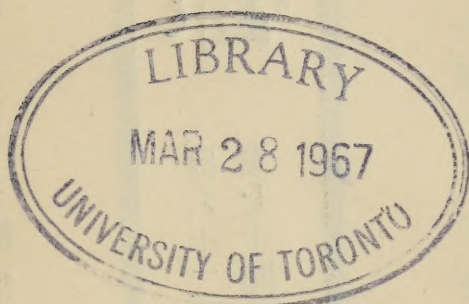
顧問 井上通泰先生
山田孝雄先生
新村出先生

正宗敦夫 編纂
校訂

古名録

自六十二巻
至七十四巻

合資會社 日本古典全集刊行會壽梓

古名錄禽部卷第六十二目錄

水禽類上

豆流（ツル）倭名類聚鈔　［漢名］鶴 本草　［今名］ツル

本草綱目曰、鶴大ニ於鵠ヨリ長サ三尺、高三尺餘、喙長四寸、丹頂赤目赤頰青脚修頸凋尾粗膝纖指白羽黑翎。眞珠船曰、朱晦菴詩謂鶴身白頸尾黑然尾實不レ黑、黑者其兩翼之末耳。五雜組曰、鶴之黑者非レ尾也。兩翅之下翅歛ハ、則傳テ於後ニ似レ尾耳

［一名］**都留** 天文写本和名鈔〇倭名鈔曰、鶴。和名豆流。萬葉集卷第二曰、夢所見鶴云云。流涙止曾金鶴。同卷第四曰、夢（イメニ）所見鶴云云。忘金鶴。同卷第十三曰、人曾告ゲ鶴云云。鳴（イヘクテツル）立鶴。同卷第十四曰、於由爾美要都留。同卷第十五曰、伊米爾美要都流。同卷第十三曰、狂ガ言哉、人之云鶴、玉緒乃。餘畧之

津流 萬葉集卷第四曰、在曾金津流

川留 本草類編曰、鶴。和川留

しら鶴 八雲御抄曰、しら鶴。しらたづとも。萬葉集卷第六曰、塩干レ者、葦邊爾蹉ク、白鶴乃、妻呼音者、宮毛動響二。藻塩草曰、鶴はまな鶴、一説白鶴之

多豆 倭名鈔曰、唐韻云、鸖。鶴別名也。楊氏漢語抄云、多豆。今按、倭俗謂レ鶴爲ニ葦鶴一是也。萬葉集卷第七曰、淡路ノ島爾、多豆渡リ所見。同卷第十五曰、牟故能宇良能、之保非能可多爾、多豆我許恵須毛云云。多麻能宇良爾、安佐里須流多豆、奈伎和多流奈里云云。安之辨爾波、多豆奈伎和多流云云。可良能宇良爾、安佐里須流多豆、奈伎豆佐和伎奴。可之布江爾、多豆奈吉和多流、之可能宇良爾云云。同卷第十八曰、奈呉能宇美爾、之保能波夜悲波、安佐里之爾、伊泥牟等多豆波、伊麻曾奈久奈流。同卷第十四曰、久毛能宇倍由、奈伎由久多豆乃云云。阿倍乃田能毛爾、爲流多豆乃云云〇萬葉集卷第一曰、鶴寸乎白粉云云。同卷第三

曰、塩干ニ家良進、鶴鳴渡。葦邊ニ波、鶴之哭鳴而、潮風云云。日本戀シ久、鶴左波爾鳴ク。同卷第四曰、闇キ夜爾、鳴奈流鶴之、外耳云云。打渡ス、竹田之原爾、鳴鶴之云云。同卷第六曰、云云奥ツ渚爾、鳴成鶴乃、曉之聲。同卷第七曰、塩干者、共潟爾出、鳴鶴之云云。足柄乃、筥根飛超、行鶴之云云。同卷第八曰、夕去者、鶴之妻喚、難波方云云。同卷第十曰、寄鶴。今夜乃、曉降、鳴鶴之。鶴鳴之、所聞田井爾、五百入爲而云云。同卷第十一曰、伊勢能海從、鳴キ來鶴乃、音杼侶毛云云。餘畧之。古事記曰、多豆賀泥能、岐許延牟登岐波

田津 萬葉集卷第二曰、海邊乎指而、柔田津乃云云。同卷第十二曰、柔田津爾、舟ネ乘リ將爲跡、聞キ之苗云云

田鶴 狹衣曰、聞つけたりし田鶴の一声の。伊勢國風土記曰、桑名郡田鶴濱。更級日記曰、入江の田鶴乃聲おしまぬもおかしく

多都 萬葉集卷第十五曰、多都我奈伎、安之徼乎左之弖、等妣和多類、安奈多頭多頭志、比等里佐奴禮婆

多津 萬葉集卷第一曰、此渚崎爾、多津鳴倍思哉

多頭 萬葉集卷第三曰、旦雲二、多頭羽亂。同卷第四曰、旦霧隱、鳴多頭乃、哭耳之所哭云云。同卷第六曰、葦邊乎指天、多頭鳴渡云云。潮干乃瀉爾、多頭鳴渡。多頭我鳴乃、今朝鳴奈倍爾云云。同卷第十一曰、天雲爾、翼打附ケ而、飛鶴乃、多頭多頭思鴨、君シ不座者。同卷第二十曰、宇奈波良爾、霞多奈妣伎、多頭我禰乃云云。徒然草曰、たづのおほいどのは童名たづ君ゝ。鶴を飼給ける故に申は僻事なり

太豆 天文写本和名鈔

蘆鶴 萬葉集卷第三曰、君爾戀、痛毛爲便奈美、蘆鶴之、哭耳所泣、朝夕四天。同卷第四曰、草香江之、入江ニ求食、蘆鶴乃、痛多頭多頭思、友無シニ指天

蘆多頭 萬葉集卷第六曰、帥大伴卿宿ニ次田ノ溫

儛　校
正本
舞ニ作
潴山ヲ

泉ニ聞ニ鶴喧ニ作歌一首。湯原爾、鳴蘆多頭者、如吾(ワカコトク)、妹爾戀哉、時不定(ワカズ)鳴。同卷第十一日、葦多頭乃、颯(サワグ)入江乃、白菅乃云云。八雲御抄曰、つるをば、あしたづといふこそ、あしつるといはねばちからなけれ。たゞつるとはいはんをわろかりて、たづなど〳〵このむ返〻みぐるし云〻。古今著聞集曰、或は、すはまのいそに、あしたづのおり居るかたを作りて

ツル鳥　塵添壒囊抄曰、今云ツル鳥ノ六(ムタヒ)飛ヒケルガ前キヘ飛バデシリザマヘ飛行キケル事アリ、是ハ空ノ風ノツヨク吹ク故ニ、風ニ吹レテ心ナラズシリヘ飛ビケル也。其ノ時ノ風ハ、空ツヨクメ下ニハ風少シモ吹ク事モナカリケリ云云○玉造曰。鸖頭。通雅曰、鶴亦作鸖。北山移文。蕙帳空兮夜鸖怨、漢李倫晉、食貨志作李儒、揚攉或作揚擢、則知寉霍通矣。文選理學權輿亦與此同、其文汲冡周書曰、菌鸖晉孔晁注云、菌鸖可用爲旌翳。字典曰、鸖。正字通、同鶴。淮南子覽冥訓、鴻鵠鶬鸖。史記衛世家、懿公好鸖。左傳、作鶴。觀此則古ヨリ鶴ノ字ヲ用ルコト明也

集註　日本書紀曰、天武天皇白鳳十一年九月、庚子日中、數百鶴當ニ大宮ニ以高翔ニ於空ニ、四尅而皆散。本朝無題詩曰、賦鶴。藤原茂明。何回靈鶴足ニ相憐ハ云云玉羽難レ分白雪前、此鳥非ニ人境鳥ニ云云。俊頼髓腦抄曰、又つるのさはになく聲なん空にきこゆる、といふことのあるゝ。續日本後紀卷第十九曰、嘉祥二年三月庚辰、興福寺ノ大法師等爲レ奉レ賀シ天皇寶筭滿ニ于四十ニ云云副ニ之長歌ニ奉献ス。其長歌詞曰、云云澤鶴ハ命平長美、濱爾出テ、歡舞天云云。常陸國風土記曰、茨城郡、覽ニ儛鶴於潴山ニ。山背國風土記曰、久世郡横產鶴。兎道郡貢鶴。大和國風土記曰、宇陀郡貢鶴。平群郡飽波庄貢鶴。攝津國風土記曰、有馬郡貢鶴雁。參河國風土記曰、寶飯郡貢鶴。武藏國風土記曰、荏原郡貢鶴雁鴨鷺雉鶉。安房國風土記曰、平群郡貢鶴雁鸖。加賀國風土記曰、加賀

渚千ニ
改ム
家ノ下
刊本々
アリ

郡貢鶴鵆。駿河國風土記曰、伊穗原郡高橋貢鶴雁。安弁郡廣伴貢鶴厂。廬河郡貢鶴雞厂雉。盆頭郡盆頭貢鶴鵝。明月記曰、安貞元年十二月十日、近代卿相家多成長夜之飲、各結黨群集所々、好而食鵝鵠、尋常山梁等連日群飲之坐、猶乏少々敬歟云云。源氏物語みほつくし曰、日くれがたになりゆき、夕しほみちきて、いりえのたづも、聲おしまぬほどのあはれなるおりから。同若菜曰、ちとせをかねてあそぶつるの、け衣に思ひまがへらる。住吉物語曰、むれゐるたづをわかれつゝ、たゞひとりのみありそうみの。八雲御抄曰、万十一、たづのとゞろといふ、是なくこゑをよそにきく心也。榮花物語曰、日やう〳〵くれて、みぎはのたづのかすみのたえまよりみえたり。かはなみのをとも、つるのこゑも、さま〴〵にこゝろうごかし。桐火桶曰、やり水をかしきみぎりに、つるの一つかひ立めぐりて、みぎはのあしねさやかなるを云々。土左日記曰、かくてうたのまつばらをゆきすぐ。そのまつのかずいくそばく、いくちとせへたりとしらず、もとごとになみうちよせ、えだごとにつるぞとびかふ、おもしろとみるにたへずして、ふなびとのよめるうた云々

形狀

枕草紙曰、つるはこちたきさまなれども、なくこゑ雲ゐまできこゆらん、いとめでたし。四季物語曰、またつるといふ鳥は、木ずゑもおほかるに、この千年の枝になれて、やんごとなきためしにもてかしづかるれど、子をおもふ夜のあはれなるこゑ〳〵、いへばいみじうあさましきものから、ことぶく家には、やうかはりたる翅なるべし。榮花物語初花曰、このたびは、はかまをさへ、しろうしたれば、かくもありぬべかりけりと、しろたへのつるのけごろもめでたう、ちとせのほどをしはかられたり。家中竹馬記曰、羽は云々鶴のすり羽などをも付也。撰集抄曰、鶴千里にとぶ、猶地をはなれず。塵添壒囊抄曰、鶴ハ白色本

也、以可知鶴ハ白色ノ本ナル事ヲ〇本朝食鑑曰、鶴大者高五六尺、長三四尺餘、嘴長六七寸、而蒼黑、丹頂朱頰赤目蒼脚修頸凋尾白羽玄翎、翅裏小羽本白末黑、呼テ號鶴之本白ト、膝粗節高、指纖爪尖。天氣晴朗、和煖淸夾ナレハ則舞レ空、而鳴聲唳(イタリテ)ニ雲霄ニ、以聞ニ十里ニ

〇ひな鶴 藻塩草　［一名］ ひなつる 八雲御抄　［集註］ 公任卿集曰、「ひな鶴をすだてし程に老にけり雲井の程を思ひこそやれ。又曰、ひな鶴をやしなひたてゝ松原の陰にすませんことをしぞ思ふ　［形狀］ 〇本朝食鑑曰、竟ニ巢ニ于野叢ニ、其卵如ニ椰子大ニ、一孕生ニ四五子ニ、或八九子、初ハ黃毛白嘴短翼長脛ニシテ而淺蒼色ナリ、漸ク長以作ニ父母形ニ、此呼號ニ雛(ヒナ)鶴ニ也。本草啓蒙曰、白鶴ノ子モ、初ハ黃色ナリ。按、白鶴ノ子ハ親鳥ノ如ク白色サエズ、頭ヨリ背尾上ニ至テ黃斑也。丹頂ナシ。鶬鷄(マナツル)ノ子ハ首黃色ヲ帶

眞名鶴(マナツル) 倭姫世記　［漢名］ 鶬鷄 本草　［今名］ マナヅル

本草、穎曰、鶬鷄狀如ニ鶴大ニ、而頂無レ丹、兩頰紅。時珍曰、鶬水鳥也。食ニ于田澤洲渚之間ニ、大如レ鶴靑蒼色、亦有ニ灰色者ニ、長頸高脚羣飛

［一名］ まなつる 義經記曰、いづの國まなづるがさきよりふねにのりて云々。源平盛衰記卷第廿一曰、マナ鶴ヘムケテゾ責行ケル。吾妻鏡卷第一曰、武衛自ニ土肥眞名鶴ノ崎ニ乘ニ船ニ赴ニ安房國方ニ給フ　［集註］ 倭姫命世記曰、彼

稍、白眞名鶴咋持廻乍鳴云。此見顯、其鳥鳴聲止云云 云又明年秋之比、眞名鶴皇太神宮當、天翔從ㇾ北來天日夜不ㇾ止翔鳴云。重行集曰、ひなごとに千世もゆづりてまな鶴のいづれの雲に飛かくれけん。藻塩草曰、松かぜのさとにむれゐるまなづるは

ちとせかさぬる心ちこそすれ

〔形狀〕 奥儀抄曰、つるはあしけの馬に似たれば、まなづるのあしけの駒とはよめり〇本朝食鑑曰、眞鶴者頂頸皆白、頰赤背青ク、背後至ニ胸腹ニ悉黑、背至ニ尾前ニ灰色帶ㇾ青、尾白翎羽皆黑。大和本草曰、マナヅルハ色青シ、其大サ黑鶴ヨリ大ナリ。其味亦黑キニ次ゲリ。本草啓蒙曰、鴰鷄。此ニ二品アリ、筑前伊豫三作備前加賀產ハ青蒼色、水戶產ハ背灰色、腹ニ微青アリ、ナベツルト呼、江戶ノ產灰色ナリ、子ズミツルト呼ブ

くろつる 八雲御抄

〔漢名〕 陽烏 本草

證類本草曰、陽烏身黑頸長白咮小ニ鸛背ニ〇本朝食鑑曰、黑鶴者、白頸赤頰、背黑脚蹈、其餘悉純黑也。

〔形狀〕 大和本草曰、黑キ者形小也。足モ亦黑シ、味爲ニ上品ー

於保止利（おほとり） 倭名類聚抄

〔漢名〕 鸛 本草

〔今名〕 シリグロ

〔一名〕 古布 漢語抄〇按ニ、平家物語曰、しらのにつるのもとしろ、こうの羽わりあはせてはひだる矢

本草綱目曰、鸛似ㇾ鶴而頂不ㇾ丹、長頸赤喙色灰白、翅尾倶黑ク、多巢ニ于高木ニ

云々。源平盛衰記曰、切府に鵠ノ霜降破合テ矯タル征矢一手云々。本朝食鑑曰、鸛訓ス古布ト。翅黒而端羽黒中羽表淡白有レ光、比ス霜之布レ地、呼テ號ニ霜降ト而造ニ箭羽ト、ト觀ユレバ、古布ハ鸛ナルコト明シ矣。本朝食鑑ニ、漢語抄用ニ鵠字ヲ訓ニ古布ト誤焉ト云、大和本草ニ、鵠ニコウノ音アル故、アヤマリテ鵠ヲコフトヨミト云、倭名鈔鵠ノ下ニ、漢語抄云、古布、日本紀私記云、久久比。ト二物ヲ合シ註スルヨリ、鸛ト鵠ヲ混ズル也。久々比ハ鵠ニメ、日本紀私記ニ鵠ヲ久久比ト云ヲ以テ證トスベシ。大和本草ニ、古布ト久久比、一物トセントテ、强テクヾヒハクチナハクヒナリ、ト云ハ甚シキ臆斷也。雲井の御法曰、六日けふは大しやう殿供御をまいらせらる云々くゞゐなどいふもの三四たにいたくみやこにはなきなにてこそあるに、十そろへられ侍りけるとうけたまはりしト覩ユ。鸛ハ下鳥ニメ、天子ノ供御トスベキモノニ非ズ。海人藻芥ニモ、大鳥ハ白鳥鴈鴨、此外者不レ備ニ供御ニナリト云、久々比ハ白鳥ニメ、即白鵠タルノ證也。伊勢貞丈雜記曰、くゞゐといふは白鳥の事也。鴈に似て形大シテ白シ〇本草和名曰、鸛骨白鸛、似鵠巢樹者、和名於保止利。倭名鈔曰、鸛、和名於保止利

集註

續日本紀卷第十四曰、聖武天皇天平十三年三月辛丑、攝津職言、自ニ今十四日ニ始至ニ十八日ニ有ニ鸛一百八ノ來集ニ宮内殿上ニ。或集ニ樓閣之上ニ、或止ニ大政官之庭ニ。毎日辰時始來、未時散去。仍遣レ使鎭謝焉。伊勢國風土記曰、安濃郡出鸛鴨鷺云云。山背國風土記曰、久世郡横産鸛鶴鴎雁。兎道郡貢鸛鶴。大和國風土記曰、宇陀郡貢鸛。平群郡飽波庄鸛鶴。攝津國風土記曰、有馬郡貢鸛。參河國風土記曰、寶飯郡貢鸛。形原郡貢鸛鶴。八名郡貢鸛鶴鴎鷺。武藏國風土記曰、荏原郡蒲田貢鶴雁鸛。安房國風土記曰、平群郡石井貢鸛鶴雁鷺等。白濱鶴鸛之類尤充官用多以國府之擧知而調。駿河國風

今名原本、本草とあり今訂す

土記曰、益頭郡八田鶴鶴。止駄郡貢鶴鶴鴨鷺。大津貢鶴鶴鴨鷺

形状 ○本朝食鑑曰、鶴似二白鶴一而長頸、頂不レ丹、翅黒而端羽黒、中羽表淡白有レ光、眼淡青目邊及觜根色赤、觜太長六七寸而黒、脚赤爪指似二鶴之爪指一、尾純白常潜カクメ二于翅羽一而不レ見、能巣二居于高木及臺觀之上一、其飛也奮二於層霄一旋リ遶テ如レ陣、仰レ天號鳴スレハ必主レ有レ雨、其鳴者非レ聲、以レ觜相鳴、性無レ聲舌亦短小、或立二于田澤河海之岸洲一

○於々止利乃保禰（オホトリノホネ） 本草類編曰、鸛骨。和於々止利乃保祢

久久比（クグヒ） 日本紀私記

漢名 鵠 本草 **今名** ハクテウ **一名** くゞひ

本草綱目曰、鵠大ナリ二于鴈一ヨリ、羽毛白澤其翔極高而善ク歩、亦有二黄鵠丹鵠一、湖海江漢之間皆有レ之 梁塵愚案抄。倭名類聚鈔曰、鵠。日本紀私記云、久久比。源平盛衰記曰、鵠（くゝひ）坂、神無の社、醍醐路にかゝり。日吉行幸記曰、鵠坂、馱餉の御儲もうるはしくて

古比

新撰字鏡曰、鵠。胡穀反、黄鵠久々比、又古比。按漢語抄ニ鵠ヲ古布ト云、比布（ヒフ）ノ字五音相通ニ據テ相誤也。古比ハ鵠、古布ハ鸛也

くゝ井

義經記曰、しらのにくゞ井の羽をもつてはぎたるくつまきの上十四束にこしらへて。又曰、しらのにくゝ井の羽にてはぎたる矢に云々

久々伊太 本草類編 之呂止利

倭名抄國郡部曰、讃岐國白鳥、之呂止利。萬葉集第四曰、白鳥能飛（トバ）羽山松之、待乍（マチツヽ）曾云云。按ニ日本書紀曰、仲哀天皇元年閏十一月乙卯朔戊午、越國貢ニ白

爰ノ上白雉アルベキカ
築ノ下刊本之字アリ
等ノ下同唱曰ノ二字アリ
ロロ刊本呂ニ作ル

鳥四隻一。孝德天皇紀曰、爰見、我日本國譽田天皇之世、白鳥樔レ宮。續日本紀卷第十一曰、聖武天皇天平五年春正月庚子朔、越前國獻二白鳥一。續日本後紀卷第十四曰、承和十一年六月己未、太宰府獻二白鳥一双一。常陸國風土記曰、香島郡、郡北三十里白鳥里、古老曰、伊久米天皇之世、有二白鳥一、自天飛來、化爲二僮女一、夕上朝下、摘レ名造レ池、爲二其築レ堤乎徒二積二日月一、築ク、々ハ壞テ、不レ得二作リ成一、僮女等、志漏止利乃、芳我都々弥乎、都々牟止母、安良布麻目右疑、波古叡。斯クロロニ唱テ升レ天、不二復ク降來一、由レ此其ノ所ヲ号二白鳥ノ鄉一。ト觀ユ。延喜式卷第三曰、臨時祭。國造奏二神ノ壽詞一。白鵠二翼、垂レ軒。同卷第八曰、祝詞。出雲國造神賀詞。白鵠シラトリ乃生御調能。トミユレバ、白鳥ハ白鵠タル明證也。續日本紀卷第九曰、聖武天皇神龜三年二月辛亥、出雲國造從六位上出雲臣廣嶋齋事畢、獻二神社劒鏡幷白馬鵠シロトリ等一。出雲國風土記曰、出雲郡禽獸鵠

止利 常陸國風土記　白鳥 延喜式。　志漏

豐後國風土記曰、化白鳥發西南飛。塵添壒囊抄曰、俗ニ鵠クヾヒヲ白鳥ト云ハ、只其色ヲ指ス歟〇殿中申次記曰、正月十四日、白鳥一。廿三日、白鳥一。二月朔日、白鳥一。七月朔日、白鳥一。恒例年中定例記曰、進士御前にて白鳥切リ申、此まないたを貞凞と貞牧かきて參ル。正月十日東の法中は判門田上杉雜掌と申て於二庭上一御目にかゝる。白鳥一進上。御末より申入ル。二月朔日、先今日畠山殿より、御進上の美物の目錄を御目にかけて、白鳥一、のしあはび千本、備二上覽一ル。正月御㚑始之記曰、二月朔日云々御肴は白鳥一、抖のしあはび千本也。花營三代記曰、應永廿八年正月二日、大草於二御前一白鳥仕佳例也。應永卅一年二月十一日、於二御前一大草三郎左衛門尉公範、白鳥鯉仕也。飯尾宅御成記曰、白鳥一、雁三

【集註】古事記曰、故今聞二高往鵠之音一、始爲二阿藝登比一。尒遣二山

〔一ハ群本ふトアリ〕

邊之天鵠ヽ令レ取ニ其鳥一。新撰姓氏錄曰、鳥取部連云云垂仁天皇ノ皇子譽津別ノ命、年向ニ三十一不レ言語一。于レ時見ニ飛鵠一問曰、此何物。爰天皇悅レ之、遣ニ天ノ湯河桁一尋求、詣ニ出雲國宇夜ノ江一、捕テ貢レ之、天皇大喜、即賜ニ姓鳥取連一。日本書紀曰、仲哀天皇。元年閏十一月乙卯朔戊午、越ノ國貢ニ白鳥四隻一。出雲國風土記曰、秋鹿郡。南入海。秋則有ニ白鵠鴻雁鳧鴨等鳥一。出雲郡、所在禽獸有ニ晨風鳩山鷄鵠一。太平記三十七曰、十二間ノ遠侍ニハ、鳥兎雉白鳥三竿ニ懸雙ベ。深塵愚案抄曰、みなとだに、くゞひやつをり、とろちなや、とろちなや、やつながら、とろちなや。みなと田に、鵠八をりたると云々。家中竹馬記曰、鵠は大鳥、他に異なる故に、鷹の鳥よりも猶前に書也。殿中申次記曰、正月十日、鵠一、判田進上之。武家調味故實曰、白鳥には生皮黑足をい□べし。次皮いりを正するばかり、しかれども時の躰に極ル也。雁白鳥のはぶしのつぎめの一二をば、身よりをしやうするが正也

〔形狀〕〇本朝食鑑曰、鵠似ニ白鴈一而大項、頸長而肥大ナリ。眼前觜上黃赤觜脚倶黑、羽毛白澤、其翔ルコト極高而善步。大和本草曰、鵠鶴ヨリ形大ナリ

〇

黃鵠　延喜式　本草、時珍曰、亦有ニ黃鵠一

箇利　日本書紀　〔漢名〕雁　本草　〔今名〕ガム

〔一名〕加利　本草和名曰、鴻大雁小野鵝、和名加利。倭名類聚鈔曰、鴻鴈。毛詩鴻鴈篇注云、大曰鴻、小曰鴈。洪岸二音、和名加利

苅　萬葉集卷第九曰、獻ニ弓削皇子ニ歌三首。佐宵中

等、夜者深去良斯、鴈音、所聞空、月渡見ユ。妹ガ當リ、茂苅音、夕霧ニ、來鳴而過去、及乏。雲隱レ、鴈鳴ク時ノ、秋山ノ、黄葉片待、時者雖過

可里 萬葉集卷第十五曰、安麻等夫也、可里乎都可比爾、衣弖之可母云云。同卷第二十曰、安麻久母爾、可里曾奈久奈流、多加麻刀能云云。同卷第八曰、今朝鳴之、鴈爾副而云云。同卷第十曰、明闇之、朝霧隱レ、鳴而去ク、鴈者言戀、於妹告社。餘畧之。

加理 古事記曰、仁德記亦一時天皇、爲レ將ニ豐樂ヿ而、幸ニ行シ玉日女島ニ之時、於ニ其島ニ鴈生レ卵、尒召ニ建内宿祢命ヿ、以テ歌問玉フ鴈生レ卵之狀ヲ。其歌曰、云云蘇良美都、夜麻登能久迩尒、加埋古牟登岐久夜。於レ是建内宿祢以レ歌語曰、云云夜麻登能久迩尒、加理古牟登、伊麻陁岐加受。如レ此白而、被レ給ニ御琴ヲ。歌曰、那賀美古夜、都毘邇斯良牟登、加理波古牟良斯

加里 萬葉集卷第十七曰、氣佐能安佐氣、秋風左牟之、登保都比等、加里我來鳴牟、等伎知可美香物

歌理 釋日本紀曰、歌理ハ鴈也

閑り 平家物語

くろおこり 伊勢守貞陸記曰、女房ことば、がん、くろおとり、またがんとも

【集註】山背國風土記曰、久世郡横産雁。和泉國風土記曰、日根郡貢鶴雁鶤鴨鴫。武藏國風土記曰、荏原郡荏原鄉有鶴雁之類。源氏物語夕顏曰、空とぶかりのこゑ、とりあつめて忍びがたき事おほかり。同須ア曰、かりのつらねてなくこゑ。同乙女曰、かりのなきわたるこゑの、ほのかに聞ゆるに。同横笛曰、月さし出て、くもりたき空に、はねうちかはす鴈がねも、つらをはなれぬうらやましく。同まほろし曰、雲井をわたる鴈のつばさも、うらやましくまもられ給ふ。同椎本曰、ながめさしてたち給に、鴈なきてわたる。枕草紙曰、かりのこゑは、とをくきこえたるあはれなり。一本四季物語曰、かりはとこよをしりてゆきかよ

ふ、いづれも〳〵あはれにおかしきふしをそへたるもの也云々。權中納言定頼卿集曰、かりのおほくつれていきけるに「かきつらね雲路にむせぶ鴈がねのはかずも秋の月は見えけり。又曰、かりのなきたり、こゑにもなみだとゞめがたき心ちするに。むかしがたり曰、秋の夕べは雲ゐのかりもをとづれてあはれなるおりから。十訓抄曰、山鳥の鏡に向てなき、鴈の行をなしてとぶ、皆友を思心也。狹衣曰、かりの羽風にまよひなんこそ、心にくからめと思へば。又曰、かりさへくも井はるかになきわたりつゝ又曰、かりのあまたつらねて、なき渡るは、たがたまづさをと、ひとりごちて。住吉物語曰、あらしはげしきそらに、かずたえぬねを鳴わたる鴈も、おりしりがほに聞ゆ。八雲御抄曰、鴈八月、柳のすゑに風ふく時、とこよの國より來て、二月にかへるといへり。又曰、朝には海邊にあさる、夕されば山べをこゆるかりとよめり。まことにもしかり。榮花物語曰、かりのつれてわたるもおどろかれ。同松の下枝曰、かへるかりのひゞきも、とりあつめ、ことさらのやうなるたびのそらなり。同もとのしづく曰、たびねのかりのたよりなげなるこゑもみゝとまりて。平家物語卷第三曰、秋は田のものかりのをとづるゝ樣に云々。同卷第四曰、こしぢをさして歸るかりの、雲井にをとづれ行も、おりふしあはれに思召。同卷第八曰、野鴈のれうかいになくを聞ては、兵共のよもすがら舟をこぐかとおどろかる。同卷第十曰、今はと歸るかりがねの、こし路をさしてなき行も、故鄉へことづてせまほしく。義經記曰、春の空のあけぼのに、かすみにまがふかりがねの、かすかになきてとをりけるをきゝ給ひて。桐火桶曰、月いとさやかにふけすみて、さすがに秋風の物しづかに、とき〳〵をとづれ、はつかりのなきわたりたる心ちし侍る。曾我物語卷第三曰、五つつれたるかりがねの、にしにとびけ

るを。同卷第十一曰、あけがたのかりがねの、ともをかたらひなくこゑもうら山しく云々。吉野拾遺曰、おりふし鴈のとをりければ。殿中申次記曰、正月十四日、鴈一。河越記曰、田面の雁は友をしたひ。六代勝事記曰、みなみにかけるはつかりもうらやましく。東關記行曰、折しも一行の鴈がね空に消ゆくも哀なり。太神宮參詣記曰、沙に下居る鴈金の、浪まをつたふよそほひ。歌林四季物語曰、白たへの、きぬたのをと、思ひつらねて、なきわたる、かりのこゑ〳〵、月にふれ、露にそぼちても、あはれわするべくもあらぬに。身のかたみ曰、雲井のかりもをとづれて。又曰、かりなどは、あながちにしのぶにあらねども、たまづさのたよりに、秋のかりをば待ともいひ。覽富士記曰、いつくにて侍しやらむ、霧わたれるひま〳〵より、いなばほのかにみえて、嶺の空さへえむなるに、鴈つれてとぶ。俊賴髓腦抄曰、月まことにくまなけれど、そらにゆくかりのかずさへにみえず、ともに見えぬにては猶かげさへとこそよみけめ云々。本朝無題詩曰、雲雁幾声落枕窓。陽祿門院三十三回忌の記曰、空とぶ鴈のつばさも、軒端をすぐる聲々に云々。赤染衛門集曰、かへるに風のいとあらくて、いしべといふところにとまりて、日ごろあるに、かりのなきしを云々。西行物語曰、こしぢのかりもをとづれ。高倉院升遐記曰、こし地にかへるかりがねにたまづさをつけてもなぐさむべきに。又曰、かりの雲井をすぐるをきくにつけても云々。源平盛衰記卷第十七曰、折知がほに鳴厂の音さへつらくぞ聞召。撰集抄卷第二曰、旅鴈としてはこゝろの空にも歸りけん。同卷第九曰、胡鴈のつらなれる音を聞はんべるは、その事となく心のすみて、すゞろに涙のこぼるゝぞとよ。つれ〳〵曰、鴈(かり)なきてくる比。又曰、中宮の御方の御湯殿のうへのくろみ棚に、鴈の見えつるを、北山入道殿の御覽じて、歸らせ給

て、やがて御文にて、かうやうの物、さながら其姿にて、御棚にゐて候し事、見ならはず、さまあしき事之云云。筑紫道記曰、賤の山田に、鴈のうち鳴などする所〳〵を過て云〻折ふしも空飛鴈の鳴わたるにも。

富士紀行曰、あけぼのゝ空霧わたりて、鴈の鳴侍るを聞て。金槐和歌集曰、まな板といふものゝ上に、鴈をあらめざまにして置たるを見てよめる云云。餘材之

形状 清輔奥儀抄曰、玉江とは越前の國にあり。鴈は春は北へかへるに、はねつかれぬるは、越前越後などにおちとまりて、夏は江のあし、野の草などの中に、はねもぬけ、毛もおちてはひありくなれば云〻○本朝食鑑曰、雁蒼黒而腹有二黒斑一、背脚黄者號二眞鴈一也

附録 四

○始鴈 萬葉集 **一名** 初鴈 殿中申次記 はつかりかね 撰集抄

集註 萬葉集卷第八曰、九月之、其ノ始鴈乃、使爾毛、念心者、可聞來奴鴨。殿中申次記曰、八月朔日、禁裏様へ參、初鴈一、例年進上之。朝倉彈正左衛門尉。初鴈一、例年進上之。武田伊豆守。撰集抄卷第五曰、風しのゝ篠葉草にゆることをり草の露もろくて、物がなしき折節、はつかりがねの、雲井にほのかになきわたるをきくに。北畠親房卿記曰、時ニ隆資之青侍三四人與レ客座隔二障子ヲ一候二次之間ニ一、潜密私語ノ論ニ件ノ初鴈ヲ一、其ノ說ニ云、鴈ハ是レ三秋第一之春物也、時漸ク去レ暑節、凉風淸颯焉甚有レ食味ト附ニ之庖厨人ニ一早於ニ饌ニ一飡セン者、愈酒酣有ント云レ興矣、又遙ニ去リ二其座ニ一十餘間、庖人之居所仕丁下部數十人群居ノ、僉謂テ曰、中秋之厂數翼飛行、此物尤以當年之最初也、與ニ之ヲ商賈ニ一其代リニ得ニ金錢數枚ヲ一、而各叶ニント云所欲之願ニ一矣。明月記曰、天福二年九月十四日、月出之間聞初鴈

○箇利古武 日本書紀。仁德天皇五十年

春三月壬辰朔丙申、河內國人奏言、於茨田堤雁產之、卽日遣使令視、曰既實也。天皇於是、歌以問武內宿祢曰、多莽耆破屢、宇知能阿曾、儺虛曾破、豫能等保臂等、儺虛曾波、區珥能那餓臂等、阿耆豆辭莽、椰莽等能區珥々、箇利古武等、儺波企箇輸挪。武內宿祢答歌曰、夜輸彌始之、和我於朋枳彌波、于陪儺于陪儺、和例烏斗波輸儺、阿企蔆辭摩、挪莽等能倶珥珥、箇利古武等、和例破枳箇儒

形狀　大和本草曰、鴈北土ニテ子ヲウム。邊要分介考、粆弗加考曰、シモジリ嶋蝦夷ノ東北之此島ヨリ前路ハ夏中モ雁常ニ居ルナリ、ウセシリ嶋雁ハ夥シク手捉ニナルベシ、夏中モ常ニ居ル、雁ノ卵ヲ拾ヒ、叺ニ入レ、三叺モ四叺モ脊負テ歸ルホドナリ。同哈刺士考曰、シメレイ夏月雁遊ブ所アリ

○鴈櫓　淸輔奥儀抄曰、鴈櫓といふことあり。かりのなくこゑは、櫓をすに似たり。六代勝事記曰、夜鴈の遼海になくをきゝても、つはもの舟をこぐかとおどろく。源平盛衰記卷第四十八曰、夜の雁雲井に啼渡を聞ては、兵船を漕かと魂を迷す。豐臣勝俊朝臣九州のみちの記曰、霞のうちより鴈の声かと聞えて、から櫓のをとしたるもおかしきに

○可里我禰　萬葉集卷第十五曰、可里我禰曾奈久。安思必奇能、山等妣古由留、可里我禰婆。同卷第八曰、今朝之旦開、鴈之鳴聞都。巫ノ部麻蘇娘子雁歌一首。誰聞都、從此間鳴渡、鴈鳴乃

鴈我禰　萬葉集卷第十七曰、鴈我禰波、都可比爾許牟等、佐和久良武、秋風左無美、曾乃可波能倍爾

鴈音　萬葉集卷第十三曰、鴈音文、未來鳴云云。吾背子者、待跡不來、鴈音文、動而寒

鴈之鳴　萬葉集卷第十曰、鴈之鳴乎、聞鶴奈倍爾、高松之云云。鴈之鳴、聲聞苗荷云云。同卷第十九曰、見歸鴈歌二首。燕來、時爾成奴等、鴈之鳴者、本鄕思都追、雲隱喧

鴈

之哭 萬葉集卷第八曰、久堅之、雨間毛不置、雲隱々、鳴曾去奈流、早田鴈之哭

鴈哭 萬葉集卷第十曰、詠レ鴈。吾屋戶爾、鳴キ之鴈哭、雲上爾、今夜喧成、國ッ方可聞

鴈泣 萬葉集卷第九曰、師付之田井爾、鴈泣毛、寒ク來喧奴云云

鴈鳴 萬葉集卷第十曰、鴈鳴之、寒キ朝開之、露有之云云。秋風爾、山跡部越ル、鴈鳴者云云。鴈鳴者、今者來鳴キ奴云云。鴈鳴乃、來鳴之共云云。鴈鳴之、寒ク鳴從云云。鴈鳴之喧之從云云。鴈鳴乃、所聞空從云云

折木四哭 萬葉集卷第六曰、折木四哭之、來繼ハ皆ル石此續云云

切木四之泣 萬葉集卷第十曰、左小牡鹿之、妻問時爾、月乎吉三、切木四之泣所聞、今時來等霜

大鴈 古今著聞集

【漢名】 鴻 本草

【今名】 ヒシクヒ

【一名】 加利 新撰字鏡曰、鴻。加利。倭名類聚鈔曰、鴻鴈。毛詩鴻鴈篇注云、大曰レ鴻、小曰レ鴈。和名加利

證類本草曰、陶隱居云、詩云、大曰レ鴻、小曰レ鴈、今鴈類亦有ニ大小一、皆同一形

按日本書紀モ鴻ヲカリト訓ズ

【集註】 駿河國風土記曰、鳥渡郡西島、產鴻雁。致乃、出鴻厂。薦河郡、桃沢池、令レ棲ニ鴻厂鶴鴨鷺。益頭郡、燒津有鴻厂鶩雉。日本書紀曰、雄略天皇十年秋九月乙酉朔戊子、身狹村主青將ニ吳所レ獻二鵝一、到ニ於筑紫一。是鵝爲ニ水間君犬一所レ囓死、由レ是、水間君恐怖憂愁、不レ能ニ自默一、獻ニ鴻十隻與ニ養鳥人一、請ニ以贖レ罪。天皇許焉。古今著聞集卷第十八曰、ある人のもとに、わかき

さぶらひ共よりあひて、大鴈をくはんとて、したためける所へ、年寄たるさぶらひ一人來たりければ、いかゞして此鴈をくはせじとおもひて、殿へめされ給に、いそぎ參り給へ、とわかき侍共いひければ、老たる侍、この鴈をわれにくはせじとて、かくいふとは思ながら、其座を立て、かた〴〵にてかくぞよみける。「こゝろえつ鴈くはんとてわかたうが老たる物をはじきだすとは

形狀　○本朝食鑑曰、鴻類ニ鴈而大、背頸倶蒼黑、翮亦深黑ナリ。有ニ腹淡白ナル者ー、有ニ腹黑斑者ー。大和本草曰、鴻ヒシクヒハ鴈ヨリ大ナル事一倍餘ナリ、腹ノ毛ウス白シ。鴈ヨリ味ヲトル。鴈ハ腹マダラ也。鴻ハマダラナラズ

白鴈　續日本紀　和漢通名

集註　續日本紀卷第五曰、元明天皇和銅五年三月戊子、美濃國獻ニ木連理幷白鴈ー

續本事詩曰、北方白鴈似ㇾ鴈而小、色白秋深乃來、白鴈至レハ則霜降、河北ノ人謂ニ之ヲ霜信ト

形狀　○本朝食鑑曰、全體白而翮翮黑、觜脚紅者白鴈也。大和本草曰、白雁常ノ鴈ヨリ小也。北土及武藏相模坂東ニ多シ

○朱鴈　延喜式　祥瑞　太平御覽曰、漢書云、武帝太始三年、幸東海獲赤鴈、作ニ朱鴈之歌ー。香祖筆記曰、漢赤鴈朱鷺皆異物也　今案　今朱鴈ト云アリ、雁ニ同クメ背頂淺藷黑色也

○五色鴈　延喜式　祥瑞　太平御覽曰、漢書郊祀志、宣帝於ニ西河ニ築ニ世宗廟ー、有ニ五色鴈ー集ニ殿前ー。唐書曰、貞元十年同州獻五色鴈

下音ハ音押トアルベキナリ。鳧鷖ノ處ニ下音鳥嵇反トアリ

軻茂 日本書紀 【漢名】 **鳧** 本草 【今名】 **カモ**

本草綱目曰、鳧ハ東南江海湖泊中皆有レ之。數百爲レ羣晨夜蔽レ天ニ而飛、声如ニ風雨一、所レ至ル稻粱一空シ。陸機詩疏ニ云、狀似レ鴨而小、雜青白色、背上ニ有レ文、短喙長尾、卑脚紅掌。或云、食用ニ綠頭者爲レ上、尾尖者次レ之

【一名】**可母** 萬葉集卷第十四曰、水久君野爾、可母能波抱能須云云。安之能葉爾、由布宜利多知氐、可母我鳴乃、左牟伎由布敝之、奈乎波思奴波牟〇可母ヲ鴨ニ用ル例。萬葉集卷第五曰、阿比美都流可母。同卷第十曰、今夜會ル可母。同卷第十二曰、不相人可母云云。妹爾不相可母云云。所沾可母。同卷第十四曰、安敝流伎美可母。餘畧之。同卷第四曰、外ニ居而、戀乍不有者、君之家之、池爾住云、鴨二有益雄。倭名鈔曰、鴨。加毛、下音。日本書紀曰、飯企都鄧利、訶茂豆句志摩爾、和我謂爾志云云。釋日本紀曰、飯企都鄧利、瀛津鳥也。是欲レ讀レ鴨之發語也。藻塩草曰、おきつ鳥、かもいふ船のかへりこば云云

可毛 萬葉集卷第二十曰、水ッ鳥乃、可毛能羽能伊呂乃、青馬乎云云。鴨ヲ可毛ト云例、同卷第五曰、烏梅能波奈可毛。同卷第十二曰、所念可毛。同卷第十四曰、於毛波流留可毛。同卷第十五曰、麻多於伎都流可毛。云云 安波奴許呂可毛。餘畧之

青頭鷄 萬葉集卷第十二曰、戀渡青頭鷄。按事物異名錄云、青頭雞。魏志ニ帝方ニ食スルコト優レ人ニ、唱ニ青頭雞ト、青頭雞者鴨也。陔餘叢考曰、魏志司馬懿、將ニ統レ兵拒レ蜀、許允等謀因其入請帝殺之已書詔優人於帝前唱青頭雞青頭雞者鴨也。古エ鳧鴨通用シテ カモトスル ヲミレバ、青頭鷄ヲ以テカモトスルコト明也〇武家調味故實曰、鴨の男鳥をば惣名に青くびといふ、但女鳥をばたゞ

かもの鳥と云也。壒囊抄ニモ、アヲクビト云。本草綱目主治諸腫ニ、青頭鴨ト出。古文正宗曰、小鳧有青首者○鳧ヲカモト云ル例、萬葉集卷第七曰、過不勝鳧。同卷第十一曰、氣緒爾、妹乎思念有、年月之、往覽別毛、不所念鳧。木海之、名高之浦爾、依浪ノ、音高キ鳧、不相子故爾。倭名抄曰、爾雅集註云、鴨。野名曰レ鳧。家名曰レ鶩。大和本草曰、鴨ヲカモトスルハ非ナリ。鴨ハアヒロナリ。鳧ハ野鴨ト云。按ニ、常州名勝志云、鴨城舊傳吳王聚ニ鳧鴨一牧ニス之ヲ於此一。然則古エ鳧鴨通用スル事可レ知也

加茂 元亨釋書曰、鴨。和訓加茂

乎加母 萬葉集卷第十四曰、於吉爾須毛、乎加母乃母己呂、也左可杼利、伊伎豆久久〔○衍〕伊毛乎、於伎氏伎努可母

青羽鳥 藏玉集

ま鴨 藻塩草曰、ま鴨、眞鴨也。室町殿日記曰、眞鴨七羽

許毛 萬葉集卷第二十曰、多知許毛乃、多知乃佐和伎爾、阿比美豆之、伊母加己己呂波、和須禮世奴可母

麻可母 萬葉集卷第十四曰、於吉都麻可母能、奈氣伎曾安我須流○倭名抄國郡部曰、讚岐國阿野郡鴨部、加毛

〔已下同稱カモノ字〕

加母 萬葉集卷第一曰、船出爲加母。同卷第五曰、那何列久流加母。同卷第十八曰、古非和多流加母。同卷第二十曰、伊波非弖之加母。餘略之

我母 萬葉集卷第四曰、將見因毛我母。同卷第五曰、美牟必登聞我母。同卷第十五曰、安米能火毛我母。同卷第十七曰、多治可良毛我母。同卷第十八曰、波之伎故毛我母。同卷第十九曰、將因兒毛我母。同卷第二十曰、知登世爾母我母。餘略之

我毛 萬葉集卷第十四曰、由都可爾母我毛。同卷第十七曰、伎牟餘之母我毛。同卷第十八曰、之良多麻母我毛。餘略之

賀聞 萬葉集卷第一曰、處女之友者、之吉召賀聞

香蒙 萬葉集第二十曰、

美夜故杼里香蒙

賀毛 萬葉集卷第十九曰、鳴知等理賀毛

賀母 萬葉集卷第十四曰、伎美我與母賀母。同卷第十八曰、安比見都流賀母

可僻 萬葉集卷第五曰、多布刀伎呂可僻

香聞 萬葉集卷第一曰、見禮常不飽香聞。同卷第二曰、又將見香聞。同卷第二曰、雖見不飽香聞。屋前之石竹開家流香聞。同卷第四曰、戀ル物香聞。同卷第六曰、所念武香聞。忍而有香聞。同卷第十五曰、奈里爾家流香聞。餘略之

香毛 萬葉集卷第二曰、有亘勢濃香毛。同卷第十二曰、所念ル香毛

加毛 萬葉集卷第五曰、阿利己世奴加毛。同卷第十五曰、見禮杼安可奴加毛。同卷第二十曰、由伎加亘努加毛。餘略之○新撰字鏡曰、鴨。加毛。古事記曰、意伎都登理、加毛度久斯麻邇。延喜式曰、美濃國安八郡、加毛神社

香物 萬葉集卷第十七曰、安禮波須流香物。乎美奈敝之香物。等伎知可美香物

香裳 萬葉集卷第二曰、飽不足香裳。同卷第三曰、淺爾家留香裳。同卷第四曰、今夜相有香裳。同卷第六曰、所念ム香裳。同卷第七曰、惜夕香裳。同卷第八曰、打見都流香裳。同卷第十二曰、將相物香裳。餘略之

香母 萬葉集卷第十四曰、爾呂等敝奈香母。同卷第十五曰、須疑爾家流香母。同卷第十七曰、今日見都流香母。同卷第十八曰、於毛保由流香母。同卷第二十曰、奈氣吉都流香裳。餘略之

我聞 萬葉集卷第五曰、爾牟必登母我聞

可物 萬葉集卷第九曰、鳴河蝦可物

欲得 萬葉集卷第七曰、將見因毛欲得

可聞 萬葉集卷第一曰、見禮跡不飽可聞。同卷第二曰、將言可聞。同卷第三曰、吾於富吉美可聞。同卷第三曰、君爾不相可聞。餘略之

【集註】 常陸國風土記曰、行方郡自ニ無梶河ー達ニ于部陲ー。

正本云。垂ノ誤カ　御時鴨邊、校正本、躬射、鴨迅ニ作ル　綠紅刊本　腹同ナシ

有鴨飛度。天皇御時鴨邊應弦而墮、仍名其地謂之鴨野。本朝麗藻曰、冬日於雲林院西洞同賦境靜少人事詩。一首幷序。源道濟。云云而貯泉脉、江鳧海鷗萃止其間云云。山背國風土記曰、久世郡槙產鴨。兎道郡貢鴨。出雲國風土記曰、秋鹿郡深田池有鴛鴦鳧鴨。枕草紙曰、かもははねの霜うちはらふらんとおもふぞおかし。曾我物語曰、かもをもさきをもつれよかし。吾妻鏡卷第二十六曰、貞應元年四月廿六日、近日、前濱腰越等浦々、死鴨寄來之間、依彼恠於前濱被行七座百恠祭、國通朝臣、知輔、親職、忠業、重宗、文元等奉仕之。俊賴髓腦抄曰、あしまにすだくかものうきねも、たらぬこほりせきがたくなりぬれば、たまものやどにくることとたえぬとうらむ。仙覺萬葉集註釋第二曰、まがりのいけ、日本紀には、かもをぞおほくこの池にははなたれたりける、といへるとかけり。同第十四曰、鴨は水をくゞれば、みくゝ野をよそへよめり。東關記行曰、をしかもの、うちむれてとびちかふさま云云。催馬樂曰、いかにせんや、をしのかもどり、いでゝゆけば、おやはありくとさいなめど、よづまはさだめつ、やさきんだちや

形狀

萬葉集卷第十五曰、由布佐禮婆、安之敝爾佐和伎、安氣久禮婆、於伎爾奈都佐布、可母須良母、都麻等多具比豆、和我尾爾波、之毛奈布里曾等、之路多倍乃、波禰左之可倍氐、宇知波良比云云。塵添壒囊抄卷第八曰、土鴨書ケルハ、鳥ノ名歟。土鴨ヲバ、アヲガヘルトヨム云云。アヲクビト云フカモノ、クビノアヲキニ似タレバ、カモト書リ云云。（土鴨、爾雅曰、在水者黽、註耿黽也、似青蛙大腹、一名土鴨。大アヲガヘル也）本朝食鑑曰、頭頸深綠、喉ノ下白、胸腹紫有黑點、腹ノ毛灰白帶淡紫色、有黑小斑、背灰色有黑斑、翅蒼黑ニメ而翮純黑、翮上小羽深綠交白、蒼觜短啄紅掌卑脚、俗呼テ稱眞鴨、其雌者淡黃赤色、交蒼黑毛而作斑、翅翮蒼黑、蒼觜短啄、紅掌卑脚

底本作粗

くろかも 仙覺萬葉集註釋

一名 かる 仙覺萬葉集註釋第二日、かるト云ハ鴨のたぐひ也。ヰなか人は、くろかもなど云也

集註 ○本朝食鑑曰、有ニ輕鴨者、全體黑色、頸後帶青有光、眼上ニ有ニ淡白條、觜黑而喙端淡赤、腹淡赤白色而有ニ黑縱横紋一條、脚掌俱赤、其味亦佳、次ニ于眞鴨ニ者也

秋沙 萬葉集

今名 アイサ

一名 あぢさ 秋紗 八雲御抄曰、秋紗、河にゐる鳥之 阿知 藻塩草○萬葉集卷第七曰、詠鳥。山ノ際爾、渡ル秋沙乃、往將居、其ノ河ノ瀬爾、浪立勿湯目 阿遲 萬葉集 安治 同上 安遲 同上 味 萬葉集卷第十一曰、味乃住、渚沙乃入江之、荒磯松 萬葉集卷第十四曰、阿知乃須牟、須沙能伊利江乃、許母理沼乃云云。倭名鈔國郡部曰、因幡國高草郡味野、安知乃。越前國今立郡味眞、阿知末。日本書紀曰、味耜此ヲ云ニ婀膩須岐ト。味經此ヲ云ニ阿膩賦。又曰、味耜高彥根神。古事記曰、阿遲鉏高日子根ノ神。又曰、阿遲志貴高日子根神。又曰、阿治志貴日子根神。此皆味ヲ阿知ト云證也

正誤 大和本草曰、アイサ萬葉ニ秋紗。本草啓蒙曰、アイサガモ、萬葉集ニ秋紗ト云、倶ニ誤也。萬葉集ニハ秋沙ニ作リ、八雲御抄ニ秋紗

ニ作レリ

今案　阿知ハ卽秋沙也。藻塩草ニ、アヂサト云、今アイサト云。安治村ハアヂカモノ群ヲ成ヲ云。卽アイサノ群也。萬葉集卷第三曰、奧邊波、鴨妻喚、邊津方爾、味村左和伎云云。邊都返者、阿遲村動、奧邊者、鴨妻喚。同卷第四曰、味村乃、去來者行跡云云。反歌。山羽爾、味村騷、去奈禮騰云云。同卷第七曰、安治村ノ、十依海ニ、船浮、白玉採、人ニ所知勿。同卷第十七曰、布勢能宇彌爾、布爾宇氣須惠底、於伎弊許藝、邊爾己伎見禮婆、奈藝左爾波、安遲牟良佐和伎云云。仙覺萬葉集注釋第四曰、あぢむらは鳥之。同卷第七曰、あぢむらのとは、つばさをならぶるちきりをうらやむ心也。明月記曰、嘉祿二年正月廿九日、天晴、朝天群鳥渡レ天、羽音似レ颷、阿治村云云、京中非尋常事、可奇、下人等云、此兩三日如此云云

形狀　○本朝食鑑曰、又有下似ニ小鴨一而頭淡赤、全體帶ニ赤色一、觜脚黒者上、呼號ニ小阿伊佐一。又有下似ニ小鴨一而全體稍白、頭有ニ碧黒冠毛一、觜脚黒者上、呼ニ巫阿伊佐一、又有下似ニ小鴨一而全體黒、目邊黄稍青、兩脇淡白、觜碧脚黒者上、呼號ニ黄黒阿伊佐一。又有下眼上有ニ黒條一、翅上ニ交レ黒者上、呼號ニ嘔阿伊佐一。又有下觜長ク如ニ鸕鷀之觜一、頭如ニ巫阿伊佐一者上、呼號ニ鵜阿伊佐一。此五種モ亦小鴨之西而種類尙多。然常好食ニ小魚一而味不レ佳、最劣ニ小鴨一爾

多加閉　倭名類聚鈔

漢名　沉鳧　正字通

今名　ヲナガガモ

正字通曰、鸍沉鳧似レ鴨好沒。爾雅曰、鸍沉鳧。註似レ鴨而小、長尾ニ背上有レ文

一名　高部　萬葉集卷第三曰、人不榜、有雲知之、潜爲、鴦與高部共、船上住ム。同卷第十一日、高山爾、

高部左渡、高高彌、余ヵ待ッ公平、待將出可開。倭名鈔曰、鵠。漢語抄云、多加閉。本朝食鑑曰、今世以ニ小鳧一號ニ多加閉一

太加戸 新撰字鏡曰、鳧。補倶反、太加戸

［形狀］ ○大和本草曰、コガモト云一種アリ、タカベト云。又尾長鳧トモ云。本朝食鑑曰、有ニ尾永鴨者一、頭頸淡紫色、白ニ眼邊一至ルマデ腹白色、背灰色帶レ碧、而黑毛脇ニ有ニ淡赤白條一、脊黑而兩邊青白、尾永者二三寸許、脚掌倶ニ黑、其味亦佳

小鴨 鷗百首

［漢名］ 刀鴨 本草

［今名］ コガモ

本草、韓保升曰、野鴨有下與ニ家鴨一相似者上、有ニ全別者一、其甚小者名ニ刀鴨一、味最佳

［形狀］ ○本朝食鑑曰、小鴨似レ鴨而小ナリ。雄者頭頸紫色、目後ヘニ有ニ青色一、背蒼ニシテ帶レ赤ヲ有ニ花紋一、兩脇碧ニシテ有ニ白條一、胸黃有ニ赤黑點一、腹淡蒼兩腰白、翅蒼交ニ綠白黑羽一、脊脚黑ク帶レ赤、雌者淡黃淡赤交ニ黑毛一、頭深灰色。先レ鴨而來、後レ鴨而歸。晨夜成レ群高飛

海加毛 新撰字鏡

［今名］ ウカル

［一名］ 海黑鳥 吾妻鏡　海鴨 同上

［集註］ 吾妻鏡卷第五十曰、弘長元年六月三日、申刻、御所北對西端與ニ臺所東間一、海黑鳥海鴨云名非一云云其ノ飛落、和泉前司

行方郎従等獲レ之、即被レ放ニ海辺一

【形状】○大和本草曰、ウカルハ海濱鹵斥ニアリ、ウカルハ雁ノ大サホドアリ、黒鳬ノ毛色ニ似タリ

阿之賀毛 萬葉集

【今名】アシガモ

【一名】安之我母 萬葉集巻第十七曰、安之我母能、須太久舊江爾云云。敬和下遊ニ覽布勢水海一賦上一首。云云奈呉佐爾波、阿之賀毛佐和伎云云　葦鴨 萬葉集巻第十一曰、葦鴨之、多集池水、雖溢、儲溝方爾、吾將越八方。

【集註】土左日記曰、〽おしとおもふひとやとまるとあしがものうちむれてこそわれはきにけれ。藻塩草曰、〽難波がた入江にめぐるあしがもの玉もの床にうきねすらしも

【形状】○本朝食鑑曰、有ニ葦鴨ト云者一、頭背深灰色、腹白翅間ニ交ニ青羽一、脚黄赤、其味稍好、有ニ蘆鴨ト云者一、頭灰色帶レ赤、眼上有ニ小黒條小白條一、頂上ニモ亦有、胸間赤黒、腹灰白、背灰碧有ニ白條赤黒條黒毛一、翅交ニ青羽一、觜脚倶ニ黒、其味最佳、次ニ于眞鴨一者也。大和本草曰、アシガモ頰ニ巴ノ紋アリ、觜ハ小カモニ似タリ

すゞ 八雲御抄

【今名】スヾカモ

八雲御抄曰、鴨あしかもすゞ、按ニ沖ノスヾカモ羽振シテト云エバ、洋中ニ居スル鳬ノ聲、鈴ヲ振立ル如ヲ云

鷖　刊本綱目鶩トス

底本　作喧

之呂支加毛（シロキカモ）　本草類編　即白鴨　【漢名】鶩　本草　【今名】アイヒル

【今案】本草類編曰、鶩脂、和之呂支加毛乃安不良。白鴨屎、和加毛乃久曾。證類本草曰、鶩。衍義曰、陶隱居云、鶩ハ即是鴨然ゾ有ニ家鴨一、有ニ野鴨一。陳藏器本草ニ曰、尸子云、野鴨爲レ鳧、家鴨爲レ鶩。蜀本注云、爾雅云、野鳧鶩注云、鴨也。如レ此則鳧鶩皆是鴨也。又云、本經用鶩肺、即家鴨也。如レ此所レ說各不レ同。其義不レ定。又按唐王勃滕王閣記云、落霞與孤鶩齊飛、則明知レ爲ニ野鴨一也。勃唐之名儒、必有レ所レ據、故知レ鶩爲ニ野鴨一明矣。白鴨屎ヲ名通觀レバ此、則和漢古ハ鳧鶩相混ジテ皆鴨ト云、故ニ本草類編ニ鴨ヲ加毛トセリ。天文写本倭名鈔ニ、鴨。爾雅注云、鴨（烏甲反、亦作鴨邑徧ニ一）字和名抄曰鴨音押　野名曰鳧（父候切、和名鈔曰、鳧音扶）家名曰レ鶩（亡附反、又音目、和名鈔曰、鶩音木）楊氏漢語抄云、鳧鷖（烏兮切、和名加毛。和名鈔曰、加毛、下烏溪反）和名　鳥也トミエテ、即鳧鴨ヲ倶ニ加毛ト云リ　通雅曰、蒼頡解詁曰、鷖鷗也、其隨レ潮往來者。正字通曰、鷖于擲切、音衣、鷗也。蒼黑色、羣飛鳴隨潮往來。詩大雅、鳧鷖在レ涇。鷖、一名鷗、即カモメ也　本草綱目、鶩。正誤曰、陶以ニ鳧鷖ニ混稱ス、冠以レ鶩爲ニ野鴨一、並誤矣。今正レ之。蓋鳧有ニ野鶩之稱一、故王勃可ニ以通用一、而其義自明矣。廣博物志曰、春秋繁露張湯欲ニ以レ鶩當レ鳧、祀ニ宗廟一、董仲舒曰、鶩ハ非レ鳧鳧非レ鶩、愚以爲不可○本草綱目、鶩。集解曰、案格物論云、鴨雄ナル者ハ綠頭ニシテ文翅アリ、雌者黃斑色、但シ有ニ純黑純白ノ者一、又有ニ白而烏骨者一藥食更佳

【形狀】○本朝食鑑曰、鶩似レ鴨而大、凡雄多クハ瘖ス、偶ヽ雖レ有レ聲不レ喧、雌常鳴而喧シ。能泛ドレ水、能步レ地。但舒緩不レ能ニ捷スミカニ飛、雖レ飛漸不レ過ニ一步。常食ニヒ泥土一、啜ニ穢水一、生レ卵漫ニ落シ不レ定ニ其處一、故不レ能ニ抱伏一、而人拾テ取レ之、使ニ雞伏レ卵

○かりのこ　源氏物語　【漢名】鶩卵　本草

【今名】アヒルノタマゴ　物理小識曰、鴨宜六雌一雄、蒜卵四月出者良、端午不放栖、只乾食不與水、則日日生卵。寄園寄所寄曰、凡鴨卵過ニ淸明ニ、則中不滿殼、宜ニ於春初醃之。致富全書曰、鵝惟食シ五穀稗子及ヒ靑草嫩菜ヲ、不食ニ生蟲ヲ、鴨則靡シ所不ル食、雌鴨無令ル雜ス雄ヲ、常令ニ食足ニ、一鴨可生ニ百卵ニ、毎年五月五日不得ニ放栖ニ、只乾喂不可與水、則日日生卵。品字箋曰、卵。羽族之蛋曰卵、凡卵中黃爲陰、白爲陽、魂魄相待也

【一名】鴈乃兒(カリノコ)　萬葉集。枕草紙曰、かりのこ。河海抄曰、鴨子。細流曰、かものこゝ。廣東名勝志曰、藤縣鴨兒灘、在ニ縣南三里ニ

かるの子　武家調味故實曰、かるの子まいらすべき事。ねこあしのほかひに、山吹にても、卯花にても、しきて取つみて、山ぶきの枝を□なし、小弓に張て此上に置べし。是□むきては、此小弓にてちゝときるべし。あいかまへて、刀をよすべからず

【今案】本草綱目、鶩卵ノ發明ニ、今ノ人塩ニ藏鴨子ニ、其法多端ト覩エテ、和漢鴨子ハアヒルノ卵タル事明也。鳧ハ日本ニテ卵ヲ產セズ。應永記曰、當年ノ鴨子、沢山ニイデキ、水ヲ泳(ヲヨ)ゲル体、御目ニ可懸ト申ス。卽鴨子ハ鶩子(アヒルノコ)タル證也。言塵集曰、鴨の子にもとくらは泳なり。萬葉集曰、日並草壁皇子尊殯宮之時歌云云、皇子尊草壁宮舍人等慟傷作歌二十三首云云。鳥塒立(トグラタテ)、飼之(カヒシ)鴈乃兒(カリノコ)、栖立去(スダチナ)者(バ)、檀岡爾(マユミノヲカニ)、飛反(トビカヘリコ)來年(ネ)。日本書紀持統三年四月朔、皇太子草壁皇子、薨トアレバ、此歌四月ノ歌ニテ、雁ノ歸リシ跡也。然レバ鴈乃兒(カリノコ)ハ鶩(アヒル)ノ兒(コ)也。日本書紀ニモ雁ノ河内國ニ產スル珍事ヲ載テ、雁ハ日本ニ產事未聞ト云リ。蜻蛉日記曰、三月つごもりがたに、かりのこのみゆるを、これとをつゞかさぬるわざをいかでせん、とまさぐりに、すゞしのいとをなからむすびてはゆひ／＼して、ひ

いぶせなきハ云ふがわりなきノ誤脱ナラン

きたれば、いとようかざなりたり。明月記曰、寛喜二年六月廿二日、一日比在二信成前相公宅一翫二鴨鳥一。百練抄卷第八曰、高倉天皇承安三年五月二日、於二上皇ノ御所一有二鴨(カモ)合ノ事一。近習月卿雲客及北面下﨟等、分二左右二爲二念人一、結二起ニ兼日之儀一、爲二當時之壯觀一、有二勝負舞一。鳬ハ春既ニ去テ、夏絶テ不レ住ヲ以テミレバ、鴨合ト云ハ鶩(アヒル)ヲ合スル也。五六月ハ野鳬ノ不レ可レ有也。釋日本紀ニ、鶩ヲオホカリト云、家ニ養フ鳥也。鶩ヲカリト云モ、家ニ養フ者也。物理小識曰、家禽卵多黃、野禽卵多レ白、蓋レ之家禽皆堅、野黃堅白不レ堅。然則古所レ用鴨子ハ家ニ所レ養鶩(アヒルノタマゴ)卵ニシテ、野鴨(カモ)卽鳬ノ卵ニ非ル事明也 [集註] 源氏物語眞木柱曰、かりのこのいとおほかなるを御覽じて、かんじたちばなどやうにまぎらはして、わざとならずたてまつれ給云々「すがくれてかずにもあらぬかりのこをいづかたにかはとりかくすべき。枕草紙曰、あてなるもの、うすいろにしらかさねのかざみ、かりのこ、けづりひのあまづらにいりて、あたらしきかなまりにいりたる、すいさうのすゞ。清輔家集曰、女のもとにゆきて、かたらいけるに、よもやまにたのめけれど、なをうたがはしきことをのみいひて、かりのこをひとつさしいだしたりければ、その心をとりて「鳥のこの歸るかへるはちぎれども十づゝとをもいぶせなき

乎之(ヲシ) 萬葉集 [漢名] 鸂鶒 本草 [今名] ヲシドリ

[一名] 於之 本草類編曰、鸂鶒。和於之。本草和名曰、鸂鶒。和名乎之。倭名類聚鈔曰、鸂鶒。和名乎之。楊氏抄云、鸂鶒其音溪勅。觀レハ此ヲ則古モ乎之ヲ鸂鶒トセシ乛明シ。本草綱目云、鸂

鶒。其ノ形大ニシテ于鸂鶒ニ而色多ク紫ナリ。亦好ミ並ヒ遊ブ、故ニ謂フ之ヲ紫鴛鴦ト也。陝西名勝志曰、興平縣長安志云、始平原在リ縣北ニ、養フ白鷴鵁紫鴛鴦ヲ。萬葉集卷第二十曰、乎之能須牟、伎美我許乃之麻、家布美禮波云云。同卷第九曰、明卷鴦視云云。同卷第十一曰、離鴛鴦將待。同卷第十九曰、莫蹈爾乎之〇山背國風土記曰、兎道郡貢鴛〇鴛鴦。和産未詳

乎之杼里　萬葉集卷第二十曰、伊蘇能宇良爾、都禰欲比伎須牟、乎之杼里能、乎之伎安我未波、伎美我末仁麻爾。

男爲鳥　萬葉集卷第十一曰、妹戀、不寐朝明、男爲鳥、從是此度、妹使。

烏志　日本書紀曰、耶麻鵝播爾、烏志賦拖都威底云云。釋日本紀曰、鴛鴦雙居也

かほとり　假名文字遣曰、かほとり、皃鳥、をし鳥の異名、一說雉之云々

集註　出雲國風土記曰、嶋根郡前原坡、有ニ鴛鴦鳧鴨等之類一。口池有ニ鴛鴦一。敷田池、有ニ鴛鴦一。前原埼、鴛鴦鳧鴨、隨時常住。餘略之。駿河國風土記曰、益頭郡、貢鶴鶴鴻厂鴨鴛。赤目川、出鴨鴛。餘略之。續日本後紀卷第五曰、承和三年五月庚戌、鴛鴦飛來、双ニ集辨官廳南端一。康富記曰、嘉吉三年五月卄日、蘭臺已下直垂奉伴詣中堂、又円融坊一見了、西生院ともいふ也。後白河院元曆御登山之坊也。言語道斷之遠見也。又此坊主被飼水鳥。但當時只鴛一羽あり云々。源氏物語小蝶曰、水鳥どものつがひをはなれずあそびつゝ、ほそきえだどもをくひてとびちがふ、をしの浪のあやにもんをまじへたるなど、物のゑやうにもかきとらまほしきに。同若菜曰、夜いたくふけゆく、玉もにあそぶをしのこゑ〳〵などあはれにきこえて。古今著聞集曰、あかぬまといふ所に、をし鳥一つがひゐたりけるを、くるりをもちていたりければ、あやまたずおとりにあたりてげり。其をしを、やがてそこにてとりかひて、えがらをばえぶくろに

入て、家にかへりぬ云〻中一日ありて後、えがらを見ければ、えぶくろに、をしの妻どりのはらを、おのがはしにてつきつらぬきて死にて有けり。十訓抄曰、さゆる入江の浪の上に、つがはぬをしのうきねも下やすからぬ思のほど、さこそはと哀也。狹衣曰、池に立ゐるをしのをとなひも、おなじ心におぼされて。高倉院升遐記曰、ちかきみぎはにをしどりのうきねをしつゝ。又曰、いけのをしの、あけゆくたまもにあそぶこゑをきゝて。身のかた見曰、なみまのをしのうはげの霜をはらひ。砂石集曰、中比下野國ニ阿曾沼ト云所ニ、常ニ殺生ヲコノミ、コトニ鷹ツカフ俗有ケリ。アル時タカ狩シテ歸リサマニ、鴛(ヲシドリ)ノ雄ヲ一トリテ、餌袋ニ入テ歸リヌ云云朝見レバ、昨ノ雄ト、ハシクヒアハセテ雌ノ死セルアリケリ。塵添壒囊抄曰、鳥一双(ヒトツガヒ)ノ事。鳥ヒトツガヒト云ハ、一雙ノ心歟。常ニハカク思ナラハス。但唱和集云、化鴛鴦一雙飛ト云ヘリ。サレバ雙ノ字用ベキ歟。歷仁記曰、梶井宮造ハ云云御池ニハ常ニ群居ル鴛鴦ノ、近江ノ湖水ニ不異。仙覺萬葉集註釋第七曰、なゝせのよどにすむとりとはをし鴨などにや。むさし野の記行曰、小磯大磯をみわたせば、をしやかもめの波にたち
さはぐをみれば

形狀

枕草紙曰、水どりは、をしいとあはれなり。かたみにゐかはりて、はねのうへの霜をはらふらんおと、いとおかし。むかしがたり曰、多の夜のことさらさむきには、なみまのをしのうはげしもをはらひ。千首和歌曰、すむをしのをのが毛色も紫の藤なみかくる池の春かぜ〇本朝食鑑曰、形小ニシテ似タリ鴨ニ、毛羽有ニ五采一、頭ニ有ニ玄纓一、頸ニ有ニ紅絲一、尾ノ前有ニ小羽一如ニ船柁一、或如ニ摺扇之半邊一、俗稱ニ劍羽一、是據ニ世談之誕一以名乎。雌者蒼色、目後斜有ニ白條一、翅尾黑腹黄赤黑紋。大和本草曰、首ニ青白ノ長毛垂レ後ロニ腹白シ、ワキニ異毛アリ、背如レ雁、脚赤ク水カキアリ、尾ノ羽如ニ船柁形一、是俗ニ

思羽ト云、翅末翠ナリ、小鳧ヨリ大也、雌ハ文采ナシ、翅ニ翠羽アリ、頭如レ雁、背色灰黑色、腹白ク思羽ナシ○曾我物語曰、をしのつるきばの事云〻かのいしのうへに、おしどり一つがひあがりて、ゐんわうのふすまのした、なつかしげにたはぶれけり。これもかれらがせいにてもやと御らんじけるに、此をしとびあがり、思ひばにて、わうのくびかきおとし、ふちにとびいりうせにけり。それより思ひばをつるぎばと申之

爾保杼里 萬葉集　**漢名** **鸊鷉** 本草　**今名** **カイツブリ**

證類本草曰、鸊鷉、水鳥也。如レ鳩鴨脚連レ尾不レ能ニ陸行一スルヿ、常在ニ水中一、人至レハ即沉、或擊レ之便起。本草綱目曰、似ニ野鴨一而小蒼白文　**一名** **珥倍邇利** 日本書紀曰、珥倍邇利能、介豆岐齊奈。釋日本紀曰、私記云、師說尒保鳥好ク入ニ水中一、故假喩ニ于今死人ノ埋ニ土中一、故謂ニ肉尒保一　**邇保** 倭名類聚鈔曰、鸊鷉。和名迩保　**爾保** 天文写本和名鈔○新撰字鏡曰、鸊、浦覓反、**鳰** 字鏡曰、鳰尒保。壒添壒囊抄曰、鳰。參河國風土記曰、寶飯郡貢鳰○文會雜記曰、近江ノ湖ヲ鳰尒保ノ海ト和哥ニヨメリ。鳰ノ字字彙ニハ見エズ、カイツブリノ事ナリト云ナリ。近江國圖ノ刊行セルヲ見テ、初テニホノ海ト云ヿヲ悟レリ。湖ノ瀨多ノ所ハ鳥ノ頭ニ似タリ、志賀ヨリ北ハ鳥ノ脊ニ似タリ、東ノ方彥根ノ方ハ鳥ノ腹ニ似タリ、昔ノ人ハ能形容シタルニゾ。琵琶湖トハ詩ニモ用ユレ𪜈、ニホノ海ト云ヿ詩ニ用タルヲ見ズ○なぐさめ草曰、鳰鳥　**邇本杼理** 古事記曰、迩本杼理能、阿布美能宇美迩、加豆岐勢那和　**美本杼理** 古事記曰、美本杼理能、加豆岐伊岐豆岐

二寶鳥 萬葉集卷第四曰、二寶鳥乃、潜池水、情有者、君爾吾戀、情示左禰 爾保鳥 萬葉集卷第五曰、爾保鳥能、布多利那良毗爲、加多良比斯云云 丹穗鳥 萬葉集卷第十一曰、念餘者、丹穗鳥、足沾來、人見鴨 柔保等里 萬葉集卷第十五曰、柔保等里能、奈豆左比由氣婆云云 爾保騰里 萬葉集卷第十八曰、爾保騰里能、布多理雙坐、那具能宇美能云云 爾保杼里 萬葉集卷第十四曰、爾保杼里能、可豆思加和世乎、爾倍須登毛云云。同卷第二十曰、爾保杼里乃、於吉奈我河波半、多延奴等母云云。萬葉集注釋卷第十四曰、奥義抄に云、にほどりとは、に井とりと云なり。に井はあたらしといふなり云々。にほ鳥は水のなかにいりてかづくがゆへなり 鳰 塵添壒囊鈔 閑水鳥 假名文字遣曰、にほとり、鳰、鷿鷉閑水鳥

集註

狹衣曰、にほ鳥の跡もむげに御らんぜざらんは、あまりおぼつかなかりぬべければとのたまふを。八雲御抄曰、鳰、にほとりと。うきすはうきてすをくうなり。水底をくゞるゆへに、下道と云。應永なぐさめ草曰、鶯鴨鳰鳥など爰をすみかとちぎり。兼好法師家集曰、ともすればにほのうきすのうきながらみがくれはてぬ世をなげくかな。無名抄曰、にほのすをくふには、しのくきを中にこめて、しかもかれほをばくつろげて、めぐりにくひたれば、しほみてばかみへあがり、しほひればしたがひてくだる也。ひとへにゆられありかんには、風ふかば、いづくともなくゆられいでゝ、おほなみにもくだかれ、人にもとられぬべし。袖中抄曰、にほのうきすとは、にほといふとりの巣は、波のうへにつくりをきて、あだなれば、頼政卿も、にほのうきすのゆられきてとよめり。まさしく池などにあるは、

あちこちくひもてありくと人々申せり。又十郎藏人行家が申けるは、にほのうきす、波にゆられてうかれありくことなし。芦のくきをたよりにてつくりつけたれば、水にしたがひてふかくなれば、したがひてうきのぼり、あさくなれば、したがひてしづみくだる。さればうきすとは云也。李花集曰、「うきしづむにほのうきすも難波江の蘆の此世ははなれざりけり　【形狀】仙覺万葉集註釋卷第二十曰、にほとりは水の中にいりて、魚をとる也。水をかづきて出ぬれば、いきをながくつくべきが故也〇本朝食鑑曰、鸊鷉似レ鴨而小、大ナリ於小鳧ニ頭背翅尾蒼而帶レ赤似ニ騮色ニ頬及頷下頸前紫赤、胸黃有ニ紫斑一腹白嘴黑而短、紅掌好泛ニ遊出ヲ沒于水ニ或相對、相伴旋ニ迴于波上ニ。大和本草曰、カイツブリ二種アリ。二郎ト云ハ形大也。形狀ハ大小同ジ、肉ハナマ臭クメ味不レ美

宇ウ　倭名類聚鈔　【漢名】鸕鷀　本草　【今名】ウ　【一名】于　日本靈異記　ウ　同上　鵜

本草綱目曰、鸕鷀處處水鄉有レ之、似レ鶂而小、色黑亦如レ鴉、而長喙微曲、善沒レ水取レ魚、日集ニ洲渚ニ夜巢ニ林木ニ久則糞毒多令ニ木枯一也

續日本紀卷第二十五曰、天平寶字八年勅曰、天下諸國不レ得下養ニ鷹狗及鵜一以中田獵上。令義解曰、雜供戶謂鵜飼江人網引等之類也。日本靈異記曰、鵜于、此鳥名也。又曰、鵜ウ。延喜式神名記曰、越前國今立郡、鵜甘神社。越中國婦負郡、鵜坂神社。越後國三嶋郡・鵜川神社。備中國小田郡、鵜江神社。同卷第二十六、主稅上曰、鵜原寺料云云。倭名鈔國郡部曰、讚岐國鵜足、宇多利。古事記曰、化レ鵜云云。又曰、以ニ鵜羽ウノハ一爲ニ葺草カヤト一

造二産殿一。新撰字鏡曰、鸕。郎都反、宇。鵜。才賫反、宇。本草和名曰、鸕鷀、和名宇。萬葉集卷第一曰、幸二于吉野宮一之時、柿本朝臣人麿作云云。上瀨爾、鵜川乎立、下瀨爾、小網刺渡云云。同卷第十三曰、隱來之、長谷之川之、上ツ瀨爾、鵜矣八頭漬シ、下瀨爾、鵜矣八頭漬、上瀨之、年魚矣令咋、下瀨之、鮎矣令咋云云

宇 古事記曰、志麻都登理、宇加比賀登母。萬葉集卷第十七曰、遊覽布勢水海賦一首云云。伎欲吉勢其等爾、宇加波多知。山背國風土記曰、兎道郡或宇治或鵜路〇鵜ハ古ユウトス、郎本草ノ鵜鶘ニメ、ガラン鳥也

眞鳥 塵添壒嚢抄曰、眞鳥ノ事。眞鳥トハ、何ノゾ。是數ノ説アリ。常ニハ、鵜ヲ云ト云ヽ。万葉ニハ、鵜ノ歌ニ、眞鳥ノ歌トテ、別ニ載タリト云リ。或説ニハ、眞鳥トハ雉ヲ云、又鶴ヲ云ナンドモ云リ。眞鳥栖、卯名手ノ杜ノ云云是ハ鵜ヲ指ス歌歟。卯名手ノ森ニ、鵜多シト云リ云云。眞鳥モ別ニ可レ有歟。袖中抄曰、まとりとは鵜を云也。又ゐ中のものは鵜をばまとりと申すと云ヽ。仙覺萬葉集註釋卷第七曰、押紙云、私云、眞鳥とは、鵜の一の名也。眞鳥は、海鵜をいふ。河鳥とは、河の鵜なり。かるが故にまとりすむ、うとつゞけたり。眞鳥を鵜ともつゞけたり。又眞鳥は海にすむ鵜なれば、眞鳥すむうみと云こゝろにもかよへる歟。鷲を眞鳥といふとも、こゝは鵜の眞鳥は今すこしかなひ侍るにや

水鳥 萬葉集卷第六曰、玉藻苅、辛荷乃島爾、島回爲流、水鳥二四毛有哉、家不レ念有六。同卷第十九曰、贈二水鳥越前判官大伴宿禰池主一歌一首并短歌云云、叔羅河、奈頭左比泝、平瀨爾波、左泥刺ノ渡シ。早ヤ湍爾波、水鳥乎潜都追、月爾日爾云云。叔羅河、湍乎尋都追、和我勢故波、宇河波多多佐禰、情奈具左爾江家。鸕河立チ、取ラ左牟安由能、之我婆多婆、吾等爾可伎無氣、念之念婆〇仙覺萬葉集註釋卷第六曰、水鳥とかけるはう也。言塵集曰、水鳥とは鵜の

事也

志萬豆止利

倭名類聚鈔曰、鸕鷀。日本紀私記云、志萬豆止利。仙覺萬葉集注釋卷第一曰、鵜といはんとて、しまつとり、うがひなどいふごとし。同卷第十七曰、しまつどりとは、鵜をいふ。この鳥こそ、水をかづきて、魚をくふ能をほどこす、故に絕嶋にすむゆへに、嶋津鳥といふ。魚をくふひま〳〵には、つばさをほさんがために、嶋をすみかとする也。神武紀曰御謠之麼途等利、宇介譬餓等茂。萬葉集卷第十七曰、之麻都等里、鵜養我登母波、由久加波乃、伎欲吉瀨ごと爾、可賀里左之云云。同卷第十九曰、潜鸕歌一首云云、流ル辟田乃、河瀨鮎、年魚兒狹走リ。島津鳥、鸕養等母奈倍、可我理左之云云。反歌。每年爾、鮎之走レ婆、左伎多河、鸕八頭可頭氣氐、河瀨多頭禰牟

くろとり

土佐日記曰、かくうたふをきゝつゝこぎくるに、くろとりといふとり、いはのうへにあつまりをり、そのいはのもとに、なみしろくうちよす。かぢとりのいふやう、くろきとりのもとに、しろきなみをよするとぞいふ。十六夜日記曰、いとしろきすざきに、くろきとりのむれゐたるは、うといふ鳥なりけり

嶋鳥

言塵集曰、嶋鳥、嶋津鳥、眞鳥、嶋津、以上鵜之

川鳥

言塵集曰、川鳥是も鵜之〇永享行幸記曰、御湯殿之うへ、銀の御鵜飼茶碗

集註

續日本紀卷第八曰、元正天皇養老五年秋七月庚午、詔曰、宜下其云云大膳職鸕鷀云云悉放二本処一令上レ遂二其性一。同卷第廿五曰、稱德天皇天平寶字八年冬十月甲戌、勅曰、天下諸國、不レ得下養二鷹狗及鵜一以田獵上。類聚國史曰、延曆二十四年冬十月庚申、佐渡國人道公全成配二伊豆國一。以レ盜二官鵜一也。三代實錄卷第十七曰、淸和天皇貞觀十二年二月十二日甲午、先レ是、太宰府言、對馬嶋下縣郡人卜部乙屎麻呂、爲レ捕二鸕鷀鳥一、向二新羅堺一。乙屎麻呂爲二新羅國一所レ執、縛囚禁二于獄一。同卷第

五十日、光孝天皇仁和三年五月廿六日己亥、太宰府年貢ニ鸕鷀鳥一、元從ニ陸道一進レ之、中間取ニ海道一、以省ニ路次之煩一、寄ニ事風浪一、屢致レ違レ期、今依レ舊自ニ陸道一入貢。源氏物語松風曰、うがひどもめしたるに。同藤のうら葉曰、ひんがしの池に、舟どもうけて、みづし所のうがひのおさ、院のうがひをめしならべて、うをおろさせ給へり。榮花物語曰、二でうどのに、おはしましゝときに、うのいをゝくひてさぶらひけるを、にうだうの大なごんきこゝ給て、にようごどのゝ御かたに、うのいをゝくひて、さむらひけることなどかき給て、いかでかはうはのそらにはしりにけんかもめみゆるによにあへりとは。吾妻鏡卷第十六曰、正治二年七月一日、羽林爲レ覽ニ鵜船一、令レ赴ニ相摸河辺一之給、畠山次郎葛西兵衞尉以下愛レ鵜之輩、依ニ別仰一令ニ供奉一云云。八雲御抄曰、鵜河する所は多けれ共、殊讀ならへる大井、桂、うさき河、宇治など也。うのゐるいはと云は、あらうみなどにあり。吉野拾遺曰、將軍の宮、わかき殿上人あまたともなはせたまひて、よし野川にて鵜をつかはせて御らんありけるに、左衞門尉やすかたが、わかゝりけるときに、鵜のあゆをくらふをみて、あたらことにこそ、鳥のくらふ魚おとりて、まさな事にせさせたまへかし。あみよかるべけれといひけるに、みな人おかしがらせたまひて云々。藻塩草曰、かつら人、鵜つかひ之。うつかひの在所也。山城の桂河之。うをつかふは、暗夜のわざ之。されば月をいとふとよめり。又う河の在所は多けれども、何となくよみつけぬ所はよまず。大井河、桂、宇治、鵜坂河等之。毎年にあゆしはしればさきた河う八かづけて川せ尋ん。よ河たつ五月きぬらんせゝをとめやそとものをもかゞりさすめや。八十氏人など云やうに、おとこ女も今さ月きたりぬと、瀨々にかゞり火さして、うつかふと云也と云々。駿河國風土記曰、伊穩原郡浦田河、有ニ鵜飼業一、充ニ國

善光寺記行ト云ヘルハ誤ニテ兼良ノふぢ河の記ナリ

府之料一、慰二官使之鬱一。鷹河郡蘴科川、國造取二鵜師之貢一。百練抄卷第六曰、大治元年六月廿一日、宇治桂鵜皆被レ弃。續世續曰、宇治川にあそびの舟うたうたひて、うがひなどしていと面白く遊ばせ給けり

【形狀】釋日本紀曰、鸕口喉廣。飮二入魚一又吐二出之一容易之鳥也。古事記曰、又遮二其逃一ル軍ヲ以斬者、如二鵜浮一於河一二。故号二其河一謂二鵜河(ウカハ)一ト也。藻塩草曰、うをつかふは暗夜のわざ也。散木集曰、うといふ鳥の有けるをみて、僧のしたりける、あらうとみればくろきとりかな。善光寺記行曰、江口といふは、攝津國にある同名也。されど遊女などはなくて、夜になれば鵜飼のくだると云をきゝて云々月出ぬほど、江口にいでゝ鵜飼をみる。六艘のふねにかゞりをさしてのぼる。又一艘をまうけて、それにのりて見物す。おほよそ此川ののぼりくだり、やみになれば、獵舟數をしらぬといふをきゝて云々鵜の魚をとるすがた、鵜飼の手繩をあつかふ躰など、けふはじめてみ侍れば、ことのはにものべがたく、あはれともおぼえ、又興を催すものなり。すなはち鵜のはきたる鮎を、かゞり火にやきて賞翫す。これをかゞりやきといひならはしたるとなん。緗素雜記曰、蜀人臨レ水居者、皆養二鸕鷀一繫二其ノ頭一ヲ使レ之、捕レ魚則倒提出レ之至レ今如レ此、予在二蜀中一見二人家一、養二鸕鷀一使(シム)レ捕レ魚、信二然一リ。漁隱叢話曰、按夷貊傳云、倭國水多陸少、以二小環一掛二鸕鷀項一令レ入レ水捕レ魚、日得二百餘頭一、則此事信然。本朝食鑑曰、全體黑色如レ鴉、惟頷下及翅裡脇邊有二白色一爾、長喙微曲、善ク沒レ水取レ魚。日集二洲岸沙石之上一、好曝二西照一、夜、宿二林木城壘之邊一、營レ巢亦林木也。其棲久則糞白粘二于石壁一如二霜雪一、或積毒令二木枯一也。本邦自レ古山川溪澗之漁舟往往、縻(ツナギ)畜フコト數十、放二于水中一而令レ捕レ魚、魚未レ下レ咽時、漁父推二鵜喉一ヲ、則自出。鵜常馴レ之不レ俟二漁手一而吐レ魚、呼稱レ使レ鵜、其漁曰二鵜飼一、其舟曰二鵜舟一。大

抵用ニ細繩ヲ際ニ鵜之翅頭ニ、漁之掌中握ニ鵜繩末ヲ、而放ニ之ヲ水中ニ、一掌數繩運レ之如レ組、就レ中濃州稱巧ナル者、一擧放ニ于十四五隻ヲ、或十一二、其次五六七八、餘州之漁不ニ相及ハ、是悉捕ニル年魚ヲ之術也。城之大井川、宇治川、江之田上川、濃之諸川最有、關西關東亦多矣

【正誤】大和本草曰、本邦ノ人鵜ヲウトヨムハ誤也。按ニ鵜ハガランテウ也。本草、禹錫曰、鵜鶘大如ニ蒼鷺ノ頤下有ニ皮袋ニ容ニ二升物ヲ胸前有ニ兩塊肉ニ如レ拳。時珍曰、鵜鶘水鳥也。似レ鶚而甚大灰色。如ニ蒼鷺ノ喙長尺餘、直而且廣。口中正赤頷下胡大如ニ數升囊ノ好ニ群飛沉レ水食レ魚、亦能竭ニ小水ヲ取レ魚。名物辨解曰、本邦有レ之、俗伽藍鳥ト名ク、或ハオホトリト呼フ。大サ鶴ニ二倍ス、頷下ニ囊アリ、其翅羽ヲ帚ニ製ス。本草啓蒙曰、形鵜鶘ニ似テ大ナリ。白色、觜ノ長サ一尺許、濶サ三四寸許、末ハ尖レリ。觜ノ下ヨリ咽ニ至リ一尺許ノ囊ノ如キモノ垂ル、是胡ナリ。水ヲ入ル、寸ハ皮ノノビテ數升ヲ入ル、小池ノ水ヲカヘ出シ、魚ヲ取リ食フト云

○宇乃久曾 本草類編

【漢名】蜀水花 本草

【今名】ウノフン

證類本草曰、鸕鷀屎、一名蜀水花。陶隱居云、溪谷間甚多見レ之、當自取ニ其屎ヲ擇ニ用白處ヲ

【一名】鵜屎 延喜式神名記曰、鵜屎神社。倭名類聚鈔曰、蜀水華。和名宇乃久曾

【集註】本草類編曰、宇乃久曾。不拘時採之、在海中

白鸕鷀 日本書紀

集註 日本書紀曰、雄略天皇十一年夏五月辛亥朔、近江國栗太郡言、白鸕鷀居二于谷上濱一、因詔置二川瀨舍人一

古名錄禽部卷第六十二 終

古名錄禽部卷第六十三目錄

水禽類下

志岐(シキ) 鷸

久呂止利(クロドリ)

爾波久奈布里(ニハクナブリ) 鶺鴒

佐木(サギ) 鷺

大鷺 白鶴子

青鷺(アヲサギ) 青鵰

於須賣止里(オスメドリ) 方目

けり〳〵

曾比(ソビ) 魚狗

加毛米 鷗 〇美夜故杼里(ミヤコドリ) 白鷗 〇一種都鳥

倶比那(クヒナ) 秧雞

知等理(チドリ)

豆木(ツキ) 紅鶴

小鷺

あま鷺 黄毛鷺

伊微(イヒ)

加佐佐久(カササギ) 鵲 〇白鵲

左久奈支(サクナギ)

水乞鳥(ミツコヒドリ) 翡翠

やすかた　　かしらからけ

通計二十四種

古名錄禽部卷第六十三

紀藩　源　伴存撰

水禽類　下

志岐(シギ) 三代實錄　漢名 **鷸** 本草　今名 **シギ**

證類本草曰、按鷸如レ鶉嘴長色蒼、在二泥塗間一作二鷸鷸聲一

一名 **辟藝** 日本書紀　**之木** 倭名類聚鈔曰、玉篇云、鷸。野鳥也。楊氏抄云、之木。一云田鳥。品字箋曰、鷸。羅鸗小鳥也。史楚世家、秦魏燕趙者。鶀雁也。齊魯韓魏者。青首也。鄒費郯邳者。羅鸗也。其餘則不足射。字典曰、鸗。廣韻、鴨也。集韻、小鳧也。鳧。正字通、同レ鴨。廣雅作レ鳧

田鳥 倭名抄

之岐 天文写本和名鈔曰、楊氏漢語抄云、之岐

志支 新撰字鏡曰、鵽陟骨反、志支○通雅曰、埤雅以鵽爲鶬、智謂鵽即鷃字、莊子所謂斥鷃也。正字通曰鵽同鷃。即フナシウヅラ也

之伎 萬葉集卷第一曰、旅ヒ爾之而(ニシテ)、物戀之伎乃(ノコヒシギノ)、鳴ク事毛(モ)、不所聞(キカズ)有リ世者(セハ)、孤悲而(コヒテ)死萬思

しき 枕草紙

志藝 古事記曰、志藝和那波留。萬葉集卷第十九曰、見二飛翔ル鳴一作歌一首。春

儲而、物悲キ爾、三更而、羽振鳴志藝、誰ヵ田爾加須牟

鷸　塵添壒囊抄。字典曰、鷸。古今注、扶老禿鶖。時珍曰、禿鶖水鳥之大者。埤雅、鶖性貪悪、今俗呼ニ禿鶖一。按禿鶖俗曰ニ鵚鶖一、如ニ鵝鵰一爪如レ雞

鳴　大和國風土記曰、宇陀郡貢鳴

しき　三好義長亭御成記曰、献立次第、くま引ふなしき。袖中抄曰、故六条修理ノ太夫の歌に、しぎのふすかり田にたてるいなぐきのいなとは人のいはずもあらなん

集註　日本書紀曰、于儾能多伽機珥、辭藝和奈破蘆、和餓末莬夜、辭藝破佐夜羅孺、伊殊區波辭。三代實錄曰、淸和天皇天安二年云云先レ是有ニ童謠ニ云、大枝平超天、走超天、走超天、騰躍止利加理超天、我那護毛留田仁波捜阿左理食無志伎邪、雄々伊志岐邪、識者以爲ニ大枝ハ謂ニ大兄ニ也。江家次第曰、鹿完一坏、以ニ田鳥ニ代レ之。和泉國風土記曰、日根郡貢鴨鳴。駿河國風土記曰、鷹河郡柏原貢鶴鸛雉鳴。桃沢貢鶴鸛帷雉鳴鷺等。狹衣曰、夕ぐれあかつきのしぎのはねがきにつけなど、思ひがけずをとづれ給ふ。なぐさめ草曰、有明にしぎのはねかきをかぞふ云々。赤染衛門集曰、念佛寺にておきあかすあかつきに、しぎのなくをきゝて「夜もすがら我取るかずのみだるゝをしぎの羽がきかきやつくらん。西行物語曰、相摸國大庭といふ所砥上が原をすぐるに云々そのタぐれに、さはべの鳴とびたつをとしければ「心なき身にも哀はしられけりしぎたつ沢の秋のゆふぐれ。娵入記曰、きやうのぜん云々しぎつぼ也。古今切紙次第曰、鳴は羽をもゝ度くらべて、一度もわれにをとる男鳴には契らず、是は、すの内に居て、めこをはごくむべきに、羽のよはき物は、それかなふべからずとて、羽をくらぶると云之。然はもゝ羽がきと云之。桐火桶曰、山もとちかきあたりは、野べの草葉も色づきそめて、野分の、夕の空すごく吹はらひたるに、いづちやらん、さはべのしぎのなきたるらんとぞおぼゆる。散

木集曰、伊勢の齋宮に侍ける比、宇田といふかたに、あけぼのにしぎのはねかくをとのしけるを聞て云々。歌林四季物語曰、そともの小田も水こえて、しぎたつひまもみえわかず。海人藻芥曰、小鳥は鶉雲雀鴫、此外者供御に備へズト云々。家中竹馬記曰、雲雀鴫鶉といふとも、鷹の獲たらんは賞翫おなじ云々。大内問答曰、小鷹はうづら鴫ひばり等たるべし。是もやきいて可出い。きじと同前也。武家調味故實曰、しき付る様。同荻を二すぢ合て、はなき所は鷹付尾かくるより一尺五寸、此をかけたるより一寸上に、柿のはね五まい重てはさむ。はさみたる上下をばかうよりをばはさみてかけべし。物にたてそふる時は、鳥をば下にし、荻をば上にすべし、しもに置時如レ此之。かうよりにて付るなり。下ぐびへまはして、兩方のはがへの下ニ一結ゆひて、はがへのあはひよりかうより二筋付出すべし。荻なくば柿の枝にてもあるべし。枝の寸法四尺五寸なり。柿のはを所々に糸にて付る事あり。もみぢたるよしに見するなり。いづれも此物どもなくして、ことかぐれば、すゝきもよし。可レ付かたち口傳あり

形狀

清輔奥義抄曰、しぎははねかくことのしげき之。さればもゝはがきといふ之。袖中抄曰、しぎと云鳥は、曉にとぶ羽音の、こと鳥よりもしげくきこゆれば、もゝはがきとはよむ也〇雍州府志曰、鷸多レシ品、其ノ狀圓ノ而肥クル者味堪ニタリ調和一スルニ、是謂ニ保士志義ト一、自ニ夏末一至ニ新秋一特ニ賞レ之。本朝食鑑曰、鴫之種類最モ多、狀似レ鶉而長觜長脛、倶ニ蒼黑、頭背翅蒼ノ而白黃赤斑、翮黑ク胸有ニ黃赤黑斑一、腹白ク尾黃赤ニシテ有ニ黑紋一、呼テ號ニ母登鴫ト一。頭背翅尾黑有ニ黃斑一、胸灰黑有ニ黑斑一、腹白觜短ニシテ於母登一ヨリモ脛長ニシテ於母登一ヨリモ、倶蒼黑ナリ、呼ニ號ニ胸黑鴫一。此二種鴫中之所ニシテ最モ賞一、而味不レ減ニ鼻鴫一也。常居ニ田澤一能ク鳴キ能ク飛フ、夜深テ鳴レ翅爲ニ閑寂之趣一、夏秋最多、至レ冬而

鵙本校
濟作鷲
ニル
下同ジ
於同拾
蠢同擲

不ㇾ見。大和本草曰、鶹鷝長ク大サツグミヨリ小ニ、腹長ク、背ノ毛茶褐色ニシテ足長ク、クビ少長シ、尾白ク先黑キ文アリ、ツバサノウラニ白ク小ナル文アリ、田間水溝ニアリ

倶比那 日本書紀　漢名 **秧雞** 本草　今名 **クヒナ**　一名 **鵙** 日本靈異記 **久比奈** 本草和名曰、鼃鳥。音戸媧反、

本草綱目曰、秧雞大如ニ小雞ㇾ、白頰長觜、短尾背有ニ白斑ㇾ、多ク居ニ田澤畔ㇾ、夏至ノ後夜鳴テ達ㇾ旦ニ、秋後卽止能食鼃故以名之、貌似水鷄。和名久比奈

水雞 日本書紀曰、水雞。此云倶比奈。倭名類聚鈔曰、鼃鳥、和名久比奈。漢語抄云、水雞。壓添𡑮囊鈔曰、常ニハクイナヲ水鷄ト書ドモ、クヒナカヘルヲ食スル故ニ、所ㇾ食隨テカヘルノ字ヲクヒナトヨムニヤ。又曰、水鷄。品字箋黽註曰、正義云、蛙青蛙俗謂之水雞黽、黒鼃俗謂之水鴨。俗呼小錄曰、水雞謂之鶺。正字通曰、鶺。舊註、鳥名、俗呼水鷄爲鶺鴒。按、爾雅鶺鴒、一名雝渠。郭註、雀屬、別名章渠、右誤云今水雞、本作章改作鶺、不知章渠卽脊令並非。五雜組曰、水雞蝦蟆其實一類、卽カヘルヲ云

くゐな 枕草紙

集註 日本靈異記曰、平群驛郡西方有ニ小池ㇾ、夏六月彼邊有ニ牧ㇾ牛童蒙等ㇾ、見ㇾ之、池中有ニ聊木頭ㇾ、頭上居ㇾ鵙。牧牛見ニ彼居ㇾ鵙、於ニ集礫塊ㇾ以ㇾ之擲打、不ㇾ避猶居、蠢拍疲懈下ㇾ池取ㇾ鵙、垂ㇾ將ㇾ捕ㇾ之。源氏物語明石曰、くゐなのうちたゝきたるは、たが門さしてと哀におぼゆ。同見ほつくし曰、くゐなのいとちかうなきたるを云々。四季物語曰、五月のはれまなき空も、いつしかなごりなくなりて云々夕ばへなを有がたう、はしゐ涼しく思ひとりて、漸みじ

五月の さみだれの
群本

か夜といへど、夜のふくるまはほど久しきに、くゐなのけしからずたゝくに、たが門さしてと、よその戸ざしおもひやりふかゝふ、枕とて草ひきむすびうちぬるに、はや夜もあけぬ。藻塩草曰、たゝく水雞聲の似也。榮花物語曰、四月ばかりのおかしきに、こなたかなたのほそどの、そりはしのとぐちなどに、でんじやう人まいりて、くひなのたゝくも、なべてのところににぬぞうちつけなるや云〻。散木集曰、うしまどゝいふ所にて、くゐなのたゝくをとのしけるを聞て云〻。又曰、寄水雞戀、くゐなをば鳴をたゝくと聞なして我をばとはで空を尋ぬる。女郎花物語曰、上とうゐんの女房小少將、ゆふづくよおかしきほどにくいたのなき侍りければ、紫式部がもとへよみてつかわしける、小少將〽あまのとの月のかよひぢさへねどもいかなるかたにたゝくくいなぞ。むらさき式部〽さきのともさしてやすらふ月かげになにをあかずとたゝくくゐなぞ。弁内侍日記曰、おりしも水鷄のたゝくをとのきこゆるをこそ。つれ〲曰、くゐなのたゝくなど心ぼそからぬかは、

形狀 言塵集曰、鳥の水鷄立と云は、つかれの鳥の羽音もたてず、よは〲とふし、草をぬけ立を、くゐなたつと云なり。くゐなは羽よはき故に、水鷄によそへて云也〇本朝食鑑曰、當鳥、似ニ計里鳥ニ而頭背翅有ニ蒼黑斑ニ帶ニ淡黃赤色ヲ、眼上ニ有ニ白條ニ嘴蒼ノ而長ク細ク頷ヒ白ク、頸ノ內胸間白シ、有ニ黑小斑ニ尾短ク脛キ長ノ而靑シ、夜鳴テ達レテ旦ニ而息ム、其聲ヘ如ニ人之敲クカ戶ヲ。大和本草曰、夏初ヨリ秋初マデ居ニ此地ニ、夏間ヤブノ內ニスクフ

久呂止利(クロトリ) 倭名類聚鈔 **漢名** 田雞 臺灣府志小バン也。大ハバンハ百鳥圖ニ載ル骨頂也 **今名** バン

底本作「鼃」

【一名】黑鳥　倭名鈔國郡部曰、土佐國安藝郡黑鳥、久呂止利。倭名抄曰、鵅。唐韻云、鵅。他后反。漢語抄云、久呂止里、水鳥也○字典曰、鵅。天口、他口反、音姓。說文、似レ凫黑色【正誤】大和本草曰、䳓雞。小ヲ黑鳥ト云、クヒナトハ大ナルヲ云。此說非也。按ニ、倭名鈔ニ鼃鳥、和名久比奈。鵅、久呂止里ト覯レバ、クヒナ、クロドリ爲ニ二物一明也【形狀】雍州府志曰、鷭。夏ノ初在ニ澤邊ニ者、有ニ大小之異一、其大ナル者謂ニ大鷭ト一、又稱ニ水鳥一羽毛偏黑而風味麁惡也。其小者謂ニ小鷭ト一、又號ニ梅首雞一、其頂ニ有ニ赤毛點一、故稱レ之。羽毛淡黑ニシテ而兩脚淡黃ナリ。其味爲レ佳ナリ。是又夏初之珍味也。與等并伏見澤多

知等理（チドリ）　萬葉集

百鳥圖載水喜鵲チトリノ一種、大チドリ也

【今名】チドリ

百鳥圖贊曰、水喜鵲、一名長脚孃。不向檐前報言辞。唯來澤畔恣翺翔。渚淸沙白銜魚食。任俗呼他長脚孃。

【一名】千鳥　萬葉集卷第三曰、淡海乃海、夕浪千鳥、汝鳴者、情毛思努爾、古所思。同卷第四曰、千鳥鳴、佐保乃河瀨之、小浪云云。千鳥鳴、佐保乃河門乃、瀨乎廣彌云云。同卷第六曰、芳野河之、河ノ瀨乃、淨乎見レ者、上ツ邊者、千鳥數鳴、下邊者、河津都麻喚云云。千鳥鳴、其佐保川丹云云。難波宮作歌云云。塩干乃共、納渚爾波、千鳥妻呼と云云。同卷第七曰、詠鳥。佐保河爾、小驪千鳥ノ、夜三更而、爾音聞者、宿不

難爾。思故郷。清瀬爾、千鳥妻喚、山際爾、霞立良武　甘南備乃里。同巻第十一日、可旭、千鳥數鳴、白細乃云云。同巻第十二日、宗我乃河原爾、鳴千鳥云云。同巻第十六日、吾門爾、千鳥數鳴、起余起余云云

乳鳥　萬葉集巻第三日、飯海乃、河原之乳鳥、汝鳴者云云。又曰、吾背子我、古家乃里之、明日香河、乳鳥鳴成、鳥待不得而。言塵集曰、乳鳥ハ千鳥之

知鳥　萬葉集巻第七日、佐保河之、清河原爾、鳴知鳥云云

知登理　萬葉集巻第十七日、暮鴈爾、知登理布美多底。於敷其等爾云云。同巻第十九日、夜裏聞千鳥歌二首。夜具多知爾、寢覺而居者、河瀬尋、情毛之奴爾、鳴知等理賀毛。古事記曰、波麻都知登理、波麻用波由迦受、伊蘇豆多布

智杼利　萬葉集巻第十九日、十二日侍於内裏聞千鳥喧作歌一首。河渚爾母、雪波布禮禮之、宮乃裏爾、智杼利鳴良之、爲牟等己呂奈美

智鳥　萬葉集巻第七日、佐保河爾、鳴成智鳥、何師鴨、川原乎思努比、益河上

智耐理　日本書紀曰、播磨都智耐理學。釋日本紀曰、濱津千鳥也。或喩無伴之濱千鳥者也

知杼理　古事記曰、知杼理尓阿良米

鴴　山城國風土記曰、兎道郡貢鴴。安房國風土記曰、平群郡鷺鴎鴴。字典曰、鴴。戶庚切、荒鳥也　○豊臣勝俊朝臣九州みちの記曰、沖にうかぶ船も、かもめ千鳥などのやうにちいさくみえて

○河千鳥　萬葉集巻第十一日、河千鳥、住澤上爾、立霧之、市白兼名、相言始而者

河波知登里　萬葉集巻第十九日、夜降而、鳴河波知登里、宇倍之許曾云云

川ちどり　枕草紙曰、川ちどりは友などはすらんこそ

○はま千鳥　平家物語巻第三日、おきのしらすにすだくはま千鳥の、ほかはあと

とふものも なかりけり

濱千鳥 十六夜日記曰、しほひのほどなれば、さはりなくひがたを行、折しも濱千鳥いとおほくさき立て行も、しるべがほなる心地して

濱ち鳥 東關紀行曰、なるみのうらのしほひがた、音にきゝけるよりも、おもしろく、濱ち鳥むら〳〵にとびわたりて〇撰集抄曰、濱千鳥の跡を尋て、あらぬしほがまの浦に尋至りて、すみかとせんに。又曰、濱千鳥の跡ふみつくるなるみがた云々

【集註】源氏物語須广曰、あかつきの空に、千鳥いと哀になく。十訓抄曰、佐保の河原の霧の中に、友まどはせる千鳥の、夕暮のこゑすごくこそ聞ゆれ。平家物語卷第八曰、すさきにさはぐ千鳥の聲は、あかつきうらみをまし。同卷第九曰、或はあはぢのせとをしわたり、ゑしまがいそにたゞよへば、波路はるかになきわたり、ともまよはせるさよ千鳥、是も我身のたぐひかな。又曰、おきのしらすになく千鳥云々。同卷第十一曰、よるはすざきの千鳥と共になきあかす云々。義經記曰、なぎさ〳〵になく千鳥、おりしりがほにぞ聞えける。桐火桶曰、しまかすかに浪にうかべるけしき、ことうらよりはとおぼゆるに、みち行人もおもひをなをざりにせず、ながめやすらふほどなる海濱（うみはま）に、千どりなきかはし云々。狹衣曰、しはすの月も見る人がらにや、よひ過て出るかげさやかにすみわたりて、雪すこしふりたる空のけしきの、さえわたりたるもいひしらずこゝろぼそげなるに、さよ千鳥さへ、つまよびわたるに。六代勝事記曰、洲崎にさはく千鳥の聲は、曉のうらみをそへ。東關紀行曰、友なし千鳥ときく〳〵をとづれわたれる旅の空のうれへ云々。蜻蛉日記曰、ほの〴〵とあけゆくちどりうちかけりつゝ、とびちがふものゝあはれにかなしき、ことさらにかずなし。太神宮參詣記曰、友なし千鳥の鳴まよふ聲をきゝては云々。高倉院升遐記曰、

わかのうらぢにかよふ千どりのあとにまかせて。重之集曰、くらきに千鳥なきて、おきのかたに出ぬ。源平盛衰記巻第卅二曰、洲崎ニ騒ク千鳥ノ聲。同巻第四十八曰、夜ハ渚ノ千鳥ト共ニ泣明シ云云、波間幽ニ千鳥ノ聲ヲ聞キ。筑紫道記曰、千鳥のひとつふたつ四五など啼行も、いかなる事をおもふかと哀なれば

形状　〇本朝食鑑曰、鴴類レ鴫似テ脊令ニ而微小也、頭蒼黒頬白ク眼後有ニ黒條一、背青黒、翅黒倶ニ無ニ斑紋一、腹白ク胸黒、嘴モ亦蒼黒、尾短略ゝ黒シ、脛黄青ニシテ而細長、百千成レ群飛鳴シ呼レ侶ヲ、常居ニ江海川澤之邊一、冬月最多

爾波久奈布里（ニハクナブリ）　倭名類聚鈔

漢名　鶺鴒　毛詩鳥獸考　今通名

一名　爾波久奈不利　天文写本和名

毛詩鳥獸草木攷曰、鶺鴒水鳥也、一名雝渠、雀屬、飛ハ則鳴キ行ハ則搖ク、大如ニ鷃雀一、長脚長尾尖喙、背上青灰色、腹下白頸下黒如連錢

抄。倭名鈔曰、鶺鴒、字或作ニ鶺鴒一。和名爾波久奈布利。日本紀私記曰、止豆木乎之閉止里

止豆木乎之閉止里　見上註　　爾波久奈布利

本草和名曰、鶺鴒。和名尓波久奈布利

止豆岐乎之倍止利　天文写本和名鈔　　仁和太々支　本草類編　　庭たゝき　八雲

御鈔〇源語秘決抄曰、庭たゝきは水鳥なり。原にあるは、くがにまどへるゝ

つゝなはせ鳥　八雲御抄曰、鶺鴒、日本記には、つゝなはせ鳥と云　　とつきをし

說ノ下
刊本々々
アリ次

へ鳥 八雲御抄曰、鶺鴒、又とつきをしへ鳥と云、是みとのまぐはい、是を見てまなびけるゆへ也

石たゝき 言塵集曰、稻負鳥。種々あれども石たゝきなり。むぎまき鳥之。庭くなぶり共、とづきおしへ鳥とも

むぎまき鳥 見上注

庭叩 夫木集。明月記曰、天福元年七月八日、鶺鴒庭叩小鳥始見來、秋氣之早歟。萩花一枝開

イシタヽキ 塵添壒囊抄 鶺鴒(イシタヽキ)

いしくなき 家中竹馬記曰、射まじき鳥の事云々いしくなき云々。源語秘決抄曰、いしくなきを、にはたゝきといふ。くなぐはたゝく心也、藻塩草曰、いしくなきを、にはたゝきと云も、くなぐはたゝく心之

稻負鳥 新撰萬葉集曰、山田守、秋之假廬(ホ)丹、置露者(ハ)、稻負鳥之、涙那雷部芝。言塵集曰、私云、いなおほせ鳥は石たゝき共、たう共、鳫共、馬共云之。定家說は、石たゝき之。建長哥合、行家、わが門につくる山田の穗に付ていな負鳥の聲すだく也。判者知家云、ほに付てと侍詞優にあらす之もし稻負鳥を雀と云事侍とかや、たしかならぬ下說之と云々。袖中抄曰、いなおほせどりとは、ふるくとかくいひたれど、たしかにみえたる事なし。秌の田になくよしをよめるさるとり侍にこそ。和語抄云、山田に、よるやあか月などになく鳥也。綺語抄云、いなおほせどりはにはたゝき也。無名抄云、いなおほせどりとは、しれる人なし。にはたゝきといへる鳥なめり、といへる人あり。をしはかり事なめり。此にはたゝきといへる鳥は、とづきをしへとりとぞ申なる。明月記曰、寛喜元年八月十九日、此三四日、鶺鴒小鳥來鳴、炎暑雖如盛夏、時節自至歟。鷰不見、古今哥稻負鳥有說叓也●事不切予用此小鳥之說、家隆卿多捨、赤羽用々□見之由披露云々、未知其證、其鳥頭常近邊不可來、此小鳥來鳴之時、賓鳫必計●矢鳥也●

行「々」ナシ
必刊本ナシ

會、尤叶此鳥之哥也。只以節物慰心緒、故記之

トツギトリ　釋日本紀曰、鴾鴇。尒ハクナフリ、トツキヲシヘドリ。トツキトリ。ツツナハセトリ。ツツマナハシラ已上有二五說一之中第一之說

ツツナハセトリ　見上

集註　日本記略曰、弘仁五年二月甲午、是日、鴾鴇萬數集二陰陽寮枇杷樹一、觀人異レ之

形狀　〇本朝食鑑曰、脊令狀チ類二鵆一而青灰色、頸下眼後二有二黒條一、長脛長尾、嘴尖腹白、胸有二黒文一、每ニ居二水邊一鳴而求レ匹、能ク搖二首尾一。大和本草曰、鴾鴇、頭小ニ尾長シ可信

豆木（ツキ）　倭名類聚鈔

漢名　紅鶴　本草

今名　トキ

本草、鷺。集解曰、又有二紅鶴一相類色紅。禽經所謂朱鷺是也

一名　桃花鳥（ツキ）　日本書紀曰、安寧天皇、元年冬十月丙戌朔丙申、葬二神淳名川耳天皇ヲ於倭ノ桃花鳥田丘上ノ陵一。垂仁天皇二十八年十一月丙申朔丁酉。葬二倭彥命于身狹桃花鳥坂一。延喜式卷第二十一日、諸陵寮、桃花鳥田丘上陵。身狹桃花鳥坂上陵

鴾　延喜式卷第四曰、伊勢太神宮神寶二十一種云云須我流橫刀一柄。柄長六寸云云柄以二鴾羽一纏レ之。倭名鈔曰、鴾。玉篇云、鴾音牟、和名豆木、赤喙自呼之鳥也。楊氏漢語抄云、紅鶴、和名上同。俗用二鴾字一。今按、所レ出並未レ詳。日本紀私記云、桃花鳥

都岐　天文写本和名鈔

豆支　新撰字鏡曰、鴾鶂二字、豆支、又云太宇

太宇　見上。古今著聞集曰、とう〇管領記曰、鳥羽鴾ノ森ニ陣ヲ取ル。又曰、御勢ハ本海道鳥羽鴾森ニ陣ヲ取テ、敵ヲ待掛タリ。言塵集

曰、稲負鳥はたう共

唐ノ鳥 御隨身三上記

赤羽 明月記曰、赤羽用矢鳥也

集註 古今著聞集曰、此むつるの兵衛尉、懸矢をはがすとて、とうの羽を求けるが、不足しければ、郎等共に、もしや持たるとたづねければ、上六太夫といふ弓の上手聞て、此邊にとうやはみゆ、見よといひければ、下人立出てみて、只今河より北の田にはみゆ、といふを聞て、則弓矢を取て出たるに、とう立て南へとびけるを、上六太夫矢をはげて、左右なくも射ず。いづれかはこがれたるといひければ、しりに飛をこがれたるといふを聞て、なをにいそがず、はるかに遠く成て、河の南の峯の上飛ほどになりにける時、よく引てはなちたるに、あやまたず射おとしてけり云云其事にゆ、近かりつるをいおとしたらば、川に落て其はねぬれ侍りなん、むかいの地に付て射おとしたればこそ、かくはねはそんぜねとぞいひける。又曰、左衛門尉平助綱は、つやつや弓引はたらかす事叶はざりけるものなりけり。家の棟に、とうの飛きてわたりけるを、是はいむなる物をと思て、立出てみるほどに、下人左右なく弓矢をとりて、あたへたりければ、なをざりにとりて、いたりける程に、あやまたず射おとしてげり

形狀 ○本朝食鑑曰、ツキハ似ニ白鷺ニ無ニ冠毛一而帶レ紅、翎莖最モ紅シ。能高ク飛ヒ、能宿レ水、能巢レ樹、能憩イコヒレ梢ニ、能捕レ魚。其形態悉ク不レ殊ニ于鷺類ニ、其味雖レ美有ニ臊氣ニ、煮レ之則脂肪如ニ紅玉之浮レ水、故食レ之者少亦不レ爲ニ上饌ニ。惟湖澤蘆荻之間、偶見レ之。大和本草曰、紅鶴。水鳥ナリ、味不レ佳、頭ニ無レ勝カザシ、羽ノ色淡紅色

佐木サギ 倭名類聚鈔

漢名 鷺 本草

今名 サギ

太夫一本ナシ

ツキハ刊本鴇トス

之ノ下「爲ニ佳之」ヲ、麗禽ニ略セリ

本草綱目曰、鷺水鳥也。林棲水食、羣飛成ㇾ序、潔白如ㇾ雪、頸細而長、脚青善躑、高尺餘、解指短毛、喙長三寸、頂有二長毛一、十數莖毿毿然トシテ如ㇾ絲ノ

一名

佐岐 天文写本和名鈔○倭名鈔曰、鷺。和名佐木。本草和名曰、鷺。和名佐岐。萬葉集卷第九曰、鷺坂作歌一首。細比禮乃(タク)、鷺坂山ノ、白管自云云。鷺坂作歌一首。山代ノ、久世乃鷺坂、自神代(カミヨヨリ)、春者張乍(ハリツヽ)、秋者散リ來ル。堀河院百首曰、鷺のゐるあれたのくろにつむ芹も春は若なの數にやはせぬ

佐義 新撰字鏡曰、鷀。來故反、佐義

佐支 字鏡曰、鷁。佐支。鵜同

さき 曾我物語卷第三曰、いづれもおなじとりならば、かもをもさぎをもつれよかし

白佐支 新撰字鏡○萬葉集卷第九曰、鷺坂作歌一首。白鳥ノ、鷺坂山ノ、松影ニ、宿リ而往(ユカ)奈、夜毛深往乎。同卷第十六曰、詠二白鷺ノ啄ㇾ木ヲ歌。池神ノ、力士儛(マヒ)可母、白鷺乃、桙啄持而、飛渡良武○五經通義曰、東夷之樂、持ㇾ矛舞ニ助時之生一、詩陳風、値二其鷺羽一。註、値植也。以二鷺羽一爲ㇾ翳、舞者所二執以指麾一也

しらさぎ 平家物語卷第八曰、白鷺の 遠松にむれいるをみては、源氏のはたをあぐるかとうたがはる。同卷第十二曰、とをき松にしらさぎのむれゐるをみては、源氏のはたかと心をつくす。源平盛衰記卷第七曰、俊寛ヲバ白石(シライシ)ノ嶋ニ棄ケリ。彼島ニハ白鷺多メ石白シ、故ニ白石ノ嶋ト云

しら鳥 言塵集曰、しら鳥、鷺之○駿河國風土記曰、此獄郡大長貢鸛鶴鷺鷺

集註

古事記曰、住二是鷺巣池之樹一鷺乎、宇氣比落、如ㇾ是詔之時、宇氣比其鷺墮ㇾ地死。續日本後紀卷第十六曰、承和十三年十月癸巳、白鷺集二建礼門上一、須臾降集二大庭版位一。同卷第十七曰、承和十四年十月己未、鷺集二春興殿上一。文德實錄卷第八曰、齊衡三年十一月戊辰、有ㇾ鷺、集二版位

下、記レ異也。同卷第十日、天安二年秋七月丙戌、大雨。白鷺集ニ太政官聽版位間一、記レ異也。三代實錄卷第二十日、淸和天皇貞觀十三年十一月五日丁丑、鷺集ニ于綾綺殿一。同卷第二十四日、貞觀十五年九月六日戊辰、鷺集ニ朔平門上一。同卷二十六日、貞觀十六年秋七月十日丙申、鷺集ニ紫宸殿前庭一。九月廿九日甲寅、鷺集ニ紫宸殿前沙上一。同卷第三十三日、陽成天皇元慶二年六月十五日乙卯、有ニ白鷺一雙一、飛鬪ニ紫宸殿前一、其一下ニ集殿庭版位側一。同卷第三十五日、元慶三年二月廿二日壬午、夜、鷺集ニ紫宸殿前版位一。同卷第四十日、元慶五年秋七月廿三日己巳、有ニ白鷺一、集ニ太政官曹司廳版位上一。同卷第四十三日、元慶七年六月廿七日辛酉、白鷺集ニ大極殿西鴟尾一。同卷第四十四日、同年秋九月二日乙丑、是日、鷺集ニ大極殿東樓上一、未時又集ニ大極殿鴟尾一。同卷第四十九日、光孝天皇仁和二年九月廿四日己亥、辰時、鷺集ニ紫宸殿前版位下一。同卷第五十日、仁和三年八月十二日癸丑、鷺二集ニ朝堂院白虎樓豐樂院栖霞樓上一云云十三日甲寅、有レ鷺、集ニ豐樂院南門鴟尾上一。十五日丙辰、未時有レ鷺、集ニ豐樂殿東鴟尾上一。本朝無題詩曰、白鷺斜飛遠水長。又曰、白鷺群飛歸故池。又曰、白鷺伺魚水巷邊。山背國風土記曰、兎道郡貢鷺。日本記略曰、延曆二十一年秋七月丁卯、白鷺集ニ于朝堂院一。大和國風土記曰、平群郡飽浪庄貢鷺。和泉國風土記曰、日根郡貢鷺。參河國風土記曰、寶飯郡貢鷺。武藏國風土記曰、荏原郡赤坂庄貢鶴鷺等。安房國風土記曰、平群郡貢鴨鷺。加賀國風土記曰、加賀郡田上鄕貢鸛鶴鷗鷺、駿河國風土記曰、益頭郡山西貢鸛鶴鴻厂鴨鷺。帝王編年記曰、龜山院文永口八月十二日午時、內裏內侍所上白鷺一羽居之大番者追之、次居殿上云云十三日、依鷺居皇后叓於藏人所有御卜。人車記曰、仁安二年五月十五日、今日巳時皇后御殿東北子午渡殿棟白鷺居、上下爲奇。吾妻鏡卷第二十二日、建保三年八月廿一日、巳

尅、鷺集御所西侍之上。同卷第二十七曰、寛喜二年六月五日、巳尅、幕府小御所之上、白鷺集云云。同卷第五十一曰、弘長三年五月十七日丙申、天晴、鷺集于左典廐御亭、頃之指永福寺山飛去云云。爰武田七郎次郎追彼鷺射殺之持參。砂石集曰、家ノ棟ニ鷺ノ居タリケルヲ占ヒケレバ、神ノ御トガメト申ケルヲ。源平盛衰記卷第一曰、延喜御宇ニハ、池ノ汀ノ鷺ヲ取タル藏人モアリ。中務内侍の日記曰、まきの嶋といふ所、すざきに鷺のゐたる、おほきなる水くるまに、もみぢの色々にしきをかけわたしたらんやうなり。六代勝事記曰、白鷺の遠松にむれゐるを見ても、えびすばたをなびかすかとあやしみ。散木集曰、中宮亮仲實備中の任にくだりける時に、備前國にすきのく井といふものゝたちなみたるさきに、うといふ鳥と、さぎといふとりと、ゐたりけるを云々。又曰、むべといふとまりにて、さぎの木にゐてなきければ云々。家中竹馬記曰、射まじき鳥の事云々白鷺。早歌曰、さきのくびとろんと。扶桑略記廿三曰、延喜二年三月十二日戊午、有鷺集南殿庇上。延喜六年九月廿六日、鷺集南殿版位南邊。延喜七年十月九日、鷺集承明門上。裡書曰、寛平九年七月廿二日、言、大極殿、豐樂殿上、左近大炊屋上鷺集事也。八月七日、官西廳鷺集。延喜十一年九月廿一日、自今日於豐樂院有御修法七箇日、依大極殿鷺恠也。同廿四日、延長五年十月十二日云云其日午時、鷺集淸凉殿東庭。延長六年六月十四日、鷺集承明門上。

形狀

仙覺萬葉集註釋卷第九曰、たへひれのさぎさかとつゞけたるは、さぎのかしらには、ながき毛の立あがりたるがあれば、さぎといはんための諷詞に、たへひれのとをけり。又さぎは白鷺とて、白きとりなれば、さぎさか山のしらつゝじとつゞけたり。枕草紙曰、さぎは、いと見るめもみぐるし。まなこゐなどもうたて、よろづになつかし

ひる本ノマ、

からねど、ゆるぎのもりにひとりはねじ、とあらそふらんこそおかしけれ。吾妻鏡卷第十五曰、建久六年三月九日、今日將軍家御二參石淸水幷左女牛若宮等一云云懷嶋平權守入道、紺地直垂、鷺蓑毛ニテトヅ、押二入烏帽子一弓手鎧少短、保元合戰之時、被レ射故也。藻塩草曰、さぎの頭のけ一むら立たるは、女房の頭に、ひれとてさがりひる物あり、それに似たると也と云ゝ。鷺の蓑毛、うなげ共讀り。東關紀行曰、ねぐらあらそふ鷺むらの、かずもしらず梢にきゐるさま、雪のつもれるやうに見えて、遠く白きものから、暮行まゝにしづまり行聲こゑも、心すごく聞ゆ。本朝無題詩曰、鬢持白鷺共垂絲。源平盛衰記卷第卅七曰、白旌其數ヲ不知指上タレバ、白鷺ノ蒼天ニ羽ヲ並ベルガ如シ。詞林采葉抄曰、細比乃鷺ト云ルモ、首毛ノヒレノ如クニサガリタルヲ申之。海道記曰、そともの小川には、川ぞひ柳に風たちて、鷺のみの毛うちなびき。又曰、白洲にたてる鷺は心あれども毛砂にまとへり　○本朝食鑑曰、鷺有二大小一、細頸長脚、高翺アガリ遠飛、喙黑而長、身毛散シ垂テ如レ簑、每窺二魚鰕一而食フ、飽則擧レ足立眠ル

小鷺　鷺百首　［今名］コサギ

［形狀］○大和本草曰、小サキ足黃也。地鳥也。異邦ヨリワタラズ。夏月最美、凡夏月ハ鳥ノ食品マレナリ、鷺ヲ最賞ス

大鷺　鷺百首　［漢名］白鶴子　本草　［今名］ダイサギ

本草ニ纐曰、似鷺而頭無レ絲、脚黄色者、俗名ニ白鶴子ー

集註 鷹詞百首曰、大鷺黄觜ハ、小鷺同前にこしらへゆ、しかるにより丸はしとは中習ゆと云之

形状 〇本朝食鑑曰、一種大ニ於鷺ニヨリモ而頭無レ絲、脚淡黄色、呼テ號ニ大鷺ー。大和本草曰、ダイサギ、觜黄ニ足黒シ、或淡黄色、頭ニ無レ勝カサシ。是本草所謂白鶴子ナリ。小サギヨリ鵜メグリハ大ニ、鳥メグリヨリ、ダイサギハ大也

あま鷺 藻塩草

漢名 黄毛 臨桂雑識

臨桂雑識曰、有黄毛如鷺、背有黄毛

一名 あま 八雲御抄 黄觜 鷹詞百首

形状 〇大和本草曰、アマサギ小鷺ヨリ小也。夏間ハクビ半赤シ、野ニツナゲル牛馬ニツク

青鷺 續日本後紀

漢名 青莊 本草 今名 アヲサギ

一名 美止佐木 倭名類聚鈔曰、漢語抄云、蒼鷺。美止佐木 蒼鷺 見上 美都佐岐 天文写本和名抄 見と 八雲御抄 見と鷺 藻塩草。言塵集曰、霜むすぶ入江のまこも末分てたつみと鷺の聲も寒けし。又曰、みとさきは水戀鳥とも アヲサギ 吾妻鏡曰、アヲサギ、カスケ馬ノ名ニアリ あ

遊ノ下一本極ニ作ル

をさぎ

朝倉亭御成記曰、御汁あをさぎ。藻塩草曰、あを鷺。八雲御抄曰、あを

集註 續日本後紀、卷第十八日、嘉祥元年九月丁巳朔戊午、青鷺集二紫宸殿南庭版位下一。吾妻鏡卷第十日、文治六年九月十八日、佐々木三郎盛綱俣野箭一腰進上云云以二青鷺羽一云云。同卷第十八日、承元元年十二月三日、甲辰、冴陰、白雪飛散、今日御所御酒宴、相州、大官等被レ候。其間、青鷺一羽入二進物所一、次集二于寢殿之上一。良久將軍家依二恠思食一、可レ射二留件鳥一之由被レ仰二出之一處、折節可レ然射手。不レ候二御所中一、相州被レ申云、吾妻四郎助光、爲レ愁下申蒙二御氣色一事上。當時在二御所近辺一歟。可レ被レ召レ之云云仍被レ遣二御使一之間、助光顚レ衣、參上。狹二引目一自二階隱之蔭一、窺寄兮發レ矢。彼矢不レ中二于鳥一。樣雖レ見レ之、鷺忽騷墜二于庭上一。助光進二覽之一、左眼血聊出、但非二可レ死之疵一、此箭羽鷹羽遊施云云見二鳥之目一兮融云云助光兼以二相斗一無レ違也云云乍レ生射二留之一、御感殊甚。如レ元可レ奉二眤近一之由、匪レ被二仰出一、所三下ニ給フ御劍一也。大内問答曰、鷺之鳥くひやう云々同鷄雁鴨青鷺之事はすひ物にこしらへ可出なり。是はかはらけを取上、いたゝくべし。はしにてくふべし。先汁をすふ事は如何、後にはすふべき也。鷹詞百首曰、青鷺は、大鷹に春夏は、あをさぎのくはせとて、かひどころあるとなり。それをしらねば、鷹により取のく事也。青鷺のくはせは、一段鷹に藥之。惣別はあをさぎは鷹の毒之。おほく飼べからずゆ。取飼ときも、雀一ばかり、又は一半二せいさいなり、歸てうは餌をかふべし。鷹青鷺を取のくをば、鷹青鷺にしらみたるなどゝ人にもかたる詞なるべし。青鷺食てわづらひ出したる鷹むつかしき事といへり云々青鷺にしらむは飼所の故之

形狀 ○本朝食鑑曰、蒼鷺(アヲサギ)似レ鷺而大、頭背翅蒼黑、頂ニ有ニ冠毛一、亦蒼黑也、頭上至ルマテ頸胸ニ黑毛斑斑タリ、翅之端翮

擧刊本拳ニ作ル

純黒、背外黒、内黄、腹白脚緑ナリ。形態悉ク類レ鷺、毎ニ歩ニ水中ニ而捕ヘテ魚鰕ヲ食。飛則能高擧、遠翔、靜ナレハ則傍ニ蘆荻ニ而擧レ足立眠。其味最美ニシテ勝レリ于白鷺ニ。夏月賞レ之。大和本草曰、青サキ形大也。但黒ツルヨリ甚小也。

殊品

ナシ

伊徴（イビ） 倭名類聚鈔　漢名 旋目 本草　今名 ゴイサギ

本草綱目曰、旋目。水鳥也。大如レ鷺而短尾紅白色、深目、目旁毛皆長而旋

一名 五位　鷹詞百首曰、五位青鷺はつかずゆ間、はしをそのまゝをき申ゆ。平家物語巻第五曰、延喜のみかど神せんゑんへ行幸なつて、池のみぎはにさぎの居たりけるを、六位をめして、あのさぎとつてまいれとおほせければ、いかんがとらるべきとは思へ共、りんげんなればあゆみむかふ。さぎはねづくろひして、立むとす。せんじぞとおほすれば、ひらんでとびさらず、すなはち是を取てまいらせたりければ、なんぢかせんじにしたがひてまいりたるこそ神妙なれ。やがて五位になせとて、さぎを五位にぞなされける。今日より後、さぎの中の王たるべし、といふ御札をみづからあそばひて、くびに付てぞはなたせ給ふ。まつたく是はさぎの御料にあらず、たゞ王威の程をしろしめさんがため也。萬葉集巻第十六曰、比來之、吾カ戀ヒ力ラ、記シ集メ、功爾申サ者、五位乃冠。倭名抄曰、鵁鶄。辨色立成云、鵁、伊徴。住ニ海邊ニ、其鳴極喧者也。按、鵁鶄、不詳。本草、時珍曰、鵁鶄、大如ニ鳧鷺ニ而高脚、似レ雞、長喙好啄ク、其頂有ニ紅毛ニ如レ冠、翠鬣碧斑、丹嘴青脛、養

レ之可レ玩。五位ト大ニ異也

〔形狀〕○雍州府志曰、五位川、一說五位鷺多在ニ斯ノ河邊ニ也。本朝食鑑曰、五位鷺。狀似ニ蒼鷺ニ而小、灰白色ニシテ有ニ碧光ニ。巢ニ于高樹ニ宿ニ于樹杪ニ飲ニ于水中ニ能捕ニ魚鰕ヲ其味雖ニ甘鹹ニ夏ハ味ヒ似ニ蒼鷺ニ稍佳、冬有ニ臊氣ニ而不レ佳。凡五位夜飛則有レ光如レ火、月夜最明。或大者立ニテ于岸邊ニ如ニシ巨人ニ若シ人不レ識而遇レ之驚惧シ、爲ニ妖怪ニ而斃、此非レ爲レ妖、人驚爲レ妖也

於須賣止里（オスメドリ）

倭名類聚鈔　〔漢名〕方目 本草　〔今名〕ミゾゴイ

本草綱目曰、方目、俗名ニ護田鳥ニ護レ水鳥也。常在ニ田澤中ニ形似ニ鷗鷺ニ蒼黑色、頭有ニ白肉冠ニ赤足。見レ人輙鳴喚不レ去

〔一名〕於須賣度利 天文写本和名鈔 曰

女鳥

扶桑略記第廿四曰、醍醐天皇延長六年六月十八日、曰女鳥集ニ南殿版位南ニ。倭名鈔曰、漢語抄云、護田鳥。於須賣止里

〔集註〕源平盛衰記卷第卅五曰、射殘シタル護田鳥尾ノ矢負テ。同卷第卅七曰、鼻山ハ赤威ノ鎧ニ、護田鳥毛ノ矢負。又曰、敦盛十八指タル護田鳥尾（ヲスヘヲ）ノ矢。曾我物語卷第八曰、たかうすべうのじゝや、はづだかにとつてつけ

〔形狀〕○本朝食鑑曰、薄五位、常ニ棲ニ田澤之小水間ニ、故ニ名、窺ニフ田隴之小溝ヲ、立ニ樋口之水中ニ而捕ヘテ小魚ヲ食、故俗號ニ樋（ヒ）口獲（マモリ）ト、即護田鳥也。狀如ニ五位鷺ニ而小、蒼黑色、頭有ニ如ニ白肉冠ニ者ニ、脚掌黃赤亦不レ懼レ人、每ニ在ニ澤中ニ見レ人輙鳴シ、有レ似ニル「主守官ニ、故ニ以テ名レ之

底本作捿

加佐佐木 倭名類聚鈔 從叢名入于此

【漢名】鵲 詩經 本草綱目曰、鵲烏屬也。大如鴉而長尾、尖背黒爪、緑背白腹、尾翮黒白駁雑、上下飛鳴

【一名】加佐佐岐 天文写本和名抄〇倭名鈔曰、鵲。和名加佐佐木。本草和名曰、雄鵲。和名加佐ゝ岐

加佐ゝ支 本草類編

加左ゝ支 新撰字鏡曰、嚌。鳥鳴。又加左ゝ支鳴

韓國鳥 塵添壒嚢鈔曰、播磨國風土記ヲ見レバ、佐用郡ニ船引山ト云フ、此ノ山ニ有ニ鵲鳥一、世俗ニ云ニ韓國ノ鳥ト、栖ニ枯木ノ穴ニ、春ハ見レ之、夏ハ不レ見ト云ヘリ。此國ニモアル物ニコソ

笠さき 袖中抄曰、かさゝぎのゆきあひのまと云につきて、二のぎあり、一には笠さぎの橋を云なり。一には笠さぎのとは云ゝ

【今名】カサヽギ

【集註】本草類編曰、雄鵲。和加佐々支。五月五日採之。日本書紀曰、推古天皇六年夏四月、難波吉士磐金至レ自ニ新羅ニ而献ニ鵲二隻一。乃俾レ養ニ於難波杜一。因以巣レ枝而産之。天武天皇白鳳十四年五月、新羅王献物、鵲二隻。袋草紙曰、予中云、躬恒ガ假名序ニハ、漢河ニ鳥鵲ノ與利翅ノ橋ヲ渡テ、此モ彼ノモニ行加布ト書タル様ニ覺悟ス如何云云。八雲御抄曰、かさゝぎのみねとびこえてなくと云り。かさゝぎのはしは、七月七日二さき來て爲橋云。應永廿五なぐさめ草曰、つゝみの柳きしの杉村としふりて、塒とする鵲むらがれり。俊頼髄腦抄曰、かさゝぎのわたせるはしをもとめて、くものころもをひきかさね

【形狀】源氏物語浮船曰、山のかたは霞へだてゝ、さむきすざきにたてる、かさゝぎのすがたも所がらは、いとおかしうみゆるに。塵添壒嚢抄曰、鵲ノ事。

カサヽギト云ハ、ミノ毛ノ頭ニアル鷺歟。鵲ハ尾極メテ長ク、ハシ短クメ水邊ニハスマズ、山木ニスム。一ノ名ハ飛駮ヒハウト云リ。アマノ川ノカサヽキノ橋ト云モ是也。全ク白鷺コ類ヒニ非ズ、烏鵲橋列ナ浪往來ス、ナド申テ、アヤマテ黒キ物ニコソ云ヒ習ハシタレ。多至ノ日、スツクリ初メテ、春子ヲウム物也。見ニ毛詩箋一成尋阿闍梨、在唐記ニ云、見ニレハ鵶鳥ニ似レ鳥頗小、腹白ク背黒ク、羽白斑也。ト云リ。鵶鵲烏鵲ウ也〇大和本草曰、鵲カサヽギ、畿内東北州ニ無レ之、筑紫ニ多シ、朝鮮ヨリ來リシニヤ、高麗烏カラスト云。鳩ヨリ小ニ、ツグミヨリ大也。羽ニ黒白アリ、尾長シ

〇白鵲　花營三代記

柳河東集曰禮部賀白鵲表云云示前件白鵲者。霜毛皎潔。玉羽鮮明。色質殊常。性推馴狎

集註　花營三代記曰、貞治七年閏六月十八日、御所白鵲居之

けりけり　鷹百首

漢名　未詳

集註　鷹詞百首曰、鷹などにも大わざとて、をし小鴨けりくなどあはせよるもしろなるべし

按ニ、竹取物語曰、濱をみれば、播广のあかしの濱なり梟。ト觀ユ。梟ヲケリト云ル證也。然レドモ梟ハカモ也

形狀　〇本朝食鑑曰、計里ケリ、頭背灰白ニシテ帶ニ淡靑黃一、觜シ黃赤ニシテ而末黒ク、胸淡赤ニシテ有ニ黒斑一、翎末黒ク、腹白、短尾ニシテ有ニ黒斑一、脛長而黃靑。其味極美、可レ供ニ上饌一、八九月味最美。俗謂不レ減ニ于鶴肉一也。大和本草曰、ケリ、大サ鳩ノ如シ、其羽灰色ニテ羽サキ黒シ、觜ト足ト黃也

魚。流布本及康熙字典所引トモニ水ニ作ル

左久奈支(サクナギ) 新撰字鏡 【漢名】 未詳

藻塩草。字鏡曰、鵃。左久奈支 【形狀】 藻塩草曰、鵃あやしくも風におるて、ふさくなぎのはしはみよりもながくみゆらん○大和本草曰、シャク

【一名】 さくなき

ナギ、海邊ニアリ。大中小アリ。大シャク、小シャク、中シャクト云。形ハ相似タリ。觜長シ、羽翼黒白マダラナリ。味ヨシ

曾比(ソビ) 倭名類聚鈔 【漢名】 魚狗 本草 魚虎 禽經 【今名】 カハセミ

證類本草曰、魚狗、今之翠鳥也。有ニ大小一、小者名魚狗、大者名翠、倶能水上取魚、故曰ニ魚狗一。爾雅云、鴗。天狗。注曰、小鳥也。青似レ翠、食レ魚、江東呼爲ニ魚狗一。本草綱目曰、魚狗。處處水涯有レ之、大如レ燕、喙尖而長、足紅而短、背毛翠色帶レ碧、翅毛黒色揚レ青、可レ飾ニ女人首物一、亦翡翠之類

【一名】 曾爾 新撰字鏡曰、鴗。曾尒。倭名鈔曰、鴗。和名曾比 蘇邇杼理 古事記曰、蘇邇杼理能(ソニドリノ)阿遠岐御祁斯(アヲキミケシ)。又曰、翠鳥(ソビ)ヲ爲ニ御食人(ミケヒト)一ト

せうひ 源氏和秘抄曰、ひすいといふ鳥はうつくしき鳥之。川にあるせうひといふ鳥をいふ。源氏物語椎本曰、すゑすこしほそりて、いろなりとかいふめる、ひすいだちていとおかしげに、いとをよりかけたるやうなり。撰集抄曰、國母后にもあふがれて、三千美翠(ひすい)のかんざし玉の冠のかざりあざやかにて

少微(ショウビ) 塵添壒囊鈔 そな

言塵集曰、そなと云鳥をば、川せみと云之。又云そな鳥　**川せみ** 見上注　**河蟬** 言塵集曰、河蟬鳥之　**かほよ鳥** 言塵集曰、山川の井ぐひの上のかほよ鳥影みる時ぞねはなかれける。俊頼の哥合之。是はそな鳥と云鳥之。水にかげをうつせば、底の魚の上にうかぶを取と云、かほよが沼に詠り

【集註】續日本後紀曰、天長十年八月丙申、天皇御二紫宸殿下一供二常膳一間、有二魚虎一飛入集二殿梁上一、羅得レ之。文德實錄曰、嘉祥三年夏四月癸丑、地震。帝出除。百官吉服、大ニ祓於朱雀門前一、有二魚虎鳥一、飛ニ鳴ク於東宮樹間ヲ一、何ヲ以テ書レ之、記レ異也

【形狀】言塵集曰、河せみ衣、そなと云鳥をば、川せみと云之。その鳥の毛にてをりたる衣之。㝡上品の衣と云ヽ青衣下品衣之。青女靑侍などヽ云も、如此衣ゆへと云ヽ〇呼子鳥曰、せうびん、かはせみともいふ、大きさすゞめに大ぶり、かしらより尾までるり色にひかり、はら赤く、はしながく、尾みぢかし。本朝食鑑曰、頭背ノ毛碧色翠斑翎交二青黑一、尾亦翠色、眼邊有二黑紋一、頰黄頷白、腹色黄赤、其掌有二三指一、而前指有レ枝、常止二水上之樹枝草上一、窺二魚之浮一ヲ、忽チ没レ水捕レ魚、十ニ一モ無レ不レ得レ之

水乞鳥（ミツコヒドリ） 夫木集　【漢名】**翡翠** 本草　【今名】**山セミ**

藻塩草曰、水乞鳥〔夏の日にもゆるわが身の（山家集ニ出）わびしきに水乞鳥のねをのみぞなく。〔君をゝきてことこひするはおく山に水乞鳥の水こふること。〔山ざとは谷のかけひのたえ〲に水乞鳥の声きこゆ也。〔やま

のゐのむすぶしづくやにごるら
ん水こひ鳥のあかぬけしきに
日、あつさのわりなきほどは、水こひ鳥にもおとらず、心
ひとつにこがれ給ふ。圖詩略記、加其篇中抽翡翠之毛羽

[一名] 水こひ鳥 狹衣　みつこひ鳥 散木集　[集註] 狹衣

[形狀] 日本紀略曰、弘仁四年四月辛卯、右衛門府獻ㇾ鳥、似ニ魚虎鳥一、羽毛皆足皆赤、時人無ㇾ知ニ其名一。三代實錄卷第二十九曰、貞觀十八年秋七月十四日己丑、大雷雨、諸衛陣ニ於殿前一。參議行右大辨從四位下兼行近江權守源朝臣舒、獲ニ奇鳥一獻ㇾ之、其大及體如ㇾ鴨、羽毛觜脚皆赤、勅放ニ北山一○大和本草曰、魚狗大小二種アル、大ナルヲミゾゴイト云フ、五位鷺ノ類ニハ非ズ、山セミトモ云、ツチノ川セミニ似テ大也。尾短シ。色紅黃ナリ。或碧紫ナリ。觜脚赤色ナリ。觜大ニシテ長シ。本朝食鑑曰、近俗所謂山少微ト云者、似ニ魚狗一而稍大、嘴最大如ニ鴉觜一、毎捿ニ山川一。本草時珍曰、翡翠似ニ魚狗一稍大。或云、雄爲ㇾ翡其色多赤

加毛米（カモメ） 倭名類聚鈔　[漢名] 鷗 本草　[今名] カモメ

[一名] 鴨女 續日本後紀　加萬目 萬葉集卷第一曰、海原波、加萬目立多都ニ云云。言塵集曰、かまめとは鳥かもめの事之　鴨妻 萬葉集卷第三曰、奧邊波、鴨妻喚、邊津方爾、味村左和伎。倭名鈔曰、鷗。和名加毛米　[集註] 續日本後紀卷第三曰、承和元年二月辛未、是夕、當ニ于禁中之上一、有ニ飛鳴者一、其聲似ニ世俗所謂海鳥鴨女者一、其類數百群、或言非ニ

海鳥ハ是天狐也。宿衛人等、仰レ天窺望、夜色冥曚、唯聞ニ其声ハ不レ弁ニ其貝ニ焉。土佐日記曰、けふなみたちそと、ひとぐ\ひねもすにいのる。しるしありて、風波たゝず。いましかもめむれゐてあそぶところあり。平家物語卷第三曰、沙頭にゐんをきざむかもめ云〻。義經記曰、かすみへだてゝこぐ時は、沖にかものなくこゑも、てきのときのこゑかと思ひける。催馬樂曰、きのくにや、しらゝのはまに、ましらゝのはまに、きてゐるかもめ、はれ、そのたまもてこ。兼好法師家集曰、海のおもていとのどかなる夕暮に、かもめのあそぶを。「夕なぎに浪こそ見えねはるぐ\と沖のかもめの立ゐのみして。源平盛衰記卷第五曰、汀ニ遊鷗鳥群居テ思ヤナカルラン。山背國風土記曰、久世郡槙産鶺鴒鴨鷗雁。兎道郡貢鷗。大和國風土記曰、宇陀郡貢鷗。平群郡飽波庄貢鷗。和泉國風土記曰、日根郡貢鷗。攝津國風土記曰、有馬郡貢鷗鴨。參河國風土記曰、寶飯郡貢鷗。加賀國風土記曰、加賀郡小濱鄉貢鶺鴒鷗鷺。笠野鄉貢鶴鷗。太上法皇御受戒記曰、南則池水泓澄河鶴紅鷗自馴

【形狀】○本草食鑑曰、鷗者輕漾如レ漚。湖河溪川亦居、然非レ不レ通ニ江海ニ處ト而居者少矣。頭背灰白、腹白觜脚紅、每群ニ集漁浦ニ以貪ニ腥鮮ヲ而喧躁タリ。不レ然則汎ニ泛ス千萬里晴波ニ閑ナル如レ忘レ機。大和本草曰、鷗。クビ白ク腹白シ、背ノ毛灰色ニテウスシ。觜長シ。鳥ノ如シ。肉少ナク腥シ、食スルニタヘズ

○美夜故杼里（萬葉集）

【漢名】白鷗（遵生八牋曰、王摩詰夜登華子岡云云白鷗矯翼）

【今名】シロキカモメ

【一名】みやこどり（枕草紙）　宮こ鳥（源氏物語）　都鳥（古今著聞集）　城鳥（八雲御抄）　○萬葉集

いノ下古寫本かアリ

事ノ下古寫本をアリ

寄古寫本奇ニ作ル

卷第二十曰、布奈藝保布、保利江乃可波乃、美奈伎波爾、伎爲都都奈久波、美夜故杼里香蒙

集註 源氏物語手習曰、宮こ鳥に似たるはなし、なにことにつけても。古今著聞集曰、院御隨身右府生秦頼房、みやこどりを或殿上人にまいらせたるを、成季にあづけられて侍り、くゐ物などもしらで、萬の虫をくはせ侍るも、所せく覺へて、ゆゝしきものかいなるによりて、小田河美作茂平がもとへやりてかはせ侍しを、建長六年十二月廿日、節分の御かたたがへのために、前相國の富小路の亭に行幸なりて、次日一日御逗留ありし。相國みやこ鳥をめして叡覽にそなへられけり。返歌つかはすとて、少將内侍紅のうすやうに、歌を書て鳥につけて侍ける。「春にあふ心ははなのみやこどりのどけき御代のことやとはまし。おとゞ又女房にかはりて、檀紙にかきておなじくむすびつけける。「すみだ川すむとしきゝしみやこ鳥けふは雲井のうへに見るかな。此事兼直宿弥つたへ聞て、本主に申こひて見侍て返すとて、都鳥芳名、昔聞二万里之跡一、徴禽寄躰、今遂二一見之望一、畏悦之餘。謹述二心緒一而已。前三河守卜部兼直上。にごりなき御代にあひみるすみだ川すみける鳥の名をたづねつゝ。東關紀行曰、隅田がはらならねば、こととふべきみやこ鳥もみえず。散木集曰、わたのみさきにて、都鳥のあまたみえたれば云々。回國雜記曰、隅田川のほとりにいたりて云々猶ゆきゆきて川上にいたり侍て、都鳥たづね見むとて人々さそひけるほどに。東路のつと曰、おしがも都鳥堀江こゝちして

形狀 拾穗抄曰、みやこどり、師說一条禪閤御說には、鷗の事之とのたまへり。下學集などにもしか侍るを、此物がたりに、鴫のおほきさとかきたるは、鴫ほどなるとの事なれば、いまの世の都鳥にはあらざるにやと不審立侍るゆへに、或はしぎやうにて、それよりおほきなる心な

どいふ說出來侍りしがあれど、其おほきさといふ詞は、まさしく其ほどらひといふ事之。これにつきておもひ侍るに、此物語のさま、此鳥をはじめて見て、其當意をかきたるなれば、此鳥の大小にもかゝはらず、廣き川の面にて、ちいさくみえたるさまを、かく鴫のおほいさとかけるなるべし。其時ふと鴫ほどにおぼえたるにや云々。又云、此おほいさといふ詞は、法花經に乃下一點大如微塵といへる大の字とおなじ。古今切紙次第曰、都鳥と云事云々こゝにては都鳥は淸和の御ちやく子、陽成の御事之。代々天子を鳥にたとへ奉る。是は天地を自由の御事之。然は陽成はおさなくて、はやく都を御そうぞくなれば、天子を鳥に云上に陽成を都鳥と申也。業平二条の后の御事を、我思ふ人わといへるなり。そのころ淸和の御代すめり下給に成給へば、二条の后と夫婦の御事なれば、きん中にましますともしらねば、天地の間を自由なれば、都鳥いざことゝわん我思ふ人禁中に有やなしやと云つる、是をひして伊勢物語に、かもめを都鳥と云之。かもめは左右の身は白く、はしとあしと赤き物なり

今案 伊勢物語曰、むさしの國としもつふさの國とのなかに、いとおほきなる河あり。それをすみだ川といふ。さる折しも、しろき鳥の、はしとあしとあかき、しぎの大きさなる、水の上にあそびつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人みしらず。わたし守にとひければ、これなんみやこ鳥といふ。卽江鷗也。正字通曰、鷗在レ海者曰海鷗、在レ江者曰江鷗。本草綱目曰、在レ海者名海鷗、在レ江者名ニ江鷗一江鷗二種アリ。一ハ頭背灰色ニメ腹白、嘴足赤色ナルハカモメ河䳟也卽カハカモメ此也。一種ハ全身白色、頬ニ一ツノ黑點アリテ、觜足紅色ナルハ都鳥也。河䳟者倶ニ海䳟ノ鷗ヨリ小ニメ鳩ノ如シ。共ニヒメカモメト云。海鷗ニモ亦白色ニメ觜足紅色ナルアリ。普通海鷗ハ脊灰白色、腹白、嘴青黑、足黃色也。海鷗大小數種アリ　已下ノ諸書、江（カハカモメ）鷗海鷗（ウミカモメ）

貞享海路記備前京女郎此京女郎と申は如此岩を云いかにも女郎之立姿也

倶ニ白色ニメ紅觜紅足ナルヲ通ジテ都鳥トセリ。平家物語云、波の上に白き鳥のむれゐるを見給ひては、かれなんあり原のなにがしの、すみだ川にて、事とひけん名もむつまじき都鳥かな、とあはれ也。トミユ。此レ白鷗ヲ都鳥ト云ル徴也。又拾穗抄頭書曰、都鳥は鷗の事なるを、其色白くうつくしき故に、都人の容貞に思ひよそへて、田舍人は此鳥を都鳥といふなるべし。西國の海中に白き石と黒石とむかひてたてるを、渡海の船人など、白きを京上﨟、くろきをいなか上﨟と申侍るにて推はかり侍るべしト覩レバ、白鷗ハ都鳥、灰白色ナル鷗ハ加毛米(カモメ)タル明證也。袖中抄曰、ひなはゐなか也。都は京也。寄園寄所寄曰、都ハ者美也。鄙ハ者陋也。詩云、彼都人士。史記云、五羖大夫荊之鄙人也。以帝王所居。文物整齊士女閒雅ニメ爲レ美。故曰ニ都門ハ曰ニ都人ト。以邊陲郊野風俗疎略可鄙。故曰ニ鄙民ト曰ニ鄙人ト。丹鉛總錄曰、都何以訓ニ美都ニ者鄙之對也。左傳曰、都鄙有レ章。淮南子云、始ニ乎都ニ者常卒ニ乎鄙ニ。蓋天子所レ居輦轂之下、聲名文物之所レ聚、故其士女雅容閒雅之態生、今諺云、京樣即古之所謂都相如傳車從甚都是也。邊垠所居蕞爾之邑、狐狸豺狼之所嘷、故其閭閻斉裔村陋之狀出。今諺云、野樣即古之所謂鄙。老子云、衆人皆有以而我獨頑似鄙是也。古言字考ニモ、都鳥、武州土俗謂ニ白鷗ニ爲ニ白羽ハ又謂ニ之都鳥ハト云此也。藻谷殿集曰、しかすか遠江眞砂こす波かと見れば數しらずかもめむれゐる奥のはなれ洲。十六夜日記曰、すみだ川のわたりにこそありと聞しかど、みやこどりといふ鳥の、はしとあしとあかきは、此うらにもありけり。文會雜記曰、隅田川ニテ詠ゼル都鳥ハ鷗ナリト云説ナリ、然ルベシ。シギノ大サト物語ニミエタルハ、大河ノ上ニ浮ビタランニハ、少サクモ見ツベシ。昔ヨリ都鳥ハ和田ノ御崎、コシノ海、高津ナドニ讀タリ、サラバ鷗ノ說然ルベシ。白鷗ノハシトアシハ

赤キナリ。疑フベクモアラズ

東山殿御香合云

松か勢

銀を以白鷗を作り自有沙鷗信此心といふ詩の句をあしてにする之

文會雜記曰、徠翁ハ至テ情ノコハキ人ナリ。翠水ノ懷古ヲ予ニ式作リテ白鷗ト云ハヤハリ都鳥ト云タルガヨシトナリ

歸德名勝志曰、夏竦詩云、海鷹橋邊春水深。畧ホ無ニ塵土ニ到ル花陰ニ忘機不レ問人知ルヤ否ヤ。自ラ有テ沙鷗ノ信ニス此心ヲ

平家物語曰、鳥羽殿云々池の邊を見まはせば、秋の山春風に白浪しきりに打かけて、紫鴛白鷗せうようす。源平盛衰記卷第十曰、姑射山仙洞ノ池ノ汀ヲ望バ、春風波ニ諍テ、紫鴛白鷗逍遙セリ。朗詠集曰、順。東ニ顧ヘバ亦有ニ林塘之妙ヘナル、紫鴛白鷗逍ニ遙ス於朱檻之間ニ○廣東名勝志曰、明汪廣洋詩、汀沙聚ニ白鷗ヲ。廣事類賦曰、潛確類書、李昉園中畜ニ五禽ヲ皆以レ客名白鷗曰ニ閑客ニ、黃庭堅詩有ニ白鷗ノ閑似レ我○萬葉集ニ保利江乃可波乃、美奈伎波爾、伎爲都都奈久波、美夜故杼里香蒙ト載レバ、伊勢物語ヨリ已前、都鳥ノ事ヲ難波堀江ニ詠リ。然則、伊勢物語ヨリ始テ出タル都鳥ノ名ニモ非ズ。八雲御抄ニモ、城鳥すみだがはならでもたゝ京辺何にも

有。白鳥のはしあしあかき也ト云。即白鷗ヲ云ルヿ明也。北條氏康、むさし野の記行ニ、やう〳〵すみ田川にもつきぬ、河づらをみれば、まことにしろき鳥の、はしとあしとあかき鳥の、むれゐて魚をくふありさま、むかしを思ひいでゝ。ト云バ全ク白色ニメ、嘴足紅キ江鷗ヲ都鳥ト云ル證也。同書ニ、大磯小磯をみわたせば、をしやかもめの波にたちさはぐをみればト云ハ、脊灰白色、腹白色ノ鷗ヲカモメト云ル徵也。十六夜日記曰、はまなのはしより見わたせば、かもめといふ鳥、いとおほくとびちがひて、水のそこへもいる、岩のうへにもゐたり。即脊灰白色ノ鷗也。十六夜日記ニ、水のそこへもいるト云ハ杜撰也。カモメハ紀州海士郡外濱ノ方言ニ、ヘウタント云。其身輕ク水上ニ浮ヘドモ、水底ニ入ルヿ鸕鷀ノ如クナラズ。水上ニ浮ミタル魚ヲ拾ヒ食スル耳、故ニ食ニ乏シ。俗諺ニ鷗ハ日ニ三度ノ食ニ乏ヲ愁ト云

〇都鳥 伊勢物語抄

漢名 未詳

大和本草曰、今案ニ都鳥ト称スル鳥アリ、背ハ黒ク、腹脇白ク、觜ト足ト赤シ、ケリノ形ニ似テ、其形ウルハシ。按ニ、都鳥ハナベゲリニ近ク、ナベケリヨリ小也。背灰色、内ヨリ鮮紅色、腹ニ至リテ薄ク、腹白色。此鳥鷗ノ内ニ雑居セズ、シヤクナギノ群ニ雑リ斥鹵ノ地ニ食ヲ求ム

集註 紹巴伊勢物語聞書曰、しろき鳥の都鳥は、せなか黒く、腹白き之。鴫のおほきさなる、鴫のすこしおほきなる物と云心也。其躰又鴫に似たりと云々名にしおはゞ齊宮齊字に相應せばと云心の詞之　都と云名に相應する鳥ならば、都に思ふ人は無事にしてありやなしやを問たきと之。伊勢物語抄奥書云以宗祇法師本写也云々明應八年八月十三日關白左大臣御判云々于時大永五年正月右大臣在御判云々以准后尚通公御入筆重以加右府稙宗公御奥書云々曰、しろき鳥とは都鳥、背はくろく、はらはしろし、鴫の大さなる、鴫のやうにて大なる鳥といへり、鴫の勢分なるにては

談は斷たるべし

なし。又鴫のほどにても成べし

【諸説】明暦二年仙洞御講譯、伊勢物語聞書曰、白き鳥の、しぎの大さなるを、打聞には鴫のやうにて、鴫よりは大きなる鳥と有、されども大きさとさの字入てあれば、鴫よりは大きなるとは云がたしと云。鴫の大きさ斗にてと云れさう云。是は鴫の勢分なると云心なるべし。此義御講談云。愚見には、かもめの類と云。名にしおはゞ云々此鳥の名をとへば、都鳥といへば、故郷の名たるに寄、一入なつかしきと云。都と云名に寄て、なにしおふ物ならば、都の事をとふて、我思ふ人は心かはらでありやなしやと云。後拾遺第九、和泉式部哥、事とはゞありのまに／＼みやこ鳥みやこの事をわれにきかせよ。契仲勢語臆談曰、はしとあしとあかきといへる、下に鳥のと入れ心得べし。或抄に、都鳥は、せなかくろく、腹は白しといへり。或人この鳥、かもめにうちまじりてあそびありきてあまたあるもの云。鴫よりは大きなれども、遠目には、物のちいさくみゆれば、見たる所をかける趣のよし申き。或抄に、しぎのやうにて、それより大きなる鳥といふなり、とあるはうけられず。ちいさき事をいふにも、その大さ胡麻のごとしなどはいへり。大さとは、ほどゝいはんがごとし。加茂眞淵伊勢物語古意總考曰、或人問、古今歌集に、川のほとりにあそびけりと有て、理り明らけし。この文には、水のうへにあそびてといへば、あしは見へしやと、答此とりはかもめにて、群つゝあそぶ、故に飛たつも、邊りに有も侍るべければ、此間はかたくなし。且これかもめなるをしらせんとてや語をそへつらん云々万葉に、船競(きほふ)堀江の川の水ぎはに來ゐつゝ鳴は宮子(みやこ)どりかも。とあり。其後にも歌によみたれば、此鳥の名は聞て、見るはじめなる故に、是なんと書たり。宮子鳥は、鷗の一名と見へたり。古本に鷗と有は、鷗の草の手より誤れるもの云。さて惣て、白

きに、はしと足とはあかくて、美やびたる形故に、宮てふ名を得たるか。頭書曰、田烏の大さてふを、しぎより大きなるをいふといへるはわろし。惣て何の大さてふ語、たゞその物ほどてふ語之。さて鷗に大小あり、大なるは眞鴨の如く、小きは鳩の如し。田烏にも澤なるは小く、山しぎは大き之。これは小き鷗を遠くてみれば澤にあるしぎほどゝいはんこと、大かたたがはず、かゝることはおほよそに心得て有べし。又むね黒く、腹白き鳥之。といふは僞也。かもめにもさまぐありて、羽の灰なるあれど、專らは脊も、はらも白きに、兩羽のつきゞは少し黒きぞおほき。こゝに白き鳥といへるもさることゝ

やすかた 藻塩草

漢名 未詳

集註 藻塩草曰、子をおもふ涙の雨の笠の上にかゝるもわびしやすかたの鳥。太神宮へ勅使下て、うとふやすかたと云鳥を取て、三角柏と云樋に備て、神供にたてまつると也。此鳥取物は蓑笠をきてとる之。其故は、すなの中に子をうみてかくしたるを、母鳥のうとふがまねをして、うとふくとよべば、やすかたと云て、はい出るを取と也。其時、母空にかなたこなたへつきありきて、鳴涙雨のごとくに、ちにてふる間、其涙かゝりて身のそんずる故に、みのかさをきる也。新撰哥枕曰、そとの濱といふ所に、うとふやすかたと云鳥の侍るが、此濱のすなごの中にかくして子をうみ置るを、母のうとうがまねをして、うとうくとよべば、やすかたとてはひいづるを取とぞ申。其時母鳥きたりて、あなたこなたへ附ありき鳴なり。其涙の血こき紅なる雨のごとくふる之。ある哥に云、子を思ふ涙の雨の血にふればはかなきものはうとうやすか

たとよめり。取る人此血のかゝりつれば、身のそんじ侍る故に、血をかゝらせじとて蓑笠をきるなりといへり。吾妻鏡卷第十曰、文治六年二月十二日、於下外濱與二糠部一間上、有二多宇末井之梯一、以二件山一爲二城郭一、兼任引籠之由。回國雜記曰、うとう坂といへる所にてよめるヿうとふ坂こえて苦しき行末をやすかたとなく鳥の音もがな

形狀　○大和本草曰、善知鳥。若水云、奥州ノ津輕外ノ濱ニ多シ、其形バンニ似テ喙脚モバンニ似タリ、頭ハ梟ノ如ク、嘴ノ上ニ肉角アリ、赤色也。脚赤シ。背ノ毛淡黑、腹ノ毛白色、是バンノ類ナルベシ。和漢三才圖會曰、索靚濱ハ津輕海辺惣名也。靑森ノ近辺ノ濱ニ有レ村、名二安潟一、善知鳥多シ。鷗之屬水禽。然ルニ以二安潟一爲二其聲一者、未審。奥羽觀迹聞老志曰、安方鳥或ハ号二善知鳥一、相傳是レ所レ產二于外濱一也。近來春夏之交、商賈賣レ之、其大サ似二小梟一而通形淡黑、長首尖觜、足共黃色。但自レ頷至二下腹一純白曰二善知鳥一、食レ之甚美、其好味不レ減二綠頭鴨一。外濱ハ津輕以北蝦夷ノ地、土人謂二之外ノ濱一。安潟村在二外濱靑森山畔一、此地有レ鳥、產二子于沙上一、入捕二其子一、則悲鳴甚。土人曰二沙鳥一、或称二善知鳥一、或号二烏鸇一

入ハ人ノ誤カ

かしらからけ　藻塩草

集註　藻塩草曰、うき鳥のさながらぬるゝ水
あそび何ぞはさてもかしらからけそ

古名錄禽部卷第六十三　終

古名錄禽部卷第六十四目錄

山禽類 上

○にごのり

差羽(サシバ)　海東青　○すそごさしは　○青さしは

豆美(ツミ)　雀鷹　○黒つみ　○赤き小隼

破夜歩佐(ハヤブサ)　隼

都布利(ツブリ)

久萬太加(クマタカ)　角鷹

美佐古(ミサゴ)　鶚

悦哉(エッサイ)

乃世(ノセ)

和之(ワシ)　鷲　○古和之(コワシ)

はちばみ

通計四十六種

古名録禽部巻第六十四

紀藩　源　伴存撰

山禽類

駿河國風土記曰、伊穂原貢山禽

多加 萬葉集

漢名 鷹 本草　今名 タカ

正字通曰、鷹雄形小、雌體大、生二于窟一者、好レ眠、巢二于木一者常大、雙骹長者起遲、六翮短者飛急名也。和名太加。今按、古語云、倶知兩字急讀レ屈、百濟俗號レ鷹也。見二日本紀私記一

一名 倶知 日本書紀　太加 倭名類聚鈔曰、鷹鳥 蔣魴切讀云、鷹 音膺 四 鷂揔

多可 萬葉集卷第十七曰、多可波奈家牟等、情爾波云云曾能保追多加波、麻都太要乃云云。二上能、乎底母許能母爾、安美佐之底、安我麻都多可乎、伊米爾都氣追母。扶桑略記第二曰、仁德天皇卌三年乙卯秋九月、始知二鷹能捕レ鳥、始令レ養レ鷹。西宮記曰、鷹屋在紙屋北、今荒廢人不知〇明月記曰、元久二年八月廿九日、今日八十嶋云云次隆仲朝臣云云雜色紺藍摺染交歟。摺鷹羽文染紺。仙覺萬葉集注釋十七曰、やかたおとは、尾のふの、矢の羽のやうに、もとのかたざまにきりたる鷹也。なら柴鳥 藻塩草　こゐ鳥 同上

集註

逈ハ邊ノ誤カ

日本書紀曰、仁德天皇四十三年秋九月庚子朔、依網屯倉阿弭古捕ニ異鳥一、獻ニ於天皇一曰、臣每張ㇾ網捕ㇾ鳥、未ニ曾ッ得ニ是鳥之類一、故奇而獻ㇾ之。天皇召ニ酒君一示ㇾ鳥曰、是何鳥矣、酒ノ君對言、此鳥類多在ニ百濟一、得馴而能從ㇾ人、亦捷飛之掠ニ諸鳥一、百濟俗號ニ此鳥一曰ニ俱知一、是今時鷹也。乃授ニ酒君一令ニ養馴一、未ニ幾時一而得ㇾ馴。酒君則以ニ韋緡一著ニ其足一、以ニ小鈴一著ニ其尾一、居ニ腕上一獻ニ于天皇一。是日幸ニ百舌野一而遊獵、時雌雉多起、乃放ㇾ鷹令ㇾ捕、忽獲ニ數十雉一。是月甫定ニ鷹甘部一、故時人號ニ其養ㇾ鷹之処一、曰ニ鷹甘邑一也。續日本紀卷第十曰、神龜五年八月甲午、詔曰、朕有ㇾ所ㇾ思、比日之間、不ㇾ欲ㇾ養ㇾ鷹、天下之人、亦宜勿ㇾ養。同卷第二十五曰、天平寶字八年冬十月甲戌、勅曰、天下諸國、不ㇾ得下養ニ鷹狗及鵜一以田獵上。同卷第三十七曰、桓武天皇延曆二年冬十月戊午、行ニ幸シ交野一、放ㇾ鷹ヲ遊獵。同卷第三十九曰、延曆六年冬十月丙申、天皇行ニ幸交野一、放ㇾ鷹遊獵。日本記略曰、延曆十四年三月辛未、敕、重禁ニ私ニ養ㇾ鷹。延曆二十三年冬十月甲子、禁ニ私養ニ鷹鷂一。類聚國史曰、延曆十八年五月己巳、尾張國海部郡主政外從八位上刑部粳忠言、權掾阿保朝臣廣成、不ㇾ憚ニ朝制一、擅ニ養ニ鷹鷂一、遂ニ令ニ當郡ノ少領尾張宿禰宮守、六齋之日、獵ニ於寺林一。因奪ㇾ鷹奏進。敕、須下有ニ違犯一先言中其狀上、而凌ニ侮國史一、輙ク奪ニ其鷹一、宜ニ特ニ決ㇾ杖、解ニ卻其任一。續日本後紀卷第二曰、承和元年春正月癸丑、天皇朝ニ覲後ノ太上天皇於淳和院一云云既而太上天皇、以ニ鷹鷂各二聯一云云獻ニ于天皇一。二月己丑、行ニ幸芹川野逈一。鷹鷂隼、覽ニ其接撃一。十月戊子、車駕幸ニ栗隈野一、放ニ鷹鷂一、日暮還宮。同卷第四曰、承和二年十月甲申、行ニ幸箕津野一、逈放ニ鷹鷂一、賜ニ扈從者祿一、日暮還宮。同卷第六曰、承和四年冬十月丙辰、聽ニ齋院司私養ニ鷹二聯一。同卷第九曰、承和七年五月癸未、後太上天皇崩ニ于淳和院一云云是日、於ニ建礼門南庭一放ニ弃鷹鷂籠中小鳥等一。同卷第十二曰、承

丁未原本ニモアレド重出ナレバ衍文ナラン

枝ハ扶ノ誤カ

和九年秋七月癸巳朔丁未、太上天皇崩于嵯峨院云云。丁未放弃主鷹司鷹犬、及籠中小鳥。同卷第二十日、嘉祥三年二月甲寅、御病殊劇云云。放諸鷹犬及籠鳥。文德實錄卷第七曰、齊衡二年夏四月戊午、禁私養鷹鷂。三代實錄卷第三曰、淸和天皇貞觀元年八月八日辛卯、勅五畿七道諸國年貢御鷹、一切停止。同十三日、丙申、禁畿內畿外諸國司養鷹鷂。同卷第四曰、貞觀二年閏十月四日庚戌、詔二品行兵部卿忠良親王、聽以私鷹二聯、狩五畿內國禁野邊。十一月三日己卯、詔參議正三位行右衞門督源朝臣融、賜大和國宇陀野、爲臂鷹從禽之地。同卷第五曰、貞觀三年二月廿五日己巳、詔大納言兼行右近衞大將源朝臣定、聽以私鷹鷂各二聯、遊獵山埼河內和泉攝津等國禁野之外。三月廿三日丁酉、詔河內攝津兩國、聽二品式部卿兼上總太守仲野親王、以私鷹鷂各二聯、遊獵禁野之外。同卷第七曰、貞觀五年三月十五日丁丑、是日、禁諸國牧宰私養鷹鷂。先是、貞觀元年八月、頒下詔命、不貢御鷹、亦制國司養鷹逐鳥。或聞多養鷹鷂、尙好殺生、故以獵徒縱橫部內、故重制焉。同卷第十三曰、貞觀八年冬十月廿日辛卯、是日、禁五畿七道國司庶人縱養鷹鷂。十一月十八日己未、勅二品式部卿忠良親王聽養鷹二聯、鷂二聯。左大臣正二位源朝臣信鷹三聯、鷂二聯。廿九日庚午、是日、勅聽二品仲野親王養鷹三聯、鷂一聯。正三位行中納言陸奧出羽按察使源朝臣融鷹三聯、鷂二聯、從五位下行內膳正連枝王鷹二聯。從五位上行丹波權守坂上太宿称貞守鷹一聯。從五位上行近江權大掾安倍朝臣三寅鷹三聯。同卷第十四曰、貞觀九年冬十月十日乙亥云云、貞觀之初、專心機務、志在匡濟、當時飛鷹從禽之事、一切禁止云云。同卷第四十四曰、陽成天皇元慶七年秋七月五日己巳、勅、弘仁十一年以來、主鷹司鷹飼三十人、犬三十疋食

堪大系本臺ニ改メテ云。據諸本改、類史卅ニ作措。

徑彼同經彼ニ改メテ云。據一本內本類史改。

已酉群本廿三日ニ作ル

料、毎月宛ニ彼ノ司ハ、其中割ニ鷹飼十人犬十牙料一ヲ、宛ニ送藏人所一ニ。貞觀二年以後、無レ置ニ官人一ヲ、雜事停廢、今鷹飼十人、犬十牙料、永ク以ニ熟食ニ宛ニ藏人所一ニ。同卷第四十六日、光孝天皇元慶八年十二月二日戊子、勅ノ遣ニ左衛門佐從五位上藤原朝臣高經、六位六人、近衛一人、鷹七聯、犬九牙ヲ於播磨ノ國、中務少輔從五位下在原朝臣弘景、六位四人、近衛一人、鷹五聯、犬六牙ヲ於美作國ニ、并獵ニ取野禽一ヲ。同卷第四十七日、仁和元年三月七日壬戌、勅メ遣ニ從四位下行左馬頭藤原朝臣利基ヲ於遠江國、從五位上守右近衛少將源朝臣湛ヲ於備後國ニ、並臂ニシ鷹堪フルヲ一レ犬ニ行、拂ニ野禽ハ路次往還、并徑ノ被之間、用ニ正税一ヲ供レ食焉。延喜式卷第四十一日、彈正臺。凡私養ニ鷹鷂一ヲ、臺加ニ禁彈一ヲ。法曹至要抄曰、弘仁八年九月己酉宣旨ニ云、中納言藤原朝臣冬嗣宣、奉ル勅ヲ、飼レ鷹者、頃年禁斷スルコト已ニ久シ、而ニ今諸人無レク有ニルコト公撿一、乖レ制ニ盜ミ養フ、但シ仰ニ看督ノ長ニ嚴ニ令メ禁察セ、其五位已上ハ錄シテ名ヲ奏聞シ、六位已下ハ禁メ身ヲ申シ送リ、所ノ持之鷹皆進セヨ內裏ニ。令曰、主鷹司。正一人、掌下調ニ習鷹犬ニ事上ヲ、佑一人、令史一人、使部六人、直丁一人、鷹戶。榮花物語月のえん曰、たかいぬかひまでのありさまを御らんじいれて。催馬樂曰、たか山に、たかをはなちあげて、おくをなみ、あはれをくをなみ、はれ。源氏物語柏木曰、たか御馬などそのかたのあづかりどもも。歌林四季物語曰、御鷹飼等たかすへてまいり、いろ〳〵の大鳥など、交野禁野、さらぬ野山にても、てうじてたてまつりて、そのことをこなひ祿たまはりぬ。河內國風土記曰、戶久良野爲栖鷹橫木以藁覆于其上、戶久良自此始使鷹甘部居之。出雲國風土記曰、仁多郡、禽獸則有鷹晨風。飯石郡、禽獸則有鷹隼。大原郡禽獸則有鷹晨風。陸奧國風土記曰、宮城郡磐城庄、貢鸖鶴隼鷹。百練抄卷第六曰、大治元年十二月八日、祭主公長取ニ進伊勢國內神戶庄鷹ハ、太上皇叡覽切ニ放之一。扶桑略記廿三日、

撿、同驗佑一人塙本ナシ流布本ハアリ

〻大系本古寫本〻

昌泰元年十月廿一日、太上天皇存二御鷹狩逍遙一。同二十日、承保三年十月廿四日、行二幸大井河一、御鷹逍遙也。古今著聞集卷第十四曰、わかき氏人どもおなじく狩裝束して、みな〳〵鷹手にすへて、かんだちべのかたへ御ともつかうまつりて、雪の中のたかゞりして御覽ぜさす。道すがらいと興有事共ありけり。同卷第二十曰、一条院御時御秘藏の鷹ありけり、たゞしいかにも鳥をとらざりけり云〻。鷹はやりければあはせてけり。則大なる鯉をとりてあがりたりければ、やがてとりかひてげり云〻。此鷹はみさご腹の鷹にて候。まづかならず母が振舞をして後に、父が藝をばつかうまつり候を、人そのゆへをしり候はで、今迄鳥をとらせ候はぬなり云〻。又曰、桓武御門、御まつりごとの後は、衣冠をぬがせおはしまして、御ぜんまいりて、鷹司の御鷹を庭にめして、餌をかはせさせ給けり。ある時は、又御手づから觜爪抔をつゞらせ給けり。吉野拾遺曰、なつみの河の河よどのほとりにて、鷹つかはせ御覽ありけるに。吾妻鏡卷第十五曰、建久六年九月廿九日、可レ停二止鷹狩一之旨、被レ仰二諸國御家人一、於下違二犯嚴制一之輩上者、可レ有二其科一。但神社供稅贄鷹事者、非二御制之限一。同卷第二十曰、建曆二年八月十九日、可レ禁二斷鷹狩一事、被レ仰二守護地頭等一。但於二信濃國諏方大明神御贄鷹一者、被レ免レ之由云云。同卷第三十六曰、寬元三年十一月十日、被レ停二止鷹狩一、今日普可レ被二觸仰一之由被レ定レ之。十二月十六日、鷹狩事永被二停止一、違犯輩者、可レ有二後悔一。但於二神社供祭物一者、非二制限一。同卷第四十曰、建長二年十一月廿九日、鷹狩事。諸人已背二嚴重ノ制府一、以レ之爲二日次之業一、所處、喧嘩狼籍職、而由レ斯二、仍可二停止一之由、被レ仰二諸國守護人等一。其狀云、鷹鶴事。右自二右大將軍御時一、諸社贄鷹ノ外、禁斷之處、近年諸人令二好仕一云云、甚不レ可レ然、於二自今以後一者、所々供祭之外、大小鷹一向被レ停二止之一、存二此旨一、

當國中隨二聞及一、可レ被レ加二制止一者、不二承引一輩、出來者、早可二注申一、殊可レ有二御沙汰一也者、依レ仰執達如レ件。建長二年十一月廿九日。相摸守、陸奥守。某殿。同卷第五十曰、弘長元年二月廿九日、鷹狩神社供祭外、可レ令二停止一事。同卷第五十二曰、文永三年三月廿八日、仰二放遊之士一、可レ被レ禁二遏鷹狩一之旨、日來有二其沙汰一、所レ被レ施二行于諸國守護人一也。其狀云、鷹狩事。右、祭之外、禁制先畢、仍雖レ備二于供祭一、非二其社領一、縱雖レ爲二彼ノ社領一非二其社官一者、一切不レ可レ仕レ狩之由、可レ令レ相二觸其國中一、若有二違犯輩一者、慥可レ註二申交名一之狀、依レ仰執達如レ件。文永三年三月廿八日。相摸守、左京權大夫。某殿守護人。白鷹記曰、大內の鳥の曹司に、數聯(モド)の良鷹をつながれ、數牙の逸犬を飼をかる。山家集曰、ふたつありけるたかの、いらこわたりすると申けるが、ひとつのたかはとゝまりて、木のするにかゝりて侍と申けるを聞く。續古事談曰、大饗ノ鷹飼ハ、中門ヲトヲリテ慢門ノ本ニテタカハスウルナリ。ソレニ東三条ハ、中門ヨリ慢門ノモトマデ、ハルカニトヲシ。下毛野二父トイフタカヾヒ、西ノ中門ヨリ、タカシスヱデアユミ入タリケルヲ、上達刀(ベ)ノ座ヨリアラハニミエケルニ、錦ノボウシキタルモノ、手ヲムナシクシテアユミキケレバ、人々千秋万歲ノイルハ何コトゾトワラヒケリ。ソノ、チ中門ノ下ニテタカヲスヱテイル也

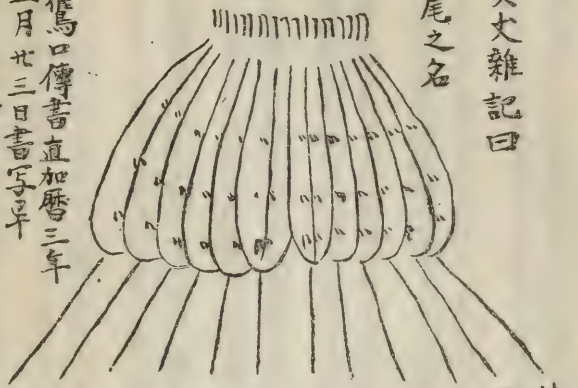
形狀

言塵集曰、鷹の手をなちとは、あら鷹を始て鳥に合を、たはなちとは云ゝ。とや出しにも言詞ゝ。ぬす立とは、つかれなどに忍て立を云ゝ。ぬすみ立共云ゝ。水雞たつとは、つかれ鳥の、羽よはに、しのび立を云ゝ。たかの谷入すると云は、ゑせ鷹の羽仕ゝ。谷わたしの羽とは、すくに飛羽ゝ。いちもつの羽仕ゝ。ますりきの羽とは兩說有ゝ。一說は、羽を次第にかきますを云共、一文字に飛をも云。いづれも逸物の羽仕ゝ。又曰、私云、鷹の

二父　群本公
久
シ　同モ
下　同ト

さか羽とは、もぢれたる羽之。鷹百首曰「名にめでゝ梅のはなげやにほふらん鷹のはかぜもはるさむきやま。むめのはな毛は、鷹の目の前にある毛なり。又曰「とつたかのくもでわかれのあをどつてまひさしあれてかほはつみかほ云〻。青どつては、青きとつての色之。これをこのむなり。黄どつては嫌なり。くもでわかれとは、ゆびのまた〳〵のわかれやうなり。とつてにみのなきをこのむ。あしの間をば、けなしはぎといへり。ひぢをば、こひぢといふなり。こひぢの毛をば、ほうしやうの毛と云之。ほうしやうの毛は、なかゝれといひつたへたり。又鷹のゆびのうらに、いぼのやうなるものゝあるをば、鳥ひしきといふ之。おにひしきともいふ之。鷹の名どころ多し。しるしがたし云〻。塵添壒嚢抄曰、餌トハ肉ニテ鷹等ノ餌也。其ヲヒサグ物ナレバ、エトリト云。又曰、鷹ヲアハスルニハ、鶚ノ字ヲ用。八雲御抄曰、鶚。屋かたをの、尾のまだらなるなり。袖中抄曰、屋かたをとは、鷹の相經には、屋像尾、町像尾とて、二の様をあげたり。屋かたとは、屋の棟のやうにさがりふにきりたるをいひ、町かたとは、田の町のやうに、よこざまにうるはしうきりたるなるべし。或人の、たかのことしりたるが申し侍しは、矢の尻のま地といふものゝ様に、尾の中のくきのまだらなるやうを、畫にかきてみせ侍りしかど、くき許にてやはあるべき。うるはしく尾のふの文にてあるべきなり。綺語抄云、尾にさがりふと云物のあるを云之。おほやかたを、ふのちがふなり。こやかたを、おほやかたをよりは、ちひさくきりたる也。童蒙抄云、矢のかたにゝたるをの有鷹之。奥義抄云、尾のふの矢の羽のやうにさがりふにきりたるなり〇閑見常談曰、鷹栢子點絲點斑點羅親點土卯點照布紋半照布紋土卯紋等名號頗ル多シ、而駿鷙不レ係ニラ於是ニ。或云、蛭點壽絲點ハ、不才亦タ非ニル的論ニ也

伊勢貞丈雜記曰

鷹尾之名

白鷹記		鷹傳書	鷹當流次第
芝引	シバヒキ	小石打 ヒハ之卓尾	小石打
石打	イシウチ	大石打 筈尾	大石打
鳴柴	ナラシバ	ナラシバ	ナラシハ
瀬待	セマチ	セバチ	ナラヲ
多肋	タスケ	タスケ	タスケ
尾魁	ビクハイ	鈴付	上尾
尾魁		同	上尾
多肋		タスケ	タスケ
瀬待		セバチ	ナラヲ
鳴柴		ナラシハ	ナラシハ
石打		大石打	大石打
芝引		小石打	小石打
以上白鷹記		以上鷹傳書	以上鷹當流次第

鷹口傳書直加暦三年二月廿三日書写了

鷹當流次第年代未詳古書

○於保太賀（オホタカ） 倭名類聚鈔 【漢名】蒼鷹 卓氏藻林 【今名】オホタカ 肉攫部曰、凡鷲鷙等一變爲鴘、二變鶬轉鶻、三變

爲正鵠、自此已後至累變皆爲正鵠。魏元深鷹賦曰、二周作レ鴘、千日成レ蒼。品字箋曰、鷹生久而蒼、故又謂ニ之ヲ蒼鷹一

一名 **大鷹** 言繫集曰、大鷹は女鷹之。鷹百首曰、大鷹の兄を兄大鷹とは申之。又大鷹と云字、角鷹ともかく也。倭名鈔曰、鷹不レ論ニ青白一、大者皆名ニク於保太加一ト。俗說、雌鷹謂ニ之大鷹一也

はし鷹 鷹百首曰、西國日向薩摩には大鷹をはし鷹と云也。其國ぶりの習在之間、物ごとにかはる事あるべし

大黒 萬葉集巻第十七曰、大黒者、蒼鷹之名也

集註

義輝公御元服記曰、從ニ義賢方ニ蒼鷹一聯、御太刀云云奉レ献ニ上大御所ノ御方ニ也。本朝無題詩曰、蒼鷹一擊過寒樹。萬葉集巻第十七曰、思ニヒテ放逸鷹ヲ夢ニ見ルヲ感悅作歌一首并短歌。云云矢形尾乃、安我大黒爾、之良奴里能、鈴登里都氣底、朝獦爾云云。右射水郡ノ古江村取ニ護蒼鷹ヲ一、形容美麗鷙レ雉ヲ秀レ羣ニ也。於レ時養吏山田史君麿、調試失レ節、野獵乖レク候ヲ、博風之翅高翔匿レ雲、腐鼠之餌呼留靡レ驗。於レ是張ニ設羅網一窺ニ乎非常一、奉ニ幣神祇一特ニ乎不虞一也。粤以ニ夢裏ニ有ニ娘子一、喩曰、使君勿下作ニシ苦念ヲ空ク費中情神上、放逸彼鷹、獲得未レ幾矣哉。須臾覺寤有レ悅ニ於懷一、因作ニ却レ恨之歌一、式旌ニス感信一、守大伴宿禰家持、九月二十六日作也

形狀

萬松院殿穴太記曰、伊勢國住人加太といふ逸物の大鷹を持侍る由聞せ給ひ、則めしのぼせられてつかはしめ給ひ云々此鷹の相、鷹經にかなへるのみならず、秋獵の道をえたり。首頭(頂イ)は盤を項き、羽毛は斑紕をみたし、前に向へば、腹のみ有て羽翼見えず、後にめぐれば、飛泉を毛上に落すかと疑はれ、それる事は軒の如し。目の光り明星に似たり。尾魁多助、背待尾、鳴羽、石打、芝引尾、只一枚にたゝみなして、たいひろくして鳥をとをし、懸爪、打爪、鳥居、歸子のゆびのさきに至る迄、一々善相ならずと云事

なし。鷹百首曰、かほはつみかほといふこと、大鷹のかほはつみと云、小鷹のかほのごとく、かしらのうへひら俱まびさしあれ靑ばしふとくくひこみ、ふかくうけがひひらき、こくびぬけあがりたるをこのむなり。うけかひとは、したばしの下、をとがひなり、をとがひとはいはぬなり○大和本草曰、白鷹ハ日本ニナシ、朝鮮ヨリ來ル、鶴雁鵠䳑ヲトル。山海名產圖會曰、鷹。甲斐山中、日向丹後伊豫等に捕るもの皆小鷹にして、大鷹は奧刕黑川上黑川大澤富澤油田年遺大瓜矢俣等にて捕なり。しのぶ郡にて捕者凡てしのぶ鷹とはいへり。按ニ鷹百首ニ西國日向巢の大鷹は毛を早する物之ト云エバ、大鷹日向ニ出ル證トスベシ　○

勢宇　倭名類聚鈔　○飛鷹錄曰、朝日ヲ受テ爪ノスキ見ユルヲ雌トス。スキテ見エザルハ雄ニシテ、今云兄鷹也。雌ハ和俗ノ云弟鷹ナリ。鷹家ニテ鵰ノ雌雄ヲ定ムルニハ、縣爪ヨリ鳥搦ノ爪マデ引延シ五寸アルモノヲ雌トス。又組合タル羽先ノ多ク出タルヲ雌トスルノ說アレド正說ニアラズ。論ノ鷹ヲ雄ニ定ムルコトハ鷹家ノ習也。曾我尙祐旧記曰、雄ヲ兄鷹ト云事ハ、巢ニテ雌ヨリモ早ク生テ、早ク大ニナルニ依テ兄鷹ト云也。本朝食鑑曰、按今亦雄ヲ爲レ兄、而小雌爲レ弟、而大大能摯而疾小雖レ摯、而不レ逸也。弟讀作レ大爲レ名、所レ出未レ詳。俗說雄鷹謂ニ之兄鷹。鷹百首曰、弟鷹とかきて、たいたかとはよむまじきと也。たいとばかりよむべし。兄鷹同前、せうたかとよむ事比興と云也。言塵集曰、兄鷹とは、せうの事也。せうは男鷹之。人の女におそるゝは、せうのやうにと源氏にも云り。尺素往來曰、鷹兄鷹

一名　兄鷹　倭名鈔曰、鷹、小者皆名ニ勢字ト。漢語抄用ニ兄鷹二字ニ

形狀　○大和本草曰、諸鳥ハ雄大ナリ、只鷹ハ雌大ナリ。雄ヲ兄鷹ト云、雌ヲ弟鷹ト云　○之良

四年春正月ナリ

太賀 倭名類聚鈔 【今名】シラタカ 正字通曰、凡物之白者皆以レ白名レ之、白ハ通稱也 【一名】白大鷹 萬葉集 眞白部乃多可 同上 麻之路能鷹 同上。倭名鈔曰、鷹。廣雅云、三歳名ニ之青鷹白鷹一。今按、青白ハ隨レ色ニ名レ之、俗說ニ鷹白者不レ論ニ雌雄一皆名ニ之良太賀一。八雲御抄曰、ましろのたか

【集註】言塵集曰、白鷹。赤白、青白皆是ハ白鷹之。又曰、鷹。御鷹、白ふの鷹、眞白ふの鷹、青鷹、赤鷹、是等も白ふにあり。吾妻鏡卷第十四曰、建久五年十月廿二日、葛西兵衛尉清重獻ニ白大鷹一羽一、無雙之逸物也云云。則被レ預ニ結城七郎朝光一。日本書紀卷第二十九曰、天武天皇白鳳四年壬戌、是日、東國貢ニ白鷹一

【形狀】萬葉集卷第十九曰、詠ニ白大鷹一歌一首并短歌。云云鳥布美立、白塗之、小鈴毛由良爾、安波勢也里、云云都麻屋之內爾、鳥座由比、須惠氏曽我飼、眞白部乃多可。反謌。矢形尾乃、麻之路能鷹乎、屋戸爾須惠、可伎奈泥見都追、飼久之余志毛。鷹百首曰、雪じろのしら符まじら符つまじろにあをじろほゝしろ舌も白鷹。是はみなしろの鷹の類之。符もいづくも常の鷹なりとも、舌のしろき鷹しろのうち也。白鷹の符なりとも、したしろくなきは、しろにてはあるまじきといふ說あり。是は子細口傳有之。きた山兄鷹はきはめてしたしろきとなり。これにて分別すべしとぞ。きた山も舘によるといへり。弁慶巢とて目にあざのある心歟。これも所によるといふ之。弁慶巢不知案內の衆は、いかさま一腹の舘と心得候歟。せいろう巢はつくさなどのたち程には無之候也申傳候。まないたふちはすぐれたる舘也。をろかなる鷹なし。彼國もとにても大切まれなるやうにきゝつたふる之。弟鷹兄鷹によらずほん

そう逸物するなり。言塵集曰、のきばうつましろの鷹のゑ袋にをきゑもさして返しつる哉。金葉集に有也。昔我等鷹もて遊びし時、随分のたかさうを聞し人の申しは、鷹ののきばうつとは、とはふ鷹は主にそむきてといふ間のきばうつと云。又そるゝ鷹の羽仕ともいひし也。此歌はそれたる鷹をのきばうつと詠たる也。凡鷹詞狩詞所々にいひかふるなり、何をもて可用歟、鷹のそゞろうつとは、昨日飼たるゑの骨毛などを朝はき出す云なり。攎此一字をそゞろとよめる、鷹の尾ふさは鞦之。此字をしか讀之。袖中抄曰、しらふのたかとは、たかには、あかふ、くろふ、しらふ、とてみつの毛のあるなかに、しらふはしろみ、くろふはくろみ、あかふはきばみたるなり。そのしらふの中に、よくしろみたるを、ましらふといふ歟○大和本草曰、白(シロ)ハオホタカ隼ニアリ。本朝食鑑曰、一種背腹白ク、觜灰白、此レヲ謂ニ白鷹ト。又迄(イタルマデ)レ爪白者呼ニ雪白鷹ト。飛鷹錄曰、羅山文集云、去冬長門國有ニ白鷹一、以ニ其ノ不ルヲ常故欲レ獻ニ幕府ニ云云。(壬寅)本藩旣ニ白符ト云ヘル村アリテ、往昔此邑ヨリ白生鷹出タルカ故ニ名トス。寛永二年乙丑秋、公廣ノ代第七代本藩支利宇知村谷地ヨリ異體ノ羽替ノ白雄鷹出テ、爪觜悉ク白カリシトゾ。同七年庚午冬亦一色白雌鷹出テ、江府ニ獻ジタリシガ云云近代晉曆年中ニモ亦予ガ采邑反部ノ離山ヨリ白鶻出タリ。西園寺家ノ傳ニ、白鷹ノ定法アリ。乱飛ノ根白ク、四毛ニ覆輪深ク、羽筋白ク、拾花深ク、足ノガンキコマカニ色鶸ノ如ク、目色薄ク、羽裏白シト云ヘリ。亂飛ハ頭飛四毛ハ背上ノ四毛也。毛並ニヨリテ三毛共云リ。拾花ハ尾端ノ白キトコロ、ガンキハ鷹ニモ蹼アレバ是ヲ云

○もろこしの鷹　著聞集

【集註】古今著聞集曰、嘉保二年冬のころ、石見守宗季もろこしの鷹をまうけたりける。はぎたかく、尾みじかくして、よの常のにも

似ざりけり。足緒などもつきたりけるは、人の飼たりけるにこそ。人にあづけてかはせける程に、かひそんじにければ、院よりめされけれども参らせざりけり

○ましろ 鷹百首

仙覺萬葉集註釋卷第九曰、矢形尾第十七にいへるがごとし。ましろのたかとは、目の上の白き鷹といへり

一名 眉白 鷹百首曰、眉白、眉の白キたかなり ましろのたか

集註 奥儀抄曰、やかたおのましろのたかをやどにすへかきなで見つゝ云々、やかた尾のふの矢の羽のやうにさかりふにきりたるたかなり。集には矢形尾とかけり。袖中抄曰、童蒙抄云、ましろとは、目のうへのしろきをいふ。綺語抄云、目の白也。めのけのしろきなり

形状 鷹百首曰、とびいづる羽かぜも袖にあらたかのましろのゆきははらふともなし。ましろ、眉白也。常の鷹より眉ふとくしろきをいふ也。あらき羽風にも、眉白の雪ははらふともみえず、しろきといふ心也。付眞白としろの鷹といふと他流に在之、眞白符は當流也。ましら符と云、白鷹歟。ましろは眉白也。まぎれたる事之。能々分別すべし

○本朝食鑑曰、目白者眉ノ上ヘ白也

○和賀太加 倭名類聚鈔

漢名 黄鷹 埤雅 今名 ワカタカ

一名 和加太加

埤雅曰、一歳曰黄鷹。三才圖會曰、鷹鷙鳥也、一歳曰黄鷹

天文写本和名鈔曰、鷹。廣雅云、一歳名之黄鷹、音應、和名和加太加。倭名鈔曰、黄鷹、俗云、和賀太加。袖中抄曰、黄鷹と書ては、わかたかとよむ、一歳のたかなり

若鷹 鷹百首 あかげ

鷹百首曰、あつめたりあかげ野ざれ山がへりもろかたかへり巣鷹巣まは

り。あかけは若鷹の事之。されども巣鷹のわかたかなどをあかげといふべからず、字には網懸とかけり。又黄毛とも書之。日向たかの巣鷹若鷹をば日向巣といふべき之。又曰、若鷹を網懸黄尾とかく之。又曰、あかけといふ字は黄毛とも書、之若鷹之

赤鷹 言塵集曰、赤鷹とは若鷹の時の毛之。鷹百首曰、赤鷹赤符、大黒符若大鷹に在之見様口傳歟

赤毛の鷹 言塵集曰、赤毛の鷹とはあみにて取たる鷹を云之〇雜記曰、若鷹は野にてそだちたるをいふ

［形狀］鷹百首曰、おほくゆく犬のかしらに木居づたひつかれのとりをおしむ赤鷹。赤鷹とは符のあかき鷹之。大鷹にあるえ。あかけのときにいふなり。赤符とはいふまじきとなり。黄毛とかきて、あかげとよむ、桃花符、赤符にいへり。大鷹に赤符黒符のせんさく當流には不申、他流には申ならはすとみえたり。口傳共歟。又曰、鷹によりせまち町かたやかた尾にしと丶尾まじる尾よしわしずり。せまち尾町かた尾しと丶尾およしわしずりみな尾の符の名之。付尾よしの符の横に黒筋を切とをさぬなり。若鷹にあり。但とやをすれば、常のごとくになる之。又曰、若鷹の鳥屎出のむねのとを山毛はつとりがりにあはせてやみん。遠山毛とは、毛をかへたる中に、若鷹の毛、ところ〲にのこしたるをいふなり。見事なる物なり。はつ鳥がり、とやをいだしはじめて、鷹を山へあけて取餌事也〇飛鷹錄曰、黄ハ當歳也。黄鷹ヲナベテアカケト云ヘルモ片クナシ。赤毛トカキタランニハ若鷹也

〇大黒符 鷹百首

［一名］**黒ふの鷹** 鷹百首

［形狀］鷹百首曰、大黒符は各別と云〻大黒符と云はうけかひのしたに、はりをすりならべたる様に符をたつにこまかにきる、さて尾すけへ符をきりつむ

るなり。大黒符は、心ふかくなつきかねけにより餌かひも逆之。順の餌飼にてはちがふ物なり。言塵集曰、黒ふの鷹は、大黒ふと云事、尾すけの毛までふを切たるを云之。八雲御抄曰、鷹しらふのあかふくろふもあり

○加太加閉利（カタカヘリ） 倭名類聚鈔 【漢名】鵜鷹 埤雅 【今名】カタカヘリ 埤雅曰、一歳曰ニ黄鷹、二歳曰ニ鵜鷹ハ鵜次赤也。三歳曰ニ鶬鷹ハ今通ニ謂ニ之ヲ角鷹ハ頂有毛角微起○袖中抄曰、綺語抄云、ことしとりて、つぎのとしのあきすぎてかへるをば、かたかへりといふ。むねのふの、よこざまになる也。つぎのとしをば、もろがへりといふ。ふのこまかになるを云也○飛鷹録曰、撫鷹ハ鳥屋ニメノ二歳也。今云片毛片鳥屋是也。然レ圧鳥屋ニテ赤毛ヲ残リナク振タランニハ片毛トハ云マジキモノナリ。黄鷹ヲナベテアカケト云ヘルモ片毛ナシ、赤毛トカキタランニハ若鷹也

【一名】片鳥屋 鷹百首。倭名鈔曰、鵰雅云、二歳名ニ之撫鷹。俗云、加太加閉利。言塵集曰、鷹二歳をば撫鷹とも云なり。かた歸同物也、袖中抄曰、撫鷹とかきては、かたかへりとよむ、二歳なり

かたかへり 八雲御抄曰、とかへり

【集註】定家卿鷹百首曰、鷹ははやもろかたかえりすぎぬ之今いくとしのとやをかはまし。袖中抄曰、たかに、かへるといふことをよむは、毛のかはるなり。鵜とかきてかへるとよむ、経ニ二歳ニなり。たかへるといふ事ぞふたやうに申すめる、一にはあはせやりたるたかの、たかゞひの手へかへるをいふといへり。長能歌云、みかりするすへ野に立るひとつ松たかへるたかのこひにかもせん。此歌は、手にかへりみると、こゝろへらるゝを、いかにもたかのかへるといふは、けのかはるをいへば、わが

手にて、けのかはるをいふべきなり云〻盛房は、宇治殿の仰られしは、たがへるとは、田にてかへるといふ也。をのずから、田にてあはすることあり共、たがへるといふべからず。或人のまうししは、たがへる、とがへるとは同ことゝ。ひとつには、とやかへるを、ことばを略して、とがへるといへども云〻。或人の申しは、とやかへりは、とやにてかへるにむかへて、とやの外にてかへるをいふかと申き。或人のまうしゝは、たかには七かへりと申す事もあれば、十度かへらんずるを、とかへりと云歟と云〻。只惣じて鷹のけのかへるをいふとぞ思べき。綺語抄云、とやにてかへるをいふ、とやかへりと同事ゝ。童蒙抄云、とやかへるといひ、とかへるといふは、かのとやにてかへると云也。奥儀抄曰、たかには、たがへると云事あり。わが手にかへりぬるを云ゝ、などかきたるものも侍れど、こゝろえず。たがへるとは、わが手にかへるといふこそ、とやがへりのたかを申べきにや。又とかへると云事あり。それもこのとやかへりをいふと思ひ侍るに云〻やまにてかへりたるをも、とかへるといふときこえたり

形状

〇本朝食鑑曰、鷹至ニ夏ノ末ニ毛羽次第ニ落テ、而還生ニ新毛ヲ、至テ冬ニ如レ初、此ヲ俗呼テ曰ニ鳥屋ト、言心ハ鷹易ルレ毛時、入テ鳥屋ニ不レ出之故乎。易レ毛後謂ニ一鳥屋ト、是一歳也。次ノ年易テ毛後謂ニ二(フタ)鳥屋ト、是二歳也。鶻隼亦同。八九月以レ媒取レ之、呼謂ニ鳥屋待(マチ)ト。雜記曰、片かへりとは一年經たるをいふ。撫鷹ともいふ也

〇山かへり　鷹百首

袖中抄曰、やまかへりといふは、やまにてけのかはるなり　〇飛鷹錄曰、鷹賦中ニモ二周ヲ鵤トスト云ヘル、山ニテ年ヲ越テ、黃毛衣ヲ毻テ、黑白ノ羽毛ヲ毨限中紫根歷黃ナルモノニシテ、今云ヤマカヘリ是也。西園寺流ニテ、春トリタル鷹ヲバ、若モノニテモ山歸リト云コトアリ、コレハ日來記ノ說ニヒトシキ

起マヽ越ノ誤カ

カ

一名 山歸 言塵集 やまかへり 八雲御抄 山回 尚祐記 集註 鷹百首曰、山かへり、山にて毛をかへたる鷹之。形狀 ○雜記曰、山がへり やまがへりに、かたがへり、もろがへり、もろかたがへり、もろ〳〵がへり、などいへり。言塵集曰、山歸とは山にて一年へたるを云之。又山にて一年取たるをも云と云は、山にて一とやも、二とやもしたるを云。曾我尚祐旧記曰、山回ト云ハ、歲ヲ起テ二歲ナルモ末ヽ換カヘ毛ヲ云也

○小山がへり 鷹百首○雜記曰、小山がへりはあかけの鷹、正月十五日より内に打落したるをいふ

○片山歸 言塵集 集註 言塵集曰、片山歸とは、山にてたゞ一とやに一年へたるを云之。又片山歸云ゝ山にて一年取たるをも云と、一說とや片山歸共云 。只一鳥や二とやなどゝも云之。古山歸古鳥歸などゝ云はおひたるたかの事之

○諸鳥屋 鷹百首 形狀 ○雜記曰、鳥屋と云は四年の秋より、十年廿年も鳥屋鷹といふ、鳥屋とは夏の末より羽ぬけ落て、冬に至て新羽はへとゝなふを云なり

○古鳥屋 鷹百首 集註 鷹百首曰、とや數をふませてつかふは古し鷹の見えがたきをばいかにしてまし。鳥屋數ふまするとは、每年毛のかずをかさねたる鷹なるべし。古鳥屋なり○飛鷹錄曰、定家卿ノ鷹ハハヤモロカタカヘリスギヌ之今イクトシノトヤヲカハマシ。詠ゼラレシハ、鳥屋籠ノ四歲鷹之。指ハ十字ヲ重ジ、尾ハ合盧ヲ貴ブコト古ヨリ云レタリ。小鷹ガリ秋ヨリスマノ雨ヲホヒ一羽アルカトミユル尾タヽミ。𪜈ヨメリ。尾ヲ一枚ニ振タヽムト云コト是之。尾末ノヒラケルハ

其性虛弱ニシテ悪相ナレバ之。雨ヲホヒハ鷹ノ尾ヲ蓋ヒタル毛也

○こやかへり 八雲御抄 集註 袖中抄曰、とやがへりといふは、鳥屋にて毛のかはるなり

○もろかへり 八雲御抄 ○雜記曰、諸がへりとは、三年經たるを云、春鷹とも云也。曾我尙祐旧記曰、三歳ヲ鵃(モロカヘリ)鷹ト云 一名 春鷹 言塵集曰、鷹三歳をば靑鷹と云之。白たか同物之

○野ざれ 鷹百首 集註 鷹百首曰、野ざれ種々の說あれども、かたがへりほどなるをいふ歟。言塵集曰、野ざれ山がへりなど云は、ふる鷹の事之。又曰、はやふさのあまたかへりたるをば野ざれの山がへりなど云之 形狀 ○飛鷹錄曰、鷹鵃數歲ヲ重子バ毛羽ツマリ身重ク、飛コト遲シ。片毛兩毛ハ二歳三歳ヲ云、五歳ヨリ分チガタキヲ云ヘリ。一說ニ旧鷹ハ年ヘタル鵃ヲ云、久鷹ハ鳥屋鷹ノフルヲ云トモ云リ。鵃キハメテ常鷹ニ異ナル良鷹アリ、又キハメテ奸ニシテ誘キガタキ惡鷹アリ。其故ハ年ヘタル功ニテ人ヲモ欺クベキ智アリ。古歌ニ、ノザレト云ヘル野編ナリ。旧鵃ノキハメテ尾羽モツマリ至テ古サビタルヲ云。雜記曰、野ざれとは、三月之內に取たる若鷹をいふ。山にて鳥屋たるは野心つきてつかひにくきと之。曾我尙祐旧記曰、野曝ト云ハ、今年ノ鷹ヲ、冬ノ內ニ捉タルヲ云之

○半子 鷹百首 一名 はした子 言塵集 集註 言塵集曰、はした子はせうよりはちいさく、はいたかよりは大なるを、はした子とも云と云 云はした子と云文字は半と書、故に何れも不足故に云 形狀 ○飛鷹錄曰、鷹鶻雌雄殆ンド分チガタキモノハ古ニ論ノ鷹ト云ヘリ。又半子

トモ云之 ○はしたい（鷹百首） 一名 はしたね 言塵集曰、はしたねと云事鷹に有之。一說には、是をはしたかと云々 一說にはせうにもあらず、はいたかにもあらず、定がたきたが有之。はいたね共、はした共云々 はいたね（見上） 集註 鷹百首曰、鷹を架につなぐ次第も若鷹片鳥屋諸鳥屋古鳥屋野ざれ山がへり弟鷹兄鷹隼子はしたい白鷹以下、其外隼小鷹諏方流當流かはり是あり云々又はしたいと云事當流の秘事と云々

○さほひめかへり（鷹百首） 集註 鷹百首曰、はし鷹のさほひめがへり小山がへり春は色々の名にやたつらん。節分こえて、春うちおとしたる鷹は、さほひめがへりとも、春のあら鷹をいふ之。又曰、さほひめのまじろの鷹のかねつけもほのかにみえて日もくれはどり。さほ姫がへり、春うちおとしたる鷹なり。かねつけ、くれはどり、いづれもたかのけの名なり 形狀 曾我尙祐旧記曰、佐保姫鷹トハ、ワカタカヲ春提タルヲ云、ムカシ奈良ノ京ノ時、佐保山都ノ東ニ當レリ、春ハ東ヨリ來レリ、然バ春得タル鷹ヲ佐保姫鷹トハ云之

○巣鷹（鷹百首） 漢名 蒐鷹（肉攫部） 今名 タカノコ 肉攫部曰、鷹巣一名蒐鷹呼二蒐子一者、雛鷹也 一名 すたか（言塵集） 小鷹（同上） 集註 鷹百首曰、巣鷹子飼之巣迴巣立を云歟。西國東國鷹によらず双牛双々がんぎまさご輪屋といふ事鷹の秘事見所肝心と注置と之。口傳有之。又曰、巣鷹鳥屋大略、日向巣又は筑前國つみ巣なるべし。但東國松前にも巣鷹在之、西國には網懸

もゆへどもまれなり。言塵集曰、すだかとは、巣より取てかひたるを云之。すだかをその年とやにて飼たるを云之。又曰、小鷹をたかの子とも詠たるなり。すだかの子を取て飼を云と云々。宇治拾遺第六曰。いまはむかし、たかをやくにてすぐるものありけり。鷹のはなれたるをとらんとて、とぶにしたがひて行ける程に、はるかなる山のおくの谷のかたきしに、たかき木のあるに、たかの巣くひたるをみつけて、いみじきこと見をきたるとうれしく思て、かへりてのち、いまはよきほどになりぬらんとおぼゆるほどに、子をおろさんとて、またゆきてみるに、えもいはぬみやまのふかきたにの、そこゐもしらぬうへに、いみじくたかき榎の木の、枝はたににさしおほひたるがゝみに、巣を喰て子をうみたり。たか巣のめぐりにしありく、みるにえもいはずめでたきたかにてあれば、子もよかるらんとおもひて云々

形状

言塵集曰、たかの子のつはな毛と云は、たかのこと云り○本朝食鑑曰、又取巣捕雛養之、呼謂巣鷹。甲信奥羽之諸山多捕之、西北諸州亦有。雑記曰、巣鷹とは巣の内よりおろしてひなの時（ひなとは鳥の子なり）かひ立たるをいふ。

飛鷹錄曰、凡鷹鶻ノ雛ハ、古ヨリ畜ヘル例アレド、予ハ此物ヲ好マズ、物ノ子トシテハ、其父母ノ養ヲ得テ長ズルコト自然ノ理也。禽獸豈亦タガハンヤ。各其父母ノ哺ヲ得ルニシクベカラズ。サレバ巣子ニ百癖アリト云リ、キハメテ育ガタキモノナレバ也。サレバ魏彥深モ養雛則小病ト云ヘリ。意フニ常ノ研餌ノ味ヒヲモト、スベシ、美餌ヲ多ク與ヘバ腰ヌケ、長生ヲ保チガタシ。長ズルニ隨テハ土ヲフマシムベシ、雛ヲ捕ルノ節ハ、綿毛ニテ肩韝ノ黑毛四五分生出ルヲ度トス、肩韝ハ俗ニ云鞆形也。ワタ毛ハ白雪ノ如クナルモノナレバ、ハシタカノ塒ノ雪ヲフミチラシトヤノ内ヨリ冬ヤ待ラント。定家卿モ詠ゼラレタリ。鶻モトヨ

リ法アリテ明旦日中薄暮ニ三五ノ餌ヲ飼コトアレド、鷹鶻各其性ニヨルベシ。巣子ヲ若種トモ古來ノ称也。今モ羅シ捕タル黄鷹ヲ初種ト云、是也。サレバ鵜鷹ハ初テ捕タリモ初種トハ云マジキモノナリ。鷹家ニテ巣ノ字ヲ鷹ニ用ヒ、窠ノ字ヲ鶻ニ用ヒ來レルモ據コロアル說ナリ。字彙ニ、鳥在穴曰窠、在木曰巣云云鷹鶻ノ巣即チ然リ。字典窠字註曰、窠音科。說文穴中曰レ窠、樹上曰レ巣、又巣字註曰、巣音鄛、說文鳥在レ木上曰レ巣、在レ穴曰レ窠 巣子百ニ九十八虚弱ニシテ拙シ、久鷹タリモ巣鷹ヲ末架ニ繫クコト鷹家ノ習也。今和俗ノ雄ヲ兄鷹ト称シ、雌ヲ弟鷹ト称スルモ亦據ロアルコトナリ。鷹雛卵ヲワルトキ、雄前タツ也。後ニ㲉ヲワリタルハ雄トミユレモ、生長ニシタガツテ雌ノカタチアラハルベキナリ。巣鷹ヲ捕モノ心ヘアルベキ事ナリ。巣子三雛アレバ、一鷹决テ雄ナリト云ヘルモ非也。明和庚寅ノ年、蝦夷西部ノ地イシヨリ店所ヨリ予ガ従僕鷹雛ヲ持來シガ、一巣皆雌鷹也キ。此時三鷹共ニ一巣也。學者世俗ノ說ヲ信ズベカラズ

○網懸 鷹百首

○雑記曰、網懸とは今年生れたるを七月より冬の月に至るまで取りたる若鷹の事之。いまだ鳥屋せぬ内に取たる之○巣まわりといふは、今年生たるを七月半までに取たるをいふ。五月末ならばあかげと云之雑記

【正誤】 本草啓蒙曰、又鷹ノ雛已ニ長ジテ食ヲ求テ飛翔スルヲ見テ、樹間ニ網ヲ張リ、死鳥ヲソノ旁ニ置ケバ、雛鷹來リ死鳥ヲトラントスル者ヲ羅シ捉ルトハ誤也。飛鷹錄曰、松前ニテ鷹(カラス)ヲトル法モ、秋七月上旬ヨリ九月下旬マデ也。年ニヨリ初冬中旬已下ニモイタル。鶻ハ窠立チ早シテ鳥ニサキダツホドノモノナレバ、仲夏下旬ヨリ鳥屋ノ用意ヲスルナリ。良鷹ハ暮秋已後出ルコト多シ。凡鷹ヲ捕ニハ、天氣ノ晴雨ヲ考ベシ。東風雨ヲ起シ、西風ニ變ジ忽チ白雲ヲ拂テ青天ヲ見ルヲ羅シトルノ法則トス。一雨過テ鷹鶻必ズ深山

ヲ出ヅベシ。山林人家ニ近クバ鳥ノ声ニ心ヲ付ベシ。扨山ニ登リ、媒鳥ヲ繫キ鷹ヲ待ベシ、鴿ノ羽色形容變ズ、其時鴿ヲ守ルノ外他方ヲ見ルベカラズ云云。又曰、鴿ハ和名イヱバトニシテ今云土鴿也。鴿ハ即山バトニテ、毛羽モロシ。シカレドモ媒鳥トモナスベキ之。雌雄ノルイハ已コトヲ得ズコレヲ用ユルナリ。黑キニハ白斑ノ鴿ヲ用ユベシ。空中ノ鷹ニモ覩スベキガ爲ナリ。又曰、本餌木ト窟屋ノ間凡十二三間ホドナルベシ。其中央ニ囮ヲ繫ベシ。正字通曰、囮率レ鳥ヲ者繫クニ生鳥ヲ以來スレ之ヲ名テ曰レ囮。觀此則媒鳥ハ生鳥タル明證也。山海名產圖會曰、伊豫國小山田には羅して捕れり。此山は土佐阿波三國に跨たる大山なり、されば鷹は高山を目かけてわたり來るものなれば、必此山に在り。七八月の間柚の實の色付かゝる折を渡り來る期とす。羅はほり切羅といひて、目の廣さ一寸、或二寸、すが糸にても苧にても作る、竪三四尺、横二間許なるを張りて、其下に提灯羅とて、長三尺ばかり、周徑一尺斗のもめん糸の羅に、ひよどりを入れ、杭に結ひ付、又其傍に木にて作りたる蛇の形のよく似たるを竹の筒に入れて、糸をながく付て、夜中より仕かけ置き、早天に鷹木末を出て求食を見うけしかきの内より、蛇の糸を引て、ひよどりのかたを目かけ動かせば、恐れて騷ぎ立を見て、鷹是を捕んと飛下て、羅にかゝる。即媒鳥は生鳥ニテ、死鳥ニアラザルヲ知ベシ　〇

多加乃久曾（タカノクソ）　本草和名　［漢名］　鷹屎白　證類本草　［今名］　タカノクソ　［一名］　太加乃久曾　本草類編曰、鷹屎白、和太加乃久曾。本草和名曰、鷹矢白、和名多加乃久曾

波之太賀（ヘシタカ） 倭名類聚鈔　漢名 鷂 爾雅註　今名 ハイタカ

爾雅曰、鷂負雀。註、鷂鷂也。江東呼レ之爲レ鷂、善捉レ雀。因名云

一名 波之太加 天文寫本和名鈔〇倭名鈔曰、鷂。兼名苑云、鷂。一名鷂。鷂也。野王按、鷂。似レ鷹而小者也。

漢語抄云、波之太賀。兄鷂古能里。鷹百首曰、鷂と云字を鷂とも書之類之。かきかへと可心得云々鷂をはしたかと云說もあり

はい鷹 言塵集曰、はしたかに鷂と書、兄鷹とはせう之。兄とはこのりなり。はい鷹はこのりの女之。又曰、はいたか、はしたかと云

山鷂 伊勢國風土記曰、安濃郡出山鷂鶴云云

箸鷹 言塵集曰、私云、箸鷹は小たかの名之。倭頼髄腦抄曰、はしたかの野守の鏡えてしがな思ひおもはずよそながら見ん。むかし天智天皇と申みかど、野にいでゝたかがりせさせ給ひけるに、御鷹そりてうせけり。むかしは野守とて、野まもるものありけり、それをめして、御鷹そりうせにたり、たしかにもとめてまいらせよ、とおほせられければ、たみは君におもてをむくる事なし、うつぶしにゐてつちをまぼりて、御鷹はかのおかのまつのほずえに、みなみにむきてしかはべりと申ければ、おぎとらせたまひにけり。そも〳〵、なむぢ地にむかひてかうべを見る事なし。いかにしてこずへにおれるたかをばしるぞや、ととはせ給ひければ、野守のおきな、たみは公主におもてをまじふる事なし、しばのうへにたまれる水をかゞみとして、かしらの雪をもさとり、おもてのしはをもかぞふるものなれば、そのかゞみをまもりて、御鷹のこゐをえたりと申ければ、そのゝち野中にたまれる水を、のもりのかゞみとは

閏五月、癸酉（廿四日）　　乘イホ草

いふとぞいひつたへたるに云々。古今著聞集卷第五曰、紫の雲にちかづくはし鷹はそりてわかばにみゆるなりけり。返し道因法師。はし鷹のわかばにみゆときくにこそそりはてつるはうれしかりけれ。袖中抄曰、はしたかとは、とやたかを云也。そのゆへは、とやよりいだして夜とりそむるには、かならず人のものくひたるふるきはしをとりあつめて、たきてよとりそむるなり。仍はしたかと云也。今案、とやにてよとりそむるを、はしたかといひならはしつれば云々。淸輔袋草紙曰、道濟ノ哥云、ぬれぬれもなをかりゆかんはしたかのうはげの雪をうちはらひつゝ。雜記曰、鷂はこのりの女之。歌にはしたかとあるは、はいたかの事之

【集註】日本記略曰、延曆十七年閏五月、先レ是、主鷹司於二北山一造レ巢ヲ、放二ツ鷂子一、卽生二三雛一、於二御前一養二長ス之一。天皇甚愛翫云云。續日本後紀卷第三曰、承和元年二月己丑、行二幸芹川野一、逝二ヲ鷹鷂隼一ヲ覽二玉フ其接擊一ヲ。十月戊子、車駕幸二栗隈野一、放二鷹鷂一、日暮還レ宮。同卷第四曰、承和二年十月甲申、行二幸ノ箕津野一、逝二放鷹鷂一、賜二扈從者二祿一ヲ、日暮還宮。同卷第五曰、承和三年二月壬午、天皇幸二神泉苑一、放二鷂隼一。同卷第十七曰、承和十四年十月壬子、雙丘ノ下有二大池一、池中鳥成レ群、乘輿臨幸、放二鷂隼一拂レ之。吉野拾遺曰、今上御位に居させ玉いし初つかた、伊豫國大舘左馬介氏明のもとより、世にためしなき程の逸物なりとて、はい鷹一もとたてまつられしを、大納言隆資卿にあづけさせ玉ひて、おりおり御覽じさせたまひけるに、まことに勝れたりけり

【形狀】袖中抄曰、鷹の中に鷂（ハイタカ）といふは、はいたかといふなり。似レ鷹而小也。野ノ行幸にも、はひたか鷹飼とて、小鳥うづらひばりなどとらん料に供奉（クブ）する也〇本朝食鑑曰、鷂者小鷹、非二鷹之雛一、別一種也。遍身似レ鷹多二黑斑一、腹有二黃黑斑者一、有二赤白交レ斑者一。大和本草曰、鷂（ハイタカ）、

ハシタカトモ云、コノリノ雌也。逸物ハ、カモサギヲトル、白鷹(オホタカ)ニ似テ小ナリ。其文色(フ)々アリ

○書言字考云、

○しぼ 鷹百首 【一名】 紫鷹 鷹百首 紫鴿 同上

鷹百首曰、鴿のあかきをば、しぼといへり。字には紫鷹とも、紫鴿ともかきたるがよきといふなり

【形状】 ○本朝食鑑曰、鴿又有下胸腹灰赤色交ニ黒赤斑一背ヵ純黒含ニ薄紅生鴿毛光者上、俗稱ニ赤母(シレモ)ニ也

○黒符 鷹百首 ○黄黒符 鷹百首 ○赤符 鷹百首 ○うつら符 鷹百首 ○もみち符 鷹百首

【形状】 鷹百首曰、鷹の符に、黒符黄黒符赤符紫鴿(シボ)さしはうつら符、又はもみち符、是は鴿にある符之。前にしるすごとく紫鷹、又は紫鴿、いづれもしほと讀云々藤符といふも在之歟。近來不聞馴之

【漢名】 花豹 小知錄

小知錄曰、本草釋名云、鷹小爲レ鴿、有ニ花豹白豹松兒桑兒諸名一

○藤符 鷹百首

○古(コ)能里(ノリ) 倭名類聚鈔 【漢名】 晨風 本草 【一名】 小鴿

日本紀略曰、天曆二年八月廿八日、太上天皇御ニ九条院ニ便於ニ芹川野ニ有ニ小鴿之興ニ○雜記曰、兒鷹は、はいたかの男也。兒鷹以下を小鷹といふ。兒鷹はつみニ同じ大サ也。鳥とらず

古乃里 天文写本和名鈔曰、鴿。楊氏漢語抄云、波之太加(ハイタカコノリ)、兒鴿、古乃里。尺素往來曰、鴿、兒鴿。扶桑略記三廿日、醍醐天皇昌泰元年十月廿日、主上聊弄ニ小鴿ニ逍遥歷覽

兒鴿 鷹百首曰、このりといふ字、兒鴿とも、兒鴿ともかくえ。又曰、みだれ裝束といふ事、小鷹にあり。大鷹にはなし。口傳に云、とりわき兒鴿

鶻にするなり。袖中抄曰、兒鶻。このりとよむ、みなおなじ小鷹なれど、このりなどは、すこしおほきなり

【集註】言塵集曰、このりはむねとひばり鷹につかふ之。このりは、よはき間、風ふかず、のどかなる比つかふ之。又曰、このりは、むねとねりひばりにつかふ之

【形狀】〇本朝食鑑曰、古能里者、鶻之兒而、狀略與レ鶻同シ大　〇和本草曰、兒鶻ハヒハリヲトル鶻ノ雄也。雌ヨリ小也

にごのり　鷹百首

【漢名】丹兒鶻　鷹百首　丹兒鶻　同上

【形狀】鷹百首曰、まへうしろ赤符の中にあかきをばにごのりとたがいひはそめけん。にごのりとは、一かどすぐれてあかきを云之。鶻にはなし。丹兒鶻、字に如此かきて、丹兒鶻とも也〇本朝食鑑曰、有ニ丹兒鶻者一、毛色如レ渥レ丹

差羽　鷹百首

【漢名】海東青　大淸一統志

【今名】サシバ

聞見常談曰、海靑與ニ鵶鶻一形體略同而鵶鶻、卽尾短ク與ニ鵔䴊一齊シ、海靑ハ則尾稍ヲ長ク如レ鷹、此レ其ノ異也。且皆栖子點雖レ陳不レ改、但陳則點差小。大淸一統志曰、寧古塔五國城出ニ名鷹一、自ニ海東一來者ヲ謂ニ之ヲ海東靑ト一。六研齋筆記曰、海東靑鶻之俊者、大者如レ鳩、春初自レ海入レ遼不ニ肯ヲ高ク飛ニ冲天一

【一名】小鷹　言塵集曰、小鷹の題にては、つみ、さしば、このり、などゝ讀なり。按ニ鷹百首曰、又うせたるをそらすといふ事は隼にいふ詞なりと香川美作守書にも注之。小鷹にはさし羽をそらすと云とみえたり。大鷹鶻已下小鷹うせたるなるべし、隼差羽いにたるうせたるといはず、それたる、そらしたるといふ事、

子細あると注之ト觀ユレバ、さし羽ヲ小鷹ト云ル證也

こたか

曾我物語卷第九曰、かれら二人はすはだにて、かたきにあはんとはしりめぐるありさまは、こたかのとりにあふがごとし。言塵集曰、木居をば小鷹には詠まじき之。古木居などは小鷹にも可有、草取と云事も、つかれと云事も大鷹に云詞之

小隼

鷹百首〇尺素往來曰、大小雀(サシバ)鷂等

集註 歌林四季物語曰、廿日あまりには小鷹狩のことはじめなど。言塵集曰、さしはと云こ鷹ゑつさいと云も有也。鷹百首曰、かりころもたてるうづらに手ばなせる跡をさし羽の野驛の遠かた。手放はうづらにさし羽をあはする躰之。鶉さしばの物之。さし羽と云字他流には多之。當流には差羽とかく也。又小隼ともかけり。つれ〴〵曰、小鷹によき犬、大たかにつかひぬれば、小鷹にわろくなるといふ。世繼物語曰、閑院のおとゞ冬つぎと申人の御子、内舍人よしかと申けり云〻わかくより鷹をなんこのみ給ひける云〻九月ばかりに小鷹狩に出給ぬ。扶桑略記廿七日、秋風遊狩之士、又無下臂二小鷹一之野上。源氏物語手習曰、八月十日あまりの程に小鷹がりのついでにおはしたり。太平記曰、高貞三月二十七日ノ曉、貳(フタ)ゴ、ロ有マジキ若黨三十餘人、狩裝束ニ出立セ、小鷹手每ニスヘテ、蓮臺野西山邊ヘ縣狩ノ爲ニ出ル樣ニ見セテ。長能家集曰、くりこまのみやけといふ所に、秋小鷹狩しにまかりけるに、あこたにの口に女郎花のたてるを見て云〻

今案 飛鷹錄曰、定家卿鷹歌、ハシタカノミヨリタ、サキカハルラン唐人(モロコシ人)ハ右ニスヘツ、。タ、サキハ徒先ニテ、鷹體ノ左也。ミヨリハ身寄ニテ、鷹體ノ右也。左手ニ居ルヲ、右手ニ居レバ、鷹體ノ名モ共ニ替ルベキト之。唐人ハ鷹ヲ馬上右ニ居ル、爾雅圖ニ出タリ。今日本ノ左居ニメ歩行ナルト異也。古ハ本邦ニテ小

鷹狩ニ馬上ニ鷹ヲ居シ證アリ。言塵集曰、仲正「雲雀とるこのり手にすへ駒なべて秋の苅田に出ぬ日ぞなき。むさし野の記行曰、人〻あまたうちつれて、小鷹がりしてあそばむとて、みな〳〵かりの裝束して、馬にうち乘。紹巴富士見記曰、山岡孫太郎よそ目さへたゝならぬ若人なるに、小鷹すへ、馬はやめなどして、柳が崎まで又したへり　形狀　○本朝食鑑曰、又小ニシテ如キ雀ノ鷁者曰ニ刺羽ト、能鷙ス小鳥ヲ、隼之類也。大和本草曰、サシバ小隼也。隼ニ似テ鷂ヨリ小也。ウツラヲトル朝鮮ニアリ、是鷹鶻方ニ称ニ鶏鶻ニ者ナラン。又ガツサイアリ。是亦小隼也。雜記曰、さしはは小隼也。大サはと程あり、諸鳥、餌かりをするなり。小鳥を取之。うづらをも取之○雜記曰、かつさいも小隼之。本朝食鑑曰、隼之小者ヲ俗ニ曰ニ我津佐伊ト或曰ニ目黒ト

○すそごさしは　言塵集　形狀　言塵集曰、すそごさしはとて、尾の半黑も有之。鷹百首曰、かりごろもすそごのさし羽靑さしばみどりをそふる野邊の靑草。すそごのさし羽とて尾のすそごなるあり

○靑さしば　鷹百首　漢名　靑松鶻　聞見常談　聞見常談曰、北人稱ニ海靑純白者ヲ曰ニ白松鶻ト、半白者曰ニ蘆花松ト、體黃紫者曰ニ黃松鶻ト、靑黑者曰ニ靑松鶻ト、或云ニ玉松鶻ト　形狀　鷹百首曰、靑差羽、靑き符也

○赤き小隼　鷹百首　形狀　鷹百首曰、又赤き小隼もあり

豆美　倭名類聚鈔　漢名　雀鷹　詩疏　今名　スヾメタカ

一名 須々美多加 倭名鈔曰、雀鷂。兼名苑云、雀鷂。善捉ㇾ雀者也。漢語抄云、須々美多加。或云豆美。袖中抄曰、こたかには雀鷂をばつみといふ、すゝみたかとも云 須々美太加 天文写本 和名鈔 都美 同上。鷹百首曰、つみといふ字は雀鷂と書之。又曰、つみといふ字、當流に雀鷂と書也。又雀賊ともかけり 雲雀鷹 言塵集曰、雲雀鷹とは五六七月間につかふひばりの夏毛替時、尾羽の落比つかふ之。尾羽の落たるをねりひばりと云、雲雀鷹とは、つみ小鷹の名なり。尺素往來曰、鵿兄鶙

形狀 ○本朝食鑑曰、雀鷂ハ能鷙ニ鳩已下小鳥ヲ、又鷙ニ鳧鷖ニ亦有、最モ爲ㇾ希也。大和本草曰、雀鷂ハ小鳥ヲトル、又ダイサギヲモトル。鷂ニ似タリ。雜記曰、雀鷂ハゑつさいの女之。大サひゑとり程あり

○黑つみ 言塵集

集註 言塵集曰、黑つみと云も有なり、若狹山の巣といへり

○悅哉 倭名類聚鈔

今名 エツサイ

一名 菩提雀 鷹百首曰、ゑつさいとは、菩提雀と書之 ゑつさい 言塵集○倭名鈔曰、雀賊。唐韻云、雀賊小鷹也。漢語抄云、和名悅哉。字典曰、廣韻、鵊似ㇾ鷹小ク、能ク捕ㇾ雀。尺素往來曰、兄鶙。袖中抄曰、鵿、ゑつさいとよむ。悅哉ともかけり

形狀 ○本朝食鑑曰、今以テ雀鷂之雄ヲ爲ニ雀賊ト 雀賊不ㇾ及ニ雀鷂ニ、漸鷙ニ雀鷂之類ニ而已。大和本草曰、雀賊ハ雀鷂ノ雄ナリ、鳥ヲ不ㇾ取、チカラヨハシ、ツミヨリ猶小也、形ハ似タリ

破夜歩佐 日本書紀 【漢名】隼 通雅 【今名】ハヤブサ 【一名】八夜布佐 倭名類聚鈔曰、鶻。音骨 斐務齊切韻云、鶻

通雅曰、隼。鶻屬也。齊人謂ニ之擊征一。禽經曰、鷹好時、隼好翔。毛詩鳥獸草木考曰、隼或曰卽今所ノ呼テ爲レ鶻者是也

和名八夜布佐鷹屬也。隼音筍、訓同上

大ヲ名ニ祝鳩ー鷙鳥也。

波夜布佐 天文写本和名鈔〇言塵集曰、はやぶさは鶻之。又隼共書。曾我尚祐旧記曰、隼鶻ノ二字ハヤブサ也

波也不佐 新撰字鏡曰、晨風鳥、波也不佐。鶻鶻同、之然反、平〇毛詩鳥獸草木考曰、晨風鷙鳥也。一名鸇、一名鷐、狀類レ雞青黃色、燕頷勾喙向レ風ニ搖レ翅、乃因レ風急ニ疾ク擊ニ鳩鴿燕雀ー食レ之。禽經曰、鶻鸇之信不レ如レ雁、今鶻亦去來有レ時然則制レ字以レ意又可レ知矣。孟子所謂爲レ叢敺レ爵者鸇卽此也。按正字通曰、鶻小于鷹、卽所謂鸇、觀レ此則晨風ハ、ハイタカノ雄ニタ、コノリ此也 莊子鶻爲鸇。字典曰、鶻ハ鷙鳥、鶻之別名。爾雅注、鶻、善捉レ雀。通雅曰、鶻小ニ于鷹一、卽所謂鸇、觀レ此則晨風ハ、ハイタカノ雄ニタ、コノリ此也

波夜夫佐 古事記曰、多迦由久夜、波夜夫佐和氣能云云。日本書紀曰、時隼別皇子舍人等歌曰、破夜歩佐波、阿梅珥能朋利、登弭箇慨梨云云

速總 古事記曰、是以速總別王、不ニ復奏一、云云其夫速總別王到來之時、云云於レ是速總別王、女鳥王、共逃退云云。鷹百首曰、はやぶさは兄隼と書て、せうはやぶさと讀べし、をとゝ隼は、たゞ隼とばかりいふべきとて、書狀にも弟はやぶさとは不可書之、隼一居とあるべきと也

つはさかま鳥 藻塩草曰、つはさかま鳥・はやぶさの事之

【集註】山背國風土記曰、兎道郡貢

弘仁十四年十二月壬午國史大系本仁明天皇承和五年十一月癸未ニ改ム　戊辰大系本ニ改ム

隼鷹類。類聚國史曰、弘仁十四年十二月壬午、是日、先太上天皇先ッ御ニ冷泉院ニ、次御ニ神泉苑ニ、放チ隼ヲ擊ニシッ水禽ヲ、天皇獻ニシ玉フ御馬四疋、鷹鶻各四聯、嗅鳥犬、及ヒ御屏風種々翫好ノ物ヲ。陸奥國風土記曰、宮城郡多賀庄貢牧馬隼鷹。駿河國風土記曰、伊穗原郡用隼鷹鶻鸇等。續日本後紀卷第二曰、天長十年九月戊寅、幸ニ綿子ノ池ニ、令ニ神祇少副從五位下大中臣朝臣礒守ニ、放チ所ニ調養ニ隼ヲ掛ニ水禽ニ、仙輿臨覽シ、而樂シ玉フ之。同卷第三曰、承和元年十月壬午、從ニ太上天皇幸ニ雲林院ニ、遊ニ獵北郊ニ、有ニ四國ノ藏人所隼從レ之。同卷第四曰、承和二年十二月壬辰、天皇幸ニ神泉苑ニ、放レ隼掛ニ水禽ヲ。同卷第五曰、承和三年正月戊戌幸ニシ神泉苑ニ、放隼掛シム水禽ヲ。十二月丙辰、天皇於ニ神泉苑ニ放隼、獲ニタリ水鳥百八十翼ヲ。同卷第六曰、承和四年冬十一月戊辰、天皇於ニ神泉苑ニ放隼。丁亥、天皇於ニ神泉苑ニ放隼。同卷第十八曰、嘉祥元年春正月辛巳、上幸ニ神泉苑ニ放シ隼、獲ニ水禽百廿翼ヲ。冬十月壬子、幸ニシ雙岳ニ、臨レ池放レ隼。鷹百首曰、をぎかふにえならぬ物は餌鳴して雲井をかける巣子の隼。をぎかふは、鷹を手はなち、餌をみせてをぎたつる事之。鷹を呼とはいはず、をぐと云之。手にわたるをば勿論わたる、又をぎとるといふなり。雲井をかけるは、隼にかぎりかけらするとて、手にわたらんとするときに、をぎ餌をかくすとき、そのまゝそらへあがり、雲井をかけりまはる事之。近來鴨鷹とて隼を空へあげつくる也。又曰、はやぶさにあておとされて白鷺のあさ澤水に羽ぶくあはれさ。隼の鷺にあたるをば、あておとす、あつる、あてたなどもいふなり。大鷹など鷺にあたるを、あたりをとすと云之。又曰、はやぶさのこくびをつきて肩をわりあおつ羽かぜに鴈をこそとれ。こくびをつくとは、うなづきてとりをみる事之。かたをわるとは、鳥を見てちく／＼と肩をひろぐる躰之。あをつとは、兩方の羽をひろげて、ひらひらとあおつ

受　大系本、愛ニ、摸ヲ横ニ改ム

事なり。隼にかぎりたるたか詞之。大鷹にかたをわるとは、なきこと葉なり。鳥にとび出くくするをば、はやるといふなり。是はいづれの鷹にも云詞なり

【形状】續日本後紀巻第五曰、承和三年二月己丑、天皇幸二神泉苑一放レ隼シ玉フ。受二其逸氣摸生、遲トキハ則應レ机ニ、招トキハ則易シ呼〇本朝食鑑曰、隼似レ鷹而蒼黒、臆腹灰白ニシテ帶レ赤、其背腹斑紋アリ、初毛不レ正、易テレ毛後略與レ鷹同、然全體不レ似二鷹鷂一、比ルニレ鷹則力亦不レ及乎。能摯ニテ鴻雁鳧鷺一、不レ能レ摯二鶴鵠及雲雀鶺鴒燕之類一。性猛而不レ悍、鷹鷂之屬同類並居トキハ則相拒而爭攫ム、隼者雖二同類並居一而不レ拒、相和並食、或同鷙二一鳥一、亦不レ拒、凡鷹摯二鴻鴈一、動以レ翅被レ搏而昏迷至ルニモ損傷一亦有、是鷹脚長之故也。隼摯二鴻鴈一而不レ搏レ、飛摯レ首ヲ喰折ル、是隼脚短之故也。大抵鷹鷂鷙レ鳥者、必先攫二鳥之腰一、若シ遇二ハ鵠鶴之類一、則垂レ下テ如二猿之サカツリノ一、隼亦雖レ攫レ腰、然モ早ク登二頭肩一者也〇飛鷹録曰、雄鶻ハ畜ベキモノナラズ、然ドモ鷹鶻共ニ雄ニ勝レタル顔相多ケレバ思ヒアヤマルコトアルベシ

乃世（ノセ）　倭名類聚鈔　【今名】ノタカ

【一名】能勢　天文写本和名鈔曰、題鵜附鶚子　隋雅云、鶚鵜漢語抄云能勢　倭名鈔曰、鷂鵜。鷂屬也。漢語抄云、乃世〇字典曰、集韻、鷂鵜鶚子、一曰征鳥、一曰鷹。通雅曰、題肩、或作二鶚鵜一、鷂鵜卽鷂也。鴕亦通作レ喬。記曰、鳥不レ喬則作レ獝、風之孔疾者也。亦作二鷸䬘一。字典喬字註曰、玉篇、飛貌。類篇、驚遽貌。禮ノ禮運、鳳以爲レ畜故鳥不レ喬、註、喬又作レ獝、驚飛也。左思吳都賦、鷸䬘䳎喬、註、衆馬走貌、喬同レ獝。又獝字註

曰、玉篇、狂也。禮禮運、註、獝飛之貌也。疏、獝驚飛也。據ニハ此等ノ說ニ、則乃世ハ野産ノ鷹ニシテ、人ノ養ヒ飼ハザル者也。世ハ即倭名鈔ニ、鷹小者皆名ニ𪀚字ハ、俗說ニ雄鷹謂ニ之兄鷹ハト云モノニシテ、兄鷹ナル鷂ノ山野ニアルモノ此也

都布利 倭名類聚鈔

今名 コノリノ山野ニ放シタル者

一名 豆不利 天文写本和名鈔〇倭名鈔曰、鷂子。廣雅云、鷂子、鷂属也。漢語抄云、都布利。本草綱目曰、禽經云、鵲生ニ三子ハ、一爲レ鶻鵲小ニシテ於鶻ヨリ而最モ猛捷、能撃ニ鳩鴿ハ、亦名ニ鷂子ハ、一名籠脫鷂、色青シ、向レテ風ニ展レハ翅迅摇 搏ニ捕鳥雀ハ、鳴則大風、一名晨風鷂、小ニシテ於鷂ハ、其脰上下亦取ニ鳥雀ニ如ニ擮掇ニ也。一名鷂子。字典曰、禽經、奪曰レ鷂。註、如レ鷂而小、取ニ鳥雀ニ如ニ擮奪ニ也。正字通曰、奪覆取也〇廣雅ニ、鷂鵲鶻籠脫鷂也。本草ニ鷂子、一名籠脫鷂ト云ヲ以テ考レバ、都布利ハコノリノ用ヲナシタル後、山野ニ放ツ者也〇鷂與ニ突厥雀ニ同名

和之 萬葉集

漢名 鷲 本草 今名 ワシ

正字通曰、鷲ハ大鵰、羽可レ爲ニ箭笴ニト

一名 於保和之 倭名鈔。按倭名鈔ニ鵰、和名於保和之。鷲、古和之ト云。倭名鈔國郡部曰、參河國碧海郡鷲取、和之止利。新猿樂記曰、

十ノ下八脫カ

之ノ上十九字署カ脫

本朝物。

和志

新撰字鏡曰、鷲。疾僦反、去、和志。鷲、和志〇字典曰、鷲。集韻、羌鷲、鳥名、南方有レ之〇萬葉集卷第十四曰、筑波禰(ツクハネ)爾可加奈久和之能(カカナクワシノ)、禰乃未乎可(ネノミヲカ)、奈岐和多里南牟(ナキワタリナム)、安布登波奈(アフトハナ)

鷲羽・

思爾(シニ)。倭名鈔曰、鷲。文選蕪城賦云、寒鴟嚇雛、嚇音呼格反、師說寒鴟讀ニ古伊太流止比一、嚇讀ニ加加奈久一

眞鳥

家中竹馬記曰、宇津ぼの上にさすべきしんとうは云〻羽は眞鳥羽を付べし。仙覺萬葉集注釋卷第七曰、眞鳥(まとり)は鷲也。えびすは、わしの羽をば、まとりのはと云なり。うなてのもりは、美作國の名所也云〻わしはうみちかき森にすむ鳥なれば、よそへよめるなり。うなてとは、うなは海(うみ)也。ては、はたの義也。邊(へん)なり

集註　日本靈異記曰、飛鳥川原板葺宮御宇天皇之代、癸卯春三月頃、但馬ノ國七美郡山里ノ人家有ニ嬰兒女一、中庭匍匐(ハラハフ)、鷲擒(トリテアカリ)騰レ空ニ指レ東而翥(ハフル)云云。延喜式卷第四曰、伊勢太神宮。神寶云云箭七百六十°隻、長二尺四寸、鏃箭以ニ鷲ノ羽一作レ之、以ニ雜ノ丹漆ヲ一畫レ之。箭七百六十八隻、以ニ鷲羽一作レ之。物所レ須鷲羽八百枚。吾妻鏡卷第九曰、所謂金百兩、鷲羽百尻。同卷第十曰、文治六年正月三日、九郎藤次爲ニ飛脚一上洛。是鷲羽一櫃所レ被レ進ニ仙洞一也。十一月十三日、鷲羽二櫃云云所レ被レ進ニ禁裏一也。同卷第十一曰云云鷲羽納櫃。出雲國風土記曰、出雲郡門石嶋有鷲之栖。駿河國風土記曰、伊穗原郡出鷲。宇津保物語俊蔭曰、鳥といへど鷲山鳥ならぬは住ぬ所に。義經記曰、國のならひとて、わしのは百じり。宮寺縁事抄曰、舊記云、村上天皇御時、有ニ名鷹一、其名称ニ鳩屋一。件鷹自ニ陸奧國一所ニ貢進一也。而陸奧奉ニ國解一曰、鳩屋所レ生巢在ニ府廳前一、鳩屋母鷹爲レ鷲被レ嚙之間°、傾レ耳聞レ之。其後不レ食レ餌不レ居レ韝、雖レ無レ病似レ有ニ病氣一、御鷹飼等見レ之、更以レ無ニ治方一、奏ニ可レ被レ放之由一。依レ玆被レ放ニ南殿櫻樹一。于レ時鳩屋刷ニ羽毛一、指ニ東方一飛去。御鷹

飼以餌呼之、敢不歸來。天皇太驚、殊有御恪惜之御氣色。依之解件鈴被獻石淸水宮、可歸來之由、有御祈請云云、其後第七日、來著陸奧舊巢云云。在廳官人等見之、鳩屋本巢上、假構新巢、仰臥二箇日、于時鷲鳥就靑雲廻翔、良久落逢鳩屋、欲劉飡、其時鳩屋自新巢落入舊巢、鷲鳥奈攀朽木、不得其身、鳩屋自底取鷲鳥、一日飡劉其喉、鷲鳥忽悶絕、遂落樹下。在廳等見之、以餌呼、鳩屋飛來、仍相副國解、重以貢進之。八幡愚童訓又有鳩屋說。但一條院御時トシテ、尾ニ金鈴ヲ付タルヿヲ載。藻塩草ニモ見エタリ。河越記曰、いま敗北の翼は天をかける鳥の鷲の翅にかゝり云々

形狀

○本朝食鑑曰、鷲訓和之似鷹而最大、鷙悍者也。頂有毛角、背蒼黃色、脛爪黃色、腹白、有黑縱文、尾有黑白斑紋、美而勁捷、能搏狐狸兎猿猫犬、其多力可敵熊狼、盤旋空中無細不覩、常捿深山窮峯、而不出村里、偶出、出則里人遙望雲中、恐走抱孩兒而藏、動被執孩兒、最懼戒者不減狼犲也。奧常及松前蝦夷最多、今官家捕之畜於樊中、取其尾羽而造箭羽。其羽潔白中間黑文正直者號中黑、而珍賞之、其美好者尤少矣。羽之上下有黑斑文、而中間白者號中白、或曰切斑、羽薄而黑處極少者號薄標、其餘名義稍多。凡鷲有大小、小則雛之稍長者也。大者尾美、小者不美、斑文亦駁雜。故以大鳥小鳥而別之、造箭羽亦大者勁堅而黃文、腹純黑。狗鷲。似鷲而小、力亦稍減。尾羽白端黑、以造箭羽亦劣矣。大和本草曰、鷲ニ大小アリ、尾十三枚以上ヲ大鳥ト云、十二枚以下ヲ小鳥ト云。鷲衆鳥ノ內尤タケク、力ツヨシ。小兒ヲツカム事古來有之。矢ヲハクニ、大鷲ノ尾ニ大中黑アリ、稀ナリ。タカウスベヲモ大ワシノ尾ニアリ、コレハ多シ。中白ヲ切文ト云、海邊ニ栖ヲ磯鷲ト云、小ナリ。按

ニ盛京通志鷲注ニ有ニ花紋ー者曰ニ虎斑翅ート云ハ切フ也。同注ニ、黒白相接者曰ニ接白ート云ハナカジロ也○建治三年日記曰、十二月二日相大寺賢息御元服云々御弓征矢大切府

附方　喉ノ腫タルヲ治方　類醫抄曰、鷲ノ羽灰ニ燒テ、米ノ湯ニ入テ飲ベシ

○古和之　倭名類聚鈔　漢名　脂麻鵰　盛京通志

今名　小鳥　大和本草　盛京通志鷲註曰、其最小者曰ニ脂麻鵰ー

久萬太加　倭名類聚鈔　漢名　角鷹　天工開物　今名　クマタカ

一名　久萬多加　天文写本和名鈔○倭名鈔曰、角鷹。辨色立成云、角鷹。久萬太加。今按、所出未詳。但角者毛角之義歟　久万太可　新撰字鏡曰、鷹。力狄反、鵰。　久万太加　字鏡曰、鵃。古玄反、天近飛小鳥、又久万太加。鵰、都聊反、入、久万太加○字典曰、鵰。正字通、俗鵰字、鵰、杜鵑ホトヽギス也○出雲國風土記曰、意宇郡、禽獸則有ニ鵰晨風山鷄鳩鶉鶬鴟鵄ー。秋鹿郡、所在禽獸鵰晨風山鷄鳩雉。楯縫郡、所在禽獸則有鵰晨風鳩山鷄。神門郡、禽獸有鵰鷹晨風鳩山鷄。駿河國風土記曰、烏渡郡玖乃出鵰隼。按ニ此等ノ書ニ出ル鵰ハワシ也

集註　古今著聞集卷第二十曰、同住人左近將監なにがしとかやいふなるおのこ、くまだかを養けり。ある日此蛇いでたりけるに、れいのことなれば、里人かくれまよひけるに、蛇くまだかに目をかけては

い行、くまだかもまた身をほそめ、毛をひきて、蛇に目をかけてありけるほどに、しばしばかりありて、此蛇くまだかのをりのもとにすでに近付ぬ云々〇大理府名勝志曰、世ニ傳フ龍性畏レ鵰。按ニ本草綱目ニ、鵰鷲一物ト云、然レドモ禽經ニ、鷹以レ膺レ之、鶻以レ猾レ之、隼以レ尹レ之、鵰以レ周レ之、鷲以レ就レ之、鷻以レ搏レ之、皆言ニ其擊搏之異ヲ也ト見ユレバ、鵰鷲二物タル可レ證。字鏡ニ久万太可ニ鵰ノ字ヲ用モ亦據アリ〇字典曰、埤雅ニ、鵰之義出ニ於鵰鶚之雕ニ也。玉篇鵰鶚也。本草魚鷹又名ニ鵰鷄ト。以之考レバ鷻ハ魚鷹ニメミサゴ也。本草ニ時珍、靑雕、一名海東靑ト云ハ、サシバ也

形狀 〇本朝食鑑曰、鵰訓ニ久末多加ト。似レ鷹而大ニ比スルトキハ鷲ニ則稍小也。蒼黃帶ニ黑色ヲ頂ニ有ニ毛角ヲ腹白ク有ニ縱文ヲ胷脚掌爪倶ニ黑其猛悍多力不レ劣ニ於鷲ニ能搏ニ狐狸兎猿之屬ヲ官家畜ニテ之ヲ樊中ニ以執ニ其尾ヲ而造ニ箭羽ニ呼號ニ鷹羽ト。其尾羽有ニテ黑白紋ヲ重重成レシ列如レ畫而鮮者ヲ爲レ上其文如レ對者此ヲ號ニ逆膚(サカフ)ト爲ニ珍奇ト而賞レ之尤希ナリ矣。雜記曰、角鷹と書てくまたかとよむ之。矢の羽にたかの羽といふは、くまたかの羽の事之、たゝ鷹の羽には不用之

はちばみ　義經記

集註 義經記曰、佐藤の家につたへてさす事なれば、はちはみのはをもつてはいたる、ひとつなかざしを、いづれの矢よりも一寸はつをば出してさしたりける

形狀 〇本朝食鑑曰、八鵰(ハチクマ)鵰類而黑色、尾羽斑文稍大ニ而黑白、或正直或錯雜如レ畫、間有ニ八字ノ斑紋ニ爲ニ珍奇ト、故稱ニ八鵰(ハチクマ)ト乎。此モ亦造レ箭。或曰、蜂鵰言心ハ如ニ蜂之雄ニ。此未レ爲レ當。伊勢貞丈雜記曰、はちばみの羽は、はちくまの羽之。はちは

蜂之、はみは食之。はちくまと云くまたかは蜂を好み食ふと云之。武用辨略曰、或人ノ云、蜂鷹ト云アリ、八文字ノ生アル故ニ八鷹ト云ト雖、尤左ニハ非、此鳥好テ蜂ヲ取テ食故ニ蜂鷹ト云トソ。此鳥年ヲ經ヌレハ毛文色々替テ、其ヲ必トハ定カタシ、故ニ人形生ナド云テ異品多

美佐古 倭名類聚鈔　[漢名] 鶚 本草　[今名] ミサゴ

本草綱目曰、鶚、禽經云、王雎魚鷹也、尾上白者名ニ白鷹鶚ハ似レ鷹而土黃色、深目好テ峙ッ、雄雌相得鷙而有レ別、交則雙翔、別則異レ處、能翺ニ翔水上ニ捕レ魚食

[一名] **水沙兒** 萬葉集卷第十一曰、水沙兒居、奧ノ麁礒爾、緣浪ノ、往方毛不知、吾カ戀ッ久波。水沙兒居ル、渚座船之、夕塩乎、將待從者、吾ヮ社ッ益ッ。

三佐吳 萬葉集卷第十二曰、三佐吳集ル、荒リ礒爾生流、勿謂藻乃、吉名者不告、父母者知ル鞆

美沙 萬葉集卷第三曰、美沙居、荒礒爾生ル、名乘リ藻乃、吉名者告世、父母者知友

三沙吳 萬葉集卷第十二曰、三沙吳居ル、渚爾居舟之、榜出去者、裏戀監、後者會宿友。

彌佐古 新撰字鏡曰、鴟。弥左古。倭名鈔曰、鴟鳩。和名美佐古。今按、古語用テ覺賀鳥ニ字ハ云ニ加久加乃土利ト。見ニ日本紀私記ニ公望案、高橋氏文云、水佐古

加久加乃土利 註 見上　**水佐古** 同上　**覺賀鳥** 日本書紀曰、景行天皇五十三年冬十月、至ニ上總國ハ從ニ海路ニ渡ニ淡水門ニ。是時聞ニ覺賀鳥之聲ハ欲レ見ニ其鳥形ハ尋而出ニ海中ニ。釋日本紀曰、

覺賀鳥。私記曰、說レ瑞鳥、不レ見二其名一也。安大夫說、美左古。秘訓曰、覺賀鳥、ミセコ止可讀之。倭名鈔國郡部曰、武藏國荏原郡覺志、加々之。八雲御抄曰、見さこ也。似二山鵲一而小、一名鶌鳩。即本草ノ鶻嘲ニメ、カムリトリ也。品字箋ニモ、鶻鵃似二山鵲一而小、短尾青黑色、至春多聲、一名鶌鳩ト云リ

鵃ミサゴ 太平記〇字典曰、鵃。說文、鶻鵃、鵃

覺鴐鳥 尾張國熱田太神宮緣起曰、度駿河之海一々中有レ鳥、鳴聲可レ怜、毛羽奇麗、問二之土俗一、稱二覺鴐鳥一、公謂曰、捕二此鳥一獻中我君上。飛レ帆追レ鳥、風波暴起、舟船傾沒

日本紀略曰、弘仁十二年十一月己未、鶚鳩執レ魚、集二紫宸殿前版位一、見人異レ之。

集註

仙覺萬葉集註釋曰、みさごゐるとは、このとりは空をかけり、こずゑにもゐて、水中の魚のあるところを見て、水にいりてうをゝとる鳥なり。古今著聞集卷第九曰、一院鳥羽院にわたらせおはしましける比、みさご日ごとに出きて、池の魚を取けり。ある日、是を射させんと思召て、武者所にたれかゐると御尋有けるに、折ふしむつるがゐけり。召に隨ひて參りけるに、此池にみさごの付て、おほくの魚を取、射とゞむべし。但射ころさん事は無慙之。鳥もころさず、魚をもころさじと思召之。あひはからひて、つかうまつるべし、と勅定ありければ、いなみ申べき事なくて、則罷立て、弓矢を取て參りたりけり。矢はかりまたにてぞ侍りける池の汀の邊にゐて、みさごを相待所に、あんのごとく來て、鯉を取てあがりけるを、よく引射たりければ、みさごはいられながら猶飛行けり。鯉は池におちて、腹白にてうきたりけり。則取あげて叡覽にそなへければ、みさごの魚をつかみたる足を、いきりたりけり云々。太平記卷第十六曰、本間孫四郎重氏、黃瓦毛ナル馬ノ太ク逞ニ、紅下濃ノ鎧着テ、只一騎和田ノ御崎ノ波打際ニ馬打寄セテ、澳ナル船ニ向テ、大音聲ヲ擧テ申

ケルハ、將軍筑紫ヨリ御上洛候ヘバ、定テ鞆尾道ノ傾城共多ク被召具候覽、其爲ニ珍シキ御肴一ツ推テ進セ候ハン、暫ク御待候ヘト云儘ニ、上差ノ流鏑矢ヲ拔テ、羽ノ少シ廣ガリケルヲ、鞍ノ前輪ニ當テカキ直シ、二所藤ノ弓ノ、握太ナルニ取副、小松陰ニ馬ヲ打寄テ、浪ノ上ナル鵃ノ、己ガ影ニテ魚ヲ驚シ飛サガル程ヲゾ待タリケル。敵ハ是ヲ見テ、射放タランハ希代ノ笑哉、ト目ヲ放タズ、御方ハ是ヲ見テ、射當タランハ、時ニ取テノ名譽哉、ト機ヲ攻テゾ守ケル。遙ニ高飛翠リタル鵃、浪ノ上ニ落サガリテ、二尺許ナル魚ヲ主人ノヒレヲ摑デ澳ノ方ヘ飛行ケル処ヲ、本間小松原ノ中ヨリ馬ヲ懸出シ、追懸ニ成テ、カケ鳥ニゾ射タリケル。態ト生ナガラ射テ落サント、片羽ガヒヲ射切テ、直中ヲ射ザリケル間、鏑ハ鳴響テ、大内介ガ舟ノ帆柱ニ立、ミサゴハ魚ヲ摑ナガラ、大友ガ舟ノ屋形ノ上ヘゾ落タリケル。方丈記曰、見さごは荒磯にゐる、則人をおそるゝによりて也。散木集曰、筑紫へくだりけるに、たかとみといふ所にて、みさごのいをとりけるをみて

形狀　○本朝食鑑曰、雎鳩。狀似鷹帶赤黃色、深目好峙。其雌雄有別者與鷹同、交則雙翔、別則異處、常翺翔水上捕魚食、又捕數魚潜置于石間密處而經宿、此號美佐古酢、漁人識之而食、其味雖不佳稍在味耳

古名錄禽部卷第六十四　終

○校云、波刀、八幡使鳥ノ二項ハ目ノミ有リテ本文ナシ、六十七巻ニ同ジ目ヲ立テ、其方ニ本文モアリ

古名錄禽部卷第六十五目錄

山禽類 下

保等登藝須 杜鵑
天良豆々木 啄木鳥
夜毈杼里 鷄雉 ○白山鷄
かし鳥
布々土利 鴟鳩
佛法僧
山から
山からす 山鳥
らいの鳥
夜萬八止 青鵐
波刀 鴿 ○白鴿
八幡使鳥 斑鳩

通計十四種

古名錄禽部卷第六十五

紀藩　源　伴存撰

山禽類　下

保等登藝須（ヒトトギス）萬葉集　漢名　杜鵑 本草　今名　ホト、ギス

本草綱目曰、杜鵑、狀如ニ雀鷂一而色慘黑、赤口有ニ小冠一、春暮卽鳴、夜啼達レ旦ニ、鳴必向レ北、至レ夏尤甚、晝夜不レ止、其聲哀切ナリ、田家候レ之以與ニ農事一。證類本草曰、杜鵑人云口出レ血聲始「止ム、故有ニ嘔血之事一也

一名　保度々木須　倭名類聚鈔曰、䳏鳺鳥。唐韻云、䳏鳺藍縷二音、和名保度々木須今之郭公也。正字通曰、䳏鳺、鵑鴂別名、一曰覺鳩、其尾屈促、其羽如ニ繿縷一、其形似レ鸞、故有ニ諸名一。又曰、褸。兩擧切、音呂。繿褸ハ衣敝也。方言曰、布而無レ緣、敝而紩レ之、謂ニ之繿褸一。又曰、楚人衣被醜敝謂ニ之須捷一。亦曰ニ褸裂一、亦曰ニ挾斯一。史楚世家作ニ藍蔞一。通雅曰、雜組云、阿鵴、其羽藍褸、好食ニ桑椹一。左傳曰、篳路藍褸以啓山林、註藍縷敝衣。品字箋曰、藍縷敝衣也。又曰、繿褸衣敝不レ堪貌、本草鶻嘲、釋名阿鵴鶻鵃トミユ。卽䳏鳺產ノカムリドリ也。字典曰、廣韻、䳏鳺鳥、今之郭公也。集韻ニ鷵鸆鳥、郭公也。此等ノ說ニ據リホト、ギスニ

充。正字通ニ、郭公即布穀鳥、本作ニ鳲鳩一、又名鵲鵴與ニ鶻鵃一別。舊註、俗呼ニ郭公一誤ト云リ。鶻鵃ハ鵓鳩也。郭公ハ本草ノ鳲鳩ニメ、カツコウドリ也〇源平盛衰記第十一日、雲井に名乗杜鵑、杜鵑ノ字ヲ古モ用ヒタリ

保止々岐須 天文写本 和名鈔　**保止々岐爪** 江談抄　**保止止支須** 新撰字鏡曰、郭公鳥。保止々支須。萬葉集卷第十八日、保止止支須、支奈久五月能云云

保登等藝須 萬葉集卷第十四日、保登等藝須、奈久許惠伎氣波云云。同卷第十五日、保登等藝須、毛能毛布等伎爾云云。同卷第十七日、詠霍公鳥歌二首云云保登等藝須、周無等來鳴者云云。思霍公鳥歌一首、保登等藝須、今之來鳴ヶ者云云。同卷第十八日、保登等藝須、奈爾加伎奈加奴云云。同卷第十九日、保登等藝須、伊麻太伎奈加受云云。同卷第二十日、保登等藝須、許許爾知可久乎云云餘畧之

保登等伎須 萬葉集卷第十五日、保登等伎須、和我須武佐刀爾云云

保等登伎須 萬葉集卷第十七日、保等登伎須、許惠爾安倍奴伎云云。同卷第十八日、聞霍公鳥喧作歌一首。伊爾之敝欲、之奴比爾家禮婆 保等登伎須、奈久許惠伎氣氐、古非之吉物能乎

富等登藝須 萬葉集卷第二十日、先太上天皇御製、霍公鳥歌一首。富等登藝須、奈保毛奈賀那牟、母等都比等、可氣都都母等奈、安乎禰之奈久母

霍公鳥 萬葉集卷第二日、古爾、戀良武鳥者、霍公鳥。同卷第三日、霍公鳥、鳴五月ニ者云云。同卷第六日、狛ヶ山爾、鳴霍公鳥、泉河云云。同卷第八日、霍公鳥、痛莫鳴云云。同卷第十日、山彥乃、荅響萬田、霍公鳥云云。同卷第九日、霍公鳥、鳴而去成云云。同卷第十二日、霍公鳥、飛幡之浦爾云云。同卷第十七日、夜麻霍公鳥、可禮受

も人に
きにハ
諸本と
むべも
いひニ

許武可聞。同卷第十九日、霍公鳥、來喧五月爾、笑爾保布云〻。二十四日、應ニ立夏四月節ー也。因レ此二十三日之暮、忽思ニ霍公鳥曉喧聲ー作歌二首云〻。餘略之

してのたおさ　源氏物語

かげろふ曰、おまへちかきたちばなのかのなつかしきに、郭公のふたこゑばかりなきてわたる。やどにかよはゞと、ひとりごち給ふもあかねば、きたの宮に、こゝにわたり給ふ日なりければ、たち花をおらせて聞え給ふ。「忍びねや君もなくらんかひもなきしてのたおさに心かよはゞ云〻。「たちばなのかほるあたりはほとゝぎす心してこそなくべかりけれ。奧儀抄曰、時鳥の一名をば、しでの田をさと云之。藻塩草曰、しでの田をさとは、時鳥の一名也。時鳥はしでの山よりきて、農をすゝむるゆへに、しでの田をさと云と云り。但しでのたをさをあさな〳〵よぶと云り。自の名をばよぶとは、いひがたき歟。又云、しでの山より來て農をすゝむ、鳴詞云、過時不熟となく聲の、ほとゝぎすときこゆる也、と云り。故にしての田をさと云と云〻。或云、しでの山、しではおとこにてありと云〻、又云、わらはにてこゆと云り、共に難知事なれば不及沙汰云〻。袋草紙曰、蓮仲「草のはにかとではしたりほとゝぎすしでのやまぢもかくやつゆけき。是ハ人ノモトニテ、俄ニ絶入タルヲ、カキイダシタリケルトキ、イキイデ、草ノ露ノアシニサハリケルニ、郭公ノナクヲキ、テヨメルナリ。榮花物語御着裳曰、よみ人たれとしらず、ほとゝぎすのなきわたるを、女ばう。さなへうふるおりにしもなくほとゝぎすしでのたをさも人にきにけり。催馬樂曰、しでたをさ、あまやどり。愚案抄曰、しでたをさは、郭公の名之。拾穗抄曰、師說、賤の田長といふべきを、てとつと五音通ずる故に、しでのたをさといへり。此鳥なきて農をすゝむる故の名之。袖中抄曰、しでのたをさ。いくばくのたをつくればかほと

作リ イ本ゐうへにきにニ作ル。本書ハ誤カ

ひ イ本えニ作ル

と イ本に

ゝぎすしでのたをさをあさな〳〵よぶ。顕昭云、しでのたをさとは、しづのたをさといふなり。ほとゝぎすは、勸農の鳥とて、過時不熟(シユク)となくといへり。時すぎばみのらじと云義なり。それがほとゝぎすなくとは聞ゆるといへり。たをさは、田つくるものなり。しづとは、しづのをなり。さればほとゝぎす、いくらばかりの田をつくれば、たをさは、つとめてことにはよぶぞとよめる也。催馬樂歌云、いもがゝど、せながゝど、ゆきすぎかねてや、わがゆかば、ひぢかさの、雨もやふらん、しでたをさ、あまやどり、かさやどりまからん、しでのたをさ。此しでたをさは、田つくる物なり。しづのたをさなり。しでと、しづとは、同五音なり。しかるを、よの人、しでのたをさとは、ほとゝぎすをいふなり。しでの山よりきたりて、農をすゝむれば云也、といへり。伊勢哥云、しでの山こひてきつらんほとゝぎす戀しき人のうへかたらなん。とよめり。さればしでの山よりくることは、むかしより申けり、ときこゆ。さるにても、ほとゝぎすを、しでのたをさといはんにはいかに、しでのたをさをば、ほとゝぎすにはよばすべきぞ。此哥の心は、別事之。伊勢物語云、なのみたつしでのたをさはけさぞなくいほりあまたとうとまれぬれば。時はさ月になんありける。いほりおほきしでのたをさはなをたのむわがすむ里に聲したえずは。此哥ども、ほとゝぎすをしでのたをさとよむときこえたり。されど是等は古今の哥におもひあはするに、これもしでのたおさをよぶを、けさぞなくとはよめる歟。さりとてほとゝぎすを、しでの たをさといふにはあらじ。綺語抄云、しでのたおさ、ほとゝぎすを云、或書云、ほとゝぎすは、しでの山よりわらはにてくる之。しでの山こゆるあひだ、田などつくるゆへに、しでのたをさとはいひつたへたり。無名抄、奥義抄、童蒙抄等おなじくほとゝぎすを、しでのたをさといへ

り○紫桃軒雜綴曰、成都記杜宇亦名杜主、從天而降、好稼穡、教人務農、後以位號望帝、死其魂化爲鳥、名曰子規、三月子規鳴、一作秭歸。爾雅疏、子嶲鳥出蜀中。說文蜀王望帝化爲子嶲、今謂之子規。楊雄傳注、鶗鴂、一名買鶬、一名子規。一名杜鵑。爾雅杜鵑、一名嶲周欧越間曰怨鳥、夜啼達旦、血漬草木、凡啼皆北向。禽經江介曰子規、蜀右曰杜鵑、張華注、啼苦則自懸於樹、自呼曰謝豹、文曰子規、莫肯先鳴、每旦必推一鳥、使啼不歇、歇則羣啄之、必流血乃已、生子百鳥爲哺、豈其有神靈寓託爲之耶

時鳥

和泉國風土記曰、日根郡禽獸則有時鳥。細川幽齋西國陣道記曰、こよひの玉祭の手向などかまへをかれけるに、時鳥の二聲三聲なけるを、こゝにはいつもかやうに有かと尋しに、珍しき事也、と云。一首を讀てつかはしける。「しでの山をくりやまつる子規たままつる夜の空に鳴なり。公任卿集曰、子規まつ心を「ほのかにもきかぬ限りは時鳥待人さへぞねられざりける。塵添壒囊鈔曰、異名志曰、鶗鴂、一名杜鵑、至三月鳴、晝夜不止云云、時鳥三月ニ鳴事尙早速ナルカ、漢地ハアタヽカナル故ニ

杳手鳥（トク）

鳴皷　江談抄○俊頼髓腦抄曰、時鳥鳴つる夏の山邊にはくつていださぬ人やわたらん。時鳥といふ鳥は誠にはもずといふ鳥之。そのもずを時鳥といふ之。昔くつぬひにてありけるとき、くつのれうを取せたりければ、いま四五月斗にならばたてまつらんといひてうせにけり。そのゝちいかにもみえざりければ、はかるなりけりと心得て、くつをこそえさせざらめ、とらせしくつてをだにもかへしとらんと思ひて、とらせんと契し四五月にきて、時鳥こそとはよびありくなり、もずまゝはその比もよにあれども、あきつかたするやうに、木のすへにいでゝ、こゑだにもなかで、をともせず、かきねをつたひありき

て、とき〴〵ひそかにこと〴〵しうとばかりをつぶやきなくなり○かたそぎの記曰、一とせ伊豫の國にまかりて、くす山といふにいたりぬ。松山といふより七八里ばかりふかく入もて行ところなり。山里にいたりて、馬をかりてのる。口につきたるおのこ、ものいふさまうちゆがみ、こと國の人のやうなり。折ふし郭公の鳴けるに、これは何鳥としれると問ば、これはこつてとりとこととふ。歌草帋に郭公をくつて鳥といふことをかきだり、歌よむ人もなみ〳〵はしり侍らぬことを、おかしくもあるかなと、などてこつて鳥といふぞととへば、あれきゝめせ、こつてかけたかといふむかし物語しりつらんよとて、馬子にとりあはせてろうしてわらへば、こゝろへぬかほつきにて、こつてにこそ侍れ、沓代と申さばこそよ、とつぶやく心得ずと、こつてといふのあるにやととへば、五月の比、柴のわか葉にこつてといふものてき侍り、この鳥めら、必こつてのいでき侍る時にこそはかまびすしく鳴とよみ侍るとぞいふ。さて此鳥ほとゝぎすともいふか、ととへば、かしらをふる。さらばことゝりに、ほとゝぎすといふとりやある、ととへば、つゐにうけたまはり侍らずといふ。郭公といふ名をしらぬ國もありけるよと、ともなふ人皆わらふ。さてぞ歌草帋には、こつてといふ事をあやまりて、くつてといひなしてぞ、くつうりの生れかへりしなどいふ事をそへたりとはしりぬ。かのこつては、木のみのやうにて、柴の葉のうらになりいづるものとぞ。このくつて鳥の、こつて鳥といふがまさしきすぢなることは、たれかおもひより侍らん

こきの鳥 八雲御抄　ホ

トヾリ 匪添搖囊抄曰、時鳥又ホトヾリトモ云云 云ホトヽリニカヨフト云ハ、蜀都賦云、碧出萇弘之血ヨリ鳥ハ生杜宇之魄ヨリト云リ

橘鳥 藏玉集

たをさ鳥

いにしへこふる鳥 藻塩草　常詞鳥 同上　百聲鳥 同上　よたく鳥 同上　玉迎鳥 同上

五露鳥 藻塩草　○證類本草曰、杜鵑、初鳴先聞者主ㇾ離別ㇾ

田歌鳥 同上。室町殿日記曰、卯月のはじめつかた日歌鳥初声きくもいとめづらかに覺て、心ある人〻は枕そばだて〻今一声と思ふ折節。事類賦曰、異物志、田鵑春三月晝夜鳴テ不ㇾ止、音聲自呼俗言取梅子塗其口兩邊皆赤云云

早苗鳥 藻塩草　草つく鳥 同上　賤鳥 同上

たそかれ鳥 同上　いもせ鳥 同上　玉さか鳥 同上　鏡暮鳥 同上　うつた鳥 同上　さくめ鳥 同上　めつら鳥 同上　さくも鳥 同上　夕かけとり 藻塩草曰、時鳥ならば夕影歟　うなひこ鳥 藻塩草曰、うなひこ鳥、童となるゆへと。言塵集曰、うなひこ鳥とも、郭公の本名と云〻八雲の御抄に云り

集註 萬葉集卷第十七曰、橙橘初咲テ霍公鶆嚶云云。帝王編年記曰、一條院長保元年、今年郭公声不ㇾ絕、无不吉ノ事也。先々有恐。明月記曰、寛喜元年七月六日、郭公鳴日夜更不ㇾ休止。文曆二年五月廿二日、近日郭公音不絕。閏六月一日、昨日暑氣、郭公又鳴。文暦二年四月廿九日、巳吃許郭公數声聞南方、初声已無間斷。六月廿三日、此三四日郭公不ㇾ鳴。潤六月一日、昨日暑氣、郭公又鳴。蜻蛉日記曰、ほとゝぎすのこゑなきかす、ものおもはしき人はいこそねられざなれ。あやしう心ようねらるゝけなるべ

きノ下あ脫カ

かけノ下水戸本りアリ

し。これもかれも一よきゝ、このあか月にもなきつる、といふを云〻。又曰、そらをうちかけて、ふたこゑみこゑきこへたるは、みにしみておかしうおぼへたれば、山ほとゝぎすけふとてや、などいはぬ人なうぞうちあそぶめり。本朝鬪諍集曰、六月郭公九月鶯不稟名殘。又曰、空山郭公只一聲語(カクラヒ)差(サスガニ)賀蘇レ心更成ニ今日許云云。源氏物語花散里曰、おりしも郭公鳴てわたるもよほし聞えがほなれば。同螢曰、夜ふかく出給ひぬ、郭公などかならずうちなきけんかし。同まぼろし曰、郭公のほのかにうちなきたるもいかにしりてかと、きく人たゝならず。枕草紙曰、賀茂へまうづる道に、女どもの、あたらしきおしきのやうなる物を笠にきて、いとおほくたてりて、哥をうたひ、おきふすやうに見えて、只何すともなくうしろざまに行は、いかなるにかあらん、おかしと見るほどに、郭公をいとなめくうたふ声ぞ心うき。ほとゝぎすよ、をれよ。かやつよ、をれなきてぞ、われは田にたつ。とうたふに、聞きもはてず、いかなりし人か、いたくなきてぞ、といひけん。なかただがわらはおひいかでおとす人と篤に郭公はをとれる、といふ人こそ、いとつらうにくけれ。奥儀抄曰、郭公のめづらしくなく聲をきけば、これを人にきかせばやと、たれとはなけれど人のまたれこひしき心之。四季物語曰、郭公の聲〲も、みやこの内よりは、山郷はしたしうゆきかよひ、朝な夕なに、しでの田長にすゝめがほなるもおかし。歌林四季物語曰、ほとゝぎすの、五月雨のはれまの空にをとづれて。狭衣曰、そらはあま雲はれわたりて、ほの〲とあけ行山ぎは、春の明ぼのならねどおかしきに、はなたち花にやどかりにや、ほとゝぎすほのかになきわたるねにあらはれにけりときゝ給ふ。又曰、明るもしらぬさまなるに、京にはをともなかりつるほとゝぎすも、いがきのわたりには聲なれにけり。仙覺万葉集注釈

にもノ間ニやありけん。ひとすぢ

卷第十九曰、郭公鳥は立夏の日來鳴こと必定といへり。權中納言定賴卿集曰、三月つごもりに、ほとゝぎすのなくを〳〵ほとゝぎす思ひもかけず春なればことしはまたで初音きゝつる。榮花物語木綿四手曰、御めのとだち、かけたてまつらぬおりなう、こひなきたてまつる。ひめみや、みゝずがきにせさせ給へる。これいかであての御もとにたてまつらん、との給はするにつけても、ほとゝぎすにやつけまし、とあはれに御らんぜらる。袋草紙曰、俊賴ノ君ノ云、折節ニカナヒタル哥ヲ詠ハ、ヨムニハマサレル也。先年前齋宮、伊勢ヨリ皈京之時、御供ニ候（コウス）、ヨドノワタリニ御船付テ、人々不寢アカスアヒダ、ムカヒノ市ニ郭公一声ナキ行ク、万人斷ッ腸ヲ、自ニ御船ニハ女房ノ声ニ竊ニ、ヨドノワタリノマダヨフカキニト詠タリシ。○臨レ時ニメデタカリシ者也ッ人々感歎シテ今ニ難忘云云。平家物語第四曰、ころは卯月十日あまりの事なれば、雲井に郭公二聲三こゑをとづれてとをりければ云々。同卷第七曰、初音ゆかしき郭公、おりしりがほにつげわたり。同卷第十二曰、山ほとゝぎすの二こゑ三聲をとづれてとをりければ云々。又曰、やえたつ雲のたえまより、山ほとゝぎすの一こゑも、きみのみゆきをまちがほなり。又曰、折ふし山ほとゝぎす二聲三こゑをとづれてとをりければ云々。十六夜日記曰、さるほどに、卯月のすゑになりければ、郭公のはつ音ほのかにもおもひたえたり。人づてに聞ば、ひきのやつといふところにあまたこゑなきけるを、人きゝたりなどいふを云々もとよりあづまぢは、みちのおくまで、むかしよりほとゝぎす稀成ならひにも聞人ありけるこそ、人わきしけるよと、心づくしにうらめしけれ。俊賴髓腦抄曰、いつしかと時鳥をまち、やすき夢をだにむすばず、しらぬ山路に日をくらし、おもはぬふせ屋によをあかすにつけても云々みな月になりぬれば、時鳥にわかれをおしみ、か

に又なかずはよし。

稀にトアリ脫カ恐カ

ぎりありて身はくもぢにかへるとも、こゑばかりをばなきとゞむべきこと葉をかたらひ。高倉院升遐記曰、四月朔日、ほとゝぎすのこゑをきゝても云々。八幡愚童訓曰、折知顏ノ時鳥、此方彼方鳴渡ソヨヤ月隱レバ是モ別ヲ忍トヤ、花橘匂馴レ昔袖ノ香ヵ云云。實方朝臣集曰、杉むらのもりにてほとゝぎすをきゝて云々。身のかた見曰 郭公の初音をまつなどいふことは、つねの事にいひならはし侍り。赤染衞門集曰、五月ついたちごろ、ゆふぐれに時鳥のなくを云々。西行物語曰、おりふしほとゝぎす一聲二聲をとづれてすぎければ。源平盛衰記卷第四十八曰、八重立雲ノ絕間ヨリ、初音ユカシキ山郭公ヲバ、此里人ノミヤ馴テ聞ラント云云。夏ハ木陰凉シキ曉ニ、初郭公ノ音モウレシ。撰集抄卷第四曰、夏にもなりぬれば、花橘に香をとめて、鳴時鳥を待て、五月やみにも來なけかし、しのゝめの空にもをとづれよかし、とうつゝ心もなく待し程に、郭公の聲もうちたゆるまゝには、野邊の草花のはやくさきねかしと、人しれず待しかひに云々。又曰、香隆寺のうしとらのすみ、蓮臺野の御山をくりの有けるに、郭公の幾聲と、數わきかぬるまでに鳴けるも、死出の山路の鳥ときけば、さそひ奉りつとや、なきけん。又猶もはやめ奉る聲にしもや侍らん。折から鳥の音も、物うくぞ侍る。但郭公は、昔の人を戀なれば、すでにむかしがたりにならせ給ぬる程に、いつしか戀しとや鳴わたるらん。同卷第七曰、杉村におちなくほとゝぎすのはつねいちはやく聞え。鹿苑院殿をいためる辭曰、おりふしまへにある人時鳥のなき侍るとつげ侍れども、心のやみにまよひぬるゆへにや、さだかにもきゝ侍らねば、おりふしもあはれをもよほされて。つれ〴〵曰、龜山院の御時、しれたる女房ども、わかき男たちの參るゝごとに、郭公やきゝ給へる、と問て心見られけるに、なにがしの大納言とかやは、數ならぬ身

はえきゝ給はず、と答られけり。堀川内大臣は、岩倉にてきゝ給ひしやらむ、と仰られたり。文華秀麗集曰、春鸞送鳴鵑。又曰、杜鵑啼序春將レ闌云云。吾妻鏡第十九日、建暦元年四月廿九日云云是於二此所一、昨朝聞二郭公初聲一之由、依レ有二申之輩一也。至二林頭一、數尅雖レ令レ待レ之給一、無二其聲一之間空以還御。高野參詣日記曰、ほとゝぎすのこゑを。こゝにてはじめてきゝ侍りしに、輿は雨皮してつゝみめぐらして、いづかたもみえざりし云々。更級日記曰、郭公さへいと近き梢にあまたゝびないたり云々、此つごもりの日、谷のかたなる木の上に、郭公かしかましくないたり。富士歴覽記曰、山中と申所にて、ほとゝぎすをきゝ侍。弁内侍日記曰、卯月十日のころは、太政大臣殿北山におはしますほど、女房たち、ほとゝぎすのはつ音たづねにおはしましたりけるに

形狀

枕草紙曰、まつりのかへさ見るとて、うりんゐん、智足院などのまへに、車をたてたれば、郭公もしのばぬにやあらんなくに、いとようまねびにせて、木だかき木どもの中に、もろごゑになきたるこそ、さすがにおかしけれ。郭公は、猶さらにいふべきかたなし。いつしかしたり顔にもきこえ、哥に、卯花、はな橘などにやどりをして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへなり。袋草紙曰、先達モ誤ル事アリ。良暹ハ郭公ナガナクト云コトヲ、長鳴（ナガナク）トイフ心ト存スル也。於二俊綱朝臣許一、五月五日詠二郭公一哥云、やどちかくしばしながなけほとゝぎすけふのあやめのねにもくらべよ。懷圓嘲哢メ云ク、ホト、、鳴（ナキ）ハジメテ、ギスト、ナガムルニヤト云云。江談抄第三曰、郭公爲二鶯子一事。戸部卿談曰、郭公者非レ眞也。爲レ負二沓手一鳥遠呼云、保止ゝ岐爪、ゝゝゝゝ止云也。眞實郭公鳥者、隱二居於卯花垣一云、保止ゝ支須士云也。又万葉集云、藍纏鳥者鶯子也。昔人宅之樹蔭ニ造レ巣生レ子、漸生長之比、近臨見レ之、自レ鶯頗大

鳥、羽毛漸具、抵ニ其羽ハ、即奇思之間、保止々岐須鳴去了云云。萬葉集卷第九曰、詠ニ霍公鳥一歌一首云云。鶯之、生卵乃中爾、霍公鳥、獨リ所生而、己父爾、似而者不鳴、己母爾、似而者不鳴、宇能花乃、開有野邊從、飛ビ飜ヘリ、來鳴令響、橘之、花乎居令散、終日ニ、雖喧聞吉、幣者將爲、遐莫去、吾屋戸之、花橘爾、住度鳥。塵添壒囊抄曰、時鳥鶯子ト云ヒ、又ホト、リトモ云、如何。鶯ノ卵ノ中ノ郭公云歌ハ人ノ口ニアリ。今モ鶯ノ中ニ郭公アル事常事也。鶯巢ヨリ郭公ノタツ事コソハ多分ナルラメ、是ハ希ナルベキ事ナガラ、又不レ絕聞ヌ云云。郭公ハロ中ヨリ血出ル鳥也。血ノ出止ム時、ナキ出レバ鳴止ト云フ。口ニ出レ血声始止ト云ヘリ。カワヤニテ郭公ヲ聞ハ、イム事ト云ハ大國ニモ有ル事也。カワヤニテ是ヲ聞ク時ハ犬ノホユルマ子ヲメ咒フト云事、本草ノ中ニ見ヘタリ。此邊ニハ、キモノヲ脫ギテ、拂ヘナドヲスレ共、犬マ子ハ無ニヤ。本朝無題詩曰、賦ニ郭公一。釋蓮禪。郭公屬レ夏有ニ佳名一、好事家々嗟嘆成、鶯子巢中春刷レ翅見ニ萬葉集一故云云。仙覺萬葉集注釋卷第十九曰、うつしまこかもとは、うつしは現なり。心はほとゝぎすは、うぐひすのまことの子かと云也。俊頼髓腦抄曰、時鳥はうぐひすの子といふ事は、万葉集にところ〴〵よめり。歌はしにかけり。おほつかなき事にてありしを、時助と申古舞人の、故帥大納言のもとにまうできてかたりしをこそ、まことなりけりとはおもふ。かの大納言きゝあざみて、ふみはそらごとせぬものとけりと作りしか、時助が弟子とける舞人のいへのそのふに有けるかたはらに、うぐひすのすをくひて、子をうみたりける、やう〳〵ゐでたつほどになりて、ひとつの子の、ことの外におほきになりて、すにもいらぬほどに成にければ、つねにほかの竹のえだにゐて、さすがにはゝの鶯の、むしをくゝめければ、おほくちをあきて、くひけるを見て、時助にかゝることとこ

そ見つれ、と申ければ、まかりみければ、ほとゝぎすゝと、ふたこゑばかりなきて、まかりにけりっと申し。のこりの子どもは、うぐひすとなきつゝ、をの〳〵まかりにけるとかや。脚氣集曰、杜陵杜鵑詩云、生子百鳥巢、百鳥不敢親、一作嗔 殷勤哺其子、禮若奉至尊、亦不然、杜鵑ハ鶹鷅梟之徒也、飛入鳥巢鳥見之而去、於是生子於其巢、鳥歸不知是別子也。遂育之、既長乃欲啖母。漁隱叢話曰、按博物志杜鵑生子寄之他巢、百鳥爲飼之、故江東所謂杜宇曾爲蜀帝王、化禽飛去舊城荒是也。按生子百鳥爲哺紫桃軒雜綴ニモ載タレドモ、此說非矣。本草綱目曰、杜鵑不能爲巢、居他巢生子又山人云、杜鵑ハ他鳥ノ巢ヲ借テ子ヲ生シ、自ラ哺其子、ウグヒスノ巢ハ雞卵ノ大サ也。杜鵑ハ身ヒヱドリノ大サニテ、ウグヒスノ巢ヨリ大也。何ゾ內ニ入テ生子事ヲセンヤ〇源平盛衰記卷第二曰、今年ノ夏郭公京中ニミチ〳〵テ、頻ニ群リ啼ケリ。此鳥ハ初音ユカシキ鳥ナリトテ、スキ人ハ深山ノ奧ヘモ尋入例多キ事ナルニ、今ハケシカラヌ事ナリトテ、人耳ヲ峙ル程ナリケルニ、二羽ノ郭公室ニテ食ヒ合、殿上ニ飛落タリケリ。野馬入宗主人將去ト云本文アリ。此怪異ナリトテ、二羽ノ郭公ヲ捕テ獄舍ニ被禁ニケリ〇喚子鳥曰、杜鵑大きさ鳩のごとし、鷹のふににたり、色あさく、口中べにのごとく赤きを、ほとゝぎすとしるべし。ゆび何れも二本つゞ前後へふみわけてとまる

天良豆々木（アラツヽキ） 倭名類聚鈔　漢名 啄木鳥 本草　今名 キツヽキ

譯類本草曰、啄木鳥。此ノ鳥有大有小有褐有斑、褐者是雌、斑者是雄、穿木食蠹、又有青黑者、黑者頭上ニ有紅毛、生ニ山中、土人呼爲山啄木、大如鵲○塵添壒囊鈔巻第十曰、啄木ト云フ事。組ヲタクボクト云、文字如何。字ニハ啄木ト書ク、喩ヘバ組ノ色ノ、斑々トメ如シ鳥ノ啄木ノ痕ノ故ニ啄木ト云云。亦琵琶ニ流泉啄木ト云曲アリ。又啄木ト書テ、テラツヽキ共ヨム。尓雅ニ曰、啄木ハ鴷也。亦都盧ト書テ、テラツヽキマヒトヨム。文選ニ曰ク、都盧尋撞ト云云。都盧ハ國名也。合浦ノ南ニアリト云云。此國ノ人、高ヒ木ニノボルトテ、高木ニ登ル事、テラツヽキノ如シ。文明写本下學集曰、喙木物ノ緒也。以絲ヲ組之ヲ、其色斑々而如シ鳥ノ啄木ノ痕ノ、故ニ云ニ啄木、實ニハ鳥名

一名 天良豆々岐 天文写本和名鈔()倭名鈔曰、爾雅注云、斲木、一名鴷、好食ニ樹中蠹者也。和名天良豆々木

寺豆支 新撰字鏡曰、鴷、呂薩反、啄木鳥、寺豆支。鵃、寺豆支。喙、寺豆支。鵃、都聊作聊二反、寺豆支○字典曰、鵃、鳥名。山海經ノ鵃渠、未詳

たくみ鳥 藻塩草曰、啄木鳥。たくみ鳥、これてらつゝきの事と云々。言塵集曰、たくみ鳥とは、寺つゝきをいふ之。枕草紙曰、たくみどり。散木集曰、たくみどりのす。「ひめこ松ねたくみどりのすがたをばたちへだてける春のかすみか○寄関獺祭寄曰、啄木過蠹穴能以嘴畫字成行蠹自出

集註 本草類編曰、啄木鳥五月五日採之。日本紀畧曰、延暦十六年冬十月庚申、有ニ啄木鳥入ニ前殿。明日車駕將幸ニ于交野、緣斯而止。源平盛衰記巻第十曰、守屋ガ怨靈彼伽藍ヲ滅ンガ爲ニ、數千羽ノ啄木鳥ト成テ、堂舍ヲツヽキ亡サントシケルニ、太子ハ鷹ト變メカレヲ降伏シ給ケリ。サレバ今ノ世マデモ、天王寺ニハ啄木鳥ノ來ル事ナシトイヘリ

【形狀】〇喚子鳥曰、きつゝき、大きさひよ鳥にほそく、かしらくれなゐ、はらの尾のきはくれなゐ、せはくろ白のふ有。大和本草曰、啄木小鳥ナリ。足ノ指前後各二アリ、大木ニモトリ付ヤスキヤウニ生レ付タリ。舌長ク其サキニ針アリ。本朝食鑑曰、斲木鳥。大ニ於鳩ニ、或小者モ亦有、種類亦多。頭黃白帶レ赤、面紅ニシテ而黃也。俱ニ有ニ黑斑ニ、背翅尾黑白成レ斑、或青色モ亦有、觜足皆青色、剛爪利觜、觜如レ錐長サ數寸、舌長シ於啄ヨリモ、其端有ニ針刺ニ、針頭如ニ鋸齒ニ、啄ニ得テ蠹ニ以テレ舌ヲ鉤出而食フレ之ヲ、惟旦夕穿テレ木而不レ息マ耳

夜麻杼里 萬葉集

【漢名】鸐雉 本草　【今名】ヤマドリ

證類本草曰、江淮伊洛間有ニ一種尾長而小者ニ、爲ニ山雞ニ。本草綱目曰、鸐雉。翟ハ美羽貌、雉ハ居ニ原野ニ、鸐ハ居ニス山林ニ、故得ニ山名ニ。山鳥ノ尾之、永此夜乎。同卷第十四曰、夜麻杼里乃、乎呂能波都乎爾、可賀美可家、刀奈布倍美許曾、奈爾與曾利雞米。同卷第八曰、足日木能、山鳥許曾婆、峯向爾、嬬問爲云云

【一名】山鳥 萬葉集卷第十一曰、念ヘ友、念毛金津、足檜之、

亥子之鳥 安東郡事當沙汰文曰、毎年十二月亥子日鍬山神事之時、山鳥雄一羽宛、政所大夫出納両大夫方ヘ各一羽宛進レ之。號ニ亥子之鳥ニ

節料鳥 安東郡事當沙汰文曰、毎年十二月廿七八日比、號ニ節料鳥ニ、但元三之饗時料ニ被レ用之山鳥一羽、長御館進レ之間、出納請ニ取之ニ云云、但近代檜垣東長官御時、依レ被ニ精好ニ、雉雄一羽進レ之。鴿新儀也

山鳩 出雲國風土記曰、仁多郡鳥獸山鳩

【集註】日本書紀曰、

天智天皇十年六月新羅遣ノ使進ノ調。別献ニ云云山鷄一隻。出雲國風土記曰、意宇郡禽獸山鷄。出雲郡多有山鷄鳩晃鴨鴛鴦等之族也。源氏物語夕霧曰、やま鳥の心ちぞし給。同あげまき曰　山鳥の心ちしてあかしかね給。仙覺萬葉集註釋卷第十四下曰、又ある物には、むかし隣國より、山鳥をゝくりて、鳴こゑたえなるよしを申けれど、すべて鳴ざりけるを、或女御友をはなれてなかぬならん、鏡をかけてみせ給へと申給ひければ、籠に鏡をかけたりけるに、影をみてなきけるとあり。ある説には、山鳥は夜るになれば、女鳥(めとり)と尾をへだてゝ別々にぬるに、あかつきに成て、おとりのおをもたげてみるに、女鳥のある所の鏡にてみゆる之。この故に、山鳥のかゞみとは云也と申す。これはさもと聞ゆ。問云、山鳥おをへだてゝぬといふ事は、山の尾をへだつにはあらず。ひとゝころにねたれど、おとりの尾ををりかへして、なかにへだてゝぬる之。家中竹馬記曰、羽は云々其外山鳥の尾、鶴のすり羽などをも付之。狹衣曰、とを山どりにてやみぬべき事にこそはとおぼしつゝくるに云々遠山どりにてはとり所なきを。又曰、たゞ山鳥のやうにてもあかしくらし給ひける。仙傳抄曰、ゑぶくろのくちより山鳥の尾の出たる樣に云々。扶桑略記廿三裡書曰、延喜十二年九月十九日、午刻、山鳥自ニ丑寅方ニ飛來、集ニ左衛門陣上卿座上ニ飛ニ去北方ニ。枕草紙曰、山どりは友をこひてなくに、かゞみを見せたればなぐさむらん、いとあはれなり。谷へだてたるほどなど、いとこゝろぐるし。曾我物語卷第一曰、その外きじ山どり云々

形狀

萬葉集卷第十一曰、山鳥之尾乃、四垂尾(シダリヲ)乃(ノ)長永(ナガナガシ)夜乎、一鴨將宿(ネム)。方丈記曰、山鳥のほろ〳〵と鳴を聞て。太平記卷第十七曰、三十六差(タル)山鳥ノ引尾ノ征矢森ノ如ニトキミダシ。仙覺萬葉集註釋卷第七曰、或抄に、山鳥の尾とあるは、尾にはあらず、雄

也。おとりのしだり尾のと云也。と申す義も侍り、さもありなんとかけり。この義あまりの事也。かの第十一巻の哥にも、山鳥之尾之四垂尾之とかけり〇本朝食鑑曰、山雞ハ狀類レ雉而黃色、帶ニ赤黑斑一、首有ニ冠毛一、尾長黃黑成レ文而有レ列。大和本草曰、鸐雉。一名山雞。カシラ、ムネノ毛赤シ。尾ニ段々ヨコニ紋アリ。メトリノ尾モ長シ

〇白山鷄 日本書紀　集註 日本書紀巻第三十曰、持統天皇八年六月癸丑朔、庚申、河内國更荒郡獻ニ白山鷄一

かし鳥 藻塩草　漢名 未詳

一名 樫鳥 藻塩草　集註 散木集曰、夏そ引うなかみ山の椎柴にかしどりなきつ夕あさりして。太平記巻第十九曰、船田長門守ガ若黨葛ノ新左衞門ト云者云云カシ鳥威ノ鎧着テ

形狀 鷹百首曰、かしどり裝束と云は、かし鳥の羽くさひにあをく、るり色なる毛をとりて、鷹の鈴付につくる也〇喚子鳥曰、かし鳥、大きさひよ鳥に大きく、鳩のごとし。かしらねずみ色にごまふあり。惣身こいねずみいろ、尾羽のはしくろく、羽のもとにるりいろの羽あり

布々土利 倭名類聚鈔　漢名 鳲鳩 本草　今名 カッポトリ

本草綱目曰、鳲鳩。案、毛詩疏義云、鳲鳩ハ大サ如レ鳩而帶ニ黄色一、啼鳴相呼而不ニ相集一、不レ能レ爲レ巢、多ク居ニ樹穴及空鵲巢中ニ、哺レ子朝自レ上下リ、暮自レ下上ル也。三月穀雨后始鳴、夏至后乃止。正字通曰、鳲鳩。即布穀馮衍逐婦書曰、口如ニ布穀ニ言ニ其ノ多聲ニ也

一名 保々止利 天文写本和名鈔○倭名抄曰、布穀鳥。和名布々士利。三代實錄卷第二十三曰、貞觀十五年四月廿一日。勅曰、又其號ニ親王ニ者、同母ノ後產、並ニ同シレ蠱ニ一尸鳩之深患ヲ。同卷第五十日、譬猶ニ尸鳩ニ

集註 古今切紙次第曰、春の末にはつかう〳〵と鳴有、如此前後もしらぬ山中に、母のゆふれいをよぶこゑ物すごくおぼつかなければ云々

形状 ○喚子鳥曰、かつほう鳥、大きさみわかいりに同じ（みねかいり注）惣身ねずみくろし。さへづり大おんなりニ大きさひよ鳥に大ぶりト云

佛法僧 赤染衛門家集

漢名 未詳

令義解曰、謂ニ三寶ト者、佛法僧也。十七箇條憲法曰、三寶者佛法僧也。日本書紀推古天皇十二年ニモ出タリ。二荒山千部會緣起曰、鳥念ニ佛法僧一。觀經曰、百寶色鳥常和哀雅讚念佛念法念僧。翠書拾唾禪宗法語曰、三寶佛法寶僧寶。同老子玄談曰、三寶道寶經寶師寶。又云、天寶君靈寶君神寶君。又老子曰、我有三寶持而寶之一曰茲二曰儉三曰不敢爲天下先

一名 佛法僧鳥 扶桑略記第廿四裡書曰、延喜十八年八月十四日夜、五條后宮松林、佛法僧鳥鳴。衆人聞奇異。自ニ去三日一講ニ法華經一

集註 本朝無題詩卷第九曰、暮春於ニ醍醐寺一即事。中原廣俊。艷陽三月欲レ闌程、一訪ニ禪扉一出ニ路城一、

躬恒集の歌、群本、本寺本に頗異なれる處多し此方誤りと見ゆれど今本のまゝとす

春寺門深春草滿、暮山梯遠碧雲橫、櫻桃李色花空盡、佛法僧音鳥獨鳴、此山有ニ佛法僧ニ故云塵境隔レ蹤人事少、松風澗水響彌淸。赤染衞門家集曰、佛法僧となく鳥をきゝて「みつながらたもてる鳥のこゑきけばわが身ひとつのつみぞかなしき。源平盛衰記卷第十八曰、八幡ノ神松名ヲ護給シ處ナレバ、神護寺ト名タリ云云悲キ哉、佛法僧ト云鳥ダニモ不レ音ヲトセ。性靈集曰、於高野山龍光院後夜聞佛法僧、寒林獨坐草堂曉、三寶之聲聞一鳥。日本記略曰、延喜六年、右大臣光修ニ法華八講一、佛法僧來鳴。同十八年八月十三日、右大臣忠平於ニ五條家一、限ニ五日一十坐講ニ說法華經一、佛法僧鳴ニ松樹上一。同十四日、夜五條后宮講說之間、聞ニ佛法僧鳥松樹上一。躬恒集曰、延喜十八年八月十三日、左大臣の家に八かうするに、佛ほうそうといふ鳥の鳴ければ、よみてたてまつるながうた「あしひきの、山にすむらん、この鳥は、たへにやはなく、いかなれば、しげき林も、おほかるを、たかき梢も、あまたあれど、はねうちはぶき、とびすぎて、春夏冬の、時もあるを、君があきしも、もみぢ葉の、から紅に、ふりいでゝ、なくねを里に、きかせそめつる。山にすみまれに聞ゆる鳥なれば里にも君が秋よりぞなく。その日とも君かつげしもせじものをいかでか鳥のかねてしりけむ。殿の御かへし。左衞門そうみなもとのなかたゞを御つかひにて「のりを思ふ心し深く入ぬれとさとくも鳥に耳ぞ背けん。高野參詣日記曰、一心院の奧坊といふにいたりて、人〳〵やすみぬるほど、郭公のしきりに聞えしかば「高野山佛法僧のこゑをこそ待べき空に鳴ほとゝぎす

形狀

弁内侍日記曰、建長二年二月、佛法僧となくとり、太政大臣殿よりまいりたるを、常の御所の御えむにをかれたりしが、雨などの降日はことになく、げにそなもさやかにきこゆ、すがたはひえどりのやうにて、いますこしおほきなり。弁内侍「とにかくにかしこき君

が御代なれば三のたからの鳥もなく也〇雍州府志曰、佛法僧谷。在二北ノ華山一、土人言ク、古ヘ斯ノ谷ニ有レ寺故ニ號二佛法僧谷一、一說斯谷有二三寶鳥一、偶鳴ク故稱レ之云、本朝深山幽谷有レ鳥、形類二鶺鴒一多入レ夜則鳴ク、靜聽レ之則其ノ音聲如レ謂二佛法僧一、故號二三寶鳥一、又稱二佛法僧一、紀州高野山亦偶々鳴。弘法大師性靈集有二三寶鳥之詩一、然トモ斯ノ詩弘法住スル二河内國高貴山一時所レ賦レ之也。弘法大師年譜曰、後夜聞二佛法僧一云云。鐵石鈔云、大師高雄山閑居座禪曉、聞二佛法僧鳥一時詩也。大永中聞書云、大師奥院ニテ此鳥ノ聲ヲ聞キ給テ作リ給也。參天台五臺山記云、宋熙寧六年五月廿六日、參天竺寺於長老西軒聞佛法僧、鳥聲數度飛來峯鳴鳥也。按於吾邦三寶鳥之入吟詠、蓋以大師爲嚆矢云云後世人多知此鳥之在此山也。其他室生日光或醍醐鳳來寺諸山有此鳥。又本朝故事因緣集云、阿讃兩國之堺、雲遍寺有佛法僧鳥啼、自昔至今只聞其聲、未見其形。又本山龍光院秘製稱三寶鳥翼者一片、其羽毛碧色

〔正誤〕世ニ佛法僧ヲ以テ念佛鳥ニ充ルハ杜撰也、小知錄曰、鹿吏ニ安陸ニ有二念佛鳥一、常言フ一切諸佛ト、佛法僧ノ聲ト大ニ異ナレリ。佛法僧ハ常ニ啼ズ、四五月夜ニ入テ鳴、其聲ブポント云フ、僧ハ云ハズ、ブポンハ發聲ニメ僧ハ引聲也。然則念佛鳥者非佛法僧甚明矣

山から 藻塩草

〔漢名〕不詳

〔一名〕山雀 太平記卷第十七曰、又宇都宮ハ放召人ノ如ク遁ニゲヌベキ隙モ多カリケレ共、出家ノ體ニ成テ、徒ニ向居タリケルヲ、惡シト思フ者ヤ爲タリケン、門ノ扉ニ山雀ヲ繪書、其下ニ一首

ノ歌ヲゾ書タリケル。山ガラガサノミモドリヲウツノミヤ都ニ入テ出モヤラヌハ

山陵 藻塩草曰、山陵、山からのまはすくるみのとにかくにもてあつかふは心也けり云〻。夫木集曰、山陵鳥

山からめ 同上　**山柄** 精進魚類物語　集註　平家物語巻第八曰、へ籠のうちもなをうらやまし山がらの身のほどかくすゆふかほのやど　形状

古今著聞集曰、まりを足にのせて、その板敷をふまずして、山がらのもどりうつやうに飛かへられたりける。凡夫のしわざにあらざりけり。我一期に此とんばうがへり一度なりとぞ自称せられける○喚子鳥曰、山がら大きさすゞめにて、毛色かばいろに白くろこいねずみまだらふなり。此鳥羽づかひかろく籠の内にて中歸りする

らいの鳥　漢名　未詳　今名　ライテウ

集註　後鳥羽院御集曰、正治二年八月御百首、鳥五首、白山の松の木蔭にかくろえてやすらにすめるらいの鳥哉。藻塩草曰、らいの鳥、白山によめり。あま雲の八重雲がくれなる神の音にのみやはきゝて渡らん　形状　○伴存往年白山ニ登リ、此鳥ヲ見ル、大サツグミノ如シ。全身白色、背ニ淡灰色ノ毛ヲ雜ユ、草間樹枝ニモ住ム、且テ白山室ニ〆雷鳥ノ羽ヲ得タリ、白色ニ〆風切ハ五寸許、ホロタ羽ハ短ク微潤シ、其外小羽アリ、共ニ白色ニ〆外ニ顯ル、處淡黃赤ヲ帶フ

山小本 大系

鹿ノ下脫アルハ畧カ

夜萬八止（ヤマバト） 倭名類聚鈔

本草綱目、青鶻。釋名、黃褐侯。證類本草曰、黃褐侯如レ鳩作ニ綠褐色一、聲如ニ小兒吹竽一

〔漢名〕 青鶻 本草

〔今名〕 アヲバト

〔一名〕 夜萬八土 一本和名鈔　也末波止 本草類編

〔集註〕 日本紀畧曰、天長七年十月戊申、一山鳩飛入ニ承明門西廊一。大鏡曰、八幡放生會には、御馬奉らせ給ひしを、御使などにも、淨衣をたまはせ、御みづからもきよまはらせ給ひしかばにや、おまへちかき木に、山ばとのかならずゐて、ひき出るおりに、とびたちければ、よひありとよろこびけうぜさせ給ひけり。平家物語卷第一曰、甲良の大明神の御まへなるたちばなの木へ、おとこ山のかたより、山ばと三ッとびきたつてくひあひてぞしにゝける。はとは八幡大菩薩の第一の使者なり云々。同卷第七曰、雲の中より山鳩三ッ飛來て、源氏のしらはたのうへにへんはんす。今昔物語曰、義家の家に、山鳩入て、渡殿の（わた）欄（おはしまの）上に居たり。吾妻鏡卷第二十八曰、寬喜三年正月廿日、鶴罡別當法印申ニ入御所一云、當宮石階（ハシ）西邊有ニ梅木一、山鳩一居ニ彼樹一、今日（マテ）八箇日未ニ立去一。太平記第五曰、山門ノ根本中堂ノ內陣へ、山鳩一番飛來テ、新常燈ノ油淀（ツキ）ノ中ニ飛入テ、フタメキケル間、燈明忽ニ消ニケリ。此山鳩、堂中ノ闇サニ、行方ニ迷フテ、佛壇ノ上ニ翅ヲ低テ居タリケル云云。同第九曰、大將大江山ノ峠ヲ打越給ケル時、山鳩一番飛來白旗ノ上ニ翩翻ス 〔形狀〕

袖中抄曰、はとふくとは、山ばとは、㒵さかりになけば、秋の比人ははとのまねをして、手をあはせて、はとのこゑのやうに、吹ならすゑ。れうしの鹿ありとしらせんと思ふにも、手を合てふくを、はとふくとは云也。

又ぬす人の山たちするには、木ををりかけて、かくるゝをば、まふしさすと云、さてともにしられんと思ふをりには、はとをふくといへり　○本朝食鑑曰、山鳩居二山中一而不レ移二村里一、其ノ色美ニ其聲短、謂レ如二小兒ノ吹一カレ竽ヲ者也。狀如二壤(ツチクレ)鳩(ハトノ)一而頂背深綠、目前觜後至(マデ)レ臆ニ黃色、臆ニ有二綠斑毛一、腹白ク有二綠文一、羽尾黑ク、喙蒼ク、脛掌紅

古名錄禽部卷第六十五　終

古名錄禽部卷第六十六目錄

林禽類 上

宇具比須 柴鶺鴒　伊加流我 臘觜 ○比米

此米　比衣土里

奴要鳥　阿等利 花雞

うそ　四十から

増子鳥　火焼鳥

こから　鶲 貯點紅

松むしり　婆弉岐 鷦鷯

加夜久木　志止止

頬白　鵐

いすか 交喙　ひは

連雀　十二紅

毛受　鵙

尾長鳥

通計二十三種

古名錄禽部卷第六十六

紀藩　源　伴存撰

林禽類

上按小禽類、本朝食鑑、大和本草所レ説有下爲ニ差謬一者上、喚子鳥ニ所レ載ハ得ニタリ其眞ヲ一、故今引ニ用之ヲ一

宇具比須（ウグヒス）　萬葉集

漢名　未詳、清俗名ニ柴鶺鴒一

今名　ウグヒス

一名　宇久比須　天文写本和名抄曰、鶯。陸詞切韻云、鶯。於莖反、春黄鳥也。楊氏漢語云、春鳥子、宇久比須。新撰字鏡曰、鵅鶬鶓鸉四字、宇久比須。出雲國風土記曰、意宇部禽獸鶯字或作ニ黄雛一。扶桑略記卷第廿五曰、黄鳥出レ谷、近報ニ七旬之春光一。同卷第廿七曰、林鶯百囀暗添ニ歌曲一。同卷第廿八曰、長久二年三月四日、有ニ花宴一召ニ擬文章生一賜ニ勅題一、歌舌不レ如レ鶯○大和本草曰、古來本邦ニテ、アヤマリテ鶯ヲウグヒスト訓ズ。鶯ハ別ノ鳥ナリ。カラ朝鮮ヨリ携來、筑紫ノ海島ニモ自來ル。又曰、黄鳥（カツラヒウグヒス）ツグミヨリ大ニシテ頭背黄綠色也。腹ハ淡白、其羽ト尾少黒キ處アリ。立春ノ後鳴ク、其聲ハウグヒスニ不レ及、其形色甚美ハシ。本草啓蒙曰、鶯、朝鮮ウグヒス、此鳥東國ニハ來ラズ、筑前領蛇（ヲロノ）島ニ稀ニ來ル、此島ハ朝鮮ニ近キ地故ナリ。又薩州夜久島ニモアリ。桑椹熟スル時ノミ早朝ニ來ル、柴鶺鴒（ウグヒス）トハ異ニメ、大サ伯勞（モズ）ノ如

シ。全身黃色、眼ハ紅色ヲ帶ビ、目ノ通リ頸ヲメグリテ黑シ。風切黑クホロハ微黑雜ハル、尾ハ本末黃色ニメ中ハ黑色ナリ。尾尖ニ小紅アリ。甚鮮ナリ。觜尖リテ紅色、脚掌灰色。柴鶲ノ聲ヨリ大ナリ。按ニ、格物論曰、鶯黑眉尖觜脚青紅遍身甘草黃色羽及尾有ニ黑毛相間一鳴聲音圓滑。本草綱目曰、鶯處々有レ之、大ニ於鸜鵒一、雌雄雙飛、体毛黃色、羽及尾有ニ黑色相間一、黑眉尖觜青脚、立春後卽鳴、麥黃椹熟時尤甚、其音圓滑如ニ織機聲一、乃應レ節趨レ時之鳥也。月令云、仲春倉庚鳴。說文云、倉庚鳴則蠶生。毛詩鳥獸草木考曰、黃鳥黃鸝留也。一名、倉庚、幽州人謂ニ之ヲ黃鶯一、亦或謂ニ之ヲ黃袍一、黑眉紅觜青脚遍身黧黑而黃鳴則蚕候去レ春三十六日而鳴、ウグヒスノ立春ヨリ鳴ト異也。明月記曰、貞永二年正月二日、早梅盛開、黃鶯高歌。卽黃鶯ノ字ヲウグヒスニ誤リ用ヒタリ

汙隅比須　萬葉集卷第五曰、波流能努爾、奈久夜汙隅比須、奈都氣牟得、和何弊能曾能爾、汙米何波奈佐久

于遇比須　萬葉集卷第五曰、于遇比須能、於登企久奈倍爾、烏梅能波奈云云。和家夜度能、烏梅能之豆延爾、阿蘇毗都都、宇具比須奈久毛云云。宇具比須能、麻知迦弖爾勢斯、宇米我波奈云云。同卷第十七曰、山部宿禰赤人詠ニ春鶯一歌一首、安之比奇能、山谷古延底、野豆可佐爾、今者鳴良武、宇具比須乃許惠。同卷第二十曰、安良多末能、等之由佐我敝理、波流多多婆、末豆和我夜度爾、宇具比須波奈家。打奈婢久、波流等毛之流久、宇具比須波、宇惠木之樹間乎、奈伎和多良奈牟

春鳥　萬葉集卷第九曰、春鳥能、啼耳鳴乍。同卷第二曰、春鳥之、佐麻欲比奴禮者。格物論曰、反舌蒼毛尖觜、形小ニ於鸜鵒一、亦謂ニ之百舌一、又名ニ春鳥一。然則春鳥ハ不ニ柴鶲鵑ニ也〇萬葉集卷第八曰、居之鶯、鳴爾鷄鵡鴨云云。吾宅乃苑爾、鶯鳴裳。同卷第十三曰、云云鶯鳴母。同卷第十七曰、鶯能、奈久久良

多爾之云云。
餘器之

むしくひ（枕草紙。按ニ後世ムシクヒト呼鳥アリ、同名異物也） 花見鳥（藻塩草） 匂ひ鳥（同上） 二月すこ鳥（同上）

【集註】萬葉集巻第十七曰、方今春朝春花、流ニ馥於春苑ニ、春暮春鶯、囀ニ聲於春林ニ云云。宇具比須乃、奈枳知良須良武、春花云云。常陸國風土記曰、茨城郡謌ニ歌鶯於野頂ニ。續日本後紀巻第六曰、承和四年春正月甲申、天皇内ニ宴於仁壽殿ニ、令レ賦下苑欄ニ聞ニ鶯之題上、獻レ詩大臣以下給レ禄有レ差。扶桑略記廿四裡書曰、延長八年六月十四日、去九日、大極殿内梁上鶯居。明月記曰、元仁二年二月卅日、曙鶯啼レ之。安貞元年十二月廿二日、昨今早鶯初啼。寛喜二年正月十六日、霞聳鶯啼。貞永二年三月十三日、鶯啼。文暦二年十二月廿六日、鶯既頻歇、有ニ春氣ニ。源氏物語初音曰、五えうの枝にうつれる鶯、思ふ心あらんかし。同こてふ曰、鶯のうらゝかなるねに。同若菜曰、げにねぐらのうぐひすもおどろきぬべく。又曰、鶯のわかやかに近きこうばいのすゑにうちなきたるを。又曰、鶯さそふつまにしつべく、いみじきおとゞのあたりの匂ひなり。又曰、鶯のは風にもみだれぬべく。同まほろし曰、御かたみのこう梅に、うぐひすの花やかになきいでたれば、たち出て御らんず。同竹川曰、おまへちかきわかぎの梅、心もとなくつぼみて、鶯のはつこゑも、いとおほどかなるに。同さわらび曰、御まへちかきこうばいの、色もかもなつかしきに、うぐひすだに見過しがたげにうちなきて、わたるめれば。枕草紙曰、りんじのまつり云云雲林院、ちそくゐんなどのかどにたてる車ども、葵かつらもうちなへて見ゆ。日は出たれど、空は猶うちくもりたるに、いかできかんと、目をさましおきゐてまたるゝ郭公の、あまたさへあるにやときこゆるまでなきひゞか

せば、いみじうめでたしとおもふほどに、鶯の老たる聲にて、かれにせんとおぼしく、うちそへたるこそにくけれど、またおかし。又曰、鶯はよるなかぬいとわろし。四季物語曰、うぐひすはのどやかなる軒端になれ來つゝ、たかきにうつるいきほひもやんごとなく。袋草紙曰、範永朝臣哥ニハ、谷鶯一聲ヅスル。染肝膽哥、以之彼入爲第一秀哥之由、年來心中所存也。而余人必シモ不然之氣也。十訓抄曰、春の始軒近き梅がえに、鶯の定りて巳時斗來て鳴けるを、有がたく思て、それを愛する外の事なかりけり。源平盛衰記卷第十一曰、谷ヨリ出ル鶯モ、軒端ノ梅ニ囀。今物語曰、宮の鶯百さえづりすれども。公任卿集曰、うぐひすを櫻の枝にすへておこせたれば云〻。催馬樂曰、むめがえに、きゐる鶯や、はるかけて、はれ。高倉院升遐記曰、うぐひすの聲ばかり、有し春にたがはず。山賤記曰、谷の鶯の、ふるすたちいづるたよりには、軒ばに木づたひなくも、物おもふ身をことゝひがほにおぼえたり。身のかた見曰、おもしろきこゑなれども、うぐひす鹿のねは、まつとはいはず。たゞし、またるゝものほうぐひすのこゑ、といふことのはゝのこりて侍れども、さやうにさしても色ふかくいひ出んことはかたくや。花のちるをおしみて、紅葉のちるをおしまず、花をまちて、紅葉をまたず。赤染衞門集曰、くにゝてはるあつたの宮といふ所にまうでゝ、みちにうぐひすのいたうなくものをとはすれば云〻。四月一日くらまにまうでたりしに、うぐひすのなきしを。蜻蛉日記曰、あらたまれどもていふなる日のけしき、うぐひすの聲などをきくまゝに云ゝ。又曰、うぐひすのはつこゑたりと云〻。又曰、うぐひす許ぞ、いつしかおとしたるをあはれときく。宇津保物語俊蔭曰、春の山にうぐひすのなかぬあした。同吹上曰、鶯のはるかなる聲、松風のとほきひゞきに。榮花物語つぼみ花曰、たにのう

ぐひすも、ゆくすゑはるかなるこゑにきこえて、みゝとまり。同衣の珠曰、あめのふるころ、なかたによりうぐひすのあめにぬれてなくを云々。平家物語巻第四曰、春すでにくれなんとす、夏木立にも成にけり。こずゑの花おとろへて、みやのうぐひすこゑ老たり。同巻第七曰、澗谷の鶯舌のこゑ老て。同巻第九曰、谷のうぐひすをとづれて、かすみにまよふ所も有。十六夜日記曰、谷の戸はとなりなれども、うぐひすのはつねだにもをとづれこず。高倉院厳島御幸記曰、宮の鶯こゑしづかにさへづりて、よもの山邊もかすみこめ。又曰、廿七日、そらの氣色うらゝかにはれわたりて、のこりの鶯おもはぬみやまの木かげにかたらふこゑす。多武峯少将物語曰、四月つごもりばかりに、うぐひすのす三つばかり、むめすちばかりいれたり

形状 伊勢國風土記曰、桑名郡藤澤山、和銅三年出二黄鳥大一勝二諸鳥一其後時々出レ之。枕草紙曰 鶯は、ふみなどにもめでたき物につくり、聲よりはじめて、さまかたちも、さばかりあてに、うつくしきほどよりは、こゝのへのうちになかぬぞ、いとわろき。人の、さなんある、といひしを、さしもあらじと思ひしに、十とせばかりさぶらひてきゝしに、まことにさらにをともせざりき。さるは竹もちかく、こうばいもいとよくかよひぬべきたよりなりかし。まかでてきけば、あやしきいへの、見どころもなき梅などには、花やかにぞ鳴。夜るなかぬもいぎたなきこゝちすれども、いまはいかゞせん。夏秋の末まで、おひごゑになきて、むしくひなど、ようもあらぬものは、名をつけかへていふぞ、くちおしくすごきこゝちする。それもすゞめなどのやうに、つねにあるとりならば、さもおぼゆまじ。はるなくこゑこそはあらめ、としたちかへるなど、おかしきことに、歌にもふみにもつくるなるは。なを春のうちならましかば、いかにおかしからまし。

人をも人げなう、世のおぼえあなづらはしうなりそめにたるをば、そしりやはする。結題百首曰、我竹がほに厭ふ鶯と云、ひとく〳〵と啼心ちをもたせてよみ侍る也。蜻蛉日記曰、この時すぎたるうぐひすのなき〳〵てたちかうしに、ひと〳〵とのみいちはやくいふにぞ、すだれおろしつへく、おぼゆる。吉野詣記曰、ことなる人のいふやう、このや尾といふ所は、鶯の名處なり。よのつねのは尾十二枚かさなれり。この所のは尾を入かさね、すぐれたるよし申けり

○鶯栖（ウグヒスノス）　集註

吾妻鏡卷第十九曰、建暦元年閏正月九日、自二永福寺邊一被レ移二殖梅樹一本於御所北面一、是北野廟庭種也。匪二濃香之絶妙一、南枝有二鶯栖一、依レ之被レ賞二翫之一。○柴鶺鴒（ウグヒス）ハ山中樹枝ニ巣ヲ造ル、形狀圓長、大サ雛卵ノ如ク、毛髮ノ類ヲ聚テ織ルガ如シ。一方ニ身ヲ入ル許ノ圓孔ヲナシ、内ニ卵ヲ生ス

伊加流我（イカルガ）　萬葉集

漢名　臘觜　本草　今名　マメドリ

山堂肆考曰、蠟嘴。生二于象山一、似レ雀而大、嘴如二黄蠟色一、故名　一名　以加留加

本草和名曰、鳲。和名以加留加。倭名類聚鈔曰、鵤。和名伊加流加。斑鳩　和名上同。見日本紀私記。萬葉集卷第十二曰、斑鳩（イカルガ）之、因可（ヨルカ）乃池之（イケノ）、宜（ヨロシク）毛（モ）。按ニ、イカルガハ斑鳩（シュズカケバト）ト臘嘴（マメドリ）ト同名異物也

伊加留加

新撰字鏡曰、鳴鵤、二字、伊加留加

伊加留我

字鏡曰、鵤。止遙反、鵤。伊加留我

伊加妻可

日本靈異記曰、歌云、イカルガヤトミノヲガハノタエバコソワガオホキミノミナヲワスレメ、鵤、伊加妻可。斑鳩二字、イカルガ。又曰、

宣定
一本

聘鵤二合、

伊香留香（イカルガ）

壒嚢鈔曰、法隆寺ハ聖德太子ノ御願、号伊香留香寺、又斑鳩共書。太平記卷第三十二曰、但馬國ヨリ杉原越ニ、播磨ヘ打テ出、先宰相中將義詮ノ鵤（イカルカ）ノ宿ニヲハスルヲヤ打散スト云云宰相中將義詮朝臣ハ、西國ヨリ上洛センズル歟ヲ支ヘン爲ニ、播磨ノ鵤（イカルカ）ニ兼テ在庄シ給ヒタリト聞ヘシカバト云云

【集註】萬葉集卷第十三曰、仲枝（ナカツエ）ニ爾、伊加流我懸ト云云。同卷第一曰、是時宮前在二樹木一、此之二樹斑鳩此米二鳥大集。時勅多掛二稻穗一而養レ之。明月記曰、安貞元年十一月廿八日、今朝年來所飼之鵤、此間有病氣、死。日來在籠中、不委見、令見痩損無極。但至昨日食物如例

【形狀】枕草紙曰、鳥はいかるがのおどり。古今著聞集卷第二十日、二条中納言宣高卿いかるがを家隆卿のもとへをくるとてよみ侍ける〽いかるがよまめうましとはたれもさぞひじりこきとは何をなくらむ○喚子鳥曰、まめまはし、いかるがとも。大きさひよ鳥にちいさく、かしらくろく、惣身うすねずみいろ、尾羽くろし。はし黃いろにて太し。さゑづり高ねなり。多いづる

○比米（ヒメ）

倭名類聚鈔　【一名】比米鳥　伊豫國風土記○倭名鈔曰、鳹。陸詞切韻云、鳹。音黔、又音琴。漢語抄云、白喙鳥也○字典曰、鳹。廣韻、句啄鳥。玉篇、鳥啄食。說文、作レ雂。按ニ、仙覺萬葉集註釋卷第三曰、伊豫國風土記云、于レ時於ニ大殿戶一有レ椹云ニ臣木一、於レ其集。上鵤云ニ比米鳥一、天皇爲ニ此鳥一枝繫レ穗等養賜也。ト觀ユレバ、漢語ニ出ル比米ハ臘嘴（マメトリ）タル⌐明也

比米（シメ）

萬葉集第一

一名　之女　倭名類聚鈔曰、鵖。漢語抄云、之女〇字典曰、鵖。廣韻、鵖小青雀也

集註　萬葉集卷第十三曰、下枝爾（シヅエニ）此米乎懸（シメヲカケ）云云。出雲國風土記曰、神門郡、禽獸有鵖

形狀　〇件存云、シメハマメ鳥ニ似テ小ク、全身灰青色、背青黑、足亦同。冬月群ヲ成テ來ル

比衣土里（ヒエドリ）　倭名類聚鈔

漢名　未詳

今名　ヒヨ

一名　比衣度里　天文写本和名抄〇倭名鈔曰、鵯。和名比衣土里　ひへどり　古今著聞集　ひよどり　同上　ひゑ鳥　義經記曰、ひゑ鳥こえとて、とりけだものもかよひがたき。がんせきを無勢にておとし云々　比惠止利　本草類編曰、鵲鵙。和比惠止利〇鵲鵙ハカムリドリ也。和產無之〇塵添壒囊鈔曰、鵯（ヒエトリ）鶌（ヒエトリ）。爾雅曰、鸒斯、鵯鶋。註、鴉鳥也。小而多羣、腹下白、江東亦呼爲鵯鳥。鵯、音匹。本草時珍所說燕鳥ニメ、コクマルガラス也

集註　三代實錄卷第四十二曰、陽成天皇元慶六年九月廿日己丑、有鵯、當宮城翺翔。吾妻鏡卷第三曰、元曆元年二月七日、寅尅、源九郎先引分殊勇士七十餘騎、著于一谷後山、号鵯越　九郎主相具三浦十郎義連已下勇士、自鵯越被攻戰之間、失商量敗走。平家物語卷第九曰、此山の手と申は、一の谷のうしろ、ひよどりごへのふもと也云々一の谷のうしろ、ひよどりごへをおとさんとて云々又曰、七日のあけぼのに、大將軍九郎御ざうしよしつね、其せい三千よき、ひよどりごへ

に打上て、人馬のいきやすめておはしける云々同巻第十一曰、一の谷のうしろ、ひよどりごえをも、此馬にてぞおとされける。古今著聞集巻第二十曰、宮内卿家隆卿ひざうのひよどり、おぎのはといふを、子息の待従すみよしへもちてくだりたりけるを、とりにやるとて、はやまといふ鳥を、かはりにやりたりければ、待従おぎのはををくるとて、鳥につけ侍りける「すゞしさはは山のかげもかはらねどなをふきをくれ荻のうはかぜ。このうたをかんじて、やがて又おぎのはをかへしやるとて、宮内卿これも又秋のこゝろぞたのまれぬはやまにかはるおぎのうはかぜ。又曰、後久我太政大臣家におもながといふ鶲の有けるを、家隆卿所望せられけるを、おとゞしばしつき見給ひければ、よみてつかはしける「いかにせん山鳥のをもながき夜をおひのねざめに戀つゝぞなく

形狀 古今著聞集巻第十六曰、壬生二品家隆同卿の許に、摧寺主圓闍といふ僧侍りけり。件の僧ひへどりをかひけり。毛をおそくかへけるを、いう〳〵しき物にて、其鳥をとらへて、毛をつるりとむしりてげり。二品きかれて、比興の事に思ひて、歌をよみて、ふだにかきて、壬生の辻に立られける「ひへ鳥をむしりつゝみのはだかはらしげすゞにしてなをわたるなり○喚子鳥曰、ひよ鳥、大きさ鳩にちいさく、毛色あをぐろく青し、さゑづり大をん○按ニ、古説ニ白頭翁ニ充誤也。白頭翁今舶来アリ、ヒヨドリヨリ小クシナイノ大サニメ嘴黒色、觜ノ本ヨリ頭黒色、頭ノ後ニ白毛アリ、眼ノ上下黒色、眼ノ通リ灰黒、背黒色、末灰黒色、胸灰黒色、腹白ク、羽尾黒ホロ白色、足黒色也

奴要鳥 萬葉集

漢名 未詳 **今名** ヌエツグミ

一名

奴要子鳥 萬葉集卷第一曰、霞立、長春日乃、晩家流、和豆肝之良受、村肝乃、心乎痛見、奴要子鳥、卜歎居者云云

宿兄鳥 萬葉集卷第二曰、綾爾憐、宿兄鳥之、片戀嬬云云

奴延鳥 萬葉集卷第五曰、奴要鳥乃、能杼與比居爾云云。同卷第十曰、久方之、天漢原丹、奴延鳥之、裏歎座津、乏諸手丹。吉哉、雖不直、奴延鳥、浦嘆居、告子鴨。同卷第十七曰、奈良乃吾家爾、奴要鳥能、宇良奈氣之都追、思多戀爾、於毛比宇良夫禮、可度爾多知云云

沼江 倭名抄曰、鵼。唐韻云、鵼。恠鳥也。音空。漢語抄云、沼江。散木集曰、雨にまた水そひぬなりよもすから物思ふ宿にぬえの聲しつ

奴江 新撰字鏡曰、鵼。奴江。鵺、以謝反、去、奴江。字典曰、鵺似雉。正字通曰、鵺。郭璞贊、見人則跳頭文如繡。品字箋曰、鵺。山海經、單張之山有鳥、狀如雉而文首白翼黄足、其名曰白鵺。未詳○字典曰、[illegible]。音陽、白鷹。爾雅、楊鳥白鷹。註似鷹尾上白。ミサゴ也

奴延 古事記曰、奴延波那伎

鵼 塵添壒囊鈔○字典曰、鵼。廣韻、鵼怪鳥。按怪鳥皆謂之怪、不必以空立名。篇海曰、鵼見字統誤也

ヨミツトリ 袋草紙曰、鵼鳴時哥。ヨミツトリワガカキモトニナキツナリ人ミナキ、ソユクタマモアラシ。八雲御抄曰、ぬえとりと云、又よみつ鳥、是恠鳥也。つれ〴〵曰、眞言書の中に、よぶこ鳥なく時、招魂の法をばおこなふ次第あり。是は鵼なり○海南日抄曰、招魂方士少翁爲漢武帝召李夫人、臨功道士爲唐明皇訪楊貴妃、此二事人皆知之、又南史段淑儀薨時、有巫者能見鬼、說淑儀可致帝令召之、有頃果于帷中見形如平常、帝與言不對、將執手奄然便歇、帝于是擬李夫人賦以寄意焉。魂果可招耶。或云、是能以術

臣告

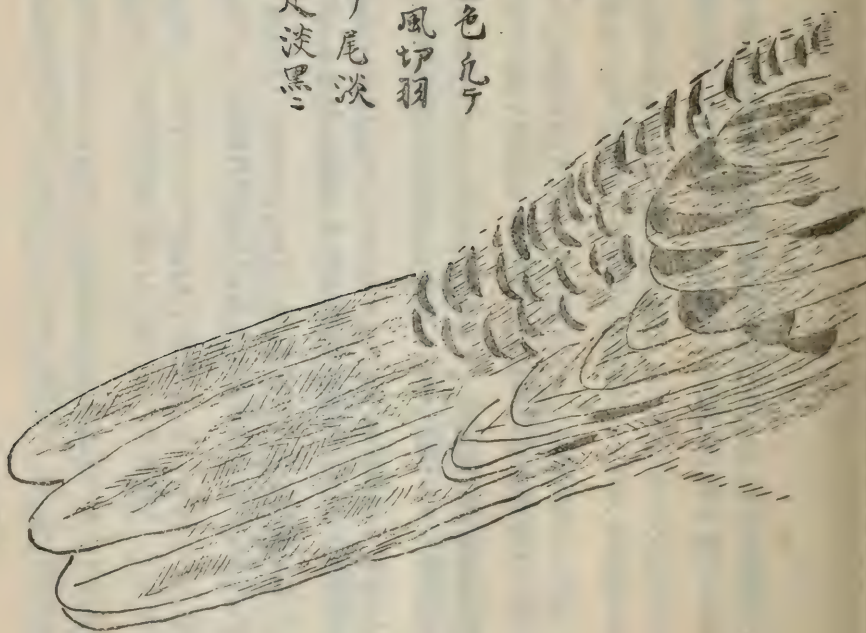
刊本

謂レ狐ヲ使レ幻ニ其形一、是未レ可レ知也

集註　言麗集曰、一岸、朝なぎ夕しほ、鵼ぬへどりかさゝきなども詠り。吾妻鏡巻第三十三曰、仁治元年四月八日、子剋、前武州御亭御厩侍鵼鳴。九日、依ニ鵼ノ恠異一、於ニ前武州公文所一、被レ行ニ百怪祭一。明月記曰、建永元年六月廿一日、參法性寺殿、九条殿、八条殿、女院渡御歡喜光院、鵼鳴之故云云、貴賤雖去恠異、予无其術、不去何爲乎。文暦二年閏六月一日、此間東一条鵼鳴、令右大臣給レ渡ニ御督典侍家一。平家物語巻第四曰、又おうほうのころほひ、二条の院御さい位の御時、ぬえといふ化鳥、禁中にないて、しば〳〵しんきんをなやまし奉る事有けり。しかればせんれいにまかせて、よりまさをぞめされける。ころは五月二十日あまり、まだ宵の事なるに、ぬえたゞ一こゑをとづれて、二こゑともなかざりけり。めざすともしらぬやみでは有、すがたかたちも見えざりければ、矢つぼをばいづくともさだめがたし。よりまさがはかりごとに、まづ大かぶら取てつがひ、ぬえのこゑしたりける内裏の上へぞいあげたる。ぬえかぶらのをとにおどろひて、こくうにしばしぞひらめひたる。つぎにこかぶら取てつがひ、ひいふつといきつて、ぬえとならべてまへにぞおとしたる。禁中さゞめきわたつて、より政に御衣をかづけさせおはします

形狀　仙覺万葉集注釋巻第五曰、奴延鳥乃能杼與比居尓。ぬえとりは恠鳥也。のどよびをるにとは、まづしき家のあれたれば、ぬえとりも、野などのやうになくとよめるにや。またある人のいふは、ぬえのなく事は、恠事なるにとりて、のどごゑとて、こもりごゑになく、ことにあしき事にすれば、のどよびをるにとよめるにやと申す。まことにさもやあらん、しりがたし○喚子鳥曰、ぬえつむき、大きさつむぎに大きし、惣身きいろにくろきふばら〳〵有、さへづり悪し

奴要鳥圖

形狀ツグミニ似タリ
大サ鳩(キジバト)ヨリ小也
背淡黒黄色腹白色ニテ
弦月ノ如キ黒斑アリ風切羽
淡黒ホロニ黒斑アリ尾淡
黒色觜淡黒色足淡黒ニ
メ微紅ヲ帶ル

【今案】徒然要草曰、予廿七歳のころ、美濃の片山といふ所に住しとき、本願寺てらのしんぼちをつれて、高野越に熊野参詣しける時、山中にて夕だちにあひ、大木の杉の本に雨屋どりしてゐけり。雨やみければ、くろ雲出てすさまじかりけるに、谷のむかひの雲の中にて、何ともしれぬ聲にてなくをとあり。たとへば十ヲ斗の子共などを、しめころさばかゝる聲ならんと思はれける程に、かの小僧おそろしからんと思ひつれども、かつておそろしげなるいろなし。不思議におもひて、何のこゑなるらんといへば、小僧の云は、あれは鵼といふ鳥にてさぶらふといふ。聞たることありや、といへば、在所にて折ふしなきゐといふ。さい〱なくかととへば、ことの外稀になくなり。靜なる雨夜、やみの夜などになきゐ。いかやうの鳥か、形をば見ずといふ。まれにてあやしき鳥なればこそ見たるといふ人なし。あやしき鳥なり。伴存云、天保八年五月初旬、和州釋迦嶽採薬ノ時、和州十二村庄猿谷ニテ日没ス。初更ニ及テ、始テヌエノ聲ヲ聞ク。其声長ク引テピイト啼。源平盛衰記ニ、鵼ノ聲メヒ、ナキテ立所ヲト云ニ合ス。萬葉集ニ奴延鳥乃能杼與比居尓ト云、仙覺ガのどごゑとてこもりごゑになくト云ハ此声也。其聲細クテ、遠ク山谷ニ響、數町ヲ經レドモ耳底ニ殘レリ。其鳥ノ在所何レノ山ト定ガタシ、其所ニ至レバ、又先ニ聞エタリ。本朝食鑑ニ、深山ニ有ニ夜啼之鳥、其ノ聲極テ悪シ、呼テ號ㇾ鵼。紀州熊野山中有ㇾ之ト云此也。今和州十津川庄中ノ山民、亦此鳥ノ人家ニ來リ鳴ヲ忌テ、無緣ノ鳥ト云、此ㇾ病人アレバ必死ヲ表スル也ト云。山家集曰、さらぬだによのはかなきを思ふみにぬえ鳴渡る明ぼのゝ空。明月記曰、建曆三年二月八日、晴。入夜參左大臣殿、侍ニ逢テ門前ニ云、此院鵼鳴、仍俄令ㇾ立給。御ニ座東平三位家ニ者、聞驚參ニ御在所ニ見參之間及ニ曉鐘ニ退出、宿九条、自明日始精進、冷泉同宿

三月八閏三月ナリ

人憚之故也

阿等利(アトリ) 萬葉集　漢名 花雞 山堂肆考　今名 アツトリ

山堂肆考曰、花雞小鳥也、八九月間自海外、投入樹林、㗖如風雨聲、毛羽青黃色、亦有黑色者、腹下淺白色、土人謂之花雞

一名 臘鳥(アトリ) 日本書紀 欽明紀　臘子鳥 日本書紀　臈子鳥 同上。下學集曰、臈与臘同。塵添壒囊鈔曰、臈與臘同シ字也。令義解曰、謂臈猶年也。年終有臘、故稱年爲臈　阿止利 新撰字鏡曰、臘子鳥。又云、臘觜鳥、阿止里。臘觜ハマメドリ也　阿止里 倭名類聚鈔曰、𪃹子鳥。阿止里。一云、胡雀。楊氏漢語抄曰、𪃹子鳥。和名同上。今按、兩說所出未詳。但本朝國史用𪃹子鳥

集註 倭名鈔曰、又或說云、此鳥群飛如ニ列卒之滿ニ山林一、故名ニ𪃹子鳥一也。日本書紀卷第二十九曰、天武天皇白鳳七年十二月癸丑朔、乙卯、臘子鳥蔽レ天、自ニ西南一飛ニ東北一。同九年十一月辛丑、臘子鳥蔽レ天、自ニ東南一飛、以度ニ西北一。萬葉集卷第二十曰、久爾米具留(クニメグル)、阿等利加麻氣利(アトリカマケリ)、由伎米具利(ユキメグリ)、可比利久麻弖爾(カヘリクマデニ)、已波比弖麻多禰(イハヒテマタネ)

形狀 㗖子鳥曰、あつ鳥、大きさすゞめに大ぶり、毛色黑白、かば色まじはり見事成鳥なり。年を重ねて、いよ〱見事なる鳥なり。然れども囀(さへつ)りなく多き鳥にて、かひ鳥の下品なり

今案 續日本後紀曰、仁明天皇承和十四年三月戊寅、群鳥億萬、繞レ日上下、自ニ日中一到ニ黄昏一、仰看ニ空中一、不レ知ニ

何鳥ト。戊子、是月、數數有二群鳥一、遲明自二西方一度二東方一、其多覆レ天、終始不レ見、訪二諸故老一、皆云、未二曾聞一レ之者。扶桑略記廿三裡書曰、延喜元年十一月十八日、近來小鳥如レ雲凝、朝西方飛向、暮東方飛歸。延喜十三年十二月三十日、自二去廿三日一、小鳥滿レ室、往二來四方一。此等ニ所レ載恐ハアトリナラン歟

夕一本多ニ作ル

うそ　山家集　漢名　未詳

○萬葉集卷第九曰、嘯鳴登（ウソフキノボリ）、岑上乎（ヲノウヘヲ）。大和本草曰、ウソ、雄ヲテリウソト云、紅シ。雌ヲアマウソト云、アカ、ラズ。其声如レ嘯、故ニ名ツク　集註　山家集曰、ことりどものうたよみける中に、もゝそのゝ花にまがへるてりうその むれ立おりはちるこゝちする　形狀　○喚子鳥曰、うそ鳥、大きさすゞめにばいせり。かしらくろく、尾羽くろし。目の下（した）にくれなゐの色あり、胸はらうすくあかし。うつくしき鳥なり。さゑづりほそし。冬の内來る、年によりわたらぬ事もあり

四十から　藻塩草　漢名　未詳

一名　四十陵　藻塩草　鵖（シヾウカラ）　塵添壒囊抄。字典曰、鵖、玉篇、鶤鳩也。鷚字註、集韻、鵏鵊也。卽カラン鳥也　四十抦　精進魚類物語。沙石集卷第五曰、四

十ガラコソ鳥ノカズナレ

集註 藻塩草曰、あさまだき四十からめぞたゝくなる冬ごもりするむしの栖を

形状 ○奥子鳥曰、四十雀、大きさ山がらにちいさし、かしらくろ白まだら、せはあさぎに黄色ねずみいろまじりたり。はら白くくろきすぢ有、さゑづりよし

増子鳥（マシコ） 夫木 集

漢名 未詳

一名 ましこ 藻塩草　てりましこ 同上。袖中抄曰、ましこは、小鳥の名にまぎるゝに

集註 藻塩草曰、ましこゐるゐのゝつちはしうちはらひみぎはにかたてし昔こひしも。時雨こし梢の色をおもへとやえだにもきゐるてりましこかな

形状 ○奥子鳥曰、ましこ、大きさすゞめにて、せの色赤うすくろく、うす白き毛もまじる、むねはらべにのごとく赤し、のどに白きけ、きくのごとくなりたるを、きくましこといひ、てりのうすきを、さるましことといふ。年をかさねて毛色さめしらけ悪敷なる。さゑづりよし。さへづるはまれなり

火焼鳥（ヒタキ） 夫木 集

漢名 未詳

一名 ひたき 枕草紙　鶲（ヒタキ） 塵添𡋽囊抄○正字通曰、鶲。按、禽經鷹曰翁鷄、即鷹別名、然禽經此說無二意義一不レ足レ信、鳥未レ有三名レ鶲者二、一說鳥頸下毛曰翁

集註

藻塩草曰「もゝしきにすみかさだめよひたき鳥なれかやとりも庭にみゆめり「おもひかね柴折くぶる山ざとをなをさびしとや火焼なく也

【形状】〇喚子鳥曰、せうひたき、大きさうぐひすにゝて、首ねずみ色にて、せのいろうす黒く、かたに白き毛あり。尾羽かば色にあかし、むねつら黒く、腹かばにあかし。さへづりほそし。秋の末より春の初まで多く出る、雪ひたき、大きさかたちうぐひすにたり。惣身あい色のるりいろ、のどよりはら白く、わきばらにかきいろの毛少しあり。目のうへに、しろきまゆげ有。さへづりほそし

こから　藻塩草

【漢名】未詳

【一名】小陵　藻塩草　こからめ　同上　鵠（コガラ）　塵添壒嚢抄〇字典曰、鵠。玉篇、鵠鴒布穀鳥也、カツコウドリ也。精進魚類物語曰、こから

【集註】藻塩草曰「友ねしてはぐくみかはすこがらめのおもふ人だにある世成せば「はねかはすこがらめふしをみてもまづわが獨ねの契をぞしる「春きてもみよかし人の山里にこがらむれゐる梅のたちえを「み山べの嵐にうつるこがらめはしぐれになびくこのは成けり「ならびゐるこがらめふしの中に入てわりなく人にむつれぬるかな。山家集曰、こどりどものうたよみける中に「ならびゐてともをはなれぬこがらめのわくらにたのむしゐの下枝

【形状】〇喚子鳥曰、小がら、大きさ四十からに小ぶり、毛色かしら黒く、せはねずみにて、はら白し。かごの内四十がらににたり、さゑづり少しあり。冬出る。近國にはま

れなり

鵼ヌカ 夫木集 [漢名] 貯點紅 畿輔通志 [今名] ヌカ

畿輔通志曰、貯點紅、形似二瓦雀一而頭有二紅點一 [一名] ぬか 藻塩草 鵼ヌカ 塵添壒囊鈔。字典曰、廣韻鵼鶏、爾雅、鶏山烏。註、似レ烏而小赤レ觜。ミヤマカラス也。字典に廣韻、鶏

瑪鳥トアリ [集註] 藻塩草曰、ことにわが一こはなれてかふぬかのぬかつくことは君をいのりて [形狀] ○喚子鳥曰、ぬか鳥、大きさすゞめにちいさし、毛色すゞめにし

らけたり。いたゞきに赤き毛あり、さへずり少しあり、冬の内に來る、年によりてわたらず

原本ハ鶮トアリ。字典ハ鵼ノ字ニ作ル。本朝食鑑ニモ鵼トカケリ

貯點紅(ヌカ)ノ圖

ヌカハ雀ヨリ短ク嘴黄色ニ〆花雞(アトリ)ノ嘴ノ如シ頂紅色喉下黒色喉下ヨリ胸ノ間淡灰白色背淡褐ニ〆黒斑アリ腹淡灰黄色ニ〆淡黒斑アリ尾ヅヽ灰白色羽黒色短羽末白尾淡黒ニ〆淡褐ヲ帯足淡紅黒色爪黒

松むしり 藻塩草 【漢名】 未詳 【今名】 マツクヾリ

【一名】 松芼 夫木集 松菟 藻塩草。精進魚類物語曰、松むしり 【集註】 藻塩草曰、み山ぎの雪ふみすよりうかれきて軒ばにつたふ松むしりかな 【形狀】

○喚子鳥曰、松くゞり、大きさすゞめにちいさし、毛色あを黒く、こまかにうす白きふ有、さゑづりほそし、よはき類なり

娑弉岐(サザキ) 日本書紀 【漢名】 鷦鷯 本草 【今名】 ミソサヾイ 【一名】 佐佐木 倭名類聚鈔曰、鷦鷯。和名佐佐木 佐佐

本草綱目曰、鷦鷯處處有之、生高木之間、居藩籬之上、狀似黄雀而小、灰色有斑、聲如吹噓、喙如利錐

岐 天文写本 和名抄 娑娑岐 日本書紀曰、鷦鷯 此云娑娑岐 駄(サザイ) 塵添壒囊鈔○正字通曰、駄、駄字之譌 みそさゝい 家中竹馬記曰、射まじき鳥の事、みそさゝい

左ゝ支 新撰字鏡曰、鷯、左ゝ支。鵫、左ゝ支○正字通曰、鵫、鷦(トキ)字之譌。字典曰、鷦、埤雅、鷦綬鳥。古今注、吐綬 佐邪岐 古事記曰、意富佐邪岐、意富佐邪岐云 云又曰、波夜夫佐和氣、佐邪岐登良佐泥 【集註】 日本書紀仁德天皇曰、復當昨日臣妻産時、鷦鷯入于産屋、是亦異焉云 云取鷦鷯名以名太子、曰大鷦鷯皇子。又曰、雄略天皇執捷鷦鷯與隼焉云 云時隼別皇子等歌

曰云 云伊菟岐餓宇倍能、娑棑岐等羅佐泥。駿河國風土記曰、安弁郡平峽貢鶺鴒

【形狀】〇喚子鳥曰、さゞい、みぞさゞい共いふ。大きさ雀半分ちいさし。毛色赤ぐろく、惣身にこまかきふ有、さゝづりいろねよく、たかねにておもしろきものなり

加夜久木（カヤクキ）　倭名類聚鈔

【漢名】未詳　【今名】カヤクヾリ

【正誤】大和本草曰、鷃ボトシギ、カヤクキ、大如レ鶉、身小ホソ長シ。觜シ下觜二寸バカリ、上觜少短シ。ウヅラヨリ足長シ。毛ハウヅラニ似テマダラナリ。クビ長ク、頭ホソシ。腹白ク、尾短シ。味美ナリ。本草啓蒙亦此ヲ受テ、ボトシギ、一名カヤグキトス。倶ニ非也。按、本朝食鑑曰、鷃。訓二加也久幾（カヤクキ）一ト、或訓二加也久久利（カヤククリ）一ト。狀似レ鶉而小ク蒼黑、背有二黑斑一、腹灰白、翅黑、脚細而高。人未レ食レ之ホトシギハ人常ニ食用トス 卽喚子鳥ニ、かやくゞり、大さゝいともいふ。大きさすゞめに少し大ぶり、毛色赤黑く、さゞいの色ににたり。さへづり有、鳥きやしやにてかごの内よしト云者是也。八雲御抄ニ、かわすゞめ、かやくきなどもろ／＼の鳥を爲レ使ト云ハ、卽日本書紀ニ以二川鴈（カリ）一爲二持帚者一、以レ雀爲二舂女一、以二鷦鷯（サザキ）一爲二哭者（ナキメ）一ト云者ニメ、鷦鷯（ササキ）ヲかやくきトセリ。カヤクヾリハ、大サ、イトモ云、卽鷦鷯（サザイ）、カヤクヾリ倶ニ小鳥ニメ、形色相似タル證トスベシ。ボトシギハ形大也。本朝食鑑曰、狀似レ鶉而長觜長脛、倶蒼黑、頭背翅蒼ノ而白黃赤斑、翎黑ク胸ニ有二黃赤黑斑一、腹白尾黃赤ニメ有二黑紋一。號二母登鴫（ボトシギ）一。ト觀エレバ、カヤグキ、ボトシギ爲二二物一可證也。雍州府志曰、鷸多レ品。其狀

圓而肥者味堪ニ調和一スルニ、是謂ニ保土志義ト、自ニ夏末一至ニ新秋一時ニ賞レ之。鷃ハ下註ニ見エタリ
也。按本草、鷃、集解、時珍曰、鷃、常晨鳴如レ雞、鶉與レ鷃兩物也。形狀相似、倶黑色。但無レ斑者爲レ鷃。即フナシウヅラ也

一名 **加夜久岐** 天文写本和名鈔○倭名類聚鈔曰、鷃小鳥曰、鷃和名加夜久木。

加夜久支 新撰字鏡曰、鴈・張交反、加也久支。鶉、加也久支。鷃、上字

加也久支 集註 拾遺抄曰「かやくきのす。何とかやくきのすがたはおもはへであやしく花の名こそわするれ

志止止 新撰字鏡 クサムラニ住ム小鳥ノ總名也

一名 **之止々** 倭名類聚鈔曰、漢語抄云、巫鳥 **芝莕止** 日本書紀○新撰字鏡曰、鷃。資昔反、志止止 **鵐** 塵添壒囊抄 **斯登登** 古事記曰、

知杼理麻斯登登 **志止止鳥** 古語拾遺曰、令片巫志止鳥肱巫 占ニ求メ其ノ由一ヲ **片巫** 見上。藻塩草曰、しぬゝ、しのゝ、しとゝ、是同事之。心もしとゝにと云歟。しとゝにぬるなど云て、しほれたる云云

集註 日本書紀卷第二十九曰、天武天皇白鳳九年三月丙子朔、乙酉、攝津國貢ニ白巫鳥一

今案 字典曰、鵐。廣韻、武夫切。集韻、微夫切、竝音無、鳥名、雀屬。日本書紀註ニ、巫鳥、此ヲ言ニ芝莕々ト。觀此則志止止ハ一鳥ヲ指テ云ル名ニ非ズ。山野叢ニカヾマリ住小鳥ヲ凡テシトヽト云。落くぼ物語ニ、またしとゞにかいかゞまりてゐたりトミエタリ。大和本草曰、

シトヾ淡赤色、又淡黑色アリ。腹青黃ナルアリ、頰白アリ、ミヤマホ、ジロアリ。是頭ニ有レ勝、カシラ、高ト云アリ。是モホ、白ノ類、有レ勝、頰赤アリ、ウス赤シ、赤シトヾアリ。凡シトヾハ類多シ、皆背短ク尾長シ、共ニ毛ノ內ニ黑ク長キ文アリ○蒿雀ハアヲジ也

頰白（ホヾ）　鷹百首

漢名　未詳

按、白鵊鳥トスル說アリ、不穩。事物異名錄ニ、白鵊鳥、探桑ノ時ニ有二小鳥一、灰色眼下正白ナリ、俗呼ニ白鵊鳥一ト。ホジロハ冬月ニ多シ、探桑ノ時ニ有ト云ニ異也

一名　から頰白

鷹詞百首曰、七月のすゑより八月ゑかゝり毛をするほじろねりしとゞともねりほじろともいふ之。尾羽をかため、毛をかへぬは、から頰白と是もいふなり。別の小鳥にはからといふ字そへて申ハ事なくハ。又からしとゞとも申さずハ。冬のほじろをばあかしとゞとは申ハ歟　付常に頰白をあかしとゞと云人あり。田人には云之。取分西國に申ときこえたり

あかしこゞ　見上

形狀

○喚子鳥曰、ほじろ、大きさすゞめに大ぶり、毛色すゞめにあかみあり、目の邊（ほとり）に黑白のすぢ引たり、よつてほじろといふ

鵐（シナヒ）　壒囊鈔　塵添

漢名　未詳

今名　シナヒ

字典曰、鶺、鶺鴒、玉篇、同ㇾ鶺セキレイ也

形状 ○喚子鳥曰、あかしなへ、大きさつむぎに同じ、つむぎの類なり。せの色黒赤し、はらうすかばいろにごまふあり、さゝづりあり、黒しなへ、大きさつむぎに同じ、惣身くろく、はら白し、くろきごまふ有、はしと足きにて、きれいなり、さゝづり、大おんにてよし

いすか 慈元抄

農田餘話曰、予早年、深秋多見林木間、有異禽如翠羽之類、斑絲可愛、其狀不一、有喙若剪股相交者

一名 鶍（イスカ） 䴏添壒囊鈔

集註 慈元抄曰、右此（コノ）条々愚昧の身として、いすかのはしの、かくなる事も、假にも筆に任せ紙をけがすべきにあらず

形状 ○喚子鳥曰、いすか、大きさうそ鳥に大きし 惣身（ミ）いろこくあかし、口ばしまがりてくひちがひたり、さへずり少し有、冬の内に來る、年によりてわたらず

ひは 枕草紙

漢名 未詳

一名 鶸（ヒワ） 䴏添壒囊抄○字典曰、鶸、而灼切、音弱、昆鳥

集註 枕草紙曰、鳥は云云ひは。山家集曰、聲せずと色こくなると思はまし柳のめはむひはのむら鳥

形状

〇喚子鳥曰、まひは、大きさすゞめにちいさく、靑く黃色にて、尾羽にひは色有て、きやしやにしほらしき鳥なり。囀りよし、冬多く來る、年によりてわたらぬ事あり

續日本後紀卷カ承和

毛受(モズ)　倭名類聚鈔

〔漢名〕鵙　本草　〔今名〕モズ

本草綱目曰、案曹植惡鳥論云、鵙声嗅嗅ナリ、故名レ之、感ニ陰氣ニ而動、殘害之鳥也

〔一名〕毛須　本草類編曰、百勞。和毛須。古事記曰、御陵在ニ毛受之耳原ニ也。又曰、御陵在ニ毛受野ニ也。日本書紀孝德曰、百舌鳥。萬葉集卷第十曰、秋野之、草花我末ニ、鳴ク舌百鳥、音聞濫香云云。山背國風土記曰、久世郡南限ニ百舌鳥原ニ。倭名鈔曰、鵙。漢語抄云、伯勞、毛受。一云鵙。日本紀私記云、百舌鳥。新撰字鏡曰、鶪、毛受。伯勞、毛受。延喜式卷第二十一曰、諸寮陵。百舌鳥耳原陵〇按ニ鵙ハ秋鳴聲喧シク不レ佳、春ニ至テ其囀聲百鳥ノ囀聲ヲナス、故ニ古ヨリ誤テ百舌トス。百舌ハ和産無之。本草綱目曰、百舌。釋名、反舌。按、易通云、能反復ス如ニ百鳥之音ニ、故名。百舌處々有レ之、居ニ樹孔窟穴中ニ、狀如ニ鴝鵒ニ而小身畧長、灰黑色微有ニ斑點ニ、喙亦尖黑。行則頭俯、好食ニ蚯蚓ニ。立春後則鳴囀不レ已、夏至後無レ聲。月令仲夏反舌無レ聲、即此ナリ〇太平記第三十五曰、一方ニ細河相摸守ヲ大將トシ、三千餘騎鵙目寺戶ヲ打過テ、七條口ヨリ寄ントス。同第二十九日、物集女ノ前西岡ノ東西ニ當テ馬煙夥シク立テ云云。和名鈔、國郡部曰、山城國乙訓郡、物集。毛豆女。續日本後紀曰、奉レ葬ニ後太上天皇於山城國乙訓郡物集女村ニ。塵添壒囊抄曰、伯勞鳥トハ何ゾ。打任テハモズト云鳥也。モズノクサグキミエズトモ云フ歌ニハ、伯勞鳥ト書テモズトヨマセタリ。鄭玄礼注ニ

七年五月戊子 モの上 万葉の 二字有り

ハ、鵙博労鳥也ト云ヘリ。百労鳥ト書ケル事モアリ。百舌鳥トモ、反舌鳥トモ云フ。禮記月令ニハ、五月鵙始鳴ト云ヘリ。草木シボムト云フ時節ニ随ヒヌ。打任テ此ノ鳥ハモズハ秋フカク成テ鳴者也。夏鳴事ハ无キニヤ云云。爰ニ云ヘル伯労ハモズ歟。袖中抄曰、但月令五月中、第六日、鵙始鳴、第十二日反舌無声、反舌はもずとまうす人あり。しかれば鵙はじめてなくと云て、ほどなくもずこゑなしといふべからず

もすまろ

俊頼髄脳抄曰、四五月にきて時鳥こそとはよびありくなり。もずまろはその比もよにはあれども、あきつかたするやうに、木のすへにいて、こゑだにもたかでをともせず、かきねをつたひありきて、ときぐ\のひそかにことぐ\しうとばかりをつぶやきなくなり

集註 日本書紀曰、仁徳天皇六十七年冬十月丁酉、始築陵。是日、有鹿忽起野中、走之入役民之中而仆死。時異其忽死、以探其痍、即百舌鳥自耳出之飛去。因視耳中悉咋割剝、故號其處曰百舌鳥耳原者其是之縁也。吾妻鏡巻第十八日、建永元年三月十二日癸巳、櫻井五郎信濃國住人殊鷹飼也。而今日於将軍御前飼鷹口傳故實等申之、頗及自讃。加之以鵙加鷹號可令取鳥云云可覧其證之由、直雖被仰、於當座難治、可爲後日之由辞申之。十三日甲午、相州依召参御所給、數剋及御雑談。将軍家仰云、有櫻井五郎者、以鵙可令取鳥之由申之、惜欲見其實、是似嬰兒之戯、無詮事歟云云。相州被申云、齋頼専此術云云、於末代者、希有事也。縦若爲虚誕者、彼不便、猶以内々可被尋仰者、此御詞未訖、櫻井五郎参入。著紺直垂、付餌袋於右腰、居鵙一羽於左手。相州自簾中見之、頗入興。此上者早可有御覧云云。仍被上御簾。及此時、大官令問注所入道、已上群参。櫻井候庭上、黄雀在草中、合鵙令取之

畢。上下感嘆甚。櫻井申云、小鳥者尋常事也。雖雉不可有相違云云。即被召御前簀子、賜御劒。相州傳之云云〇萬葉集巻第十曰、春之在者、伯勞鳥之草具吉、雖不所見、吾者見将遣、君之當婆。仙覺萬葉集註釋巻第十曰、もずのくさぐきと云事云〻いま哥の心をみるに、くぎといふは、くゞると云ことばなり。うぐひすの哥にも、このこだちくぎなかぬ日はなしなどいへるがごとし。しかるに、もずは秋冬などは、木草のすゑにゐてなけども、春に成ぬれば、草のしたにくゞりありきてみえねば、それによそへて、はるになりぬれば、もずの草のしたにくゞりて、みえぬがごとく、君がをしへしすみかも、かすみにかくれて、見えずとも、われはみやらんとよめると聞えたり。言塵集曰、百舌鳥、もずの草茎云〻百舌鳥ゐたる草を云。又曰、もずの草ぐきとは、一説には、百舌鳥のゐたりける草の枝之云〻跡なき事、又しるしのはかなき事などに鵙の草茎はよめり。八雲御抄曰、もずのくつては、わがみがはりに、かへるやうの物を、物にさしてをく也。是郭公くつてをせむると云り

形状

鵙詞百首曰、鵙尾とは百舌のごとく上尾ながく次第〻にたすけなら尾ならしば大石うち小石うちゐみちかく尾持のあるをもず尾とは云也。詞林采葉抄曰、百舌ハ秋冬ハ木草ノ末ニヰテ鳴ヲ、春夏ニナリヌレバ木ノ隠草ノ本ニクヾリアリク〇本朝食鑑曰、鵙訓毛須、似鳩而小頭、背至尾皂色帶赤似騮色、頷氣眼容類小鷂、眼邊黒、眼上白條引頬、觜黒而末曲、亦如鷂類、臆白、腹黄赤有黒横紋、翮青羽黒、脛掌黒赤爪利而硬、其聲高喧不好、故俗為悪聲、夏鳴冬止、在野則結草磔蟲、近世野人以野草茎上磔蛙蟲之類、稱鵙之草茎。大和本草曰、モズ頭大キニ、頭ノ色褐赤、背褐青色、腹ニ細紋アリ、觜少マガリ、尾ノ長サ三寸許。喚子鳥曰、もず大きさすゞめにばいせり。惣身かき色に

赤し、つら白く、くろきすぢ目の
よこに引たり、さへづりよし

連雀 倭名類聚鈔　［漢名］ 十二紅 鎮江府志　［今名］ レンジヤク

［集註］ 倭名鈔曰、連雀。唐雀也。時々群飛。今按雀有ニ黄雀青雀白雀大雀等之名ー。所出未詳。但今俗所ν稱者、雀之有ニ毛冠ー也。此鳥希ニ見、疑異國之鳥獸○喚子鳥曰、れんじやく、大きさひよ鳥にちいさし。惣身すゝ竹色、かしらにれんじやく有、尾にくれなゐのいろ有

レンジヤクノ
十二紅圖

嘴足黒色嘴本ヨリ眼上
一道黒色頂及喉紫褐色
背灰色腹淡灰色微紅ヲ
帯膺ノ羽紅色ホロ風切
共ニ黒シ尾灰
黒色末ニ紅色アリ
圓斑アリ

發　刊本教ニ作ル
傳　刊本銅鑄ニ作ル、傳ハ誤ナラン

尾長鳥 明月記　［漢名］ 山鵲 本草　［今名］ サンジヤク

［集註］ 明月記曰、建仁三年八月廿四日云云隨身四人云云葛ヲ黃メ返、狩衣、黃裏以レ黑書尾長鳥丸。寛喜二年二月廿三日、弁殿御裝束云云侍從宗教、雜色朽葉裏萌木尾長鳥、侍從發定、童櫻萌木、山吹袙傳尾長鳥。室町殿日記曰、御硯箱蓋の中に、柳に山鵲の鳥のとまり居るてい、又下より鵲鳥雄鳥を見あぐる躰　［形狀］ ○本草綱目曰、山鵲。處々山林ニ有レ之、狀如レ鵲而烏色有ニ文采一、赤嘴赤足、尾長メ不レ能ニ遠飛一。本草啓蒙曰、山鵲關東ヲナガ。深山高木ニ棲ミ、人聲ヲ聞ク寸ハ鳴ク、ソノ聲月日星ト云ガ如シ、故ニ三光鳥ト名ク。鵲ヨリ小ク、頭白ク、額ヨリ頰下喉ニ至リ黑毛アリ、腹白色、背淡紫色、翅淺藍色ナリ。長尾ハ端白シ、尾ノ裏皆黑白淡青相間ハル、觜尖リテ赤色、末微黃、脚赤色ニメ爪黃ナリ、目黃赤色ニメ淡紅郭ナリ。喚子鳥曰、くはんとう尾なが、大きさひよ鳥にてかしら黑く、せはねずみ色に尾羽淺黃なり。尾ながき事八九寸、囀(さへつり)惡し。多出る

古名錄禽部卷第六十六　終

古名錄禽部卷第六十七目錄

林禽類 下

可良須(カラス) 烏 ○烏ゑと 烏屎 ○小烏(コカラス) 慈烏 ○大烏 烏雅
○白烏 ○赤烏 ○三足烏 ○蒼烏

土比(トビ) 鳶 ○鳶糞

○白鵄

都久(ツク) 木兎

布久呂不(フクロフ) 梟

與多加(ヨタカ)

波刀(ハト) 鳩

八幡使鳥 斑鳩

通計十六種

古名錄禽部卷第六十七

紀藩　源　伴存撰

林禽類　下

漢名　烏　書叙指南　總名也

加良須（カラス）　倭名類聚鈔

一名　力良須　新撰字鏡曰、鴉。力良須。字典曰、鸒。說文卑居也。小而腹下白。即コクマルカラス也〇家中竹馬記曰、からす。萬葉集第十二曰、朝烏（アサカラス）早（ハヤクナ）勿鳴（ナキツ）吾（ワ）背子（セコ）之、旦開（アサケノ）之容儀（スカタ）、見（ミレ）者（ハ）悲（カナシ）毛

集註　續日本紀卷第四十曰、桓武天皇延曆九年秋七月辛巳云云　逮（ヲヨンテ）于他田朝御宇敏達天皇御世一、高麗國遣（ツカハシ）レ使上ルニ烏（カラス）羽之表一ヲ。群臣諸司莫（シ）二之ヲ能讀一。而辰爾進ミ取二其表一ヲ、能讀テ巧寫、詳ニ奏二表文一。天皇嘉二其篤學一ヲ、深加二賞歎一ヲ。詔曰、勤乎懿（ヨイ）哉、汝若シ不レ受レ學ヲ、誰カ能ク解レ讀、宜下從レ今始近中侍殿中上。既而又詔二東西諸史一曰、汝等雖（ヲシト）レ衆、不レ及二辰爾一、斯並國史家牒、詳ニ載二其事一ヲ矣。三代實錄卷第二十一曰、貞觀十四年春正月十四日乙酉、烏嚙ニ拔内竪傳點籌木一ヲ。同卷第二十二曰、同年十一月十四日庚辰、嚙ニ拔内竪傳點ノ籌木一ヲ。同二十三日、貞觀十五年春正月廿三日己丑、烏嚙ニ拔内竪傳點ノ籌木一ヲ。之餘畧　同卷第二十八曰、

嚙ノ上烏字脫カ畧カ

九は八の誤か

新ハ雜カ

貞觀十八年三月廿九日丁未、內藏寮御服倉院、松樹有烏巢ヘリ。烏一雙棲宿、每年生メリ五六子、今春修巢、將棲孔、有鵄一雙、奪烏巢棲止、生スヲ鶵、烏鵄相鬪、經旬不止、遂鵄戰勝矣。同卷第四十五曰、光孝天皇元慶八年三月廿六日丁亥、僧正法印大和尙位宗叡卒云云于時叡山主神假ヲ口於人告曰、汝之苦行、吾將擁護、遠行則雙烏相隨ト、暗夜ニハ則行火相照サン、以此ヲ可爲徵驗。厥ノ後宗叡到越前ノ國白山、雙烏飛隨、在於先後、夜中有火、自然照路、見者奇之。同卷第五十曰、仁和三年夏四月十三日丙辰、是日、夜分有烏、无萬數、飛鳴於大極殿上。延喜式卷第四曰、伊勢太神宮、神寶二十一種云云征箭一千四百九十隻、以烏羽作之。●新作橫刀二十柄云云柄以烏羽纏之。箭四百八十隻、以烏羽作之。箭一千隻、以烏羽作之。惣所須烏羽三千八十枚。扶桑略記廿三裡書曰、延喜十年九月七日、辰刻、烏咋拔時籖。延喜十五年八月十七日、右中辨藤良基、召外記仰云、昨日烏咋拔奏時杭。令陰陽寮占者。同廿四裡書曰、延喜廿二年十月十七日、烏咋拔時杭。延長七年十一月十七日、去十五日紛失時杭、自承明門內烏咋落云云。同廿五曰、承平四年春、弘徽殿前㭳樹烏作巢、爲令移去、勅座主尊意、令修不動法、從第三日、烏日日咋巢飛去北山。七日之內悉以咋去。承平五年九月、時司時申簡一枚、烏咋飛去。御占云、不吉。於常寧殿嘱座主尊意、七日之間令修不動法、至第五日、烏咋簡飛來、置本所而去。同裡書曰、承平四年二月五日、官正廳梁上烏巢。承平五年二月二日、弁官梁上烏成巢。明月記曰、寬喜二年正月十九日、春日徒暮、宿烏爭聲。榮花物語花山曰、からすもなきぬれば。歌林四季物語曰、おもひの外にからすのふたつそこらとびかふも心あてかはりおかしきに。高倉院升遐記曰、ものへまかりける道に、をさなきこをすてたるに、からすのあつまりて、かしらを

ければ、はゝのうつとやおもひけん、こりぬやせしと、なきけるを見て、烏鵲とりの、はゝにかはりたる心もうたてくて。陽祿門院三十三回忌の記曰、月落からす鳴、横雲しらみはなるゝほど云々。古今著聞集巻第一曰、周防國末滿の明神云々其後猶からんとしければ、烏數万とび來りて、神田の稻の穗をくひぬきて、みな神殿の上に置けり。同巻第十九曰、二品時賢卿の綾小路壬生の家に、鞠のかゝりに柳三本有けり。其内戌亥のすみの木に烏すをくひ侍けるを、いかゞおもひけん、其からす其すをはこびて、むかひの桃の木につくりてげり。人々あやしみあへりけるほどに、一兩月を經て、關白殿より柳をめされたりけり云々其柳のうち二本をほりて參らす。からすのすくひたりし木をむねと堀てげり。烏は此事をかねてさとりけるにこそ。俊頼髓腦抄曰、伊せの郡司なるものゝ家に、からすの巣をくひて、子をうみてあたゝめけるほどに、おとこからす人に打殺されにけり。めからす子をあたゝめてまちいたりけるに、まことに久しくみえざりければ、あたゝめたる子をすてゝ、おとこからすまうけて、いまめづらしくうちぐしてありければ、かのかいこかへらでくさりにけり。吾妻鏡巻第十五曰、建久六年十一月廿日、北條殿自二伊豆國一令二馳參一給。一昨日三嶋社第三御殿之上、烏頭切而死伏之由、被ㇾ申。同巻第二十四曰、承久元年二月十五日、未尅、二品御帳臺内、烏飛入。同巻第二十六曰、元仁元年三月十四日、若君御亭南廊御蔀上、烏作ㇾ巣、今日見出。同巻第三十日、嘉禎元年四月七日、申尅、御所寢殿棟上瓦傍、烏造ㇾ巣。奥義抄曰、三輪の明神云々社のおはせぬあやしとて、さとの物共あつまりてつくりたりければ、烏百千いで來りて、くひやぶりふみこぼちて、その木どもをば各くはへてゆきさりにけり。同國雜記曰、上野國杉本といふ山伏の所へうつりける。道にからす川といへる川に、雛からすなど

續群書本廿三日：廿四日：廿四日トアリ　もノ下今群本ツ一ナリも

あひまじはりて侍りけるを見て。海道記曰、日暮烏むらがりとんで、林頭に鷺わぐらをあらそへば

【形狀】仙覺萬葉集註釋卷第一曰、されば五節のかた(からす)め(なきイ)きの夜ああといふて雞をばからすなきの夜と云といへり。四季物語曰、廿四日の夕さりかた、同じく廿三日のさ夜かけて、あたごの峯の松明ともしたて、おどろ〳〵しうまいりつどふに、山時鳥も聲をわすれてや、をともたてず、たゞ烏のねぐらしめかねて、夜ひとよなきあかすなるべし。又曰、まだしのゝめもほがら〳〵ともせぬ窓に、からすの世をすてにたる衣のすさうさ云々。枕草紙曰、ときは木おほかる所に、からすのねて、夜中ばかりに、いねさはがしく、おちまろび、木づたひて、ねをびれたるこゑになきたるこそ、ひるの見めにはたがひておかしけれ。又曰、あさましきもの。かならずきなんとおもふ人をまちあかして、あかつきがたにたゞいさゝかわすれてねいりたるに、からすの いとちかくかうとなくに、うち見あげたれば、ひるになりたるいとあさまし。又曰、さはがしき物。板屋のうへにて、からすのときのさばくふ。又曰、にくきもの。からすのあつまりてとびちがひ鳴たる。日本書紀敏達曰、又高麗上表ス疏ヲ書ニ于烏(カラスノ)羽ニ、字隨ニ羽黑ニ既ニ無ニ識者一。辰爾乃蒸ニ羽於飯氣一、以レ帛印レ羽、悉寫ニ其字ヲ一。朝庭悉ニ異レ之。言塵集曰、烏はむくひを返す鳥之。烏は反哺の義をなす。親をやしなひかへすと云

○烏ゑこ　宇治拾遺物語　烏屎也

【集註】宇治拾遺物語曰、この少將のうへに烏のとびてとをりけるが、ゑとをしかけけるを云々このからすはしき神にこそありけれと思ふに。吾妻鏡卷第二十六曰、貞應二年四月廿八日、若君・出ニ御西御壺一。有ニ例手鞠會一。此間令レ懸ニ烏糞一給。有ニ驚御沙汰一。御成敗式目、追加曰、起請文失條々。鵄烏尿懸事。扶桑略記

廿四裡書曰、延長五年六月十二日卯刻、左大臣倚子幷案上烏遺矢令ㇾ占、凶也者

○小烏（コガラス） 太秦牛祭繪詞 【漢名】 慈烏 本草綱目 本草綱目曰、慈烏。小而純黑、小觜反哺者慈烏也

○大烏（オホガラス） 太秦牛祭繪詞 【漢名】 烏雅 爾類本草 【今名】 ハシブトガラス 本草綱目曰、烏鴉。大觜而性貪鷙、好ㇾ鳥、善避ㇾ繒繳ㇾ

【一名】 カラス 異本本草類編曰、烏雅、和名カラス。太秦牛祭繪詞曰、堂塔乃檜皮喫貫大烏小烏女 山烏 言塵集○吉野拾遺曰、夜もあけなんとするまで御酒まいりけるに、山がらすのこゑのきこえければ、陸資卿〽くはん幸と鳴やよしのゝ山がらすかしらもしろしおもしろのよや 於保乎曾杼里 萬葉集。袖中抄曰、あつまの國には、烏をばおほおそどりといふなり。ものくひきたなしと云也。さて烏のこかくとなくをば、ころくとなくと云也。ものくひきたなければ、おほきにきたなきとりとて、おほおそどりとは云也。おそはきたなしと云詞也 大膩鳥 塵添壒囊抄曰、大膩（オホヲソ）鳥（トリ）、又大黑鳥共書リ 大黑鳥 見上 おほよそこり 倭頼髓腦抄曰、おほよそどりとは、からすの名

【集註】 言塵集曰、森しる鴉は万葉に云り。森に住ゆへなり。善光寺記行曰、はるぐ〵と湖水をみわたせば、鳴鴉飛盡て夕陽西山にかくれり 【形狀】 萬葉集卷第十四曰、之

可良須等布（カラストフ）、於保乎曾杼里能（オホヲソトリノ）、麻左低爾毛（マサデニモ）、伎麻左奴伎美乎（キマサヌキミヲ）、許呂久等曾奈久（コロクトソナク）。仙覺萬葉集註釋卷第十四曰、おほをそどりとはからす也。まさてにもとは、まさしくもといふ也。ころくとぞなくとは、からすは、から

太ノ下刊本鴉字アリ畧セルカ

丈木、版本文ナレド誤ナルベシ古寫本丈ナリ

〳〵となき、又ころ〳〵とゝなくによそへてよめるなり。かうといふは、くろしといふ詞也。言塵集曰、烏はころ〳〵と啼といへり。華夷鳥獸續考曰、蓋シ鳥之呼ヿ如ニ人之歎聲ノ、故古者記ニ人之歎ヲ輙書ニ烏呼ト以記レ之

○本朝食鑑曰、一種大ニ於慈烏ニ而觜肥大者俗ニ稱ニ觜ハシノト太ト。大和本草曰、烏雅ハ、ハシブト、云。觜大ニメ性貪ボル、慈烏ヨリ大ナリ

【附錄】　東烏あつまがらす　今昔物語曰、ひとへに東烏あつがらすの鳴あひたるやうなり。東人ちつまふどの女子むすめかとおもへば聲氣はひ男と聞ゆ。いといぶかしとぞいひあへりけり。言塵集曰、烏、夕烏は伊勢太神宮に云り。みむろ烏は稻荷に云。さち烏とは、鹿狩鷹狩の時、幸に出來烏之。夏鴉子もち鳥月夜

烏云々

○白烏　延喜式祥瑞曰、白烏。太陽之精也○

異邦歷史ニモ多ク白烏ノヿヲ載ス

【集註】　續日本紀卷第三曰、慶雲元年秋七月丙戌、下總國獻ニ白烏ヲ。同卷第十三曰、聖武天皇天平十一年春正月甲午朔、越中國獻ニ白烏ヲ。同卷第十九曰、孝謙天皇天平勝寶六年春正月丁酉朔、上野國獻ニ白烏ヲ。天平勝寶七年六月癸卯、安藝國獻ニ白烏ヲ。同卷第廿九曰、稱德天皇神護景雲二年八月己酉、參河國ヨリ獻ニ白烏ヲ。九月辛巳、勅、今年七月八日、得ニ參河國碧海郡人長谷部文選所レノ獻白烏ヲ。同卷第三十曰、寶龜元年秋七月戊寅、常陸國那賀ノ郡人丈部龍麻呂、占部小足、獲ニ白烏ヲ。同卷第卅二曰、寶龜四年九月丁亥、常陸國獻ニ白烏ヲ。同卷第三十三曰、寶龜五年秋七月丁未、上總國ヨリ獻ニ白烏ヲ。三代實錄卷第四十一曰、元慶六年五月二日癸卯、大和國司言ス、管高市郡從五位下天川俣神社ノ樹、有レ烏巢ヘリ、產テ得ニ四雛ヲ、其一雛毛色純白。女郎花物語曰、後冷泉院の御時、あふみの國より白き烏かーすを奉りけるを、かくして人に見せたまわざりければ、女ばう達床しがりければ、をの〳〵歌よみて奉れ、扨よくよみたらむ人にみせむ、とおほせられければ

高大系本倘ニ作ル

冬十八木版本「冬七」ニ作ル冬ハ秋ノ誤ナルベク十ハ此方七ヲ誤レルナリ

つかふまつる。少將内侍〻たぐゐなく世におもしろき鳥なればゆかしからすと唯かおもはん。此歌をよみて奉りたれば、鳥を見せ侍りて、後にはこのうた金葉集に入られ侍るとなん。類聚國史曰、延曆十三年五月乙未、甲斐國獻二白烏一。弘仁二年五月戊午、信濃國獲二白烏一。大同四年五月癸酉、伊勢國獲二白烏一。百練抄卷第十曰、後鳥羽院文治二年七月十七日壬辰、大外記師尚令レ勘二申白烏例一。去比白烏出來云々。扶桑略記廿四裡書曰、延長三年三月廿七日、山城國獻二白烏一。外記勘二申先例一。同廿八日、長元七年五月九日、近江國獻二白烏一

○赤烏

延喜式祥瑞曰、赤烏 〔集註〕日本書紀卷第廿九曰、天武天皇白鳳六年十一月己未朔、筑紫太宰獻二赤烏一。則太宰府諸司人賜レ祿各差。且專捕二赤烏一者賜二爵五級一。乃當郡ノ々司等ニ加二增爵位一。因給二復ク郡内百姓一以ニ一年ニ之。同卷第三十曰、持統天皇六年五月辛未、相摸國司獻二赤烏鶵二雙一言、獲二於御浦郡一。冬十月甲午朔、乙未、賜二相摸國司布勢朝臣色布智等、御浦郡少領、闕二姓名一與二獲二赤烏一者鹿嶋臣櫲樟一位及祿一。服二御浦郡三年調役一。續日本紀卷第二曰、文武天皇二年秋七月乙亥、下野備前二國獻二赤烏一。同卷第二曰、慶雲三年九月癸卯、越前國獻二赤烏一。同卷第八曰、元正天皇養老五年春正月戊申朔、武藏上野二國ヨリ並獻二赤烏一。同卷第十三曰、聖武天皇天平十一年春正月甲午朔、出雲國獻二赤烏一。同卷第三十八曰、桓武天皇延曆三年六月辛亥、普光寺ノ僧勤韓獲タリ二赤烏一ヲ、授二大法師一ヲ幷施二稻一千束一

○三足烏

日本書紀 延喜式祥瑞曰、三足烏、日之精也 〔集註〕日本書紀孝德天皇曰、昔高麗云云又遣大唐使者持二死三足烏一來。扶桑略記第五曰、天武天皇十一年、太宰府貢二三足烏一

○蒼烏

延喜式祥瑞曰、蒼烏。烏而蒼色、江海不レ揚二洪波一東海輸之

釋名ニアラズ集解ニアリ

甘ハ天治本、其ニ作ルニヨルベシ

土比（トビ）倭名類聚鈔　【漢名】 **鳶** 詩經　【今名】 **トビ**

本草綱目曰、鴟。釋名、鳶似レ鷹而稍小、其尾如レ舵極善高翔

【一名】 **度比** 天文写本和名鈔〇新撰字鏡曰、鳶、蔦、同。与專反。鵄、止比。字典曰、鴟同鳶。延喜式卷第四曰、伊勢太神宮、神寶。鵄尾琴一面。鵄尾長一尺八寸。倭名鈔曰、鴟、音鴟。鳶、音鉛。和名土比。漢語抄云、久曾止比

久曾止比 見上注

と見 雅輔装束抄曰、と見（鵄）のを（尾）のうへ云云

止比 本草和名曰、鵄頭。和名止比乃加之良。本草類編曰、鴟頭。和止比乃加之良。家中竹馬記曰、とひ。源平盛衰記卅五曰、二十八指たる鴟（とび）の石打頭高に負

伊比登與 釋日本紀

伊比止與 新撰字鏡曰、鶀。甘之反、鵄。伊比止与〇字典曰、鶀。小雁也。集韻、鵄鶀也。正字通曰、鶀俗作鵬。鵬俗字鵄鵬鵂鶹。倭名鈔曰、鵂鶹。漢語抄云、以比止與〇倭名鈔ニ土比、以比止與ヲ二條トス誤也。日本書紀曰、皇極天皇三年三月、休留（イヒトヨ）休留茅鴟也産二子於豊浦大臣宅舍一。通雅曰、時珍以爲即鳶即茅鴟。本草ニ時珍鴟（トビ）ヲ註シテ、爾雅謂二之茅鴟一、鵂鶹即鴟鵂之小者也ト云コノハック也

【集註】

扶桑略記廿三裡書曰、延喜十三年八月十四日、公卿政後、着二侍從所一後、鵄一隻飛入取レ鼠、落二中納言清貫卿肩一。古今著聞集卷第十一曰、鳶鳥付たりとのゝしる程に云ゝ。同卷第十五曰、西行法師出家よりさきは、德大寺左大臣の家人にて侍りけり。多年修行の後、都へ歸りて、年比の主君にてはおはしますむつまじさに、後德大寺左大臣の御もとにたどり參て、まづ門外より內を見入ければ、寢殿のむねになはをはりけり。あや

しう思て、人に尋ければ、あれはとびすへじとてはられたるとこたへけるを聞て、とびのゐる何かくるしきとて、うらみて歸ぬ。つぎに實家の大納言はいづくにぞと尋聞けるに云々。十訓抄曰、後冷泉院御位の時、天狗あれて世中さはがしかりける比、西塔に住ける僧、白地に京に出て歸けるに、東北院の北の大路に、童部五六人ばかり集て、物を打領じけるを歩みよりて見れば、古鵄(トビ)のよにおそろしげなるをしばりからめて、ずはへにてうちけり。あないみじ、などかくはするぞといへば、殺して羽をとらんと云、云々。百練抄卷第五曰、天仁二年云云是去月(之)七月廿七日夜御殿天井上鵄入居故也。枕草紙曰、とびからすなどの上は、見いれきゝいれなどする人世になしかし。吾妻鏡卷第三十七曰、寛元四年二月十日、午尅、鳶入二常御所之內一。同卷第四十一曰、建長四年正月十一日、鶴岡若宮御殿與二拜殿一之間、樋之內鵄一羽死。此外大慈寺前河中、鵄廿一羽死也。同卷第四十九曰、文應元年十二月廿日、酉刻御所東侍陁羅尼衆休所鳶飛入。同卷第五十曰、弘長元年六月卅日、午尅鳶飛入、自二御所臺所東蔀間一、亘二中障子一、出二北遣戸一。竹取物語曰、いとをふかせつくりしやはとびからすの巢にみなくひもていにけり。沙石集卷第七曰、近比興福寺ノ東門院ニ有ケル兒、隱(イン)所ニ居タリケルニ、春日山ノ方ヨリ、鵄(トビ)一ツ來リテ、此兒ノ前ニネブリ居タリ。オソロシサニ、腰刀ヲヌキテ、ハタトキリテ、ヤガテ絕入シタリケルヲ、人見ツケテ、房ヘカキ入テイノリケリ。刀ニ血ツキ、鵄ノ毛チリタリケリ云云

形狀 宇治拾遺曰、大なるくそとびの羽おれたる、土におちてまどひふためくを、童アどもよりてうちころしてけり。鷹詞百首曰、とび尾とは、とびの尾のごとく尾のさき一文字にして、ことに中ひくにあるやうなるをもとびをといへり

集註 ○鳶糞 吾妻鏡

吾妻鏡卷第二十七曰、安貞二年二月七日、將軍家御衣、言蘘令レ懸給之間、有ニ御占一。御病事之由申レ之

○白鵄 日本書紀

集註 日本書紀卷第二十九曰、天武天皇白鳳四年正月壬戌、是日、近江國貢ニ白鵄一。又曰、白鳳十年八月壬午、伊勢國貢ニ白茅鵄(イヒトヨ)一

都久(ツク) 倭名類聚鈔　漢名 木兎 爾雅註　今名 ミヽツク

爾雅曰、萑老鵵。註、木兎也。似ニ鵄鵂一而小。兎頭有レ角、毛脚、夜飛。山堂肆考曰、貓頭鷹、此鳥八九月間自ニ海外ニ來、身尾俱短毛、羽褐色、眼圓睛黃頭酷似レ貓。頭兩旁有レ毛豎起ノ似ニ兩耳一、足爪似ヲリ鷹、故名ニ貓頭鷹一

一名 美々都久 倭名鈔曰、木兎。和名都久。或云、美々都久。平治物語曰、三男右兵衛佐賴朝ハ、柏ミヽヅク摺タル鞍置テ。釋日本紀曰、筑紫洲、此ノ地ノ形如ニ木兎之躰一、故名レ之也。木兎ハ鳥名、此ニ云ニ都久一。藻塩草曰、昔は筑紫を、みゝつくのしまと云也。彼十一ヶ國の形見ゝつくの姿之。壹岐對馬は耳也と云ゝ私云、彼兩國九州の耳のごとくはなき歟

美々豆久 天文寫本和名鈔。家中竹馬記曰、射まじき鳥の事、みゝづく。塵添壒囊鈔曰、鸛(ミヽツク)。字典曰、鸛。廣雅、鴟也

豆久 新撰字鏡曰、木兎、豆久。言塵集曰、つく鳥とは、みゝづくゝ。つくしと云事は、鎮西はみゝつくのゐたるに似たる姿なるゆへに、つく鳥の國と云ゝ

集註 日本書紀仁德曰、初天皇生日、木兎入ニ于產殿一、明旦譽田天皇喚ニ大臣武內宿祢ニ語之曰、是何瑞也。大臣對言、吉祥也。復當ニ昨日臣妻產時一、

底本作「崎」

鵄鵂 刊本
末別

鷦鷯入ニ于産屋一、是亦異焉。爰天皇曰、今朕之子与ニ大臣之子一同日共産、兼有レ瑞、是天之表焉。以爲取ニ其鳥名一、各相易名レ子、爲ニ後葉之契一也。則取ニ鷦鷯名一、以名ニ太子一、曰ニ大鷦鷯皇子一、取ニ木菟名一號ニ大臣子一、曰ニ木菟宿祢一。三代實錄卷第五曰、清和天皇貞觀三年九月廿六日丁酉云云平群木菟宿祢、即是文雄之祖也。木菟宿祢之後賜ニ味酒臣姓一。矢開之記曰、射まじき鳥の事、鷲鳥鵃鳶梟木菟鵄鶺鴒庭鳥云々

【形狀】 ○本朝食鑑曰、木兎狀如ニ鴟鵂一而小黄黑斑色、頭目如レ兎、兩頬作ニ白圈一、而中ニ有レ眼、頂有ニ毛角一、兩耳尖長、背小黑、掌黄翅似レ鴟而短、晝伏夜出、不レ能ニ遠飛一

布久呂不（フクロフ） 倭名類聚鈔

【漢名】 梟 詩經

【今名】 フルツク

毛詩鳥獸草木考曰、梟惡聲之鳥、一名土梟

【一名】 不久呂不 新撰字鏡曰、鵂。禍拔反、不久呂不。出雲國風土記曰、鴟鵂作横到、惡鳥也○字典曰、鵂。鵶梟也。セキレイ也

佐介 倭名鈔曰、梟、和名不久呂不。辨色立成云、佐介

佐計 天文写本和名鈔

ふくろう 家中竹馬記

かほ鳥 言塵集曰、かほ鳥は一說に、ふくろふ之と云

ふくろ 藻塩草曰、から聲。かれたるこゑ之。鳥にもいへり。ふくろ也

【集註】 帝王編年記曰、四條院仁治元年十月廿日、今夜梟入居内裏、清涼殿女官見付之、行遍僧正弟子自壇所參上捕之。明月記曰、文暦二年二月廿一日、卯刻、南隣竹中鵄高聲鳴十余聲、忌避無其術、詠鵩鳥賦、不奇驚耳、春天拜鳥發音、竹村之間尤末別歟○周禮曰、庭氏掌射國中之妖鳥、注妖鳥梟鵄惡聲之鳥也 源氏物語夕顔曰、夜中もす

刊本來鵰ニ作ル

ぎにけんかし、風のやゝあらく\/\しく吹たるは、まして松のひゞき、こぶから聞えて、けしきある鳥のからごゑになきたるも、ふくろふはこれにやとおぼゆ。同よもぎふ曰、うとましうけどをき木だちに、ふくろふのこゑをあさ夕にみゝならしつゝ、人げにこそさやうの物もせかれてかげかくしけれ。同浮舟曰、ふくろふのなかんよりも、いと物おそろし。四季物語曰、ふくろふのこゑもすさまじかりける松かへでの枝も、雪にあつこえ。方丈記曰、おそろしき山ならねど、ふくろふの聲をあはれむにつけても。太平記卷第十三曰、庭ニハ紅葉散敷テ、風ノ氣色モ冷キニ、古キ梢ノ梟ノ聲ケウトゲニ啼タル晩ノ物サビシサ。撰集抄曰、蘭荊は野干ふしどをしめ、松桂にはふくろうなける所に、むしの音を友とし、鹿をしたしみ。つれ\/\曰、狐ふくろうやうの物も、人げにせかれねば所えがほにいりすみ。吉野詣記曰、二十九日ふくろうのこゑ近くきこえけるは、いまだ夜もふかきにやと思ひつゝおき出ければ、ゝやあけゆく明ぼのゝ色も外には似ず物あざやかにして

形狀　〇本朝食鑑曰、梟訓布久呂布　狀似二母雞一頭背有二黃黑斑文一、頭圓觜短尖レリ、兩頰有二黃白圈一如二相對一、其中有レ眼如二猫目一、尾如レ鴟而短、脚掌青白、晝午不レ見レ物、夜則飛行食二鳥鼠一

與多加（ヨタカ）　倭名類聚鈔

今名　ヨタカ

一名　與多加　天文写本和名抄〇倭名鈔曰。恠鴟。漢語抄云、與多加〇爾雅曰、怪鴟。註卽鴟鵂也

形狀　〇本朝食鑑曰、夜鷹。夜ル驚二宿禽一而捕ヘテ食レ之、山下林藪有

レ之、蟄伏シテ不レ出、其態類ニ木
兎ニ、其形類ス鴝鵒ニ、或似レ鴨耳

與多加圖（ヨタカノ）
形梟ニ似タリ身短ク
頭大ニシテ眼大也眼中
黄色嘴曲リ黒色足踏分
ニシテ灰白色毛アリ背淡黒色翅ニ
黒白斑點アリ腹白色ニシテ淡黒斑アリ
尾淡黒色ニシテ黒斑アリ末白四五月ニ至リテ
夜中ニ鳴

三年ノ七月九日ナリ

波刀 日本書紀　漢名　鳩 詩經　今名　キジバト

一名　波斗　古事記曰、波佐能夜麻能、波斗能、斯多那岐尓那久。日本書紀履中天皇曰、太子獻曰、播舍能夜摩能、波刀能、資多儺企逎奈句。致富全書曰、鳩鳴有還聲者謂之呼婦主晴、無還聲者謂之ヲ逐婦ハ主ル雨ヲ。新猿樂記曰、傴僂鳩胸。塵添壒囊鈔曰、鳩杖事。老人之杖ヲ鳩之杖ト云フハ何レノ謂ゾ。老人ノ杖ノ頭ニ、鳩ノ不噎鳥ノ形ヲ刻ム事有、仍テ尓云也。其心ハ不噎セ義ヲ取ト云云鳩ハ不噎鳥ナル故也。礼記曰、五十ニシテ杖於家、六十杖於鄉、七十杖於國、八十杖於朝ト云云。鳩杖ハ則老人ノ異名トス。但シ別ノ七十ノ異名ニ出セリ。廣事類賦曰、刻玉杖以鳩形。後漢書、仲秋之月、縣道皆案戶比民、年始七十者授之以玉杖、餔之糜粥、八十九十禮有加、賜玉杖長尺、端以鳩鳥為飾。鳩者不噎之鳥也。欲老人不噎。（海南日抄曰、鳩。俗ニ傳フ東坡見介甫字說、因テ謂フ鳩ニ有九鳥、本テ鳲鳩詩以為ス、故作此ノ調笑、不知王質詩總聞實以此說解經、質引テ禽經ヲ云ク、一鳥曰隹、二鳥曰雔、三鳥曰朋、四鳥曰乘、五鳥曰雁、六鳥曰鶂、七鳥曰毗、八鳥曰鸞、九鳥曰鳩、十鳥曰鶉、今鳩七子併テ夫婦ニ為九、故ニ其ノ字從九、則比ノ說不出東坡矣

集註　延喜式卷第三十九曰、內膳司。諸國貢進御贄。旬料、大和國吉野御厨所進鳩ハ、從九月至明年四月。吾妻鏡卷第十七曰、建仁二年八月十八日、午尅、鶴岡若宮西廻廊鳩飛來、數尅不避立、仍供僧等怪之。及西尅、件鳩指西方飛去。建仁三年、同宮鶴岡寺閼伽棚下、鳩一羽頭切而死。此事無先規之由、供僧等驚申之。同卷第二十四曰、承久元年正月廿七日、將軍家御參八幡宮云云次御出

南門之時靈鳩頻囀。出雲國風土記曰、意宇郡禽獸有鳩。嶋根郡禽獸有鳩。秋鹿郡禽獸有鳩。楯縫郡禽獸有鳩。餘畧之。和泉國風土記曰、日根郡禽獸有鳩　駿河國風土記曰、烏渡郡西島雉鳩。安弁郡云ト牧山出雉鳩。廬河郡柏原貢鳩。江家次第曰、二孟旬云云內竪次第稱ニ物名ー。冬鳩、氷魚、鯉。近代鳩ノ替ニ以レ鶉替レ之。帝王編年記曰、順德院承久元年己卯正月廿五日、右馬頭賴茂朝臣參籠于鶴岡八幡拜殿奉法施之際、一眠中鳩一羽居典廐之前小童一人在其傍、尒時童取杖殺彼鳩、次打ニ典廐之狩衣ノ袖ー、成奇異思之處、今朝廟庭有死鳩、見人恠之。百練抄第四曰、寬弘元年三月廿七日、諸卿定ニ申宇佐宮訴事ー、僉議之間、陣座南方有ニ雷電ー、公卿怖畏。右大臣并時光俊賢等退出之間、於ニ櫛筒少道ー、鳩飛ニ渡上達部肩上ー、於ニ宇佐神人宿所間ー失。疑是大菩薩御變現歟云云。扶桑略記廿三裡書曰、延喜元年五月廿四日、紫宸殿梁上、鳩居爲レ怪、有ニ御占事ー。同廿四裡書曰、延長八年八月十二日、弁官西戸梁上鳩集。同廿九日、康平四年三月三日、宇佐宮御廐內馬喰ニ殺鳩ー。家中竹馬記曰、射まじき鳥の事、鳩とびからす云と白鷺鷹の事は云に不レ及

形狀　○本朝食鑑曰、雉鳩者毛羽有レ斑似レ雉故名

○白鳩　延喜式祥瑞

八幡使鳥　元亨釋書

漢名　斑鳩　本草

今名　シユズカケバト

一名　伊(イ)柯(カ)屢(ル)餓(ガ)　日本書紀曰、斑鳩。此云伊柯屢餓。按ニ斑鳩

本草綱目、斑鳩。集解曰、今鳩小而灰色、及大而斑如ニ梨花點ー者並ニ不ニ善鳴ー、惟頂下ノ斑如ニ眞珠ー者聲大ノ能ク鳴

闘背倶ニイカルガト同名異物也

まだら鳩

言塵集曰、まだら鳩とは、いかるが也。塵添壒嚢抄曰、打任斑鳩云ナ、イカルガトヨム。元亨釋書第五曰、國俗呼レ鳩爲二八幡使鳥一。八幡愚童訓曰、鳩是古神變身也

【集注】 五鳳集曰、新ニ建二八幡宮一、紫鴿來リ集ル丹鳳城。精藍分チ地席新ニ成ル

【形狀】 〇本朝食鑑曰、八幡鳩。數珠懸カケ俗稱頸ニ珠懸者ハ、頂下ニ有レ斑如ニ珠之連一ナ。或云、似ヨリ淫居頸懸ニ念珠一、故名ク、小ニシテ於壌ツチクレ鳩ニ一リ遍身灰白頂下有ニ黒斑一如ニ連珠一、其聲高亮如シ喚レ老

古名録禽部卷第六十七　終

古名錄禽部卷第六十八目錄

野禽類

通計八種

古名録禽部巻第六十八

紀藩　源　伴存撰

野禽類

三代実録巻第四十九曰、仁和二年二月十六日丙寅、勅シテ遣ニ越前ノ権介従五位下藤原朝臣恒泉ヲ於遠江ノ國、雅楽頭従五位下在原朝臣棟梁ヲ於備中ノ國ニ、並賫ニ鷹鷂ヲ、拂ニ取野鳥ヲ。十二月十四日戊午、辰一剋至ニ野口ニ、於ニ鷹鷂ヲ拂ニ擊野禽ヲ。

岐々須　天文写本　和名鈔　【漢名】　**雉**　本草　【今名】　**キジ**　【一名】　**眞鳥**　鷹詞百首曰、巣臥とは、春のすゑつかたより眞鳥をはなれかねて、立かぬるを巣臥とはいへり。まとりとは雉のことなり○按ニ新撰雜要抄曰、所々垸飯。瀧口本所、鯉一、雉一枝。武者所、鯉一隻、雉一枝。院北面、鯉一口、雉一枝。關白殿藏人所、鯉一隻、鳥一枝。三光院殿禮節曰、鷹鳥之事。鳥トハ、雉之事禁野、片野名物就ニ此ノ義ニ故賞翫多候。切之日在之事候。厨事類記曰、雉ハ生鳥トモイフ、鳥ノ右ノヒタルヲツクリカサネテモルベシ。干物、削物。干鳥、雉ヲ塩ツケ

正字通曰、雉雞屬家ニ畜ヲ曰レ雞ト野ヲ曰レ雉ト。本草綱目曰、雉、形大如レ鷄而斑色繡翼、雄者文采而尾長、雌者文暗而尾短、其性好闘

一ノ下　雙
異本　アリ　雙
侯　同　雙

寫本下同じ喉
口群本
喉隻寫本
事ノ下
群本候
アリ物
ノ下同

ズシテ、ホシテ削天供

木々須　倭名類聚鈔曰、鵗。音智、上聲之重、和名木々須、一云木之。野雞也

木之　見上

岐之　天文写本和名鈔。本草和名曰、雉、和名岐之

支之　本草類編曰、雉。和支之。又云、保呂之

保呂々　一本本草類編。堀河院次郎百首曰ヘあふことのかたの〻きゞすつまごひにむべほろ〳〵とたちゐ鳴らんヘきゞすなくのべをかすみはつ〻めどもほろ〻ともなく聲の聞ゆる

支子　類聚雜要曰、母屋大饗、饗膳、鯉支子盛

きす　義經記曰、燒野のきすのかしらをかくして、尾をいだしたるやうなるべし

枳蟻矢　日本書紀繼體天皇歌曰、奴都等利、枳蟻矢播等余武云云

枳枳始　日本書紀皇極天皇歌曰、阿婆努能枳枳始、騰余謀作儒。釋日本紀曰、雉也

吉藝志　萬葉集卷第十四曰、武藏野乃、乎具奇我吉藝志、多知和可禮云云。同卷第十三曰、野鳥、雉動云云。同卷第十九曰、聞ニ曉鳴雉ニ歌二首。椙野爾、左乎騰流雉、灼然、啼爾之毛將哭、己母利豆麻可母。足引之、八峯之雉、鳴響ム、朝開之霞、見者可奈之母。釋日本紀曰、私記云、師說、雉好ク鳴ニ於欲レ曉之時ニ也。袖中抄曰、きゞすは、きじの異名と云り。きじは詞を略する也○物理小識曰、野雞屬レ陰、先鳴而後鼓レ翼○萬葉集卷第十曰、春雉鳴、高圓邊丹、櫻花云云

岐藝斯　古事記曰、佐怒都登理、岐藝斯波登與牟

雉子　和泉國風土記曰、日根郡鳥取鄕貢鶴雉雉子、小村有ニ鷹飼村ニ、往昔仁德天皇與ニ酒君ニ成ニ放鷹之遊ヲ、初テ取ニ雉子ニ之所也。駿河國風土記曰、伊穂原郡斎鶏ノ鴫雉子

しろおとり　伊勢守貞陸記曰、きじ、しろおとり

金鳥　言塵集曰、春の野にさほどる雉とも、金鳥と書之、雉子とよめり。一說には、春

の女鳥を云と云々只雌鳥の女鳥なれば雌女鳥と云なるべし。きゞす啼と讀たれば、女鳥はなかめものゝ。やたけの雉子とは、春は妻戀する故に、やたけき間、いやたけき雉子と云々。此說可用や。みわの雉子とは、八嶺の雉と云り。やたけ、やみね各別なり○玉造曰、鳳䳯(ミノワク)雉ノ䨪(ツチクヤ)。

集註

加賀國風土記曰、加賀郡貢雉。駿河國風土記曰、安倍郡獻雉作貢云云野鷄等。本草類編曰、雉肉九月已後十月已前食之。延喜式卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物、雉腊。參河國、中男作物、雉腊。尾張國、中男作物、雉腊。信濃國、中男作物、雉腊。同卷第三十一曰、宮內省。諸國例貢御贄、尾張、雉腊。同卷第三十九曰、內膳司。節料、參河國正月三節各三擔。右參河國進レ雉云云。年料、尾張國、雉腊納ニ十八籠一、籠別六翼。越中國、雉腊一輿五籠。太宰府、雉腊二輿六十籠、別三翼。同卷第四十九曰、兵庫寮。箭四具、其料云云雉羽四百二十隻、二十隻損分、受ニ進物所一。俚書曰、豹ハ死メ留レ皮、雉ハ死メ留レ羽、君子所ニ以貴ニ于文章一也。日本書紀仁德天皇曰、是日幸ニ百舌野一而遊獵、時雌雉多ク起ッ、乃放レ鷹令レ捕、忽獲ニ數十雉一。續日本紀卷第十曰、聖武天皇、神龜四年五月辛卯、從ニ播波池一、飄風忽ニ來テ、吹ニ折南苑樹二株一、卽化メ成レ雉。同卷第十四曰、天平十四年十一月壬子、大隅ノ國司言ス、從ニ今月廿三日未ノ時一、至マテ二十八日ニ一、空中有レ聲。如ニ大鼓一、野雉相ヒ驚キ、地大ニ震動セリ。續日本後紀卷第一曰、仁明天皇、天長十年夏四月壬午、出雲國司率ニメ出雲臣豐持等ヲ奏ニシ神壽ヲ、幷獻ニ白馬一疋、生雉一翼、高机四前、倉代物五十荷一。同卷第十七曰、承和十四年三月戊申、雄雉自ニ東方ニ飛ヒ來テ、集ニ主殿ノ火爐ノ前ニ、從リ渠ノ西ニ走テ入ニ閤門ノ中ニ。右近衞六人接シ得テ觀ルニ之、體中無レ傷ナフ、羽毛全ク整レリ矣。己酉、放ッ件雉ヲ於北野ニ、高ク飛ヒ遠ク去ルト。文德實錄卷第二曰、嘉祥三年八月辛未、地震。從ニ西北一來、

十六年五月

へ群本ナシ

雞雛皆驚。三代實錄卷第四十二曰、陽成天皇元慶六年九月十八日丁亥、有雄雛集清涼殿上、須臾飛入東宮、勅遣使求之、遂無所獲。同卷第五十曰、光孝天皇仁和三年二月九日癸丑、信濃國例貢云云雉腊云云。日本紀略曰、延曆十三年春正月癸未、有雉集主鷹司垣上。延曆十六年戊戌、有雉、集禁中正殿上。冬十月庚辰、雉止兵衞陣、入禁中閤房被獲。大和國風土記曰、宇陀郡貢雉。參河國風土記曰、寶飯郡貢雉。駿河國風土記曰、烏渡郡直壁亦有遊雉之園。江家次第曰、二孟旬、次侍從所別當并若少納言率内竪三人一人、入自日華門列立版東、一人稱物名詞云、侍從厨之進雉。台記別記曰、康治元大嘗會雉百羽。本朝無題詩曰、雉逢鷹、法性寺入道殿下、逢鷹鵕思暗應覺云云。源氏物語御幸曰、藏人の左衞門のぜうを御使にて、きじ一枝奉らせ給ふ。おほせごとにはなにとかや、さやうのおりのことまねぶにわづらはしくなん〽雪ふかきをしほの山にたつきじのふるきあとをもけふはたづねよ。花鳥餘情曰、承平三四六、若狹國所獻之雉放於大内山。厨事類記曰、禁野所進雉一種、自十月至十二月。類聚雜要抄曰、御齒固用途料、和泉御厨、雉水鳥母屋大饗、饗膳鵕立盛。内大臣殿廂大饗、生物八種、雉、別足引垂引渡盛之。續古事談曰、殿上ノ一種物アリケリ云云。コト人々ハ多ハ雉ヲイダセリ。主殿司トリテ、タテジトミニヨセタツ。扶桑略記廿三曰、延喜七年七月八日、雌雉集桂芳房北墻上。明月記曰、嘉祿三年正月廿二日、方違之次、於片野狩獵之興、幕府公雅卿與實僧都供奉馳走云云、雉兎隨興之興云云。元仁二年二月八日云云一日比一上亭射少弓、負態方鵕一羽、酒一瓶子、可進申示顯次、顯次此事不思得之間、剪紅梅大枝、雄雉雌雉各十羽付之如少鳥、大瓶入酒送之、納受饗應云云。宣胤卿記曰、長享三年五月一日、柳一荷、雉一番遣、泰淸卿宿所新造之故之。曾我物語曰、その

ヘかニ作ル本アルニヨルペシ

外きじ山どり云々。大內問答曰、御成中沙汰之時かならす主殿にて式三獻まいる、御座敷兼て云々又御右の方にをき鳥とて、きじの鳥一つかひ臺にすへて候。歌林四季物語曰、此月の御祭礼のために、やまあと春日ちかき御野きじとらしめ、この御供にそなへたてまつらるゝ御事なり。言塵集曰、昔鷹をとる雉の有けるをと云々。室町殿日記曰、肴物之事、雉子三番云々右差登せ申候、御請取可成候。撰集抄曰、野原にあさる雉(きじ)となりては、鷹のために身ほろぼす時も侍りけん。つれ〳〵曰、鳥には雉左右なき物なり

形狀

大鏡曰、この殿には後夜(ごや)にめすばうすの御(お)さかなには、たゞ今ころしたるきじをぞまいらせをけるに、もてまいりあふべきならねば、よひよりぞまうけてをかれける。なりとをのぬしの、まだ六位にてはじめてまいらるゝ夜、御くつびつのもとにいられたりければ、ひつのうちに物のほと〳〵としけるがあやしさに、くらきまぎれなれば、やをらほそめにあけて見給ふければ、きじのおどりはかゞまりをる物か。人のいふ事はまことなりけりとあさましくて、人のねにけるおりにやをらとりいでつ。ふところにさし入て、冷泉院の山にはなちたりしかば、ほろ〳〵ととびてこそいにしへ。ことしえたりし心ちはいみじかりしものかな。それにぞ我はかう人なりけりとはおぼえしか、となんかたられける。殺生はとのばらのみなせさせ給ふ事なれど、これはむげのむやく事なり。又曰、やう〳〵日は山の端(は)に入がたにひかりのいみじうさして、山の紅葉にしきをはりたる樣なるに、鷹の色はいと白くて、雉はこんじやうのやうにて、はね打ひろげてゐて候し程は云々。宇治拾遺曰、三河の國に風祭といふ事をしけるに、いけにゑといふ事に、猪をいけながらおろしけるを見て、この國のきなんとおもふ心付てけり。雉子(きじ)を生ながらとらへて、ひとのいできたりけ

ろを、いざこの雉子いけながらつくりてくわん、いますこしあぢわひやよき、と心みんといひければ、いかでか心にいらんと思たる良等の物もおぼえぬが、いみじく侍なん、いかでかあぢはひまさらぬやうはあらん、などはやしいひけり。すこしもの〻心しりたるものは、あさましきことをもいふなど思けり。かくて前にていけながら毛をむしらせければ、しばしはふたく〳〵とするをさへて、たゞむしりにむしりければ、鳥の目より血のなみだをたれて、目をしばた〻きて、これかれに見あはせけるをみて、えたへずして立てのくものもありけり。これがかく鳴こと〻興じわらひて、いとゞなさけなげにむしるものもあり。むしりはて〻、おろさせければ刀にしたがひて、血のつぶ〳〵といできけるを、のごひ〳〵おろしければ、あさましくたへがたげなるこゑをいだして、死はてければ、おろしはて〻いりやきなどして心みよとて、人〻に見させければ、ことの外に侍けり。死たるおろして、いりやきしたるには、これはまさりたり云〻。塵添壒囊抄曰、雷鳴ト地震トニハ雉鳴事アリ、其心イカン。洪範五行云、正月雷微動而雉雊ス。雷ハ諸侯之象也。雉亦人君之類也ト云ヘリ。是ニテ思ニハ、同類ヲ感メ鳴心也。地震ニハ必ス鳴是ハ恐驚也。伯耆國風土記云、震動之時、鷄雉悚懼シ、則鳴踰ル嶺谷ニ、即樹レ羽踏踊スル也ト云ヘリ。庭鳥雉山鳥、此等ハ皆陽ノ氣ヲ受ル鳥也。地震ハ陰陽ヲ主サトル時、必ズアルコト也。サレバ陽ノ精ナルニヨリテ、イタミ驚ク也。續詞花集曰、かりしけるに、とりのたてるあとに、かひこの有けるをみて云〻ほろ〳〵と鳴てやきじの立つらんかひこも我もかへるまじとて〇雑記曰雉ノ事、雉の名所事、當流献立口傳書ニ云四条流の書之雉子のくぼねといふは首骨也。山かけともいふ。雉肉とは鳥の胸の肉之。ひつたれとは、鳥の羽ふしに付たる肉也。大はますとは、胸の事骨之。雪まろ

かぜとは肩骨の際之。
右雉子の名所也云々

附錄 **燒野雉** 太平記第十三曰、燒野の雉の殘る叢を命にて、雛を育らする風情にて、泣聲をだに人に聞せじ、と口を押へ乳を含て、同枕の忍びねに泣明し泣暮して。同第二十一曰、燒はてゝ後、一堆の灰を拂のけて見れば、女房は燒野の雉の雛を翅にかくして燒死たる如にて○本朝食鑑曰、春月山人燒ク野、火既ニ欲レ至ニ雉之伏レ卵處ニ、時雌先ツ張レ翅而仰ニ臥于地ニ、雄鳴ニ鼓卵ニ來置ニ雛之翅內ニ、而後雄鳴ニテ雛之背ニ急ニ引去以テ避レ火○丹鉛總錄曰、晏子春秋殺科雉者不出三月。呂氏春秋亦載此事、科雉作隋兒、按科雉謂雉方乳也。隋兒亦謂兒、初生隨牝母者、注乃謂二兒相隨何其謬邪

○赤雉

集註 扶桑略記第五曰、天武天皇十五年丙戌、大倭國進ニ赤雉ニ、仍七月、改爲ニ朱鳥元年ニ

○白雉

柳河東集曰、白雉因レ漢。注漢平帝元始元年春正月越裳氏重譯獻白雉一黑雉二○延喜式祥瑞曰、白雉。保宗之精也。扶桑略記曰、百濟國貢ニ白雉一隻ニ、是鳳類也

集註 日本書紀曰、推古天皇七年秋九月癸亥朔、百濟貢ニ云云白雉一侯ニ。孝德天皇白雉元年二月庚午朔、戊寅、穴戶國司草壁連醜經獻ニ白雉ニ曰、國造首之同族贄。正月九日於ニ麻山ニ獲焉。於レ是問。天武天皇白鳳二年三月丙戌朔、壬寅、備後國司、獲ニ白雉於龜石郡ニ而貢。續日本紀卷第六曰、元明天皇和銅六年十一月丙子、但馬國獻ニ白雉ニ。十二月乙巳、丹波國獻ニ白雉ニ。同卷第十三曰、聖武天皇天平十二年春正月戊子朔、飛彈國獻ニ白雉ニ。同卷第廿九曰、稱德天皇神護景雲二年六月癸巳、武藏國ヨ獻ニ白雉ニ、勅云云於レ是、武藏ノ國橘樹ノ郡人飛鳥部吉志五百國、於ニ同國久良ノ郡ニ、獲ニ白雉ニ獻焉。同卅曰、寶龜元年秋七月戊寅、筑前國嘉麻郡人財部宇代獲ニ白雉ニ、賜ニ爵人コトニ二級、稻五百束ヲ。同卷第卅一曰、寶龜二年三月戊午朔、

太宰府獻白雉。乙巳、壹伎嶋ヨリ獻白雉。同卷第卅二日、寶龜三年六月癸丑、參河國獻白雉。同卷第三十三日、寶龜六年夏四月丁丑、山背國獻白雉。同卷第三十四日、寶龜八年十一月丙寅、長門國ヨリ獻白雉。同卷第三十九日、桓武天皇延曆六年夏四月庚午、山背國獻白雉。文德實錄卷第十日、天安二年秋七月庚申朔、甲子、是日、武藏國上白雉雉一ヲ。三代實錄卷第二十八日、淸和天皇貞觀十八年春正月廿七日乙巳、越中ノ國獲白雉而獻。同卷第三十日、陽成天皇元慶元年春正月三日乙亥、是日、但馬ノ國獻白雉一ヲ。日本記略日、寬和元年五月廿一日、白雉令置藏人所之間、一足折了ヌ。被放北山靈感谷ニ。類聚國史日、延曆十一年三月乙亥、美作國獻白雉、延曆十五年春正月甲午朔、長門國獻白雉。弘仁五年二月己卯朔、陸奥國獲白雉。扶桑略記第五日、天智天皇七年、自常陸國進白雉

○四足雉　集註

扶桑略記廿五裡書日、承平三年四月一日、若狹國貢進雉雛四足卵等

○雉白首　延喜式祥瑞

比ヒ波バ利リ　本草和名

漢名　告天子　山堂肆考　今名　ヒバリ　一名　からひはり　鷹詞百首曰、ねり

山堂肆考曰、告天子。此ノ鳥褐色似鶉而小、生海上叢草中、黎明時、遇天晴霽、則且飛且鳴、直上雲端、其聲連綿不已。一云叫天子

ひばりとこはなれゆく半はにをひ羽のかろくあがるすごのり。ねり雲雀毛(け)をするひはりの事なり。六月土用のうちより七月盆の前後寂中なる者之。ねりひはりこのりの物なり。雲雀毛をかたのごとくして後に

尾を一度におとすもの之。それをばじんどう雲雀といふなり。じんどうひばり、すこし達者なれどもこれも鶏児鶻にとらるゝなり。又尾羽そろひ四季にかぎらずとぶひばりは、からひばりといふ之

じんどう雲雀 見上

ねりひはり 言塵集曰、ねり雲雀は七月十四日十五日物之。雲雀小鷹は夏之。春には不可詠。又曰、雲雀鷹とは五六七月間につかふ之。ひばりの夏毛替時、尾羽の落比つかふ之。尾羽の落たるを、ねりひばりと云

比波里 倭名類聚鈔曰、雲雀。和名比波里。本草和名曰、雲雀。和名比波里。新撰字鏡曰、鵳。古賢反、比波利。鷗、比波利。正字通曰、鵳、繆天切。音堅。題肩即鵳俗作鵳鵳。字典曰、正韻、鶬鶊鵳鷚。集韻、鶬鷚鵳子。一曰、征鳥。一曰、鷹○鷗。字典曰、鷗。正字通、倉庚黄鸝也。朝鮮ウグヒス也○鷚。字典曰、鷚。玉篇、鴿鷚也。爾雅、鴿鷚。鷚。詁、鴿鷚マナヅル也

雲雀 見上

比婆理 萬葉集第十九、同第二十。古事記曰、比婆理波、阿米迩迦氣流、多迦由玖夜（ヒハリハ、アメニカケル、タカユクヤ）

比婆里 萬葉集第二十

【集註】

伊勢國風土記曰、安濃郡出雲雀。和泉國風土記曰、日根郡禽獸有雲雀。鳥取郷貢雲雀。駿河國風土記曰、鳥渡郡西島產雲雀。人車記曰、仁安三年八月十日任大臣節會也云云次居汁鶬鵳美羹。保元二年八月有任大臣事云云次居汁物鶬羹。仙覺萬葉集注釋卷第二曰、ひばりあみの、月のごとくまろにすきたるをもちたるが、きぬがさに似たれば云々。平家物語卷第十曰、ひばりあがれる野路の里云々。深塵愚案抄曰、あめなるひばり、よりこやひばり、とみくさもちて。愚案、雲雀はあがりて空に囀る鳥なれば、天なるとはいへり。よりこやは、寄來と云之。藤谷殿集曰、嘉元々年式部卿親王家千首哥に、雲雀「春の野にあがる時のみ聲はして草

葉になかぬ夕ひばり哉。回國雜記曰、武藏野に出て酒など飲て遊びけるに、はじめて雲雀のあがるを見て。伊勢紀行曰、雲雀あがる聲聞ゆ。祇園會御成記曰、五献御そへ物ひばり。朝倉亭御成記曰、献立次第ひばり

【形狀】萬葉集卷第十九曰、宇良宇良爾、照流春日爾、比婆理安我里、情悲毛、比登志於母倍婆。春日遲々、鶬鶊正啼云云。同卷第二十曰、阿佐奈佐奈、安我流比婆理爾、奈里弖之可云云。比婆里安我流、波流弊等佐夜爾、奈理奴禮波云云○按、山堂肆考曰、鷃、一名倉庚、卽朝鮮ウグヒス也

宇都良 本草和名　【漢名】鶉 本草　【今名】ウヅラ　【一名】宇豆良 新撰

本草綱目曰、鶉大如二雛雞一、頭細而無レ尾、毛有二斑點一甚美、雄者足高、雌者足卑。其性畏レ寒、其在二田野一、夜則羣飛、晝則草伏、人能以レ聲呼取レ之、畜令二鬪搏一

字鏡曰、鶉。宇豆良。鶕鷂同、宇豆良。鴽、宇豆良。鵪鶉鶉鴽四字、宇豆良○字典曰、鷃同鴽○字典曰、鵪。字彙補、五諫切、音鴈鴻也

宇川良 本草類編曰、鶉。和宇川良。倭名類聚鈔曰、鶉。和名宇都良。玉造曰、鶉ノ䏈、鴈ノ醢。新猿樂記曰、鶉目之飯。萬葉集第二曰、振放見乍、鶉成云云

鵪 壓添壒囊抄曰、鶉鵪同

宇豆良登理 古事記曰、宇豆良登理

イトラ 詞林采葉抄曰、古語採擇イトラウヅラ之。鶉、按ニ本草啓蒙ニイトラ、萬葉集ト註ス。杜撰也

【集註】出雲國風土記曰、意宇郡禽獸有鶉。神門郡禽獸有鶉。和泉國風土記曰、

三代實錄トアルハ文德實錄ノ誤

矢開記ニアラズ狩詞記ナリ

日理郡貢獸有鶉。武藏國風土記曰、荏原郡蒲田貢鶉。加賀國風土記曰、加賀郡貢鳩鶉。三代實錄卷第一曰、嘉祥三年夏四月癸酉、遣ニ使於十箇佛寺ニ修ニ五七日御齋會ニ。亦如ニ前日ノ儀ニ。宣詔、山野之禁、本爲メニス鶉雉ニ、至ニ於草木ニ、非レ有レ所レ制云云。萬葉集卷第三曰、長皇子遊獵路池之時云云鶉己曾、伊波比回禮、四時自物、伊波比拜チ、鶉成云云。同卷第四曰、鶉鳴。故鄕從、念友云云。同卷第十一曰、人事乎、繁ン跡君乎、鶉鳴ク云云。同卷第十七曰、鶉鳴、布流之登比等波、於毛弊禮騰云云。台記別記曰、康治元大嘗會、鶉百羽。平家物語卷第一曰、たかどもあまたすへさせ、うづら、ひばりを、おつたてゝひねもすにかりくらし。催馬樂曰、たかの子は、まろにたうばらん、てにすへて、あはづの原の、みくるすの、めぐりの、うづらとらさん、やさきんだちや。西行物語曰、うづらのねやどあれはてたる所ゝ。撰集抄曰、松風すさまじく吹て、うづら終月に鳴く。侍中群要曰、御厨子所例云、延喜十一年十二月廿日官符云、定六箇國日次御贄、山城國 鳩鴈鶉鴨小鳥鯉鮒鰒。矢開記曰、ふせ鳥と云事、雉と鶉と二ならでは、ふせ鳥とはいはず。ふせて射事と云事、此二ならでは有まじき事之。鳥にても、うづらにても、見つけたる時は、目をつくとも、又目つけともいふなり。こと鳥にいふまじき詞之。めをつくとも、又めつけとも云事は、野山にて、地にある鳥を云なり。空飛鳥をば云まじきなり。又曰、小鳥、うづらなどは、じんとう四日などにて射べき之。三好義長亭御成記曰、獻立次第、うづら。武家調味故實曰、うづら、ひばり可レ付様、但鶉は祝言の所へは不レ可レ出候。荻を二すぢゆひあはせて、ゆひめより下一尺ばかりより置て可レ付。式には鳥七付るよし有といへども、いくつにてもあれ、付る時は、鳥をあふのけて、うち地かへゝ荻にはさみて、あをつづらにて可レ付、兩方のはがへをはさみ出して、かしらをはが

への下にかきはさむべし。すゝきにてもくるしからず、うすやうにてする事あり。すゝきもよし、口傳あり

【形狀】言塵集曰、鶉衣と云も、破てうづらの毛のごとく、すそにさがりたるに似たりと云〻。又曰、鶉衣と云も、衣のすその破たるに、うづらの毛の似たるなり〇按ニ鶉衣ノ亊、異邦ノ書ニ往々見エタリ。華夷鳥獸考曰、鶉ハ鳥之諄者、其居易容其欲易給賓ニ伏淺艸之間ニ、隨レ地而安、故言上世之俗日ニ鶉居ハ而鷇食也。尾特禿若衣之短結傳称号爰貧衣若レ懸レ鶉〇四條流庖丁書曰、筋ハシ云云筋サキコガスヘ、鶉ノフヲマナビタル間如レ毛成ベシ。數ハ不レ定、スヂノ數ニ牛成ベシ。同長一尺金ノ定サキ一寸ヲコガスベシ

〇スガドリ　壒囊抄　塵添【漢名】鴽本草【今名】フナシウヅラ　塵添壒囊抄曰、三月、田鼠化爲レ鴽云云。鴽字ハ、スガドリトヨム。鴽鶴鷂也ト云ヘリ。鶉モ鶴モ共ニウヅラ也。莊子云、田鼠化爲レ鶉云リ〇爾雅曰、鴽ハ鴾母。疏、田鼠所レ化者也。儀禮ニ以雉兎鶉鴽ト云、本草鷃、釋名鴽、卽フナシウヅラ、鶉ニメ無斑者

豆久見ツグミ　倭名類聚鈔【漢名】未詳【今名】ツグミ

【一名】豆久美　天文寫本和名抄〇倭名鈔曰、漢語抄云、鶫鳥、豆久見。辨色立成云、馬鳥　馬鳥　見上註　鶫　見上。和泉國風土記曰、日根郡貢鶫、近義貢梅竹栗鶴雁鴫鶫〇字典曰、廣韻、鶫鵍鳥名、鵍同鸖　豆久彌　新撰字鏡曰、鵍。豆久弥、正字通曰、鶫鴘鵍。ミソサヾヒ也　鶇ツグミ　塵添壒囊抄〇山背國風土記曰、兎道郡貢鶇。大和國風土記曰、宇陀郡貢鶇

つくみの鳥 四季物語 ツモジ 海人藻芥曰、内裏仙洞ニハ、一切食物ニ異名ヲ付テ被レ召事之。鶫(ツグミ)ハツモジ。但ツグミヲ供御ニハ不レ備也。西明寺殿哥曰。わび人の世にある人をうらむるはけらはらたてばつぐみよろこぶ。袖中抄曰。さく花におもひつくみのあぢきなく見にいたづきのいるもしらずて。此歌はつぐみといふ鳥をかくして、おもひつくみといへば云々

【集註】拾遺抄曰、つくみ。わが心あやしやあだに春くれば花につくみもなど成にけむ。四季物語曰、ついなの夜は、をはらのもちゐ、つぐみの鳥など焼たてまつり、御かれいゐの御まはりにたてまつれば、是ものゝけ、ゑやみやういぬべき本文侍ろとなん。家中竹馬記曰、馬上にて小鳥を射るには、鶉、雲雀、つぐみにどらひの物までは、はだぬがで、矢頭四目木鋒などにて可レ射。三好義長亭御成記曰、十六献、つぐみ、かも

【形状】○喚子鳥曰、つぐみ、大きさ、ひよ鳥に小ぶり、惣身あを黒く、腹しろし

太止利(タドリ) 新撰字鏡 【漢名】未詳 【今名】イヌヒバリ

【一名】多士利 倭名類聚鈔曰、鷚鳥、陸詞切韻云、鷚。小鳥似(タリ)レ雉也。和名多士利。字典曰、鷚鷚鳩。爾雅鷚鳩ハ冠雉。即本草ノ突厥雀、和産無之

多止利 天文寫本

和名鈔。字鏡曰、鴾、太止利。鴾ハマナヅル也。按、倭名鈔ニ切韻ヲ引テ小鳥似レ雉、和名多士利ト云ヲ以テ考レバ、多士利ハ即田ヒバリ也

【形状】○喚子鳥曰、たひばり、いぬひとも、みぞひばり共い

ふ。大きさうぐひすに大ぶり、尾ながく、うごかし、せきれいのごとし。せの色あを黒く、むね白く、くろきごまふ有。さゑづり少し有。形ちはひばりにたり。冬出る。本朝食鑑曰、田雲雀(タヒバリ)。狀類雲雀而稍大、頭背淡蒼帶青、翅尾黑、臆前後黄色有黑點、常居田澤流水之間、鳴聲飛舞亦雖似雲雀而性不捷、勢亦稍微

古名錄禽部卷第六十八　終

古名録禽部巻第六十九目録

燕雀類

須須米（スヾメ）　雀　○すゝめのこ　黄雀　○スヾメノタチクソ　白丁香
○須々女乃加比己（カヒコ）　雀卵
○白雀　○かしらあかきすゝめ
○赤雀　○三足雀
都波久良女（ツバクラメ）　燕　○阿萬止里（アマドリ）　胡燕
○川波久良女乃久曽　燕屎　○白燕　○赤燕
あまこり　鷫鷞

通計十四種

雑禽類

みこごり　うつほ鳥

つゝ鳥　　山雀
はこごり　　喚子鳥
古々鳥　　容鳥
百千鳥　　花千鳥
花よ鳥　　なかはし
鶱　　太久美止里 鷦鷯

通計十四種

三月十五日サリ　しえ群本

古名錄禽部卷第六十九

紀藩　源　伴存撰

燕雀類

須須米（スズメ）倭名類聚鈔　[漢名] **雀** 本草　[今名] **スズメ**

[一名] **須々美** 本草和名曰、雀。和名須々美。倭名鈔曰、雀。和名須須米　**須々女** 本草類編

正字通曰、雀。說文、依人小鳥也。今俗以宿堂簷間呼爲二瓦雀一

散々 倭名抄國郡部曰、參河國寶飯郡雀部、散々倍　**いな雀** 堀河院百首曰、むれてくる田中の宿のいな雀我ひくひだに立さはぐ之

[集註] 明月記曰、建曆三年云云十五日、念誦不出行、內裏此間有雀小弓。中外抄曰、保延四年四月七日、夜於宇治殿被仰云、仁海僧正ハ食ㇾ鳥人也。雖然有房ニ住ける僧の雀をしもいはず取ける也。件雀をはら〳〵とあぶりて、粥漬のあはせには用と之。驗人にて有けり云々。枕草紙曰、こゝろときめきするもの、すゞめのこがひ。又曰、すゞめなどやうつねにあるとりならば。撰集抄卷第二曰、秋の田をおどろかすなる山田守玄賓僧都のひだる腳に、驚く村雀にても侍

銅藥
大系本
飼菜ニ
作ル
れノ下
群本ぬ
るアリ
へ同り

りけん、をのが羽風になることをならして、心とさはぐ鳥。同卷第四曰、此乞食僧うちわらひてかく〳〵なるこをばおのが羽風にゆるがして心とさはぐ村雀哉。と讀すてゝ隱(かくれ)さりぬ云〻げに村雀の、おのが羽風になることをゆるがして、なる聲にさはぐなる樣に云〻。矢開之記曰、矢開の鳥の事、すゞめをば内の物をとりて、塩を少し入て、羽がいあしなどもよくこしらへて、其後あら卷にまきかためて、吉日をもつて庖丁の役人庖丁あるべし。同く鳥のあら卷長サ八寸也。宇治拾遺曰、今はむかし、春つかた、日うらゝかなりけるに、六十斗の女のありけるが、虫うちとりてゐたりけるに、庭に雀のしありきけるを、童部石をとりてうちたれば、あたりてこしをうちおられにけり。羽をふためかしてまどふほどに、烏のかけりありきければ、あな心う、からす取てんとて、此女いそぎてとりて、いきしかけなどして物くはす。小桶に入れてよるはおさむ。明ればこめくはせ、銅藥にこそけてくはせなどすれば云〻。深谷記曰、我等は竹にとまる雀、貴殿は竹に飛雀と被仰候

【形狀】四季物語曰、むれすゞめは、聲のかしがましきはさることにて、かゝるかたばへの軒をも、あさけの空よりつきほそりて、鷹などうちみだして、うるさき鳥なめり。されど心とき鳥にて、すがたひいでたれば、山鄉のあそびがたきには興あるものぞかし。言塵集曰、雀。すゞめ色は、夕暮ふかき時之。雀がくれは、二月の草木の、はつかにめぐみたるを云之。よくやをうがつと云侍に、うがつは破之。もみ雀は鷹の藥之

○すゞめこ　源氏物語

【漢名】黃雀　本草　通雅曰、小者黃口曰黃雀。證類本草曰、雷公云、雀蘇凡ソ使ニ勿レ用ニ雀兒糞ニ、其雀兒口黃未經淫者糞是

【集註】三代實錄卷第三十四曰、陽成天皇元慶二年秋七月中午朔、大藏省奏、

霹ニ靂於倉前陣木一、有ニ黄雀一、含ニ口蒼虫一而死、腹毛燋爛。源氏物語若紫曰、すゞめのこをいぬきがにがしつる、ふせこのうちにこめつるものをとて云〻。枕草紙曰、こゝろときめきするもの、すゞめのこがひ。黄雀ノ事見吾妻鏡

【形狀】 枕草紙曰、きたなげなる物、すゞめの子。又曰、うつくしきもの、すゞめの子の、ねずなきするにおどりくる、またべになどつけてすへたれば、おやすゞめの虫などもてきてくゝむるも、いとらうたし。八雲御抄曰、すゞめいろといふは、夕のそら也

○スヾメノタチクソ 頓医抄

【漢名】 白丁香 本草綱目

本草綱目曰、雄雀屎、一名白丁香俗名。證類本草曰、雄雀屎、圖經曰、雄雀屎臘月收レ之、俗呼テ爲ニ青丹一、頭尖者爲ニ雄屎一、雷公云、雀蘇蘇、若ニ底坐一尖在レ上、即曰雌、兩頭圓者是雄。物理小識曰、雀糞尖者雄、圓者雌

【附方】 頓医抄曰、乳腫方白丁香スヾメノタチクソ、水ニスリテ可塗。麻嶋眼科書曰、白丁香、雀之立糞、春ノガ吉、黑ミヲ去ル、水飛痛ヲトムル也

○須々女乃加比己(スヾメノカヒコ) 本草類編

【漢名】 雀卵 證類本草

【今名】 スヾメノタマゴ

【一名】 雀貝 麻嶋眼科書、本草類編曰、雀卵、和須々女乃加比己

【附方】 慶長十七年麻嶋眼科書曰、雀貝、雀之玉子、春ノガヨシ、皮ヲ去リ、ヲシキノ裏ニソクイノゴトクヲシ付、日ニ干カタメ、扨ヲコメ紙ニ包二三日程干也。玉之痛ヲ止メ、目之性ヲツヨクスル君藥也

○白雀 日本書紀○延喜式祥瑞曰、白雀

【集註】 日本書紀曰、皇極天皇元年秋七月丙子、蘇我臣入鹿豎者、獲ニ白雀スヾメ子一、是日、同時有レ人、以ニ白雀一納レ籠而送ニ蘇我大臣一。續日本紀卷

第十日、聖武天皇神龜四年春正月丙子、是日、左京職ヨリ獻ニ白雀ヲ。同卷第十一日、天平四年春正月乙巳朔、左京職ヨリ獻ニ白雀ヲ。同卷第卅日、稱德天皇寶龜元年五月壬申、勅曰、今年得タリ太宰帥從二位弓削ノ御淨朝臣淸人等進ルトコロノ白雀一雙ヲ。同卷第四十日、桓武天皇延曆十年秋七月辛巳、伊豫國獻ニ白雀ヲ。三代實錄卷第二日、淸和天皇貞觀元年五月十三日戊辰、備前國獲ニ白雀一ヲ、而獻レ之。同卷第三十三日、陽成天皇元慶二年夏四月廿六日辛卯、備中國獲ニ白雀一ヲ。同卷第四十八日、光孝天皇仁和元年秋七月十四日丙申、西寺獻ニ白雀一ヲ。類聚國史曰、延曆十三年八月壬戌、肥前國獻ニ白雀ヲ。延曆十五年春正月、石見國獻ニ白雀ヲ。延曆十六年春正月、太宰府獻ニ白雀ヲ。六月辛酉、三品朝原ノ內親王獻ニ白雀ヲ、御監及ヒ家司等ニ賜レ物ヲ有レ差。初見者伊勢ノ直藤麻呂、獲者云云。延曆二十二年春正月、豐後國獻ニ白雀ヲ。延曆二十三年春正月、近江國獻ニ白雀ヲ。四月壬申、右兵衞大初位下山村ノ日佐駒養獻ニ白雀ヲ、賜ニ近江國稻五百束ヲ。五月丙申、齋宮寮獻ニ白雀ヲ。弘仁五年閏七月癸卯、美作國獲ニ白雀ヲ、賜ニ獲人稻四百束ヲ。日本紀略曰、延曆十五年六月、肥前國獻ニ白雀ヲ。

○かしら

あかすゝめ 林草紙　○赤雀　延喜式祥瑞曰、赤雀。孝經左契曰、赤雀者王者孝則銜書來　[一名] 朱雀　日本書紀卷第廿九曰、天武天皇白鳳十年秋七月戊辰朔、朱雀見之

すさく　言塵集曰、すさくゐん(朱雀)をば山の兒といへり。身のかた見曰、すさくゐんのすいなうより女房の哥のことば見えたり。世繼物語曰、すさく門のうへのこしに云云○塵添壒囊抄曰、但シ書ノ中ニ四神ヲ明スニハ、朱雀ハ鳳也ト釋セリ。雀ノ字ヲバ鳥ノ惣名ト釋シタル事アリ。又雀ヲ鳳也ト云ヘル事モアリ。銅雀ト書ルハ、アカヾチノ鳳凰也。サレバ今ノ朱雀モ、實ニハ

朱鳳ニテアルベキニヤ。朱雀錦ト云フニシキモ鳳錦也。鳳凰ヲ紋ニヲリツケタル也。雀ヲ鳳トスル事、其例一ニアラズ。朱雀 名長離也。離ハ南ナレバ、南ニ長ジタル神ト云心ニテ、長離トハ云フニコソ。前朱雀ト云ハ、前ハ南ナリ、南ハ火ノ方ナレバ陽ノ鳥ニアタル。鳳ハ火ノ精ナル故ニ南方ノ神也。雀ハ卑劣小鳥ニテ、火ノ方 神トスルニタラザル歟。雀ヲ圖スル事ハ、道理覺束無シ

【集註】 續日本紀卷第三十八曰、桓武天皇延暦四年五月癸丑、先レ是、皇后宮赤雀見云云、粤得ニ參議從三位行左大弁兼皇后宮ノ大夫大和守佐伯宿祢今毛人等奏ニ云、去四月晦日、有ニ赤雀一隻ニ、集ニ于皇后ノ宮ニ、或翔ニ止聽上ニ、或跳ニ梁庭中ニ、皃甚閑逸、色亦奇異、晨夕栖息シ、旬日不レ去云云。扶桑略記第五曰、天武天皇元年八月、幸ニ野上宮ニ、立ニ年号ニ爲ニ朱雀元年ニ、太宰府獻ニ三足赤雀ニ、仍爲ニ年号ニ

○三足雀 日本書紀

【集註】 日本書紀卷第廿九曰、天武天皇白鳳十一年八月甲戌、筑紫太宰言、有ニ三足雀ニ。十二年春正月己丑朔、庚寅、筑紫太宰丹比眞人嶋等貢ニ三足雀ニ

【附錄】 入内雀ノ俗說 按、源

平盛衰記卷第七曰、實方云々横死にあへり云云去共都を戀しと思ひければ、雀と云小鳥になりて、常に殿上の臺盤に居 臺飯を食けるこそ最哀なれ。觀レ此則禁中ニ居ル雀ハ、平常ノ雀也。然ルニ大和本草附曰、俗說ニ本朝實方中將罪アリテ歌枕求ニ東ニツカハサレシニ、歸京セズシテ死セリ。存生ノ間、何ニモシテ今一度禁裡ニカヘリ度思ハレシニ、其靈化シテ雀トナリ、禁裡ノ臺盤所ニ飛來リ、食物ヲツイバミシ故、是ヲ入内雀ト云ハ、後世ノ俗一種ノ野雀ニ入内雀ノ名スルヨリノ、杜撰ニメ不足采用

房　天治本は居に作る
鵠　天治本は鶏に作る

都波久良女（ツバクラメ） 本草 和名 【漢名】燕 本草、胡越二燕通名、于ㇾ此以二越燕一註 【今名】ツバクラ

證類本草曰、陶隱居云、鷰ニ有二兩種一、有ㇾ胡有ㇾ越、紫胷輕小者是越鷰、不ㇾ入藥用、胷斑黑聲大者是胡鷰。物理小識曰、胸赤者越燕好鳴、其巢門向上

【一名】津者女 新案雜要抄曰、障子帳雜事云々上津者女口長三分云々穴、外左右八分、津者女口等、長各一寸九分。帳料絹七十二筋、内長九尺、弘各三寸、已上前津者女口壁代ノ上ノ事云々南面絹、前乃津者女口（ツハメクチ）ヲ爲ㇾ西。蜘入記曰、きやうのせんにしつはめくちをさす。奧儀抄曰、つばめは、つばくらめと云鳥之

豆波久良米 倭名類聚鈔曰、鷰。和名豆波久良米。本草和名曰、鷰。和名都波久良女

豆波比良古 新撰字鏡曰、鷰。豆波比良古。鴣。柔利反、豆波比良古。鳦。於乙反、鷰。豆波比良古。鶤。房久反、上鵠、豆波比良古。鶏。豆波比良古○字典曰、鶤ハ鷄。一名ハイタカ也○字典曰、鷄。本草、鷄鶏大如ㇾ鷄長脚紅冠、雄即無ㇾ聲與二秋鷄一同類

豆波比良々古 字鏡曰、鷃ニ豆波比良々古

ツバクラ 塵添𡋽嚢抄曰、鷰（ツハクラ）

つはくらめ 今物語曰、うつばりのつばくらめならびすめども云々○𡋽嚢抄曰、燕ツハクラメ。又曰、齊乙ハツバクラメヲ云ル歟。ツバクラメハ玄鳥トモ天女トモ云。八雲御抄曰、つばくらめ。竹取物語曰、つばくらめのもたるこやすのかひ一つとりてたまへといふ。砂石集曰、ツバクラメ

【集註】三代實錄卷第七曰、貞觀五年春正月十九日壬午云々云々上ㇾ表曰云々然而將ㇾ辭之鷰、猶ヲ有ㇾ眷二戀スルヲ彫梁一。平家物語卷第三曰、春は

つばめ、秋は田のものかりのをとづるゝ様に、をのづから故郷の事をもつたへきゝつれ。今昔物語第四曰、此家に巣をつくりて子をうむ燕あり。雄燕を相具せり。こゝろみに雄燕をとりてころして、雌燕にしるしをつけてはなちたまへ明無事其雌燕他の雄燕を具して來りたらんとき、それを見てわれに夫をばあはせ給へ。禽獸すら夫をうしなひつれば、他の夫を設くる事なし。いはんや人はかれより心有べしといふ。父母げにしかる事もとて、其家に巣をつくりて、子をうみたる燕をとり、雄燕をころして、雌燕にはかしらに赤き糸をつけてはなてり。かくてあくる年の春、燕を待に、其雌他の雄燕を具せずして、頭に糸をつけながら來りけるが、巣をつくりて子をうむ事はなくして終に飛去たり云々。萬葉集巻第十九曰、燕來、時爾成奴等、鴈之鳴者、本郷思ヒ都追、雲隱ル喧。砂石集曰、遠州ニモツバクラメノ雌死せり、雄別ノ妻ヲ尋テ來ル、サキノ子巣ニ有ケルヲ、今ノ雌ウハラノミヲクハセテ皆殺シツ。雄是ヲ見テ、雌ヲクヒ殺シケリ。源平盛衰記巻第四十八曰、春ノ雁ノ越路ニ傳ヒ、秋ノ燕ノ故郷ニ歸ヲ餘所ニウラヤミ〇竹取物語曰、くらつまろ申やう、つばくらめ子うまむとする時は、おをさげて、七度めぐりてなんうみおとすめる云々。本朝無題詩曰、玄鷰引雛蕭閣中

〔形狀〕〇本草啓蒙曰、人家ニ入リ巣ヲ結モノハ、形小ク腹下白色、胸紫色、コツバメト云、越燕是也　〇阿萬止里 倭名類聚鈔　〔漢名〕胡燕 本草

〔今名〕オホツバメ 物理小識曰、胸斑者胡燕、不多呢喃巢作小口　〔一名〕阿萬度利 天文寫本和名抄〇倭名鈔曰、胡鷰。阿萬止里

集註　竹取物語曰、丈人申やう、おほいつかさのいひかしぐ屋のむねのつくのあなごとに、つばくらめは巣をくひ侍る

形状　〇本草啓蒙曰、堂舎ノ両椽(クルキ)ノ間ニ土ヲ以テ長ク底ヲコシラヘ巣ヲ結ブモノハ、形大ニシテ胸紫ナラズ、告天子(ヒバリ)ノ如クナル斑文アリ、腹下黄色、雨前ニハ必群飛ス、俗オホツバメト云、胡燕ニシテ薬用ニ入ル、者ナリ

〇川(ツ)波(バ)久(ク)良(ラ)女(メ)乃(ノ)久(ク)曾(ソ)　本草類編

漢名　燕屎　本草　今名　ツバメノフン

集註　本草類編曰、鷰屎。和川波久良女乃久曾。竹取物語曰、中納言、あしくさぐればなきなり、と腹立て云〻われのぼりてさぐらむ、との給ひて、籠に入て、つられのぼりてうかゞひへるに、つばくらめ尾をさげて、いたくめぐりけるにあはせて、手をさゝげてさぐり給ふにひらめる物さはりけるとき、我物にぎりたり、今はおろしてよ、おきなしえたり、との給ひて、云〻御手をひろげ給へるに、つばくらめのまりおけるふるくそをにぎり給へるなりけり

附方　頓医抄曰、小児アカクサクサノ内ヘ不入治方、燕ノ屎ニ、雛ノ羽茎ノ中ニツモリタル血ヲシボリ、ソレニテヨキ酢ヲ少入テ、カキ合テノメ、則ナヲル也

〇白燕　日本書紀　雲南通志曰、萬暦十七年路南河陽俱産白燕

集註　日本書紀曰、天智天皇六年六月、葛野郡献二白燕一。持統天皇三年秋八月辛丑、詔二伊豫總領田中朝臣法麻呂等一曰、讃吉國御城郡所レ獲白燕、宜二放養一焉。續日本紀巻第一曰、文武天皇三年八月壬寅、伊豫國献二白燕一。同巻第二曰、慶雲元年秋七月丙戌、左京職献二白鷰一。同巻第九曰、聖武天皇神龜二年春正月丙辰、山背、備前國献二白鵜各一一。同巻第三十八曰、桓武天皇延暦三年五月甲

午、攝津ノ職史生正八位下武生ノ連佐比乎貢ニ白燕一ヲ、賜ニ爵二級幷當國ノ正稅五百束ヲ。三代實錄巻第十三曰、清和天皇貞觀八年六月十四日丁亥、丹波國獻ニ白燕一ヲ。同卷第三十八曰、陽成天皇元慶四年秋七月五日丁巳、伯耆國獲ニ白燕一ヲ而獻

○赤燕 延喜式 祥瑞

あまとり 袖中抄。與胡燕同名異物

〔漢名〕 鸐鶵 西陽雜俎

西陽雜俎曰、鸐鶵狀如燕稍大、足短似ﾚ鼠、未ﾀﾞ嘗ﾃ見ﾆ下ﾙﾌﾚ地ﾆ、常止ニ林中ニ、偶失ﾚ勢控ﾚ地不ﾚ能ニ自振ニ、及ﾚ擧止凌ニ青霄ニ

〔今名〕 アマドリ

〔一名〕 阿万止利 新撰字鏡曰、鶵、竹刮反、又阿万止利○字典曰、鶵鶵鴂、即本草突厥雀

〔集註〕 袖中抄曰、あまとりとは、空の雲の中にすみて、おほかた人にもしられぬ鳥也。その鳥、六月つごもり、七月になるほどに、雲の中にすをつくりて子をうむが、風など吹て雲いたくさはぎて、そのすのやぶれぬべければ、わびてなくなり。その時ばかりぞ、よの人なくこゑをもきくと或書にかけり

〔形狀〕 言塵集曰、あま鳥は、つばめ共、又つばめより大きにて、足のなき鳥之、雨降日飛鳥之。雲に巢をかけて子生と云〻○大和本草曰、鸐鶵。今案スルニ、本邦ニ風鳥ト云鳥アリ、又風切ト云燕ノ類ナリ。アマツバメトモ云、稀ニ有之。若狹遠敷郡外面ト云処海邊洞ノアタリニモ多シ。燕ニ似テ大サモ亦同、足ナシト云、足甚短シ、高ク飛ンデ地ニ下ル叓マレナリ。本草啓蒙曰、形狀ハ胡燕ヨリ大ニシテ兩翼尾ヨリ長シ。全身黑色、足短小ニシテ腹毛ニ隱ル

雜禽類

みこごり 枕草紙

うつほ鳥 精進魚類物語

つゝ鳥 精進魚類物語

山雀 【集註】本朝無題詩曰、山雀群飛押藥欄

はこごり 枕草紙

【一名】**箱鳥** 岷江入楚。言塵集曰、はこ鳥は夜はきてひるは歸と云說有之 【集註】岷江入楚曰、深山木にねぐらさだむるはこ鳥もいかでか花の色にあくべき。河果鳥(ハコトリ)ヵ箱鳥

同或は皃鳥の異名也と云々 雄略天皇御時 美作國つかさ山と云處相見乙人と云人の婦子をおひて山中を行とて、鷲にとられて、はやこ〳〵とよびしに、終に死たりける故に、はこ鳥とはいふ也。はことは、はやこと

かさ 活版本るきニ作ル

さ活
版本す
に同の
是同之

云心也。みやま木によるはきてゐるはこ鳥の明ばかへらんことをこそ思へ。あさゐでにきなくはこ鳥なれだにも君のこふれば時をさへなく。花かほどりのまなくしばなく春の野に草のねしげき戀もする哉。八雲抄良鳥は定家卿も不知是たゞうつくしき鳥なりと云。常陸國に杜若をかほ花と云、此花咲時鳴といふ。今案、深山木にぬるといへるは、まづははこ鳥正說也。弄はこ鳥の事、一勘花鳥ニあり、はこ鳥の類は深山木に住ながら、花をもわすれしとなり

喚子鳥 萬葉集

一名 **喚孤鳥** 萬葉集卷第十曰、旦霞、八重山越而、喚孤鳥、吟八汝カ來ノ、屋戸母不有九二。詠鳥。〽吾瀨子乎、莫越ノ山能、喚子鳥、君喚變瀨、夜之不深刀爾。〽春日有、羽買之山從、猨帆之內敵、鳴往ク成者、孰喚子鳥。〽不答爾、勿喚動曾、喚子鳥、佐保乃山邊乎、上リ下リ二。〽朝霧爾、之怒怒爾所沾而、喚子鳥、三船ノ山從、喧渡所見。同卷第八曰、神奈備乃。伊波瀨乃杜之、喚子鳥、痛ク莫鳴ソ、吾戀益ル。〽尋常ニ、聞者苦寸、喚子鳥、音奈都炊、時キ庭成奴。源氏物語さわらび曰、いはせのもりのよぶこどりめいたりしよの事は、のこしたりけり

喚兒鳥 萬葉集卷第八曰、幸二芳野離宮一時歌。瀧上乃、三船ノ山從、秋津邊、來鳴度ル者、誰レ喚兒鳥。慈元抄曰、昔或者鷹に子をとられて、山中に追入て、尋行けるに、終に思ひ堪かねて死したりし、其靈魂鳥となりて、子はくとなく、是を喚子鳥と云るとなん

呼兒

鳥 萬葉集卷第一曰、太上天皇幸ニ于吉野宮一時高市連黒人作歌。倭爾者、鳴而歟來良武、呼兒鳥、象乃中山、呼曾越奈流。言塵集曰、喚子鳥の事、一說に箱鳥同物と云々はこ鳥は、はやこ〳〵となく故に、子をよぶ鳥といへり。いづれも春鳴鳥と云々○按ニ明月記曰、寛喜元年八月一日、入レ夜宰相來ル、書下命也。屏風之題云々其ノ外事四季ノ景物有レ限。又喚子鳥菫菜等書圖難レ用レ之、如レ此事凡テ無ニ許略一只可レ有ニ御計一。トミエタリ

集註 堀河院百首曰、喚子鳥。つれ〳〵の春の夕暮ながめやる折にしもなく呼子鳥哉〽さ夜中にみゝなし山の呼子鳥こたふる人もあらじとぞ思ふ〽こたへする人なき山の呼子鳥獨鳴てや春をすぐらん餘署也　撰集抄卷第三曰、大原乃奥に居をしめて行給ける云々峯のよぶこ鳥のひめもすに鳴わたる。つれ〳〵曰、よぶこ鳥は春の物なりとばかりいひて、いかなる鳥ともさだかにしるせるものなし。ある眞言書の中に、よぶこ鳥なく時、招魂の法をばおこなふ次第あり、是は鵼也と　山家集曰山家よぶことり。山ざとに誰を又こはよぶこ鳥ひとりのみこそすまんと思ふに

今案 本朝無題詩云、暮ニ啼ク山鳥ハ似レ呼レ人○よぶこ鳥は猿の事之と云說アリ。然レドモ、万葉集喚子鳥ノ題ニ詠レ鳥ト云リ。撰集抄ニ、過にし仁安の比、西國はる〳〵修行つかまつり侍りし次に、讃州見を坂の林と云所に、しばらく住侍りき。深山邊のたらの葉にて、庵りむすびて、つま木こりたく山中のけしき、花の木ずゑによはる風、誰とへとてかよぶこ鳥、よもぎのもとのうづら、日終にあはれならずといふ事なし。長夜のあか月、さびたる猿の聲を聞に、そゞろにはらわたを斷侍り。トミユレバ、喚子鳥ハ猿ニ非ル明證也○萬葉集卷第十、喚孤鳥ヲ詠ル前二首霍公鳥、汝始音者、於吾欲得、五月之珠爾、交而將貫云云。足檜木乃、山霍公ト出テ後二十一首皆霍公

鳥ヲ詠ルニテ考レバ、喚子鳥ハ杜鵑ト同時ニモ啼、又梅花柴鶯鳴ニ合セ詠タレバ、春モ鳴モノトミエタリ

古々鳥 文德實錄

〔集註〕文德實錄卷第六曰、齊衡元年夏四月辛巳、有レ鳥、集ニ殿前松樹ニ、俗名ニ古々鳥ト。其鳴自呼、勅ニ左近衛將曹神門氏成ニ射レ之、應レ弦而墜、帝甚称レ善、賜ニ絹數疋ヲ

容鳥 萬葉集

江家次第卷第十七曰、御元服。祝曰、掛毛畏支天皇我朝庭令月乃吉日爾御冠加賜比天美支御貞人度成利賜奴云云。新撰字鏡曰、妓。正音記是反上美婦也。加保与支女

〔一名〕果鳥 萬葉

集卷第十曰、朝井代爾、來鳴ノ果鳥、汝谷文、君丹戀レヤ、時ヲ不終鳴。同卷第三曰、山部宿禰赤人登ニ春日野ニ作歌一首云云。御笠乃山爾、朝不離、雲居多奈引キ、容鳥能、間無數鳴云云其鳥乃、片戀耳爾云云。同卷第十曰、寄レ鳥。容鳥之、間無數鳴、春野之、草根之繁キ、戀毛爲鴨

貌鳥 萬葉集卷第六曰、春日山、御笠之野邊爾、櫻花、木晩窂 貌鳥者、間無數鳴ク云云

可保等利 萬葉集卷第十七曰、夜麻備爾波、佐久良婆奈知利、可保等利能、麻奈久之婆奈久云云。仙覺萬葉集註釋第三曰、容鳥とは、井なか人は、かほとりといふ是也。かほ〴〵となけば、鳴聲を名とせるなり。源氏物語やどりぎ曰、かほどりの聲もきゝ

しにかよふやとしげみを
わけてけふぞたづぬる

百千鳥

【集註】源氏物語若菜曰、あさぼらけのたゞならぬ空に、もゝちどりのこゑもいとうらゝかなり。花はみなちりすぎて、なごりかすめる木ずゑのあさみどりなるこだち。言塵集曰、私云、百千鳥とは万鳥なり。その中に鶯も千鳥も可入と云。塵添壒囊鈔曰、百千鳥事。百千鳥ハ、何ノ鳥ゾ。常ニ鶯ヲ云說アレ共、只諸ノ鳥ヲ指ト見タリ。袖中抄曰、顯昭云、もゝ地どりは、もゝちのとりと云也。百千鳥とかけり。もろ〳〵のとりといふべし。うぐひすの名とかけるふみもあまたあれど、それはいかゞとおぼゆ。綺語抄云、もゝ千どりとは、鶯を云也。又云、百千のとり也。とりの名にはあらず。もろ〳〵の鳥を云也。もろ〳〵のとりは、はるなくゆへなり。童蒙抄云、もゝ地どりとは、もろ〳〵のとりと云也。はるは、もろ〳〵のとりのいできてなくゝ

【今案】仙覺萬葉集註釋曰、鶯をもゝちのさへずりすとて、もゝちどりともいへり。此說信用シガタシ。榮花物語つぼみ花曰、長和三年になりぬ。正月一日よりはじめて、あたらしくめづらしき御ありさまなり。あらたまのとしたちかへりぬれば、くものうへもはれ〴〵しうみえて、そらをあふがれ、よのほどにたちかへりたるはるのかすみも、むらさきにうすくこくたなびき、日のけしきうらゝかに、ひかりさやけくみえ、もゝちどりもさえづりまさり、よろづみなこゝろあるさまにみえ、えだもな

かりつるはなも、いつしかとひもをとき、かきねのくさもあをみわたり、あしたのはらも、おぎのやけばらかきはらひ、かすがのゝとぶひののもりも、よろづよのはるのはじめのわかなをつみ、こほりとくかぜも、ゆるくふきて、枝をならさず、たにのうぐひすも、ゆくすゑはるかなるこゑにきこえてみゝとまり。トミユ。此ノ百千鳥、うぐひすハ二物タル明證也

花千鳥 言塵集

花よ鳥 言塵集

ながはし 精進魚類物語

鶩 精進魚類物語

附錄 小鳥 百練抄第五曰、寛治五年九月六日、內裏小鳥合。明月記曰、寛喜二年八月二日、近日小鳥出山渡云云。海道記曰、大鳳の雲にかけるをうらやみて、小鳥のまがきにあそぶばかりき。江家次第卷第十七曰、東宮御元服云云追物二種。小鳥、螺辛螺、件盤三寸。右記曰、禽獸ノ類飼レ之事多分小兒所レ好也。飼二小鳥ヲ之段、雖レ無二大失一、一向可レ停二止之ヲ。於二雞犬一者免之。惠平記曰、汁膾加小鳥燒物

太久美止利 倭名鈔　【漢名】鳭鷯 本草綱目　【今名】ヨシワラスヾメ

【一名】**多久美止利** 天文寫本和名抄　【今案】和名鈔、太久美止利ノ註ニ、好割㆓葦皮㆒食㆓中虫㆒、故亦名蘆虎。トミユレバ、太久美止利ハ鳭鷯ニシテヨシワラ雀也。和名鈔、工匠 和名太久美ト云、此鳥其鳴コト工匠ノ音ノ如シ。和名抄巧婦ノ字ヲ用、巧婦ハ鷦鷯ニシテミソサヾヰ也。和名抄別條ニ載タリ。

古名錄禽部卷第六十九　終

古名錄禽部卷第七十目錄

養禽類

你播都等咧 雞　　○鶏のひな
○雞ノカイコ 鷄卵　　○須毛利 鷇
○小國　　○あかきには鳥 丹雄雞
○しろきには鳥 白鷄　　○クロカケ 烏鷄
○いろ〳〵ふある庭鳥　　○くだかけ
○四足鷄　　○雌鷄化レ雄
○瑞雞
以倍八止 鴿　　○白鴿

通計十五種

古名錄禽部卷第七十

紀藩　源　伴存撰

養禽類

儞播都等唎（ニヘツドリ） 日本書紀　【漢名】雞 本草　【今名】ニハトリ

唐詩鼓吹註曰、雞屬火應陽而鳴故五更陽動則鳴。春秋說題辭曰、雞爲積陽南方之象火陽物炎上故陽出雞鳴以類感也

【一名】**庭津鳥** 萬葉集〇日本書紀繼體天皇歌曰、于魔伊禰矢度儺、伱播都等唎、柯稽播儺俱儺梨（カケハナクナリ）。推古天皇紀曰、取ニ雞鳴時ニ集ニ于藤原池上ニ、以ニ會明ニ乃往之。仙覺萬葉集注釋卷第七曰、にはつとりとは、にはとり也。かけもおなじことにして、なくこゑによりていへり。又はいへつとも云とみえたり。萬葉集卷第十二曰、物念ヘ常（ト）、不宿起有、旦開者、和備氏鳴成、雞（ニハツトリ）左倍。延喜式卷第三曰、凡觸ニ穢惡事ニ、六畜死五日、產三日。雞非ニ忌限ニ。其喫レ宍三日。北山抄曰、六畜死忌五日、鷄非忌限

爾

波都登理 古事記曰、尓波都登理、迦祁波那久（カケハナク）

仁波止利 本草類編曰、諸雞。和仁波止利

長鳴鳥 古事記曰、集ニ常世（トコヨ）ノ長鳴鳥ニ令レ鳴

柯

かとハひとノ訛ナリ

稽日本書紀 **迦祁**古事記 **可鷄**萬葉集○萬葉集卷第三曰、鷄之鳴、東國爾云云。同卷第十一曰、旭時等、鷄ハ鳴成リ、縱惠也思、獨リ宿ル夜者、開ケ者雖明。同卷第十二曰、云云鷄ガ鳴、東方ノ坂乎、今日可越覽。同卷第十八曰、鷄鳴、東國能、美知能久乃云云。同卷第十三曰、家鳥、可雞毛鳴ク、左夜者明云云。里中ヵ爾、鳴奈流鷄之、喚立而、甚者不鳴、隱妻羽毛。一云里動、鳴ク成ル鷄。同卷第十九曰、于レ是諸人酒酣更深鷄鳴。因レ此主人內藏伊美吉繩麻呂作歌一首。打羽振、鷄者鳴等母、如此許、零敷雪爾、君伊麻左米也母。守大伴宿禰家持和歌一首。鳴鷄者、彌及鳴杼、落雪之、千重爾積ム許會、吾等立チ可氏爾。吾妻鏡卷第三十二曰、曆仁元年二月六日、仍左京兆雞鳴之程、於ニ縣河宿一、到ニ河邊一。台記曰、久安六年九月二十六日雞鳴後參西殿。梁塵愚案抄曰、にはとりは、かけろとなきぬ、おきよおきよ、わがかとよのつま、人もこそ見れ。かけろは、庭鳥のなく声かけろと聞ゆるなり。水左記曰、承曆四年八月十四日、今日右大臣大饗之云云雞鳴之間事了。山槐記曰、治承四年三月十七日、雞鳴之後、中宮有御入內○廣東新語曰、凡天雞鳴而潮雞鳴潮雞鳴而家雞鳴。農政全書曰、家雞上宿遲主ニ陰雨一。物理小識曰、家雞屬レ陽、先皷レ翼而後鳴。華夷鳥獸考曰、家雞先皷レ翼者二而鳴雉雞既鳴而後皷レ翼者三雉雞雄者有冠者熟仍紅家雞雄者亦有冠焚熟則不紅矣

八

聲ノ鳥 源平盛衰記卷第卅九曰、夜ハ八聲ノ鳥ト鳴明ス。奧儀抄曰、雞をば八ごゑの鳥と云也。やごゑ鳴故之。常にやごゑなくにしはあらず。曉にははつとりなる鳥しば〱しきりなく、にはつどりには、かならずやこゑ鳴也。曾我物語第六曰、やごゑといふも、にはとりの云々。義經記曰、八ごゑの鳥もしどろになきて、寺々の鐘の聲はや打ならすほどにわけけれども。人車記曰、仁安三年八月十五日、自夜雨降雞

鳴鬧乱聲音。つれ〳〵曰、夜ふかき鳥も鳴ぬ。砂石集曰、或ル夜九番鳥ノ鳴ケルヲ

あけつげ鳥 言塵集曰、雞。かけろ、かけ、あけつげ鳥、庭つ鳥、庭鳥云々

庭とり 源氏物語

庭鳥 家中竹馬記○塵添壒囊抄曰、庭鳥ノカケロトナクハ、夜明テ、道見ユベキヲ告ル詞ニモ可見路ト鳴トモ云メリ

ゆふつけ鳥 藻塩草曰、雞。ゆふつけ鳥、世中さはがしき時、四境祭とて、おほやけせさせ給ふに、鷄に木綿を付て、四方關にいたりて祭と云々又曉になく夕つけのわび聲にとよめり。鳥となけれ共云々。新葉集曰〽人聲なけれ覺の空の郭公ゆふつけ鳥のおなじたぐひに。俊頼髓腦抄曰、ゆふつけ鳥とは、にはとりをいふ、にはとりにゆふを付て、山には夏まつりあるとかや。延喜式卷第四曰、伊勢太神宮、山口神祭、木綿麻各二斤、雞二翼。雄一、雌一。今物語曰、折しもゆふつけ鳥聲〳〵になき出たりけるに。狹衣曰、あかつきに車にもえのりやり給はで、ゆふつけどりもとありしさまなど。遠嶋百首曰〽ながき夜をなか〳〵あかす友とてや夕付鳥の鳴ぞまぢかき。袖中抄曰、夕つけとりとは、にはとりを云也。弁内侍日記曰、三日の御鳥あはせに云々 辨内侍〽われぞまづねにたつばかりおぼえけるゆふつけ鳥のなれるすがたに。吉野詣記曰、あかつきにいたりて木綿付とりのこゑ〳〵聞え

朝鳥 言塵集曰、あしたの小鳥之。範政說云、万葉に鷄之

闘雞(ツゲ) 按ニ闘雞ハシヤム也。古ヘ本邦ニテ闘鷄ニ用者ハ世ニアル雞ヲ用ヒシ也。日本書紀曰、仁德天皇六十二年、是歲、額田大中彥皇子獵ニシ玉フ于闘雞(ツケ)ニ。百錬抄第五曰、永久五年五月廿九日、內裏有ニ闘鷄闘草ニ。同第七曰、保元三年二月十三日、於ニ弘徽殿ニ有ニ闘鷄事ニ、月卿雲客爲ニ左右念人ニ、有ニ勝負舞ニ。同卷第八曰、承安四年二月五日、行ニ幸法住寺殿ニ云々有ニ闘鷄

呪師猿樂等事一。塵添壒囊抄曰、闘雞事、庭鳥ヲ合也云云合ノ字ヲ用ル歟。鳥合草アハセニハ闘レ雞トリアハセ闘レ草ト云リ。明月記曰、元久二年三月三日、有闘雞。承元二年三月三日、闘雞云云小男預鳥依召進之、又返給、可ニキノ巣立子ナル由有仰云云。後愚昧記曰不知年号月三日、參內有闘雞之興。宣胤卿記曰、文龜三年三月三日、天晴、桃花佳節、禁裏闘鷄。長享三年二月廿一日、極﨟源富仲以狀云、來月三日闘鷄事、諒闇中可爲如何哉可尋予之由被仰下云云先例不覺悟、近例永享無所見停止可然歟、闘鷄事根元幼主之御沙汰歟、長君之御時近代勿論不打任事歟、旁御無沙汰可然歟、但於可有御尋歟之由返答了。廿二日源富仲以使者闘鷄事以昨日予申分伺申之處、勾當返事如此云云加一見返遣之、其返事分者尋予可定由被仰下ケル上者、重不可及披露に罪々敗事停止可然分也。三月三日內裏闘鷄停止依諒闇也、於例者不勘知唯不依例之有無停止可然之由先日予所事由也。凡闘鷄事、幼主儀之云云近代長君之御時有此事、不打任事。台記曰、久壽二年四月廿四日、今日隆長具ニ雞十羽ニ參ニ宇治ニ令闘之〇唐陳鴻ガ東城老父傳曰、元宗在ニ藩邸ニ時、樂ニ民間ノ清明ノ節闘雞ノ戲ニ。及ニ即位ニ、治ニ雞坊ヲ于兩宮ノ間ニ、索ニ長安ノ雄雞ヲ。金毫鐵距、高冠昂尾千數、養ニ于鷄坊ニ。選ニ六軍ノ小兒五百人ヲ使ニ馴擾教飼ニ。上之好レ之、民風尤甚。諸王世家、外戚家、貴主家、侯家、傾レ帑破レ産、市レ雞以償ニ雞直ニ。都中男女、以レ弄レ雞爲レ事ト。貧者弄ニ假雞ニ。帝出遊。見ニ昌弄木雞ヲ於雲龍門道旁ニ云云。觀此則唐土ニテモ古ヘ闘雞ニ用者索ニ長安ノ雄雞ヲ、金毫鐵距高冠昂尾千數ト云トキハ、今ノ暹羅シャムノ禿毫短冠禿尾ナル雞ニ非ズ。百練抄第四曰、永承六年三月廿四日、禁裏有ニ雞合ニ、以レ木造レ之、以ニ造樣勝ニ爲レ勝ト、盡ニ其ノ美ヲ。觀レ此古ノ闘鷄ハ可レ知レ用ルコトヲ美鷄ヲ也。弁內侍日記曰、三日御鳥合なり云云はつゆきなる、あか、こくろなどいふ鳥ども、かねてよりふせこにつきて、を

のく\あづかりて、丁子しやかうすりつけ、たきものなどして、いづれかにほひうつくしきとぞあらそひし。用ニ小國雞ニ事見ニ明月記ニ詳ニ於下ニ

都祈（ツグ） 續日本紀卷第六曰、元明天皇靈龜元年六月庚申、開ニ大倭國都祈山之道ニ。延喜式卷第四十曰、大和國山邊郡都介

登利 萬葉集第二十曰、登利我奈久、安豆麻乎能故波云云。等里我奈久、安豆麻乎等故能。源氏物語はゝ木ゝ曰、鳥もなきぬ、人々おきいでゝ云云鳥もしばしばなくに、心あはたゞしくて〽つれなさをうらみもはてぬしのゝめにとりあへぬまでおどろかすらん。榮花物語花山曰、たびたびとりもなきぬ。同うらうらのわかれ曰、まいりつかせ給へば、とりなきぬ。同疑曰、とりのなくもひさしくておほされ、よひあかつきのをこなひもおこたらず。撰集抄曰、あかつきの鳥のこゑもいたく身にしみて、あはれにのみなりまさり侍しかば。又曰、あかつきには心のすみて、わかれをしたふ鳥の音などことにあはれに侍り

集註 日本書紀卷第二十九曰、天武天皇白鳳四年夏四月庚寅詔ニ諸國ニ曰、自今以後、制ニ諸漁獵者ニ、莫レ造ニ檻穽ニ及施機槍等之類ニ。亦四月朔以後、九月三十日以前ニ莫レ置ニ比滿沙伎理梁ヲ、且莫レ食ニ牛馬犬猿雞之宍ヲ、以外ハ不レ在ニ禁ノ例ニ、若シ有レ犯者罪レ之。三代實錄卷第三曰、淸和天皇貞觀元年十一月十七日、戊辰未ニ鷄鳴ニ、大甞會祭礼既ニ訖。同卷第十八曰、貞觀十二年五月九日庚申、勅答曰、況亦先ニ天雞ニ而早ク起。同卷第四十一曰、陽成天皇元慶六年二月廿八日、辛丑、天皇於ニ弘徽ノ殿ノ前ニ、覽ニ鬪雞ヲ。同卷第四十六曰、光孝天皇元慶八年十一月廿三日庚辰、未ニ鷄鳴ニ大甞會祭礼既ニ訖レリ。延喜式卷第三曰、霹靂神祭。鷄一翼。同卷第四曰、伊勢太神宮。操ニ正殿心柱ヲ祭雞一翼。鎭ニ祭宮地ニ、鷄一翼。太神宮所攝宮地鎭料、雞八翼。度會宮攝宮地鎭料、鷄二羽。造ニ船代ヲ祭、雞四翼。皇太神宮儀式帳

操
採
零本

日、次取吉日、山口神祭用物、雞二羽。雄一、雌一。次取吉日當正殿祭、用物雞二羽。雄一、雌一。次取吉日、宮地鎭謝之用物、雞二羽。雄一、雌一。次取吉日、爲造御船代云云雞四羽。鎭祭、荒祭月讀瀧原伊雜四宮地用物、雞八羽。地別二羽。源氏物語あげまき曰、曉のわかれやまだしらぬ事にて、げにまどひぬべきをとなげきがちなり。庭とりもいづかたにかあらん、ほのかにをとなふに、京思いでらるゝ山ざとのあはれしらるゝこゑ〳〵にとりあつめたる朝ぼらけかな。女君へ鳥のねも聞えぬ山とおもひしを世のうきことはたづねきにけり。中右記曰、寛治八正廿八、堀川院早旦參內於殿上小庭御覽鬪鷄數刻、無勝負、各可醜楚之歟。二月廿八日午後、与源中將參內於殿上小庭御覽鬪鷄。古今著聞集卷第八曰、鳥のねもはや聞ゆれば 同卷第二十曰、承安二年五月二日、東山仙洞にて鷄合の事ありけり。袋草紙曰、長元六年白川ノ院子日記云、當日鷄鳴以前殿下移御云々。九代畧記曰、朱雀天慶元三四、於御前有鬪鷄事、十番爲限。曾我物語卷第六曰、やごゑといふも、にはとりのよやしりふるとあけやすく。催馬樂曰 鷄鳴。とりはなきぬてふ、かささくらまろが、しがもの を、おしはしきたりゐてすれ、ながこなすまで。高倉院嚴嶋御幸記曰、いづれのさとにか、にはとりのほのかにきこえて、いとものあはれなり。又曰、あけがたにありしかば、やしろのには鳥こゑ〴〵あけぬとなふ。年中定例記曰、三月三日、御對面以後鷄合あり。三番五ケ番より、一はづゝまいらせらるゝ。今一は、御牛飼持參。やがて彼者あはせ申候。高倉院升遐記曰、あけゆく鳥のこゑもおしまず。平家物語卷第四曰、時こくをしうつつて、せきぢのにはとりなきあへり。伊豆のかみ、爰にて鳥なひては、六はらへは、ほくちうによせんずれ云々。同卷第七曰、明がたの月白くさへて、けいめい又いそがし。同卷第十二曰、けいしんあかつき

をとなへて、夜もあけぬ。吾妻鏡卷第十八日、承元々年三月三日、於ニ北御壺一、有ニ雞鬪會一。同卷第三十八日 寶治元年三月三日、營中有ニ鬪鷄會一也

【形狀】 釋日本紀曰、鷄欲レ鳴之時、先振レ羽也。曾我物語曰、おなじくすもふの事云こや七はちからおとりなれ共、手あひはましてぞみえにける。三郎はちからはまさりてありければ、くまんとのみにて、さしつめむすべばすてゝぬけ、なぐればかけてまはりしは、たうくはのせちゑのにはとりの、心をくだき、はをつがひ、せうぶをあらそふとりあはせも、これにはすぎじとぞ見えたりける

○女鳥 類聚雜要抄　【漢名】 雌雞

【集註】 類聚雜要抄曰、今勘之、郁芳門院御立后時、色々ノ裏ヲ女鳥(メトリ)羽ニヒ子 利重天、折目ヲ上ニシテ被引之。江家次第卷第四曰、執筆事。大間、或ハ先請ニ外記一付ニ折目一而返レ之ヲ、於ニ御前一帖レ之、有レ使ムレ餘置レ後帖也。如ニ葉子(ハシノ)妻(ツマカサネ)重一帖レ之、長一尺四寸許不ニ參差一。平家物語卷第十一曰、景淸うたすな、つゞけやとて、二百よ人なぎさにあがり、たてをめんどりばにつきならべ、源氏こゝを寄よやとぞまねびたる。太平記曰、寄手は楯を雌羽につき

○鷄のひな 枕草紙　鷄雛　【一名】 にはとりの子 枕草紙曰、あはれなる物、にはとりの子いだきてふしたる

【集註】 弁内侍日記曰、三月御鳥合なり云こみすのうちより出されしかば、万里小路の大納言たまはりて、あはせられし。ゆゝしかりし君なり、ひよ〳〵より御所に御手ならさせおはしまして、かひたてられしいみじさばかりにてこそ侍れ

【形狀】 枕草紙曰、鷄(にはとり)のひなのあしだかに、しろふおかしげに、きぬみじかなるさまして、ひよ〳〵とかしがましくなきて、人のしりに

たちてありくも、又おやのもとに
つれだちありく見るもうつくし

○雞ノカイコ 砂石集 [漢名] 鷄卵 本草 [今名] タマゴ 正字通曰、說文凡物無乳者卵生、鳥卵中黃爲陰、外白爲陽、魂魄相待也 [一名] 卵子 皇太神宮儀式帳曰、次取吉日、爲正殿祭用物、卵子十丸○天文寫本和名鈔曰、卵。陸詞曰、卵鳥胎也。或云、凡物無乳者卵生。和名加比古。倭名鈔曰、卵。和名加比古。野干按孵卵化也。俗云、加倍流。天文寫本和名鈔曰、孵。俗云、加閉流。頓醫抄曰、猪膽ヲ、ニワトリノカイコノ大キサホドヲ云云 雛(ニハトリ)ノ子(コ) 砂石集曰、雛子(ニハトリノコヲ)殺酬事。尾州ニ若キ女房、子ニクハセントテ雛(ニハトリ)ノカイコヲアマタ殺メケリ [集註] 延喜式卷第四曰、伊勢太神宮。山口祭、雞卵十枚。●操ニ正殿ノ心柱ヲ祭、雞卵十枚。鎭ニ祭宮地、雞卵廿枚。太神宮所攝宮地鎭料、卵四十枚。宮別等分。度會攝宮地鎭料、雞二翼 卵十枚。造ニ船代ー祭、雞四翼。卵廿枚。皇太神宮儀式帳曰、次取吉日、山口神祭用物、雞卵十枚。●次取吉日、宮地鎭謝之用物、雞卵二十丸。次取吉日、爲レ造ニ御船代木ニ雞卵廿丸。鎭祭、祭月讀瀧原伊雜四宮地用物、雞卵卅丸

○須毛利(スモリ) 天文寫本和名鈔 [漢名] 鷇 正字通 字典曰、鷇。說文、卵不レ孚也。玉篇、不レ成レ子曰レ鷇。正字通曰、鷇法言先知篇雛之不才其卵鷇矣。君之不才其民野矣。註鷇敗也 [一名] 須毛里 倭名類聚鈔曰、鷇。呂氏春秋云、雞卵ニ多レ鷇、音段。和名須毛里。天文寫本和名鈔曰、鷇和名須毛利。不成子也 [集註] 大和物語曰、〽なき人のすもりにだにもなるべきにいまはと
かへるけふのかなしさ。抄云、すもりとは鳥の巢に、かいご

のかへらずして残をいふ之

○小國（シヤウコク）明月記　今名　シヤウコク

按寧波名勝志曰、定海縣唐開元間立明州有翁山縣則海中昌國地今隷定海即翁州是也　昌國城在東海中翁州本翁山縣唐大暦年發宋熙寧間復立昌國縣元至元間升爲州我洪武二十年以其縣居海島分徙其民僅存在城五百戸隷定海縣元吳萊記署云昌國古會稽海東洲也東控三韓日本北抵登萊海泗南抵今慶元城又云　昌國中多大山四面皆海人家居篁竹蘆葦間或散在沙墺非舟不能往來田種絕少類入海中捕魚仰穀他郡抱朴子云古仙樂登名山海上大島如會稽東翁洲者今之昌國也。觀此則小國即昌國也。蓋古遣唐使着寧波明州即其地所産以美鷄携歸於日本、便稱其昌國地名爲鷄名者也○東西洋考曰、嘉靖二年再奉使至是時國王源義植孱不能御其酋諸酋爭貢以邀互市及賞賚右京兆大夫高貢使宋素卿來左京兆大夫內藝興遣宗設兼道先素卿至俱留寧波故事夷使以先後至爲序市舶中官賴恩墨素卿賄先素卿宗設大忿攻素卿遂躪諸旁縣奪舟去御史以聞下素卿獄論死因罷市舶絕貢者十七年。國史略曰、大永三年、是歲高國遣商船於明以明人宋素卿爲之使、註初宋素卿歸化也、因細川政元謁將軍義澄、遂奉仕之。義澄薨後、主高國家、高國遣商船於明、因以爲使。是時大內義興亦遣商船於明、以宗設爲使、至寧波府、素卿與宗設爭舶來先後○鷄國名ヲ稱シヿ、弁內侍日記、播磨ト云鳥ノ名ヲ載タリ　集註　明月記曰、建永元年八月六日、未終許參城南寺、出御之後無殊事、及秉燭退下、入夜參上、少將忠淸來、觸人々云、殿上人各可尋進鷄。小國也。明後日可被合、壯年之輩明曉打出、赴遠路可取之田相議、

之 刊本
々 同
以 同頭
作 同候
合ノ下 同
リ 鳥ア 同
シノ 鳥ナ
かノ下
群本と
りアリ

深更名謂ノ退下ス。七日、天晴、雞名字ハ小シヤウ之ヲ尋ネ出ス。八日出ニ御城南寺ニ、鳥合、予所レ進一勝、存外祭飼、明日可レ進出有レ仰。九日、午時許參ニ城南寺一。相ニ具雞一。出御之後小々被レ合レ鳥、小時御于時社以御所、忠信、清親、童部等作被合廿番、鳥又被合勝鳥、所進鳥二勝、被合鳥四、遂不北云云存外事歟

○あかきには鳥 平家物語

漢名 丹雄雞 本草 法苑珠林曰、以丹雄雞一隻

集註 文德實錄卷第十曰、天安二年六月壬辰雷雨、此夜、左近衛大宅年繼於北野ニ見レ之、當ニ稲荷ノ神社ニ、空中ニ有リ兩雞相鬪一、其色似リ赤ニ、相鬪之間、毛羽散落地、雞ニ相隔ト、見ニ似タリト眼前ニ、良久ノ而止ム、此ノ語類ニ妖妄ニ、而記 怪ヲ也。平家物語卷第十一曰、こゝにきの國の住人、くま野の別當たんぞうは、平家ちうをんの身なりしが、たちまちに心がはりして、平家へや參らん、源氏へや參らんと思ひけるが、まづたなべのいま熊野に七日さむろうし、御かぐらをそうして、ごんげんへきせい申ければ、たゞしらはたにつけとの御たくせん有しかども、なをうたがひをなし參らせて、しろきには鳥七ツ、あかきには鳥七ツ、是をもつてごんげんの御まへにて、せうぶをせさせけるに、あかきには鳥一ツもかたず、みなまけてぞにげにける。さてこそ源氏へまいらんとは思ひさだめけれ

形狀 辨内侍日記曰、三日の御鳥あはせに、ことしは女房のもあはせらるべしときゝしかば、わかき女房だち、心つくしてよきとりども尋られしに、宮内卿のすけどのは、爲教の中將が、はりまといふ鳥をいださんなどぞありし。万里小路大納言のまいらせられたるあかの、いしどさかあるかけ、いろもうつくしきをたまはりて、あきつぼねにほこらかしてをきたるを、もりありといふ六位が、そのとりきとまいらせよといふ。かまへてとりなどに

あはせらるまじきよし、よく〳〵いひて、まいらせつ。とばかりありて、かためはつぶれ、とさかよりちたり、おぬけなどして、見わするほどになりてかへりたり　○しろきには鳥

平家物語

漢名　白雞　本草綱目附方。廣博物志曰、忽有一白雄雞

集註　延喜式卷第一曰、不レ奠ニ幣案上ニ祈年神四百卅三座云云。社三百七十五所。座別云云。右神祇官所レ祭云云、御歲社加ニ白馬白猪白鷄各一ヲ。古語拾遺曰、宜下獻ニ白猪白馬白雞一ヲ以解中其怒上云云是今神祇官ニ以ニ白豬白馬白鷄ヲ祭ニ御歲ノ神ヲ之緣也。江家次第曰、二月四日祈年祭云云白鷄豫繫之。平家物語卷第八曰、此のぶたかの卿は、御むすめおほくおはしましければ、何れにても女御后に立まいらせたく思はれけるが、人の家にしろひにはとりを千かひつれば、其家に必后の出來と云事の有ばとて、にはとりのしろきを千そろへてかはれたりける故にや、此御むすめ皇子あまたうみまいらさせ給ひけり。源平盛衰記卷第卅二曰、七條修理大夫信隆卿は、白鷄を千羽飼ぬれば、必其家に王孫出來御座すと云事を聞て、白鷄を千羽と志して飼給ける程に、後には子を生、孫を儲て、四五千羽も有けり、鶏などは云斗なし。鳥羽田井、西京田などに行て、稲を損じ麥を失ふ。縣りければ信隆の鷄とて、人もてあつかへり。此こ彼にして打殺けれ共、生子は多し、七條八條に充滿て、盡べき樣も不見けり。弁內侍日記曰、顯方の白鳥ことにゆゝし。右記曰、又此宗以ニテ白鷄鳴尾ヲ爲ニ相應物ト　○クロカゲ　運添壒囊抄

漢名　烏鷄　廣博物志

今名　クロキニハトリ

集註　廣博物志曰、鄙諺有之、黃雞生レ卵、烏雞伏之、但知ニテ其爲ニ烏雞之子ト、不レ知ニ其爲ルコトヲ黃雞之兒ナルヲ

齊明ハ天智ノ誤

㸃囊抄曰、烏雞事。伊勢物語ニ、キツニハメナデ、クダカケノトヨム、其說イカン。此ノ物語ノ詞ヲバ、歌仙ノ讀傳テ口傳トス。非歌人ノ口入ニハ不レ能ハ、常ニ聞ク所ハ、狐ニクラハレテ、クヅ庭鳥ト云フ說、又證本ニハ、クロカケト書キタリ。烏雞ト也云 云庭鳥ノ名クダト云事アレバ、只庭鳥ト云ハントテ、クダカケト云フ、何ノ過失カアルベキ。雞ヲクタカケト云ベキ謂レアレバ、黑キ庭クヅニハトリナンド、トリナサズトモアリヌベシ

○いろ〳〵のふある庭鳥 四季物語

形狀 歌林四季物語曰、又淸涼殿の御まへには、けふの御なぐさみにとて、いとなきみやごたち、まうのぼり、わらはべをめして、あるかぎりおほやけの外までもたづねものして、いろ〳〵のふあるべき庭鳥をあつめて、さま〴〵に鬪鷄のゑんあり

○くだかけ 伊勢物語

今案 伊勢物語古意總考曰、くだかけは百濟雞ならんと我友奧津正辰てふ人のいへる、實にかなへり。神代の記に、常世の長鳴鳥といへるも、其初外國より渡れる故なるべく、後にしやむ鷄、ちやぼ鷄などいふも、出たる所を名によび侍るをもて、くだらよりわたれるによりてくだと云

○四足鷄 日本書紀

雲南通志曰、天啓四年八月武定産鷄四翼四足。廣博物志曰、後魏書正始元年、獻四足四翼鷄

集註 日本書紀曰、齊明天皇十年、是歲、讚岐國山田郡人家有ニ鷄子四足者一。天武天皇白鳳十三年十一月、倭葛城下郡言、有ニ四足鷄一。扶桑略記第二曰、應神天皇四年癸巳、鷄生ニ鵲巢中一、生子四足。同第五曰、天智天皇九年、讚岐國貢ニ四足鷄一。同廿五裡書曰、承平四年三月十一日、山城國進ニ千鷄雛一翼一、其躰白レ頸下、相ニ分二躰一、有ニ四翼四足二尾一

○雌鷄化雄 三代實錄

雲南通志曰、順治

四年南城外雌雞化雄　集註　三代實錄卷第十六曰、淸和天皇貞觀十一年十一月十三日丙寅、隱岐國言、雌雞化爲レ雄。日本書紀卷第二十九曰、白鳳五年夏四月云云是日、倭國飽波郡言、雌鷄化レ雄

〇瑞鷄　日本書紀　集註　日本書紀卷第二十九曰、天武天皇白鳳四年正月壬戌、是日、大倭國貢二瑞鷄一。同五年夏四月、倭國添下郡鸓積吉事貢二瑞鷄一、其冠似二海石榴華一

以倍八止（イヘバト）　倭名類聚鈔　漢名　鴿　本草　今名　ドバト

本草綱目曰、鴿處處人家畜之

一名　以閇波土　天文寫本倭名鈔〇倭名鈔曰、鴿。本草云、鴿。頸短灰色者也。和名以倍八止　家はと　源氏物語。言塵集曰、家ばと。鴿此一字也。家と云文字なし

伊戸波止　新撰字鏡曰、鴿。屈音。鵓鳩、伊戸波止。鳺、他口大口二反　伊戸波止。鳺、方于反、伊戸波止〇字典曰、鴿。說文、鴿鳩也。カムリドリ也〇字典曰、鳺。說文、似鳧黑色〇正字通曰、鳺同雉

伊惠乃波止　本草類編曰、白鴿、和伊惠波止　万波止　新撰字鏡曰、鶏。於遙反、鴿也。鶏字典ニ出未詳。大和國風土記曰、宇陀郡南限鴿宮

集註　大和國風土記曰、宇陀郡貢鴿。康平記曰、大饗料理次第、四獻鳥羹鴿。源氏物語夕顏曰、たけのなかに家ばとゝいふ鳥の、ふつゝかになくを聞給て、かのありし院にこの鳥のなきしをいとおそろしと思たりしさま云々。高倉院升遐記曰、院かくれさせ給ひて、あしたより、はとの二つがひあるが、御所のなげしにすみて、日ごとの御仏事にもみて、五十日すぎても、ほかへもゆかで、は

官(割註ノ)刊本近臣

建曆二年十月十日刊本此記事ナシ

かをかはしつゝ、すみなるゝもあやしく云々。吾妻鏡卷第十七曰、建仁三年七月四日庚午、未尅、鶴岡八幡宮、自下經所與ニ下廻廊一造合之上、鴿三喫合、落レ地一羽死。明月記曰、承元二年九月廿七日、夜半許西方有レ火、望レ之煙甚細ノ高シ、朱雀門燒亡云云。廿八日、傳ヘ聞ク、常陸介朝俊、(生于朝隆卿末孫、只以弓馬相撲爲藝、殊官也)取ニ松明一昇レ門取レ鳩、歸去之間、件ノ火成ニ此ノ災一、近年天子上皇皆好レ鳩給、長房卿、保教等本自養レ鳩、得レ時而馳走、登ニ舊塔鐘樓一求レ取鳩、此事遂以滅ニ社稷一、嗟乎悲哉。例幣日見ニ大宮大路一、只有ニ灰燼之跡一無ニ人家一、眞洛之滅亡尤可ニ奇驚一事也。是又非ニ鳩一事一、只國家之衰微歟。●建曆二年十月十日、又今日院於馬場殿有鳩合負態。六代勝事記曰、將軍舘より出給ふに、鳩鳥しきりにかけり

今案 吾妻鏡卷第十九曰、承元二年十月廿一日丁亥、東平太重胤遂ニ先途一、自ニ京都一歸參。即被レ召ニ御所一、申ニ洛中事等一云云。次去月廿七日夜半、朱雀門燒亡、常陸介朝俊、朝隆卿末孫、(相撲達者)取ニ松明一昇レ門、取ニ鳩子一歸去之間、件火成ニ此災一、凡近年天子上皇悉令レ好レ鳩給、長房保教等、本自養レ鳩、得レ時號殊奔走云云。觀此則古鳩鴿通用セリ。門上ニ巢者ハ鴿也。鳩ハキジバトニメ、樹葉ノ叢中ニ巢エリ

形狀 太平記卷第二十一曰、聲ハ塔ノ鳩ノ鳴ク樣ニテ云云○大和本草曰、鴿イヘバト、タフバト、毛品多シ、白者性良

○白鴿 續日本紀

集註 續日本紀卷第一曰、文武天皇三年三月甲子、河內國獻ニ白鳩一。同卷第三曰、元明天皇慶雲三年五月丁巳、河內國石川郡人、河邊朝臣乙麻呂獻ニ白鳩一、賜ニ絁五疋、絲十絇、布二十端、鍬二十口、正稅三百束一。同卷第六曰、和銅六年春正月戊辰、備前國獻ニ白鳩一。靈龜元年春正月甲申朔、丹波國獻ニ白鴿一。同卷第八曰、元正天皇養老四年春正月甲寅朔、太宰府ヨリ獻ニ白鳩一。同卷第廿九曰、稱德天皇神護景雲二年五月癸未、伊勢ノ國

負弁ノ郡人猪名部ノ文丸献ニ白鳩ヲ賜ニ爵二級ヲ當稲五百束ヲ。吾妻鏡巻第四曰、元暦二年四月廿一日、梶原平三景時飛脚、自ニ鎮西ニ參着云云次白鳩一羽、翻ニ舞于船屋形上ニ當ニ其時ニ平氏宗人々、入ニ海底ニ

古名録禽部巻第七十　終

古名錄禽部卷第七十一目錄

蕃禽類

通計十七種

異禽類

尾山一鳥
恠鳥 吾妻鏡
怪鳥 百練抄
鵜の大さなるくろき鳥
白身黒頭鳥
有鳥如鵜
尾長白鳥
弥奈志古鳥（ミナシゴ） 姑獲鳥
怪鳥 太平記
恠鳥 同上
怪鳥 扶桑略記
水鳥
異鳥
靈鳥
守墓鳥
てんく

通計十六種

古名錄禽部卷第七十一

紀藩　源　伴存撰

蕃禽類

宮雀（クジヤク） 倭名類聚鈔 [漢名] 孔尺 本草

嶺南雜記曰、孔雀產二廣西一而羅定山中間或有レ之、雌者尾短無二金色一、雄者尾大而綠金翠奪レ目、其毛羽初春而生、四月後復凋與レ花相榮衰、自ラ愛二其ノ尾ヲ欲レハ棲息一セント必先擇二置レ尾之地一。本草綱目曰、按、南方異物志曰、孔雀大如レ鴈、高三四尺、不レ減二於鶴一、細頸隆背、頭裁二三毛一ヲ、長寸許、數十羣飛、棲二遊岡陵一、晨則鳴聲相和、其聲曰二都護一、雌者尾短無二金翠一、雄者三年尾尚小、五年乃長二三尺、夏則脫レ毛、至レ春復生、自レ背至レ尾有二圓文一、五色金翠相繞ニ如レ錢

[一名] 宮佐久 天文寫ハ和名鈔曰、孔雀、俗云宮佐久。倭名鈔曰、孔雀、俗云宮尺

くしやく 榮花物語御裳着曰、りんどうは、とふぐるまのかたちをつくりて、みつのくるまのかたをつくりたり。くじやく、あふむ、しやり、かりやうびんなどのかたをつくり

くじやく 同上

くざく 雅輔裝束抄曰、（孔雀）くさく

若狹國守護職次第トアルハ若狹國税所今富名領主代々次第ノ誤

大系本廿六に作る

論詞

のまろをいろ
くにかき

【集註】日本書紀曰、推古天皇六年秋八月己亥朔、新羅貢ニ孔雀一隻ヲ一。孝德天皇大化三年十二月、新羅遣ニ上臣大阿飡金春秋等ヲ一、送ニ博士小德高向黑麻呂、小山中中臣ノ連押熊ヲ一、來獻ニ孔雀一隻ヲ云云。續日本紀曰、文武天皇四年冬十月癸亥、直廣肆佐伯宿祢麻呂等至レ自ニ新羅一、獻ニ孔雀及珍物ヲ一。續日本後紀卷第十七曰、承和十四年九月庚辰、入唐求法僧惠雲獻ニ孔雀一ヲ云云。百練抄卷第四曰、三條天皇長和四年六月廿五日、大宋國商客周文商所レ獻孔雀、天覽之後、於ニ右大臣北南第一生ニ卵十一ヲ一。未レ化レ雛云云。●若狹國守護職次第曰、應永十五年六月二日に南蕃船着岸、彼帝より日本の國王への進物等、孔雀二對。日本記略曰、長和四年閏六月廿五日、大宋國商客周文商所レ獻孔雀、天覽之後、於テ二左大臣ノ小南ノ第ニ一、作リ二其ノ巢ヲ一養レ之ヲ。去四月晦日以後、生ニ卵十一丸ヲ一、時ノ人奇トレス之ヲ、或人云、此鳥聞テ二雷聲ヲ一孕ム、出ト二因緣自然論ニ一云云。山槐記曰、治承二年十一月十一日、午終剋、依御召仁和寺宮令持孔雀尾給云云牽上香伴僧十人令參給。扶桑略記第三曰、推古天皇六年秋八月、新羅王獻ニ孔雀一隻ヲ一、天皇看奇ニ其美麗ヲ一。太子奏曰、是不レ足レ怪　有ニ稱レ鳳者一、在ニ南海丹穴之山ニ一、非ニ聖人德一不レ能レ致レ之。同第廿三曰、醍醐天皇延喜九年十一月廿七日、太宰少典御船高相、領ニ唐人貨物及孔雀ヲ一到來。裡書曰、延喜十一年三月廿六日、有ニ孔雀雌一翼一、於ニ右近陣一養レ之。近來產レ卵八員。又去年夏時同產ニ三卵ヲ一、然而未レ至レ爲レ雛。此鳥无レ雄、以レ何產哉。同廿四日、延喜十九年七月十六日、交易唐物使藏人所出納內藏大屬當麻有業獻ニ孔雀ヲ一、此唐人鮑置求所レ送ニ太宰大二ニ一也。其毛彩鮮華、勝ニ於往年所レ來。但其尾經レ夏折落、午剋、使ニ右近少將實賴ニ一奉ニ覽孔雀於仁和寺（宇多）ニ一。中外抄曰、久安四年四月十八日、祗候御前、被仰雜事之次、仰云、孔雀ハ何ナル物ゾ。申云、古仙ハ非付指畜論詞悉度之來ニ本朝ノ時火事候、聞雷

續群本、陽祥に作る
ほゝ同
示之に作る

聲孕。仰云、聞雷聲孕中、尤有興、故忠壽座主ほゝ、爲雷無恐之物ハ三也、人界ニハ轉輪聖王、獸には師子、鳥ニハ孔雀也。雷与孔雀一物也。宇津保物語俊蔭曰、其川より孔雀出來て、その川を渡しつ。又曰、花の上には孔雀つれて・あそぶ云云

鸚鵡　日本書紀

廣東新語曰、澳門有西洋鸚鵡、大紅者內毳毛黃、大綠者內毳毛赤、每拔其羽、則赤者爲黃、綠者爲赤、表裏俱變、有純白者五色者、翅尾作翠縹、青黃裏白腹者、皆來自海舶瓊州所產、多紺綠羽、有極細花紋、名曰鸚哥、兒女喜與之狎、故哥之以其如嬰兒之學母語、故曰鸚鴞、鴞作鵡者誤也、然撫其膺則聲、其背則瘖、五色者能兼番漢二語、白者黑嘴鳥爪鳳頭、撫之有粉粘著指掌、如蛺蝶翅、頂上有黃毛、上聳喜則披敷若蘭花瓣、又若芙蕖、名曰開花、亦名芙蓉冠、其產羅浮者大如母鴨、色玉雪、亦人舌能言、凡鳥四指三向前一向後、獨此鳥兩指向前兩指向後、行則啄地、然後兩足從之。大明一統志曰、鸚鵡能言鳥、建炎筆錄、郭浩以秦鳳提點形獄按邊至隴口、見一紅一白鸚鵡鳴於樹間、問上皇安否、浩詰其因、蓋隴州歲貢此鳥、徽宗置之安妃閣、教以詩文、及宣和末、使人發還本土、二鳥猶感恩不忘、浩因賦詩、隴口山深草木荒、行人到此斷肝腸、耳中不忍聽鸚鵡。猶在枝頭說上皇、

【一名】あふむ　榮花物語

【集註】日本書紀曰、孝德天皇大化三年十二月、新羅遣上臣大阿飡金春秋等、送博士小德高向黑麻呂、

若狹云との誤なる事前に頭註す

小山中中臣連押熊ニ來獻ニ云云鸚鵡一隻ニ。齊明天皇二年、小山下難波吉士國勝等、自百濟ニ還獻ニ鸚鵡一隻ニ。天武天皇白鳳十四年五月、新羅王獻物、鸚鵡二隻云云。續日本紀卷第十一曰、聖武天皇天平四年夏五月庚申、金長孫等拜レ朝。進ニ種々ノ財物、幷鸚鵡一口ニ。續日本後紀卷第十七曰、承和十四年九月庚辰、入唐求法僧惠雲獻ニ云云鸚鵡三云云。同卷第二十曰、嘉祥三年二月甲寅、御病殊劇、放ニ諸鷹犬及籠鳥ニ唯留ニ鸚鵡ニ。百練抄卷第四曰、後朱雀天皇治曆二年五月一日、大宋商客王滿獻ニ鸚鵡幷種々靈藥ニ、於ニ鸚鵡ニ者死去畢扶桑略記相同也。同卷第五曰、白河天皇永保二年八月八日、覽ニ大宋商客楊宥所レ獻之鸚鵡ニ。九月十一日返ニ給之ニ。若狹國守護職次第曰、應永十五年六月廿二日に南蕃船著岸、彼帝より日本の國王への進物等、鸚鵡二對、其外色々

形狀　枕草紙曰、ことゞころの物なれど、あふむいとあはれ也。人のいふらんことをまねぶらんよ。本朝無題詩曰、聞ニ大宋商人獻ニ鸚鵡ニ。大江佐國。云云巧語能言同ニ弁士ニ、綠衣紅觜異ニ衆禽ニ云云商客献來鸚鵡鳥云云。中外抄曰、久安四年四月十八日、又仰云、鸚鵡言ノ由聞食、今度鳥不言如何。申云、唐人の唐音の詞を唱也。日本和名詞不可唱也〇本草啓蒙曰、白鸚䳇ハ形大ニシテ雌雞ノ如ク、全身白色ナリ。塒ニ立コト鷹ノ如シ。其頭大ニ、觜モ亘大ニシテ短ク、長濶一般ナリ。上喙ノ末下ニ出ル、色青黑シテ末ハ微白色、下喙ハ鋸齒アリテ舌ヲ以テ物ヲ食フテ、觜ヲ動カサズ。凡鸚䳇嫩ナル者、雌雄共ニ啄黑シ、雄ハ長シテ雌ハ變ズルコトナシト云

鸚歌 明月記　漢名　鸚哥 廣東新語　今名　インコ

云刊本とニ作ル、と云鳥ト本文ナリ　自刊同

【形狀】 明月記曰、嘉祿二年二月七日、朝ク、宗淸法印送生〓、〓歌云云鳥爲一見也。可進殿下云云、其鳥大ノ白レ鴨、色青、毛極濃柔、觜如レ鸚而細、食柑子栗柹等云云、唤人名由雖聞其說、當時無音、不經時刻返了
○本草啓蒙曰、一種インコト呼モノアリテ暹羅シヤムヨリ來ル、即鸜鵒ノ音ナリ。大サ伯勞モズノ如ク、或ハ伯勞ヨリ大ナルモアリ、凡ソ數十種、皆羽色鮮麗比スベキモノナシ。丹青絲造皆及バス

鴝鵒 續日本紀

【今名】 ハヽテウ

證類本草曰、鴝鵒。唐本注云、鳥似レ鵙而有レ幘者是。本草綱目曰、鸜鵒。身首俱黑、兩翼下各有ニ白點一、其舌如ニ人舌一、剪剔ノ能作ニ人言一、嫩則口黃、老則口白、頭上有ニ幘アル者ハ、亦有ニ無レ幘者一

【集註】 續日本紀卷第十一曰、聖武天皇天平四年夏五月庚申、金長孫等拜レ朝、進ニ種々財物、幷鴝鵒一口ヲ一新羅使云云

【形狀】 ○大和本草曰、鸜鵒、俗ニ八八鳥ト云、昔年長崎ニ異國ヨリ來ル、鳥ニ似テ小ナリ、斑鳩ノ大サホドナリ、黑色ナリ、諸鳥ノ語ヲ學ブ、人語ハ學バス。本草啓蒙曰、鸜鵒只風切ノ本微シ白シ、翅ヲ開ケバ白色、觜脚黃色、目赤黃色、觜根鼻上ニ少シカタツマリタル毛アル贅コブノ如ク高ク出

ヲホカリ 釋日本紀、按ヲ當レニ作レ於

【漢名】 鵞 本草

【今名】 タウガン

本草綱目曰、鵞鳴自ラ呼フ、江東謂ニ之ヲ舒雁一、似レ雁而舒遲也。江淮以南多畜レ之、有ニ蒼白二色及大而垂ルレ胡者一、並綠眼黃喙紅掌善鬪、其夜鳴ニ應レ更。事類鵞賦曰、有曲頂之禽垂緩胡之纓浮白毛兮撥紅掌泛淸波兮唼綠

萍毎伏卵而隨月亦長鳴而應更○倭名抄國郡部曰、周防國玖珂、珂音如鵝。釋日本紀曰、鵝。音可讀也。ヲホカリ

【集註】日本記略曰、弘仁十一年五月甲辰、新羅人李長行等進二羖䍽二一。古事記曰、內ニ剝鵝皮ニ剝爲ニ衣服一。日本書紀曰、雄略天皇十年秋九月乙酉朔戊子、身狹村主靑將二吳所レ獻二鵝一、到ニ於筑紫一、是鵝爲ニ水間ノ君犬ニ所レ嚙死。扶桑略記廿三裡書曰、延喜三年十一月廿日、大唐景球等獻ニ白鵝五角一

【形狀】○本朝食鑑曰、鵝。唐鴈、有ニ蒼白二色一、今本邦家家所レ養者、大抵白鵝也。形大ニシテ於鴻一、而垂胡頂前背後高起如レ瘤、綠眼黃喙紅掌脚近レ臎而能步。大和本草曰、鵝。俗ニタウガント云、卵大ニ其聲大ナリ。本草啓蒙曰、形鴈ニ似テ大ナリ。蒼鵝ハ京師ニ無ク、白鵝最多シ。全身白色ニシテ尾脚共ニ短ク頸長シ、ソノ步スルコト鴨ノ行ガ如シ。嘴大ニシテ黃色、上ニ瘤アリ。頭ハ深黑色、ヨク人ニ馴ル。頭ヲ押ユレバ愈頭ヲ擧グ、人言ヘバ鷲モ亦言フ○帝王編年記曰、或記云、法皇花山御遁世之後、御同宿書寫山上人之許、件上人者延喜聖主御孫、有明親王之息也、手ノ俣滿合テ同ニ鵝足一、依爲ニ異人一

○加牟乃安不良 本草類編

【漢名】白鵞膏 本草　證類本草曰、白鵞膏、孟詵云、脂可レ合ニ面脂一。本草綱目曰、臘月煉收。錄類精微曰、鵞脂

【集註】本草類編曰、白鵝膏。和加ム乃安不良

○之也己 本草類編

【漢名】鷓鴣

々底本ニ」

桂海虞衡志曰、鷓鴣大如竹雞而差長、頭如鶉身文亦然、惟臆前白點正圓如珠。柳河東集曰、楚越有鳥甘且腴、嘲々自名爲鷓鴣。注鷓鴣鳥如雉黒色、出南越、其鳴自呼南北不北

集註 漢塩草曰「鷓胡と云鳥のうは毛のくれなゐにちりし紅葉の殘成けり。鳥のうはけの紅とは、鷓胡と云鳥は、さむがりをする鳥也。仍秋の末になれば、もみぢのちるをせなかにおいかさねて、霜雪の寒をふせぐ也。み山にあり、鳴聲すごくさびしといへり。廣東新語曰、鷓鴣早暮有霜露則不飛、飛必啣木葉以自蔽、霜露微濡其背、聲爲之啞、故性絶畏霜露

形狀 ○本朝食鑑曰、鷓鴣。形似母雞、頭如鶉、臆前有白圓點、背毛有紫赤浪文、性畏霜、故以稻草煖之。大和本草曰、鷓鴣。昔年日本ニ渡ス、矮雞(チヤボ)ノ雌ニ似テ、頭ハ鶉ノ如シ。本草啓蒙曰、大サ矮雞(チヤボ)ノ雌ニ似タリ。頂黒色、目上ニ赤條アリテ眉ノ如シ。目ハ黄黒色、目下白色、頰ハ黒色、咽頂白色、背胸腹黒シテ白圓文アリ。眉ハ赤色ヲ帶ブ、翼ノ末淺黒ニメ黒斑アリ。ソノ上ハ白文アリ。背下赤色ニメ黒文アリ。ソノ下及尾褐色ニメ小浪文アリ。尾甚短シ。觜淡靑ニメ黒色ヲ帶ブ、脚ハ黄色雞足ニ似タリ

吉祥鳥 扶桑略記 漢名 佛現鳥 華夷鳥獸續考

集註 倘湖樵書曰、余按峨眉山有佛光起于溪澗、先有佛現鳥、其聲如云佛現、此鳥鳴則佛光隨見。華夷鳥獸續考曰、佛現鳥蜀ノ大峩峯普光殿ニ有佛現鳥、狀類鴝鴿、近人其聲圓轉、山僧ノ晉、爲佛現鳥

略記、元慶八年三月廿六日

扶桑略記第廿二、僧北宗觀傳曰、登ニ五臺山一、巡ニ礼聖跡一、即於ニ西臺維摩詰石之上一、見ニ五色雲一、於ニ東臺那羅延窟之側一、見ニ聖燈及吉祥鳥一

高麗山々柄 吾妻鏡

集註 吾妻鏡卷第三十九曰、寶治二年十月廿五日戊戌、鵜津豊後左衛門尉忠綱、以ニ高麗山々柄一獻ニ將軍家一、其色白而如レ雪、其聲不レ相ニ似吾國鳥一、幕府賞翫只此事也

唐鳩 吾妻鏡

集註 吾妻鏡卷第十七曰、建仁三年六月卅日丙寅、辰剋、鶴岳若宮寶殿棟上、唐鳩一羽居、頃之頓落ニ地死畢、人奇レ之

著聞集廿

もろこしの鴨(かも) 古今著聞集

集註 古今著聞集曰、天福の比、殿上人のもとに、もろこしの鴨をあまたかはれける中に、そのはよけれ共、片目つぶれて有けり。その鴨、行がたをしらずうせたりければ、いか成もの、ぬすみたるやらんと、もとめられけれども見へず。四五日斗有て、此鴨出来にけり。そのはねにふだを付たりけるを、あやしと取て見れば、かくなん書たりける。「ふるさとにめぐりあへとてなべくるまのかたはのかもをかへしやる哉

高麗鴨(ヒヨ) 駿府政事錄

【漢名】 採桑子 江陰縣志

【今名】 シマヒヨ

駿府政事錄曰、慶長二十年閏六月九日、松浦肥前守獻高麗鵯(ヒヨトリ)、頸黑腹白背赤足赤○本朝食鑑曰、嶋鵯(シマヒヨトリ)、狀類レ鵯(ヒヨ)ニ而頭頸至レ臆雪白、背翅尾純黑有レ光、腹灰黑、觜脛倶紅、聲喧似レ鵯　有下近世自ニ蕃國一來上○字典曰、鵯。爾雅註、小而多羣、腹下白。コクマルガラス也

【集註】 江陰縣志曰、採桑子、喙紅身黑頭頭白、桑椹熟時有之、又名桑白頭

鴆 續日本紀

【集註】 本草綱目曰、按、爾雅翼云、鴆似レ鷹而大、狀如レ鴞紫黑色、赤喙黑目、頸長七八寸。按、品字箋曰、孔雀頂有レ毛、長一二寸、以レ之畫ニ酒中一、飲レ之立死、又謂ニ之ヲ鴆毒一焉卽孔雀頭上鬣毛也　又鴆注云、本草陶弘景謂鴆與ニ𪀚日一爲ニ一種、鴆如ニ孔雀一、𪀚日狀如ニ黑傖雞一、作レ聲似レ云ニ同力一、江東呼爲ニ同力鳥一。按今交廣人皆云𪀚日卽鴆更無如孔雀者然孔雀頂亦可レ毒レ人如レ之者知其毒非レ肖ニ其形一也

【集註】 續日本紀卷第二十六曰、稱德天皇天平神護元年春正月己亥、勅曰、鴆毒潛ニ行於天下一犯ニシ怒ラシ人神之心一ヲ、而怨氣感ニ動於上玄一ニ。吾妻鏡卷第三十九曰、寶治二年後十二月廿六日己巳、佐々木法橋孫子等、有ニ相論事一、與ニ鴆毒於兄一、欲レ令レ殺ニ其身一之由云云可ニ糺明一之由、所レ被レ仰ニ六波羅一也。塵添𡏖囊抄曰、鴆云フ毒鳥アリ、羽(ハネノ)以テ酒ヲカキテ、人ニ飲スルニ、卽時ニ死スル程ノ毒有ドモ、氣味ハ極テ甘キ物也。太平記第十九曰、金崎東宮幷將軍宮御隱事云云

厭 刊本 聽
三位 同 なし
悲可 同 恐に作る

潛ニ鴆毒ヲ進テ失奉レト、栗飯原下野守氏光ニゾ下知セラレケル。同第三十日、慧源禪門逝去事云云實ニハ鴆毒ノ故ニ逝去シ給ケリトゾサヽヤキケル。律曰、凡以毒藥藥人及賣者絞、卽賣買而未用者近流。注謂以鴆毒冶葛烏頭附子之類堪以殺人者。將用藥人及賣者知情並合科絞云云○明月記曰、貞永二年三月四日、前齋宮戸部夜前來、今朝歸參、伯三位妻盛實朝臣女入道取夫之宿衣入厭物、三位卽見付取弃之、追却妻之所從等之後、又欲飲酒、浮異散成奇、捕陪膳小女問之、而又依妻室之語此散交於飲食之由承伏、三位服瀉藥反吐、其妻閉籠障子內、永不可行他所由吐詞、三位出其屋座向宅云云、相具二十年、數子之母挿此害心、世上悲事歟。御隨身三上記曰、永正九年三月五日、同日ニ、御口傳有之飯ニ毒の入たるかと思ふ時は、飯ニソツト我息ヲシカケテ見レバ、其飯則黃色ニナル、然レバ毒入ルト思フ也。飯ノ汁、毒入ルト思フ時ハ、則ハシノサキニ其汁ヲ付テ、我爪ノ上ニ置テ見ルニ、其汁則ヒルハ毒有、則カハカヌハ毒ナシ。飯汁トモニ、前ノ如ク無キハ、自然毒入ルトイヘドモ、一段トクヽル事ナシ、則藥ヲ用テ吉。毒ノ入タル膳ヲ、スユル者ノ眼ヲ見ルニ、淚グム事有、然ラバ、此膳ニハ毒有ト覺悟スル也。其膳スユル者、毒ノ入事ヲ知モ知ヌモ、眼ノ樣同之。室町殿日記曰、（信長公）安見か本領半分は阿波守に出すべし、扨後家をばたばかつて失ふに於てはしさゐ有まじきよし被仰出ける。扨は承て國に歸り、神保に逢て上意の趣かくの如く云々さて此後家多年に心をおかず萬ものし玉ひける、見さはの局とて才覺有けるをひそかに近付て、しかぐ〵のやうを語りて、あさがれいに是をくわへてまいらせ玉へと、毒藥をぞとらせにける。此女房もなさけなしとはおもへども、此人をたすけんとすれば、若干の人うずるなり。されば壹人に萬人をかえん事なり。かたき道理によつて、ちからなく、或あしたいつもの

ごとく供御をそなへにけるが、運やつきたりけん、なんのこゝろもなく食しけり。中一日あつて失にけり

駝鳥 扶桑略記　　通名

華夷鳥獸續考曰、駝雞山中亦出駝雞土人捕捉來賣其身區頸長如雀脚高ニ三尺餘毎レ脚只有ニ二指一毛如ニ駱駝一喫ニ菽荳等物一行似ニ駱駝一單峰双峰俱ニ有ニ祖法兒國。本草綱目曰、駝鳥。星槎勝覽曰、駝蹄雞有ニ六七尺高者一、其足如レ駝

【集註】扶桑略記四曰、白雉元年庚戌、新羅國獻ニ大鳥一、其形如レ駝、能食ニ銅鐵一

佐夜豆木土里（サヨツキドリ） 倭名類聚鈔　【漢名】**擣藥禽** 廣東新語

廣東通志曰、羅浮志紅翠亦名擣藥禽色間紅綠春夏間夜鳴于深巖幽谷中如云克丁當宛似杵臼戚憂之聲。廣東新語曰、羅浮有紅翠毎更則鳴響ニ徹山谷一　【一名】**佐夜都岐度利**

天文寫本和名鈔○倭名鈔曰、四聲字苑云、蠲驕鳥。黄色、聲似ニ舂者一、相杵。漢語抄曰、獨春鳥。佐夜豆木土里。扶桑略記廿五曰、雲母窓間擣レ藥之聲不レ靜

寒江虫 福田方　【漢名】**寒號蟲** 本草

本草綱目曰、寒號蟲、屎ヲ名ニ五靈脂ト、五臺諸山甚多、其狀如ニ小雞ニ四足、有ニ肉翅ト、夏月毛采五色、自鳴若レ曰ニ鳳凰不レ如レ我、至レ冬毛落如ニ鳥雛ト、忍レ寒而號ヲ曰ニ得過且過ト、其屎恒集ニ一處ニ、氣甚臊惡、粒ノ大サ如レ豆、采レ之有ニ如レ糊者ト、有ニ粘塊ニシテ如ニ餳者ニ

【藥製】福田方曰、五靈脂、酒ニスリタテ、沙石ヲ去テ、ホシカハラゲテ使ヘ。此ハ寒江虫ト云物ノ糞之ト云リ

げき　榮花物語　【漢名】鷁

柳河東集曰、鷁船名、其首畫鷁、因以爲稱。正字通曰、方言船首謂之鷁首。郭璞曰、鷁水鳥也。今江東貴人船前作青雀、是其像也。相如子虛賦浮文鷁揚旌栧。晉書ニ王濬造ニ大舟ヲ、畫ニ鷁鳥怪獸于船首ニ、以懼ニ江神ヲ〇吾妻鏡曰、文治五年九月三日、泰衡被レ囲ニ數千兵ニ、爲レ遁ニ一旦ノ命害ヲ、隱ルヽ如レ鼠、退クヿ似レ鶂、差ニ夷狄嶋ヲ、赴ニ糟部郡ニ。本草綱目、鸕鷀。集解曰、一種鶂鳥或作レ鷁、似ニ鸕鷀ニ而色白、人誤以爲ニ白鸕鷀ト是也。通雅曰、鶂似鸕鷀而白、莊周所謂白鶂相視而風化、後人或作レ鷁、故畫ニ舟首ニ曰ニ鷁首ト〇青鶂。正字通曰、鶂。宜戟切、音逆、水鳥高飛似レ鴈、色蒼白、雌雄相視。通雅曰、方言艗艏又稱ニ青雀舫ト、其青鶂即鳥鷁海上化爲鵰者也〇榮花物語音樂曰、左右のふねのがく、りやうどう、げきしう、まひいでたり。塵添壒囊抄曰、播州記ニハ、揖保郡ニ鷁ノ住ム山アリ。昔鳥多ク栖ニ此ノ山ニ、故云尓。倭名類聚曰、播磨國揖保、伊比保。天文寫本和名抄作伊比奉

集解ハ正誤ノ誤

【集註】帝王編年記曰、高倉院安元二年三月六日、後宴也。樂人舞人、殿上地下、乘ニ龍頭鷁首ニ。百練抄第十七曰、正元元年三月五日、今日於ニ西園寺ニ爲レ被レ供ニ養一切經ニ。早旦中宮行啓云云龍頭鷁首各於ニ池上ニ

奏レ樂。塵添壒囊鈔曰、鷁首事。舟ニ龍頭鷁首アリ、鷁ノ何鳥ゾ、其故如何。文選注ニハ、水神ノヲヅル鳥也。水中ノ難ヲ爲レニ去ンガ此鳥ノカシラヲ付ル由見ヘタリ。今ハ偏ニ鳳首ヲ付テ、鷁首ト名ル歟。玉篇ニハ、水鳥也。善ク高飛ト云ヘリ。鷁ニハアマタノ字通ズベシ、鶂鷊鷁鵙、已上皆同字也。昇進ノ前ニ途ニ進マムト思ニ望ヲ不レ達セ還リテ下ヘ押下ル、様ナルヲバ鷁退ト云フ。此鳥ノ事也。左傳第六ニハ、六ヒ鷁退飛テ過ニ宋風ニ也。注云、高不レ爲ニ物害ヲ、故不レ記ニ鳳之異ニ也云云此鳥ガヒキク飛タラバヨカルベキヲ、高ク飛ヲ好ル物ニテ空ヲ高飛ノ空ノ風ニ吹カレケルヲ云也。鳥物ノ害ナサズト云ヘルハ、風高ク吹テ、下ニハモノ、スル事ナケレバ、大風ノ子細ヲバシルサズト云也。鷁風ニシハリクト云事ハ是ヨリハジマレリ。沉倫ノ身ヲ是ヲ譬テ退ト云フ、本文ニ用ベキ、左傳ニ既鷁ノ字ヲ用タル故ニ鷁退ト書、鷁退トハ不レ書カ。此故ニ別ノ鳥トノミ人ノ心ヘタル事ナレドモ、實ニハ鷁首ノ鷁モ鷁退ノ鷁ト同ジ鳥也。○鷁ハ吐綬雞也。扶桑略記廿六曰、應和元年閏三月十一日、於ニ釣殿ニ有ニ藤花宴ニ。龍頭鷁首舟、各一艘。同廿九日、治曆三年十月五日、天皇車駕幸ニ臨宇治平等院ニ云云又池中有ニ龍頭鷁首船ニ

鳳凰

〔韓詩外傳〕曰、鳳像鱗前鹿後蛇頸而魚尾龍文龜背燕頷鷄喙五色備

〔一名〕ほうわう 雅輔装束抄曰、竹きり（桐）にほうわうをすりたり　阿弥陀院寳物目録曰、蓋八角居金鳳凰形。倭

古名錄卷第七十一

名抄國郡部曰、能登國鳳至、不布志

異禽類

尾山一鳥 山城國風土記

〔集註〕山城國風土記曰、久世郡尾山多諸鳥、稚日本根子彦大日日天皇三年丙戌冬、此山出光數日、土人恐之、又奇之、而告卒川宮□連淸域往而祭之、課土人令狩、山出一鳥、土人不曉之、形賤而黑色大羽、取他鳥而□□連淸域搏之奉卒川宮、又無難

怪鳥 太平記

〔集註〕太平記卷第十二曰、元弘三年七月ニ改元有テ、建武ニ被レ移云云其秋ノ比ヨリ、紫宸殿ノ上ニ、怪鳥出來テ、イツマデ〱トゾ鳴ケル。其聲響レ雲驚レ眠、聞人皆無レ不ニ忌恐一。即諸卿相議シテ曰云云源氏ノ中ニ、誰カ可ニ射候一者有ト被レ尋ケレ共、射ハヅシタラバ生涯ノ恥辱ト思ケルニヤ、我承ラント申者無リケリ。サラバ上北面諸庭(テイ)ノ侍共ノ中ニ、誰カサリヌベキ者有ト、御尋有ケルニ、二條關白左大臣殿ノ被ニ召仕一候、隱岐次郎左衛門尉廣有ト申者コソ、其器ニ堪タル者ニテ候ヘト、被申ケレバ、軈(ヤガテ)召レ之トテ、廣有ヲゾ被レ召ケル。廣有承ニ勅定一、鈴間邊ニ候ケルガ、ゲニモ此鳥、蚊ノ睫ニ巢クウナル蟭螟ノ如ク小テ、不レ及レ矢モ、

虛空ノ外ニ翔飛バヾ叶マジ、目ニ見ユル程ノ鳥ニテ、矢懸リナランズルニ、何事アリトモ射ハズスマジキ物ヲト思ケレバ、一義モ不レ申畏テ領掌ス。則下人ニ持セタル弓與矢ヲ執寄テ、孫廂ノ陰ニ立隱テ、此鳥ノ有樣ヲ伺見ルニ、八月十七夜ノ月殊ニ晴渡テ、虛空淸明タルニ、大内山ノ上ニ黑雲一群懸テ、鳥啼コト若也。鳴時口ヨリ火炎ヲ吐歟ト覺テ、聲ノ内ヨリ電メ、其光御簾ノ内へ散徹ス。廣有此鳥ノ在所ヲ能々見課テ、弓押張弦クヒシメテ、流鏑矢ヲ差番テ、立向ヘバ、主上ハ南殿ニ出御成テ叡覽アリ、關白殿下左右ノ大將、大中納言、八座七辨八省輔、諸家ノ侍、堂上堂下ニ連レ袖、文武百官見レ之如何ガ有ンズラント、カタヅヲ呑デ拳レ手。廣有已ニ立向テ、欲レ引レ弓ケルガ、聊思案スル樣有ゲニ、流鏑ニスゲタル狩俣ヲ拔テ打捨、二人張ニ十二東二伏、キリ〳〵ト引シボリ、無ニ左右ニ不レ放レ之、待ニ鳥鳴聲ニシタリケル。此鳥例ヨリ飛下、紫宸殿ノ上ニ、二十丈許ガ程ニ鳴ケル處ヲ聞澄メ、弦音高ク兵ト放ツ。鏑紫宸殿ノ上ヲ鳴リ響シ、雲ノ間ニ手答メ、何トハ不レ知、大磐石ノ如ニ落懸ニ聞ヘテ、仁壽殿ノ軒ノ上ヨリ、フタヘニ竹臺ノ前ヘゾ落タリケル。堂上堂下一同ニ、ア射タリ〳〵ト感ズル聲、半時計ノ、メイテ、且ハ不ニ云休ニケリ。衛士ノ司ニ、松明ヲ高ク捕セテ、是ヲ御覽ズルニ、頭ハ如レ人、身ハ蛇ノ形也。背ノ前曲テ歯如レ鋸生違、兩ノ足ニ長距有テ、利如レ劔、羽崎ヲ延テ見レ之、長一丈六尺也。サテモ廣有射ケル時、俄ニ鴈俣ヲ拔テ捨ツルハ、何ゾト御尋有ケレバ、廣有畏テ、此鳥當ニ御殿上ニ鳴候ツル間、仕テ候ハンズル矢ノ落候ハン時、宮殿ノ上ニ立候ハンズルガ禁忌シサニ　鴈俣ヲバ拔テ捨ツルニテ候ト申ケレバ、主上弥叡感有テ、其夜軈テ廣有ヲ被レ成ニ五位ニ、次ノ日、因幡國ニ大庄二箇所賜テケリ。弓矢取テ面目後代マデノ名譽也

恠鳥 吾妻鏡

［集註］吾妻鏡卷第十三日、建久四年正月五日、工藤左衛門尉祐經家、恠鳥飛入、不レ知ニ其号一、形如ニ雉雄一云云

恠鳥 吾妻鏡

［集註］吾妻鏡卷第二十八日、寛喜三年四月廿八日、酉尅、御所北對辺、恠鳥集。水鳥類也。其鳥黒、翌日死。少々雖レ有下見ニ知之一人上、其名不ニ分明一云云

恠鳥 百練抄

［集註］百練抄卷第六日、大治三年七月十九日、陽明門恠鳥、敦光進ニ勘文一

怪鳥 扶桑略記

［集註］扶桑略記廿三裡書曰、延喜五年二月十五日、奉ニ幣諸社一、是今月二日夜有ニ怪鳥一也

鶬の大さなるくろき鳥　吉野拾遺

集註　吉野拾遺曰、そのころ皇居のうへなる山のしげみより、夜な〳〵出て、からすの聲に似て、内裏にひゞきわたりてなくを、あやしき鳥にてあらんと、武士におほせて、射させ玉ひけれども、所さだめざりければ、かれもこれもかなはでやみにけり。あるとき、かの鷹を、ふもとの野べにて雉子にあはせたまひけるに、雉子にはめもかけで、山のかたへそれゆくを、さしもかしこうおぼしめす御鷹をとて、行かたにならがり行に、しげみのうちに入けるを、いかにせんてとてまもりゐけるほどに、鶬の大さなるくろき鳥をひいだして、空にてくみあひ、ともにおちけるを、人〴〵よりてころしてけり。かたちはからすのごとくにて、右ひだりのつばさをひきのばしてみければ、七尺あまり有けり。鷹も胸のほどをくはれて、しばし程ありて死けり。夜な〳〵鳴つるは、この鳥にてや有けん。そのゝちはをともせざりけり。いづれにたゞごとにてはあらじとて、ふたつの鳥を塚にこめて、そのうへにちいさき社をたてゝ、鳥塚といひて當にありける。いとあやしき事にこそありつれ

水鳥　文德實錄

集註　文德實錄卷第三曰、仁壽元年三月己亥、有二水鳥一、似レ鷺而小、不レ得二其ノ名ヲ一、集二殿前梅樹一、何以盡レ之、記レ異也

盡　イ本書

巽 イ本異　廳 ハ系本府　巽 同巽

白身黒頭鳥 日本記略

集註 日本記略曰、弘仁五年五月庚戌、有レ鳥集ニ太政官廳ニ、捕ルニレ之不レ驚、白身黒頭、兩翮殊長ク、足似タリニ水鳥ニ、人不レ能レ名焉

巽鳥 文德實錄

集註 文德實錄卷第三曰、元壽元年八月己酉、式部省獻ニ巽鳥ノ鷂一、鳥背鵠脚、長頸無レ尾、白黒雜レ文、有レ詔放レ之、命ノ遂ニ其生一

有鳥女鵜 日本記略

集註 日本記略曰、延暦十五年夏四月庚午、有ニ鳥五六一、飛過ニ大學寮ヲ、其一落ニ寮ノ南門ノ前ニ、其形如レ鵜、毛似レ鼠、背有ニ斑毛一、人不レ知ニ其名一也

靈鳥 日本書紀

集註 日本書紀曰、雄略天皇五年春二月、天皇狡ニ獵于葛城山一、靈鳥來、其大如レ雀、尾長曳レ地、而且鳴曰ニ努力努力一

貞元三年（天元元）

尾長白鳥　扶桑略記

［集註］扶桑略記廿七曰、有二尾長白鳥一、囀曰、去來去來。即向レ西而飛去

守墓鳥　太子傳

［集註］太子傳曰、有一異鳥形如鵲、其色白、常捿墓上、烏鳶到卽遠追去、時ノ人名爲二守墓鳥一

彌奈志古鳥　新撰字鏡　［漢名］姑獲鳥　本草綱目　［今名］ウブメ

證類本草曰、姑獲能收二人魂魄一、今人一二云二乳母鳥一ト。言產婦死變化作レ之　能取二人之子一以爲二己子一、胷前有二兩乳一。玄中記云、姑獲一名天帝少女、一名隱飛、一名夜行遊女、好テ取二小兒一養レ之、有二小子之家一則血點二其衣一以爲レ誌、今時人小兒衣不レ欲二夜露一者爲此也。時人亦名二鬼鳥一。荊楚歲時記云、姑獲、一名鉤星、衣レ毛爲レ鳥脫レ毛爲レ女　［集註］今昔物語曰、源ノ賴光朝臣美濃守にて有ける時、其館にあまたの郎等どもあつまり居てよも山の物語しけるに、あるもののいひけるは、此國の渡といふ所に姑獲鳥有、夜に入て爰をすぐる人あれば、姑獲鳥子をなかせて、これをいだきてたべと望むなり。かゝればおそれあはてにげかへり

に、終にかの子をいだきたるものなきよしをかたる。又あるものゝいはく、たゝそのわたりに行てわたる者あらんかといふとき、平季武これを聞て、われはたゞ今なりとも行てわたらんといへば、傍輩どもいはく、らつともそこの武勇にては、千人の兵に一人かけあはせ射給ふ事はなるべし、今其渡りをこえ給ふことは難からんといふ。季武は、行てわたらんことはやすしといひ、かたはらよりは、なるまじといひて、かまびすしくあらそひけり。此あらそふ者ども申けるは、其儀ならばたゞ今わたりにゆき給へ、行おほせ給はゞ、我〳〵鎧冑弓胡簶駿馬に鞍置て打出太刀等を參らせんといふ。季武は、もしわたらずんば其品〻を我方よりまいらせんと約して、後季武がいはく、かしこに行着たるしるしに、胡簶の上ざしの箭一筋を、川向の土に立てかへるべし、翼朝行て見たまへとて、馬に乘てすゝみ行けり。此あらそふ者どもの中に、たけくいさめる者三人、いざや季武が河をわたる一定を見んとて、わき道をめぐりてこれもわたりに行たりける。かくて季武渡りに行着たりしに、比しも九月下旬なれば、目さすもしれずくらき夜に、馬を河に入てざぶり〳〵とわたりて、なかふの岸にあがりつゝ、馬より下りて上指の箭をぬき出して、土にをしたて馬に乘てかへるとき、河のなかばにいたるころ、いとなまぐさき風ふき來りて、女の聲にて、是をいだきてたべといふに、嬰兒の聲にてわつとなけり。季武いでいだきて得させんとて、袖の上に子をうけとりぬ。しばらくあれば、女追つきて、其子かへしてたべといふ。季武いやかへすまじといひて、河よりこなたの岸に上りつゝ、しづ〳〵とかへりける。かたはらにかくれ居たる三人の者、始終の有樣を聞て身の毛よだちて、なかばは死たるこゝちにてふるひ居たりけり。季武舘に歸りぬれば、是等もあとについてかへりぬ。かくて季武馬より下、内に入て、あ

らそひたる者どもにむかひて、かた〴〵のいはれしわたりにゆきて、姑獲鳥の子とりて來れるぞ、これ見たまへとて、右の袖をひらきければ、木の葉少し有ける云々○水東日記曰、汴洛深山中多鬪鳥。其聲多類人言。一鳥云兒回來孃家炒麻誰知米。士人以爲昔人有繼母偏愛己子者以生麻子授己子熟麻子授前妻之子。囑之曰植麻生者得歸家。二子不知其謀。中途幼子啗食熟麻子。遂彼此相易繇是其己子誤植熟麻子不得歸。母思之至死化爲此鳥。呼其子云。其他類此者多不可勝數。皆好事者託事警世之意亦如所謂提胡蘆脫布袴之類耳。倚覺寮雜記曰、嶺外人家嬰兒衣暮則急收不可露夜士人云有蟲名暗夜見小兒衣必飛毛著其上兒必病寒熱久則瘦不可療其形如大蝴蝶水經豫章逕陽縣多女鳥。元中記曰、新陽男子於水際得之與共居生二女悉衣羽而去豫章間養兒不露其衣言是鳥落塵于兒衣中令兒病亦謂之夜飛遊女由此觀之乃暗夜也

てんぐ　源氏物語

今案　粵西名勝志曰、西事珥云、河池州近山地牧童十餘人群聚歌舞、或吹笛戯、方劇忽山半一人約長二丈而濶三尺餘、披髮鳥喙背有二翼、俯觀群童爲樂嬉然而笑、垂舌長過腹、群童覩見大驚皆反走、其人能夷語呼曰、合合勿去、仍歌舞吹笛以樂、群童復聚吹笛歌舞如故、其人喜拊手大笑、聲震林樾、已而垂舌久之始去。此說殆近日本所謂天狗者矣

一名　天狗　アマツクツネ　壒囊抄曰、サレハ日本紀ニハ、天狗ト書テ、アマツク

續日本後紀曰、承和元年二月辛未、是夕、當于禁中之上、有飛鳴者云云或言非海鳥、是天狗也。唯聞其声

宇字 イ本

ツ子トヨメリ。字ニハイヌニテ讀ハクツ子也。是通ヘル事ヲ顯ス也

天く

榮花物語根合曰、しらかはどのには、つきせずむかしをこひさせ給つゝ、をこなはせ給ておはします。天ぐなどむつかしきわたりにて、いみじうわづらはせ給て、人〳〵もつぎてわづらひ、なくなりなどして、いとうたてあれば、かくてのみはいかゞと、とのなど申させ給へど、きこしめしいれぬに

アマツキツネ

釋日本紀曰、天狗。(アマツキツネ)延喜式卷第八曰、祝詞天乃血垂飛鳥乃禍無久○壒囊抄曰、天狗名目ノ事。砂石集ニ、天狗ト云事、疏釋ノ中ニ不㆑見㆓及名目㆒也。日本ニ申出シタル計リ也ト云云尓ルニ古キ物ニ多ク天狗ト云リ。何ヲ正トセン哉。故人ノ左樣ニ註シ給イケン、定テ由侍ルラム

集註

大鏡曰、さればいとゞやまの天狗のしたてまつるゝさま〳〵にきこえはべる。帝王編年紀曰、四條院仁治三年二月十九日、天狗託㆑人云、攝政殿常參三条殿給、哀御冠被差尊勝陀羅尼波哉之由稱之云云。園太曆曰、延文四年四月廿二日、去比河東天狗横行ス、以㆓飛礫㆒打所々㆒、就㆑中十樂院ノ邊殊有㆓此事㆒。源氏物語夢浮橋曰、てんくこだまやうの物のあざむきて、ゐてたてまつりたりけるにやとなんうけ給はりし。吾妻鏡卷第二十九曰、天福二年三月十日、大藏卿爲長卿獻㆓書狀於武州㆒、今日到來云云、又去二月卅、南都天狗現恠、一夜中、於㆓人家㆒、千餘字書㆓三字㆒云云、未來不匪㆓短慮之所㆑覃、尤爲㆓奇恠㆒云云。平家物語曰、あたごたかおも、むかしはだう塔のきをならべたりしかども、一夜の中にあれはてゝ、天狗のすみかとなりはてぬ。百練抄第五曰、寛治三年十二月廿一日、太上皇參㆓彥根寺㆒給、近日天下貴賤、傾㆑首參詣、利生可㆑限㆓歲內㆒云云、但爲㆓天狗所爲㆒之由、世人称㆑之、改年之後、無㆓參詣之人㆒。宇津保物語俊蔭曰、天狗のわざにこそあらめ。又曰、さればこそ天狗なゝりとて打つゞき

於　刊本出
惟　同帷
勝　同成
如　續群本而に作る
隼　同角　下同じ
心ニかけ奉る　同本云しかば
春日
成　同盛

て出給ふ。明月記曰、建久七年六月廿三日、今日刑部語云、昨曉侍雜仕開ニ妻戸ヲ出之間、着レ柹法師走リ懸欲ニ取付、仍逃入ニ妻戸內と思之間絕入了。所司見付令舁出、昨今猶度々絕入、是天狗所爲歟。此一条殿惣不苦也。嘉祿三年七月十一日、雜人等云、近日天狗猶乱殊甚、淸水鐘樓之下、以ニ白布ニ縛付法師一人、聞叫喚音求出、不言語飮食、兩三日加持之後蘇生由、本在伊勢國、去春入洛、經廻歷旬月、依無餘糧、六月十二日下向本國、於途中勢州、本見知僧山伏休相逢、洛可伴來由之間、相共更歸京、先於大內、又他僧來會、又相引入法成寺貴賤歟翟列座依貴人之下知、以此僧衣惟令取酒、盃酩乱舞、又相引入法勝寺、又相議入淸水礼堂之由雖存之、狂心不知其實、坐礼堂叫喚之由語之、不覺悟、縛樓上事云々參詣人等憐愍、令着衣裝下向伊勢云々其間事等、崇德院當時御于鎗倉竹中、僧都參讚岐之嶋等云々座列乱舞之輩、或其額有角。天福二年八月十六日、去十三日隆承法印房僧又俄天狗付吐種々詞云々淸水矣云々、魔界得時歟。中外抄曰、康治元年十月廿三日、又仰云、一日比我於東三条殿受眞言法於其僧名字予忘了其僧傍又僧達四五人居たり、如件僧達の脣ニ鳥喙あり、我思樣ハ、此ハ天狗にこそありけれ。爭か東三条殿內ニさる物は居住せん。隼明神ハ名御座ザさるかと心ニかけ奉る神主時成幷同舍弟僧經詮等我傍ニ出來、又同上下裝束着たる下家司裡の者二人出來之間、件法師原皆悉逃去し。隼明神ハ春日住者之□。廿一日隼明神社奉幣幷有御供事、御先沙汰也、爲此事被賚歟。砂石集曰、日吉ノ大宮ノ後ニモ、山僧オホク天狗ト成テ、和光ノ方便ニヨリ出離ストコソ申傳エタレ。太平記卷第五曰、或夜一獻ノ有ケルニ、相摸入道數盃ヲ傾ケ、醉ニ和メ立テ舞事良久シ。若輩ノ興ヲ勸ル舞ニテモナシ、又狂者ノ言ヲ巧ミニスル戲ニモ非ズ。四十有餘ノ古入道、醉狂ノ餘ニ舞フ舞ナレバ、風情可レ有共覺ザリケル處ニ、何クヨリ來トモ知ヌ新座本座ノ田樂共、十餘人

忽然トメ坐席ニ列テゾ舞歌ヒケル。其興甚尋常ニ越タリ。暫有テ、拍子ヲ替テ、歌フ聲ヲ聞ケバ、天王寺
ノヤ、ヨウレホシヲ見バヤ、トゾ拍子ケル。或官女此聲ヲ聞テ、餘ノ面白サニ、障子ノ隙ヨリ是ヲ見ルニ、新
座本座ノ田樂共ト見ヘツル者、一人モ人ニテハ無リケリ。或ハ觜勾テ鵄ノ如クナルモアリ、或ハ身ニ翅在
テ、其形山伏ノ如クナルモアリ、異類異形ノ媚者共ガ、姿ヲ人ニ變ジタルニテゾ有ケル。官女是ヲ見テ、餘リ
ニ不思議ニ覺ケレバ、人ヲ走ラカシテ、城ノ入道ニゾ告タリケル。入道取物モ取敢ズ、太刀ヲ執テ、其酒宴ノ
席ニ臨ム。中門ヲ荒ラカニ歩ケル跫ヲ聞テ、化者ハ掻消樣ニ失セ、相摸入道ハ前後モ不レ知醉伏タリ。燈
ヲ挑サセテ、遊宴ノ座席ヲ見ルニ、誠ニ天狗ノ集リケルヨト覺テ、蹈汚シタル疊ノ上ニ、禽獸ノ足跡多シ。城ノ
入道暫ク虚空ヲ睨デ立タレ共、眼ニ遮ル者モナシ。良久シテ、相摸入道、驚覺テ起タレ共、惘然トメ更ニ所
知ナシ。吉野拾遺曰、かゝる奥山には、天狗などいふものゝつねにすむなれば、とりたてまつりやしてんと
て。又曰、あなおそろし、山伏ともみえず、まして人にはあらじ、天狗のたぐひにてあるらむと云々きはめて
御鼻のたかくわたらせたまひけるを云々。又曰、新待賢門院に伊賀のつぼねといふありけり云々去ぬる正平
ひのとの亥の年の春の比、ばけものあなりとて、人〱さはぎおそれ玉へる。かたちをしかと見さだめたるも
のもあらず、行あひける者は、心ちくらく成にけり云々みな月十日あまりの程に、いとあつき比なりければ、
此つぼね、庭に出てたちたまへるに、月のさしいでゝいとあかゝりければ、すゞしさを松吹風にわすられて
袂にやどす夜半の月かげ。とたれきく人もあらじ、とひとりごち玉へるに、松の梢のかたより、からびたるこ
ゑして、たゞよくこゝろしづかなれば、すなはち身もすゞし。といふふるき詩の下句をいふに、みあげ玉へ

ば、さながらおにのかたちにて、つばさのおひ出けるが、眼は月よりもひかりわたるに云〻我は藤原の基とをにこそ侍れ云〻。天狗事、室町殿日記、其他ノ書ニ載タリ

古名錄禽部卷第七十一　終

古名錄獸部卷第七十二目錄

獸類 上

加鹿 ○乎志加 麀 ○左鳴子加 ○めか 麀
○加呉 麛 ○久志加 麞 ○鹿のつの 鹿角
○加乃知加都乃 鹿茸 ○加乃川乃ゝ仁加波 鹿角膠
○しろきかのしゝ 白鹿 ○八足鹿
於保之加 歌麻之之 石羊
久萬 熊 ○久萬乃阿布良 熊脂 ○くまのゐ 熊膽 ○熊掌
之久萬 羆 ○赤羆 ○黃羆
○赤羆(熊) ○青羆(熊)
於保加美 狼 ○白狼
太奴木 狸 ○白狸
牟士那 貉 ○玄貉
美 猫
岐都禰 狐 ○白狐 ○黑狐 ○赤狐

宇佐木(ウサギ)　兎　○白兎　○一頭二身兎

○猪矢　○斑猪

○白猪　○赤猪

夜萬古(ヤマコ)　玃

通計四十七種

久佐井奈岐(クサヰナキ)　野猪　○猪髮　○猪膽

佐流(サル)　獮猴　○白猿　○六足猿

萬太(マタ)　黑眚

臘腊　流本

古名錄獸部卷第七十二

紀藩　源　伴存撰

獸類　上　○水東日記曰、兩翼爲レ禽、四足爲レ獸

加ヵ　倭名類聚鈔　[漢名] 鹿　本草　[今名] シカ

字典曰、字統、鹿性驚防、羣居分背而食、環角向レ外以備二人物之害一。本草綱目曰、鹿處々山中ニ有レ之、馬身羊尾、頭側而長、高脚而行速ナリ。牡者有レ角、夏至則解。大如二小馬一、黃質白斑、俗稱二馬鹿一。牝者無レ角、小而無二斑毛一、雜黃白色、俗稱レ麀

[一名] 之之　日本書紀雄略天皇御歌曰、野磨等能、鳴武羅能陀該爾、之之符須登。○齊明天皇御歌曰、伊喩之之乎、都那遇何播杯能、倭柯矩娑能、倭柯俱阿利岐騰、阿我謨婆儺俱爾○按ニ之之ハ古今鹿野猪ノ通稱也。矢開之記曰、矢開に用る物の事、取分一ニしゝ。二ニ雀とぞ。しゝをば、身をとりてまな板にすゆる也。かのしゝの事也。平家物語卷第九曰、御さうし、さやうの所はしゝは通ふか。しかはかよひけり。世間だにあたゝかになりけへば、草のふかきにふさむとて、丹波のしかは播磨のいなみ野へこへけ、とぞ申ける。御ざうし、さては馬場ござんなれ、しかのかよはんずる所を、馬のかよ

はざるべきやうや有云ゝ。七日の日のあけぼのに、大將軍九郎御ざうしよしつね、其せい三千よき、ひよどりごへに打上て、人馬のいきやすめておはしけるが、其せいにやおどろきたりけん、男鹿二ツめじか一ツ、平家の城郭一の谷へぞおちたりける。平家の方の兵共是を見て、たとひ里ちかからんしゝだにも、我らにをそれて山ふかうこそ入べきに、只今のしゝのおちやうこそあやしけれ。いか樣にも是は上の山よりかたきおとすにこそ、とて大きにさはぐ処に、こゝにいよの國の住人たけちの武者どころきよのりすゝみ出て、たとひ何ものにても有ばあれ、かたきの方より出來りたらんずるものを、とをすべきやうなし、とておじか二ツいとゞめて、めじかをば射らでぞとをしける云ゝ○野猪鹿共ニ之之ト云ルハ、萬葉集卷第十二ニ、小山田之、鹿猪田禁如。同第三ニ、胡獲爾、鹿猪踐起トミエタリ

斯斯

日本書紀、雄略天皇御歌曰、斯斯魔都登、倭我伊麻西磨云云。武烈天皇紀歌曰、婀嗚儞與志、乃樂能婆娑摩儞、斯斯貳暮能。萬葉集卷第二曰、赤根刺、日之盡、鹿自物云云

十六

萬葉集卷第十三曰、高山ノ、峯之手折丹、射目立、十六待如、床敷而。同卷第七曰、江林、次完也物、求吉、白栲、袖纒上、完待我背。同卷第九曰、木國之、昔弓雄之、響ク矢用、鹿取靡、坂ノ上爾曾安留。云云所射十六乃、意ロヲ矣痛ミ云云。同卷第十一曰、高山、峯行完、友衆云云。同卷第十六曰、所射鹿乎、認河邊之、和草。同卷第三曰、獵路乃、小野爾、十六社者云云。言塵集曰、十六とは鹿と云心之

賀

天文寫本和名鈔曰、鹿。和名賀。和名鈔曰、鹿。和名加。萬葉集卷第八曰、大伴家持鹿鳴歌二首。山妣姑乃、相響左右、妻戀爾、鹿鳴山邊爾、獨耳爲手。云云妻戀爾、鹿鳴山邊之、秋芽子者。同卷第九曰、鹿島郡苅野橋ニテ別ニ大伴卿ニ歌一首云云鹿島之崎爾云云。同卷第十曰、

之流布本乃

幾夜乎歷而鹿云云。咏ニ鹿鳴一云云妻ヲ呼雄鹿之、音之亮左ヽ同卷第十一曰、何時從鹿云云。鹹シ無キ戀毛爲鹿云云。吾者牛鹿云云。同卷第十二曰、何時左右鹿云云。何處從鹿云云。鈴鹿河云云。同卷第三曰、越之海、角ノ鹿濟從云云。同卷第二曰、宮出毛爲鹿。同卷第四曰、四鹿乃濟邊乎。鹿魚藻闕二毛云云。奈何鹿云云

しか むかしかたり曰、秋の夕べは云々とを山のしかのねほのかにきこえ。平家物語卷第七曰、おの上のしかのあかつきのこゑ。萬葉集卷第八曰、湯原王鳴鹿歌一首。秋芽之、落之亂爾、呼立而、鳴奈流鹿之、音遙者。秋芽子師弩藝、鳴鹿毛云云。秋野乎、且往鹿乃、跡毛奈久云云。吉名張之、猪養ノ山爾、伏鹿之。同卷第九曰、暮去者、小椋山爾、臥鹿之。同卷第十六曰、伊夜彥乃、神乃布本、今日良毛加、鹿乃伏良武、皮服著而、角附奈我良○同卷第十一曰、壯鹿海部乃、火氣燒立而、燎塩乃、辛キ戀ヲ毛、吾ハ爲鳴。同卷第十二曰、今モ見テ牡鹿、夢耳云云。今更、何牡鹿將念○源平盛衰記卷第八曰、又常ノ御詠吟ニ、智者ハ秋ノ鹿鳴テ入レ山、愚人ハ夏ノ蟲、飛デ火ニ燒トゾナガメサセ給ケル。塵添壒囊抄曰、鹿ナドヲバイクカシラト云、鳥ヲバイクハト云カゴトシ

紅葉鳥 藻塩草曰、鹿。紅葉鳥ハ時雨ふるたつたの山の紅葉どりもみぢのころもきてやなくらん。是は異名之。後鳥羽院御製玉藏。天祿識餘曰、考工記云、天下大獸五、則禽亦可レ謂ニ之獸一。禮記曰、猩猩能言不レ離ニ禽獸一則獸亦可レ謂ニ之ヲ禽一

かせき 宇治拾遺卷第十一曰、鹿をかせきと云。仙覺萬葉集註釋卷第二曰、鹿を云にもしヽ、かせぎと云がことし。山家集曰、山ふかみなるヽかせぎのけぢかきに世に遠ざかる程ぞしらるヽ

はらい草 藻塩草曰、はらい草、六月鹿の異名也と、ふるき物に侍り。いかゞ

かのしヽ

延久ノ前ニ同、廿九トアルベシ

神龜ハ天平ノ誤

曾我物語卷第一曰、かのしゝ千かしら。塵添壒囊抄曰、鹿ヲシヽト云歟。常ニハカノシヽニ限リテ、シヽト計リ云歟。矢開記ニモ、しゝはかのしゝたる事見えたり

すかる 袖中抄曰、すがるをば無名抄、綺語抄、奧義抄、童蒙抄等にみな鹿を云といへり。或はわかきしかともいへり。古今切紙次第曰、すがるとは鹿の事を云之

野鹿 扶桑略記廿九曰、永承六年正月八日、野鹿入禁中。延久四年十一月□日、野鹿入禁中、捕繫以瀧口放遣西山。同三十日、承保元年二月二日、野鹿入法成寺。鹿王院記曰、野鹿現來成群、因名院称鹿王。○新撰字鏡曰、跂。鹿乃乎止利阿加久曾。字典曰、跂、前漢禮樂志、注、凡有足而行者稱跂行。

【集註】古事記曰、淡海之久多綿之蚊屋野、多在猪鹿、其立足者、如荻原、指擧角者、如枯樹。日本書紀曰、仁德天皇六十七年冬十月丁酉云云是日、有鹿忽起野中、走之入役民之中而仆死。同卷第二十九曰、天武天皇白鳳五年八月辛亥、詔曰、四方爲大解除、用物、則國別國造輸拔柱云云鹿皮一張云云。同卷第三十曰、持統天皇三年春正月壬戌、筑紫太宰粟田眞人朝臣等獻隼人一百七十四人、幷布五十常、牛皮六枚、鹿皮五十枚。續日本紀卷第十曰、聖武天皇神龜二年九月庚辰、詔曰、云云又造法捕禽獸者、先朝禁斷。擅縱人兵、殺害猪鹿、計無頭數、非直多害生命、實亦違犯章程。宜頒諸道並須禁斷。三代實錄卷第二十八曰、淸和天皇貞觀十八年三月九日丁亥、參議太宰權帥從三位在原朝臣行平起請二事、云云全天長元年、停多褹嶋、隷大隅國、是只貢百箇鹿皮、費三萬六千餘束稻之故也。同卷第三十二曰、陽成天皇元慶元年秋七月三日、比月炎旱、神功皇后楯列山陵成崇、遣使巡檢。守護義倉者、於倉下解鹿喫肉、百姓伐取南北二陵樹木三百三十

御ノ上、イ本充アリ

河內ハ阿波ノ誤

二株。守倉人及諸陵宮人科罪。同卷第三十五曰、元慶三年春正月三日癸巳、僧正法印大和尚位眞雅卒云云和尚自淸和太上天皇初誕之時、未嘗暫離左右、日夜侍奉。天皇甚見親重、奏請停山野之禁、斷遊獵之好。云云又陸奧國鹿腊、莫以爲贄奉御膳。同卷第四十八曰、光孝天皇仁和元年九月十八日己亥、是日、有野鹿、入大舍人寮、臥廳事前、爲人所逐、走入左衞門府、捕獲放於北野。仙覺萬葉集註釋卷第一曰、播磨國風土記云、香山里本名鹿來墓土下上、所以号鹿來墓者、伊和大神占國之時、鹿來立於山岑、是忽似墓、故号鹿來墓。日本靈異記曰、但鹿負矢而死仆也、仍馬荷鹿返于河內市辺井上寺之里。

延喜式卷第一曰、鎭花祭二座云云、鹿皮十張。狹井社一座云云鹿皮十張。風神祭二座、鹿皮四張。六月晦日大祓、鹿皮六張。道饗祭云云鹿皮云云各四張。同卷第三曰、霹靂神祭、鹿皮四張。鎭新宮地祭、鹿皮九張。羅城御贖、鹿皮八張。宮城四隅疫神祭、鹿皮云云各四張。畿內堺十處疫神祭、鹿云云各一張。蕃客送堺神祭、鹿皮云云各二張。障神祭、鹿皮云云各四張。凡云云祭料雜皮、伊豆國鹿皮卅張。紀伊國鹿皮卅張。同卷第四曰、伊勢太神宮神寶云云鹿皮一張半。同卷第五曰、齋宮、齋王入初齋院祓淸其院料、鹿皮四張。造野宮畢祓料、鹿皮四張。野宮六月晦日大祓、鹿皮二張。凡齋王將入太神宮、八月晦日朝廷大祓、鹿皮四張。同卷第七曰、踐祚大嘗祭。凡織神服者云云鹿皮二張。凡應供神御由加物器料云云鹿皮一張云云已上當郡所輸。鹿皮一張云云已上河內國麻殖、那賀兩郡所輸。同卷第十三曰、圖書寮、鹿毛筆一管、界六百張。凡造筆、長功日鹿毛三十管、中功日鹿毛二十五管、短功日鹿毛二十管。同卷第十五曰、內藏寮。鹿皮一張、長四尺五寸、廣三尺。除毛曝涼一人、除膚完浸釋一人、削暴和腦搓乾一人半。季料、鹿皮十張。同卷第

竝籩豆ノ三字衍太削ル

十六日、陰陽寮。凡造曆用度者、鹿毛筆九十八管。同卷第十七日、內匠寮。年料鹿皮十張、各長五尺。同卷第二十日、大學寮。釋奠十一座、座別籩十云云鹿脯。豆十、云云鹿醢。從祀九座、座別籩二云云鹿脯。豆二云云鹿醢云云。三牲、大鹿、小鹿、各加五臟云云。右六衛府別大鹿小鹿豕各一頭、先祭一日進之、以充牲。凡籩實云云大鹿脯小鹿脯竝籩豆各一斤八兩云云鹿醢五合、脯脾折葅五合、用鹿百葉云云大鹿小鹿二俎、橫而重於右。同卷第二十三日、民部下。交易雜物、伊賀國、鹿皮廿張。尾張國、鹿革廿張、鹿皮十張。參河國、鹿革六十張。遠江國、鹿皮十張、鹿革卅張。駿河國、鹿革四十張。伊豆國、鹿皮二十張。甲斐國、鹿皮卅張、鹿革十張。相摸國、鹿皮廿張、鹿革廿張。武藏國、鹿革六十張、鹿皮十五張。安房國、鹿革廿張。上總國、鹿皮五十張。下總國、鹿革廿張。常陸國、鹿皮卅張。美濃國、鹿革卅張。信濃國、鹿皮九十張。上野國、鹿革六十張。陸奧國、鹿革鹿皮、數隨得。出羽國、鹿革、鹿皮數隨得。能登國、鹿皮十張。丹波國、鹿革十張。丹後國、鹿革十張。因幡國、鹿皮十張。出雲國、鹿皮廿張。石見國、鹿革卅張。播磨國、鹿革五十張。美作國、鹿革十張、鹿皮廿張。備前國、鹿革廿張鹿皮十張。備中國、鹿皮五十張。安藝國、鹿皮廿張、鹿革廿張。周防國、鹿革廿張。長門國、鹿革廿張。紀伊國、鹿革十張。阿波國、鹿皮十張。伊豫國、鹿革五十枚、鹿皮十張。同卷第二十四日、主計上。凡諸國輸調、大鹿皮一張、六尺已上。小鹿皮二張、四尺已上。凡中男一人輸作物、鹿脯云云各一斤。鹿鮨云云各一斤八兩。甲斐國、中男作物、鹿脯。紀伊國、中男作物、鹿脯、鹿鮨。筑前國、中男作物、鹿脯、鹿鮨。肥後國、中男作物、鹿脯。豐前國、中男作物、鹿鮨。豐後國、中男作物、鹿脯、鹿鮨。同卷第二十六日、主稅上。造革ノ短甲冑一具料云云鹿革各一張、竝大。懸緒料、鹿革五張。造太刀一

日料云々、鹿洗革一條、長三尺、廣六寸。造弓一張料、弣(ユカケ)鹿革一條、圓四寸。同卷第三十日、大藏省、十七日大射云々、其所須鹿皮十六張。同卷第三十二日、大膳上。釋奠祭料、鹿脯三十斤、鹿醢一升云々、鹿一斗五升、大羹料。鹿一斗、醢料。同卷第三十四日、木工寮。年料、小刀鞘料鹿革一張、鞘緒料鹿革一張。同卷第三十九日、內膳司。諸節供御料、鹿完猪完云々、右從元日至于三日供之。節料、云々但近江國元日副進猪鹿。同卷第四十二日、左京職。凡踐祚大嘗大祓所須、鹿皮九張。同卷第四十五日、左近衞府。凡二月八日上丁進釋奠三牲、大鹿小鹿猪各一頭、加五藏、並丙日送大學寮。同卷第四十九日、兵庫寮。鹿革八條、各長二尺五寸、廣四寸。同卷第五十日、諸國釋奠式。豆十六云々鹿醢。凡盛物籩實云々鹿脯一斤八兩、豆實鹿醢五合。豐後國風土記曰、速見郡、頸峯。此峯下有水田、本名宅田、此田苗子鹿恒喫之、田主造柵伺待、鹿到來擧己頸、容柵間、即喫苗子云々。常陸國風土記曰、久慈郡、所稱高市云々西北帶山野、鹿猪住之。多珂郡。古老曰、倭武天皇爲巡東垂、頓宿此野。有人奏曰、野上群鹿、無數甚多、其聳角如蘆枯之原、比其吹氣、似朝霧之立。山背國風土記曰、久世郡白川庄貢鹿革。出雲國風土記曰、意宇郡禽獸有猪鹿。嶋根郡禽獸有猪鹿。餘郡之。大和國風土記曰、宇陀郡貢鹿革。平群郡飽波庄貢鹿。和泉國風土記曰、日根郡鹿狐狸兎之革充武庫之貢。加賀國風土記曰、加賀郡玉戈鄕貢鹿熊之革也。駿河國風土記曰、富士郡、中具羅、横税鹿革。薦河郡、矢集、貢鹿革。江談抄曰、喫完當日、不可參內裏之由、見年中行事障子。而元三之間、供御藥御齒固、鹿猪可□也。近代以雉盛之也。而元三之間、臣下雖喫完、不可忌歟。將主上一人雖食給、不可有忌歟云々。但愚案思者、昔人食鹿殊不忌憚歟。上古明王常膳用鹿完。又稱人饗座大饗、用（謙本）盛之

士　鈔本ト

見客云々八五五月五日の記事

追ノ下刊本「入鳥羽山云々、近習皆參」とあり

所刊本なし

件物一々々。若起請以後有二此制一歟。件起請何時士°嫌不レ覺。又年中行事障子被二始立一之時、不レ知二何世一、可二撿見一也。矢開記曰、矢開には、一二鹿、二二雀と申義也。但鹿は公方樣にはあげ申さずゆなり。鹿の庖丁、同魚板、一段口傳也。矢開に用る物の事、取分一二しゝ、二二雀之。しゝをば、身をとりてまな板にすゆる也。かのしゝの事之。高野御幸記曰、左兵衞佐公行犀角帶劔用鹿皮平鹿鞘著毛沓。百練抄卷第十三曰、寬喜二年閏正月廿一日、鹿走二入法成寺中一。同卷第十四曰、文曆一年十月一日或人云、去八月以後、春日山鹿好突二損人一、法花會竪義者被二突損一之間、及レ期違乱云云。同卷第十六曰、建長四年十一月八日、賀茂太田社穢鹿斃。件鹿氏人於二太田山奧一射レ之、鹿雖レ被レ疵走二來社傍一斃。類聚雜要曰、供御、御齒固云々鹿完（カノシシ）、代用水鳥。扶桑略記廿二曰、宇多天皇寬平元年十二月云云此爲レ狩二取安倍山猪鹿一也。而夜以二松火炬一云云。同廿四曰、延喜廿年庚辰三月廿二日、遣二官使於越前國一、賜二渤海客時服一。云云見°客在京之間、毎日可レ進二鮮鹿二頭一支。同廿五裡書曰、承平二年正月廿九日、鹿入二承明門一、前至二闈司町一、被レ射死。同廿九日、天喜四年九月十九日、鹿入二大內一。人車記曰、仁平三年四月廿六日、宇治殿鹿猶不離御所邊、聊有御不審、今夕以後件鹿不見之失畢。仁平四年正月廿九日、春日詣、左衞門大夫尉爲親云々鹿皮尻鞘。明月記曰、元久元年五月一日、參鳥羽殿、明日御狩云々、驅伏見山鹿、可被追°出京了。建曆三年七月廿五日、前駈云云御馬二疋云云鹿皮鞍覆。寬喜三年八月十九日、終夜聞°所鹿聲。續古事談曰、下野國二荒山云々二荒ノ權現山ノ頂ニスミ給フ、宇都宮ハ權現ノ別宮ナリ。カリ人鹿ノ頭ヲ供祭物ニストゾ。枕草紙曰、あはれなる物、鹿のね。又曰、かきまさりするもの鶴鹿。更級日

記曰、あかつきに成やしぬらんと思ふけどに、山の方より人あまたくだる音す。おどろきて見やりたれば、しかのえんのもとまできてうちないたる、ちかうてはなつかしからぬものゝ聲也。太神宮諸雜事記曰、寶龜四年十月十三日、志摩守目代三河介伴良雄、与後國書生惣判官代酒見文正、入伊雜神戸撿田程爲狩天志、伊雜宮之近邊射伏猪鹿已了云云。園太暦曰、六月秡事、一鹿食人禁否事所見只今不分明、但於此邊七ケ日以後不可有憚之由言之歟、然者後秡日數以後無憚之。源氏物語若紫曰、鹿のたゝずみありくもめづらしう見給に。同夕霧曰、鹿のなくねも瀧のをとも云々鹿はたゞまがきのもとにたゝずみつゝ、山田のひだにもおどろかず、いろこきいねどもの中にまじりて、うちなくもうれへがほなり。同手習曰、山になく鹿をだに云々鹿のなくねになどひとりごつけはひ。四季物語曰、そともの鹿の音もつまどふ夜半かれ〴〵なり。古今著聞集巻第二曰、高弁上人、春日大明神にいとま申さんとて、かの御やしろへ參られけるに、鹿六十頭ひざをおりて、地にふして上人をうやまひけり。同巻第十曰、彼大納言交野ゝ御狩に、同じ馬に乘て、鹿に付て馳ける程に、鹿淀川に入ければ、馬もつゞきて入にけり。同巻第十六曰、前大和守時賢が墓所は、長谷といふ所にあり。そこのるすする男、くゝりをかけて鹿を取ける程に、或日大鹿かゝりたりける。此男が思ふやう、くゝりかけて取たらんいとねんなし、射ころしたりといひて、弓の上手のよし人にきかせんと思ひて、くゝりにかけたる鹿にむかつて、大がりまたをはげて射たりける程に、其箭しかにはあたらずして、くゝりにかけたりけるかづらにあたりたりければ、かづらはきれて、しかは事ゆえなくはしりにげて行にけり。此男かしらがきをすれども、さらにゑきなし。平家物語巻第十一曰、此あさりの与一は、せいびやうの

てきゝにて、二町が中をはしるしかをば、はづさずつよういけるとぞ聞えし。同巻第十二曰、しかのねかすかにをとづれて云〻をしかのとをるにてぞ有ける。曾我物語巻第五曰、君御さかづきをひかへさせ給ひけるとき、しかのねかすかにきこゆるはいづくぞ、と御たづねありければ、いたばなのほとりと申。君きこしめし、いにしへの人も、しかのねちかきあきの山ごへとこそよみしに、なつのゝにしかのなくこそふしぎなれ、とおほせくだされければ、ともつなかしこまつて申けるは、さる事の外、むかしほうじやうといひし人たんごのくにゝくだり給ふかのくにゝあさづまとて、につほん一のかりくらあり、その山のしかは、ゆふべよりもよにいれば、山にはすまで、なぎさにくだりて、かずをつくしてならびふす云〻。同巻第十一曰、さらぬだに、秋のゆふべはさびしきに云〻おりしりがほのしかのこゑ。若狭國守護職次第曰、小濱八幡宮上の山にて、鹿をからせられし御祟とぞ云〻。河越記曰、妻とふ鹿は聲をしのび。又曰、南院はいつよりかあれけん、鹿のふしどゝ成て、名ばかりぞ殘ける。六代勝事記曰、しかの音むしのこゑもよはりはて。東關紀行曰、鹿の音なみだをもよほし。又曰、うしろは山ちかくして、窓にのぞむ鹿の音、虫聲、かきのうへにいそがはし。春日社參記曰、妻どふ鹿の声いとちかくきこえて、暮行秋の名殘をおしみがほなり。又曰、夏の鹿の声にたつべきことならねど。歌林四季物語曰、小倉の山、高雄などにわけ入て、一夜もやどりし人は、鹿の音すさまじきなど、秋めきたるに。榊葉日記曰、林にたゝずむ鹿のね、苔にむせぶ水の聲までも云〻鹿の頭など道大路にちろぼひ云〻。身のかた見曰、とを山のしかのねほのかにきこえ。又曰、鹿のねはまつとはいはず。照季家集曰、野にたつしかのまうさする人もなきにはあらねば云〻。赤染衛門集曰、秋石山

にまうでゝ、しかのこゑをきゝ一ニ云々。覽富士記曰、青野が原とかやに、しかのねかすかにきこゆ。榮花物語本のしづく曰、おくやまのしかもいとゞいゆめにおもひやられ。同衣の珠曰、やまのかたをながめやらせ給につけても、わざとならず、いろ〳〵にすこしうつろひたり。しかのなくねに御めもさめて、いますこしこゝろぼそさまさり給。同煙の後曰、おはしますやまざとのあきのけしき、しかのなくねなどもあはれに云々。西行物語曰、相摸國大庭といふ所砥上が原をすぐるに、野原の霧のひまより、風にさそはれ、鹿のなくこゑ聞えければ云々。源平盛衰記卷第四十一曰、尾上の鹿の曉の聲哀を催す便也。撰集抄卷第四曰、安藝嚴嶋は云々所にしゝをからざれば、御山には小鹿鳴。同卷第七曰、むかし俊方といひける弓取、野に出て鹿を狩けるほどに、例よりも鹿おほくて、思ひの外に射とゞめにけり。塵添壒囊抄曰、淸水寺云云或夜群鹿來テ壞レ岸ヲ塡レ谷ヲ嶮ヲ平ゲテ一ツノ山路ヲ開ケリ云云。又命婦三善高子起請曰、此山所生居住之輩永ク不レ可レ食ニ鹿完一、雖ニ暫ク居住人一ト食ニ鹿完一者必ス有ル衰損一者也。吾妻鏡卷第三曰、壽永三年三月十八日、武衞進ニ發伊豆國一給、是爲レ覽ニ野出鹿一也云云。同卷第六曰、文治二年四月廿一日云云次爲レ見ニ狩獵一向ニ二俣山一之処、鹿九頭、一列走ニ通義定之弓手一、仍義定幷義資冠者、淺羽三郎等、馳レ駕、悉以射ニ取之一畢。件皮所レ令ニ持參一也云云。同卷第十三曰、建久四年五月廿七日、未明催ニ立勢子等一、終日有ニ御狩一。射手等面々顯レ藝。莫レ不ニ風レ毛雨レ血。爰無雙大鹿一頭走ニ來于御駕前一。工藤庄景光、兼有ニ御馬左方一。此鹿者景光分也、可ニ射取一之由、申ニ請之一。被レ仰ニ可レ然之旨一、本自究竟之射手也。人皆扣レ駕見レ之。景光聊相開而逆ニ懸于弓手一、發ニ射一矢一、不レ令レ中。鹿拔ニ一段許之前一。景光押懸打レ鞭、二三ノ矢又以同前。鹿入ニ本山一畢。同卷第二十

九日、天福元年五月廿七日、故大將家、下野國那須野御狩之時、大鹿一頭掛下勢子之內云云。同卷第三十一日、嘉禎三年七月廿五日、北條左親衞潜赴藍澤。今日始獲鹿、卽祭箭口餠。一口三浦泰村、二口小山長村、三口下河邊行光。同卷第五十一日、弘長三年八月四日、放生會供奉人中、有鹿食憚之由申輩事、違犯嚴制之條、不可然之旨、殊被仰下之処、有各陳謝。所謂、近江五郎左衞門尉、鹿食禁制事、未承及之上、爲治所勞、食服之由申。大須賀六郎左衞門尉、所勞不快之間、鹿食可然由、依醫師申、忽忘御制事畢之由云云。信濃次郎左衞門尉、去月上旬之比、於或會合之砌、取違于他物、誤食鹿之由申。八日放生會供奉人等事、條々有其沙汰。又後日重被觸仰之中、佐渡太郎左衞門、鹿食由申云云。宮內權大輔、依所勞不快、賜鹿食暇之由申。同卷第五十日、弘長元年八月十三日云云次宮內權大輔、長門前司、宇都宮石見前司、大隅大炊助、壹岐三郎左衞門尉、伊勢三郎左衞門尉等、各依有鹿食事、辭申云云。十四日、次伊勢次郎左衞門尉賴綱、佐々木壹岐四郎左衞門尉長經　鹿食咎事、父壹岐前司泰綱、伊勢入道行願等就愁申之、評定次及其沙汰、有御免。山槐記曰、治承四年十月廿三日云云左中將淸通朝臣在山路左（自福原去二許里）日來尋逢今日雖被催當日申鹿食之由、仍左少將通資朝臣可勤云云件人新院御服藥左之間於御前同服藥云云然今日依可參內今朝許止之云云。宗淸法印立願文曰、鷄山川之猪鹿魚類者。

富士紀行曰、山中と申所あり、折ふし鹿のこゑほのかにきこえければ

形狀

萬葉集卷第十六曰云云佐宍待跡、吾居時爾、佐男鹿之、來立來、嘆久、頓爾、吾可死、王爾、吾仕牟、吾角者、御笠乃波夜詩、吾耳者、御墨坩、吾目良波、眞墨乃鏡、吾爪者、御弓之弓波受、吾毛等者、御筆波夜斯、吾皮者、御箱皮爾、吾完者、御奈麻須波夜志、

百練抄十四

大内問答とあるは奉公覺悟之事の誤なり

二ノ下群本重あり

吾ヵ佞毛毘、御奈麻須波夜之、吉ハ美義波、御塩乃波夜之、耆矣奴、吾ヵ身一ッ爾、七重花佐久、八重花生跡、白賞尼、白賞尼。源平盛衰記卷第卅六曰、同六日ノ未明、上ノ山ヨリ聶ヲ崩テ落、柴ノ梢ユルギケレバ、城ノ中ニハ、スハヤ敵ノ寄ハトテ、各甲ノ緒ヲシメ、馬ニ騎鞍ヲ取テ待處ニ、雄鹿二雌鹿一ツマキテ出來レリ。能登守ハ、此鹿ノ下樣ヲ思ニ、一定敵ガ寄ルト覺タリ、爰ニハマン鹿ダニモ、人ニ恐テ深ク山ニ入ベシ、深山ノ鹿、爭人近ク下ルベキ、菩薩ヲ山ノ鹿ニ喩タリ、招ケドモ不レ來トイヘリ。敵ノ近付ル條子細ナシ、我ト思ハン者アマスナト宣ヘバ、伊豫國住人、高市武者所淸章ハ、馬ノ上ニモ歩立ニモ、弓ノ上手ナル上ニ、而モ獵師成ケルガ、折節射付ヶ馬ノ早走ニ乘タリケリ。一鞭アテ、弓手ニ相付ケテ、箙ノ上ザシ拔出メ、雄鹿二ハ同草ニ射留、雌鹿一ハ遊テケリ。不レ意狩シタリ、殿原草分ノカフ、ソジ、ノハヅレ、肝ノタバ子、舌根、鹿ノ實ニハ能處ゾ、鹿食殿原ト云ケレ共、大形ノ忩々ノ上、軍場ニテ鹿食事憚アリ。其上稻村明神トテ、程近ク御座ケレバ、松ノ二三本有ケル本ニ奔置ケリ。其ヨリメコソ、ソコヲバ鹿松村トモ名付ケレ。百練抄曰、嘉禎二年六月云云又以二鹿六一集二置六角西洞院一、武士号二之宍市一、群集飽食、洛中不淨只有二此事一、三条西洞院爲二攝政家一之間可レ被二制止一云云○大内問答曰、社頭にて敷皮をしくには、くびかみを前へなして敷候。常は白毛之方前へ成候やうに敷候。本の敷がはゝ鹿の皮也。又ぐん陣にてくらおほひも本の敷皮をする之。隨兵日記曰、敷皮のこしらへ樣、鹿皮の秋二毛たるべし。但敷皮の廣さ長さに寸法有べからず云々。尺素往來曰、行縢。大星之夏毛者若々敷候。陰星之秋二毛候者拜領仕度候。霜臺・先ニ尉者熊皮尋常之事候歟○伊勢雜記頭書云、犬追物圖說ニ、行縢は鹿の皮を用る事本式之。若年の人は毛色のうすきを用ひ、老年程毛

色のこきを用る之。鹿は四月頃よりそろ／＼毛ぬけ代り、五月頃黃色に成り、白星あざやかに出來て、夏の末には毛長く、赤みさして色こく成、八月頃より又毛ぬけかはりて、赤みつよくなりて、冬に至る程黑みさして、後には馬のあを毛のごとくに成物之。夏毛といふは、夏に至りて毛のぬけ代りたる時はぎたる皮也。その色うすく花やかなる故、十五六迄の少年の人用之。夏毛の秋かけたるといふは、秋に至りて毛のぬけ代りたる時はぎたる皮也。夏の古毛は長く、秋の毛は短く生まじりてあるを、その生殘りたる夏毛をむしりてかくるなり。是をむしり毛と云。其色夏毛といふよりはこき故、二三十以上壯年の人用之。秋二毛といふは　卽此夏毛の秋かけたると同物之。二品にあらず。秋二毛の黑きといふは、冬に至りて少黑みさしたる頃はぎたる皮之。その色夏毛の秋かけたるといふよりもこき故、五六十以上老年の人用之。秋毛の冬かけて黑きといふは、卽此秋二毛の黑きと同物之云々

附方　水腫　頓医抄曰、鹿ヲ味噌塩酒ヲ入テ一日一夜煮テ粥ノ如ニシテ可食、煮トキト名ク少便可下

〇平志

加　倭名抄國郡部

漢名　麕　爾雅

今名　ヲジカ　爾雅曰、鹿牡麌、其牡名レ麌

一名　男鹿　萬葉集卷第十曰、奥山爾、住云男鹿之、初夜不去云云　雄鹿　萬葉集卷第十曰、妻呼雄鹿之、音之亮左　牡鹿　萬葉集卷第六曰、須臾モ、去キ而見テ牡鹿、神名火乃云云。同卷第七曰、千磐破、金之三崎乎、過レ鞆、吾渚不忘、牡鹿之須賣神。同卷第八曰、今毛見牡鹿、妹之咲容乎。同卷第十曰、奈何牡鹿之、和備鳴爲成、蓋ク毛。同卷第十一曰、牡鹿ノ海部乃云云。倭名鈔國郡部曰、陸奥國牡鹿、乎志加〇柳河東集曰、類麏麚之不息、注麚

音加、本作䴥、麌鹿也。說文、麚。牡鹿也、夏至解角

○左鳴子加 日本書紀

［一名］

小牡鹿 萬葉集卷第四曰、夏野去、小牡鹿之角乃、束間毛、妹之心乎、忘而念哉。同卷第八曰、此岳爾、小牡鹿履起、宇加潔良比云云。同卷第十曰、山邊庭、薩雄乃禰良比、恐跡、小牡鹿鳴成、妻之眼乎欲焉。仙覺萬葉集註釋卷第八曰、をしかふみとは小鹿也。うかねらひとは、大鹿わらひと云、和語のならひ、うは大の義なり

竿志鹿 萬葉集卷第十曰、竿志鹿之、心相念、秋芽子之云云

狹小牡鹿 萬葉集卷第十曰、山邊爾、京爾之有者、狹小牡鹿之、妻呼音者、乏毛有香。

狹男牡鹿 萬葉集卷第六曰、狹男鹿者、妻呼令動メ

左男牡鹿 萬葉集卷第十曰、左男牡鹿之、妻整登、鳴音之云云

沙小牡鹿 萬葉集卷第十曰、山爾文野爾文、沙小牡鹿鳴母

左小鹿 萬葉集卷第十曰、左小鹿之、聲伊續伊續云云。左小鹿之、妻呼音ヲ云云

左小牡鹿 萬葉集卷第十曰、左小牡鹿之、妻問時爾云云。詠ニ鹿鳴ー云云、左小牡鹿之、鳴成音毛云云。左小牡鹿乃、音乎聞乍云云。左小牡鹿者、和備鳴將爲名云云。左小牡鹿曾、露乎別ヶ乍云云。左小牡鹿之、妻喚山之云云。左小牡鹿之、朝伏小野之、草若美云云。左小牡鹿之、小野ノ草伏シ、灼然ク云云。左小牡鹿之、入野乃爲酢寸云云

左牡鹿 萬葉集卷第六曰、左牡鹿乃、妻呼秋者。同卷第十曰、秋芽子之、開有野邊ニ、左牡鹿者、落卷惜見、鳴去物乎

左男鹿 萬葉集卷第六曰、左男鹿者、妻呼令響メ

棹牡鹿 萬葉集卷第八曰、吾岳爾、棹牡鹿來鳴云云。棹牡鹿之、來立鳴野之云云。棹牡鹿之、朝立野邊乃云云。同卷第十曰、棹牡鹿

鳴母

狹尾牡鹿 萬葉集卷第八曰、狹尾牡鹿乃、胷別爾可毛、秋芽子乃云云。狹尾牡鹿鳴哭

棹四香 萬葉集卷第八曰、棹四香能、芽二貫置有、露之白珠、相佐和仁云云

左乎思鹿 萬葉集卷第十四曰、左乎思鹿能、布須也久草無良、見要受等母云云

左乎思賀 萬葉集卷第十五曰、佐乎思賀奈君母

草乎思香 萬葉集卷第十五曰、可也能山邊爾、草乎思香奈久毛云云。草乎思香奈伎都云云

佐男鹿 萬葉集卷第十六曰、佐男鹿乃、來立來嘆久云云

左乎之加 萬葉集卷第二十曰、左乎之加能、牟奈和氣由可牟、安伎野波疑波良

左乎之可 萬葉集卷第二十曰、左乎之可能、都由和氣奈加牟、多加麻刀能野曾

さほ鹿 世繼物語曰、和泉式部がもとに帥の宮かよはせ給ける云云此式部を妻にせさせ給ひたりとみえたり。やすまさにぐして丹後へ下たるに、明日狩せんとて、物とりつどひたる夜、さほ鹿のいたく鳴ければ、いであはれ明日しなむずれば、いたく鳴にこそ、と心うがりければ、さおぼさば、狩とゞめんに、かからん哥をよみ給へ、といはれて。ことはりやいかでか鹿の鳴ざらんこよひ計の命と思へば。さて其日の狩はとゞめてけり。源氏物語にほふ宮曰、さをしかのつまにすめる

さふしか 平家物語卷第二曰、さふしかの御見ゝをふり立て云ゝ

【集註】 日本書紀顯宗天皇曰、脚日木ノ、此傍山牡鹿之角。牡鹿此云ニ左嗚子加一。釋日本紀曰、攝津國風土記云、昔シ者、刀我野有ニ牡鹿一、其ノ嫡牝鹿居ニ此野ニ、其妾牝鹿ハ居ニ淡路ノ國野嶋ニ、彼牝鹿屢ゝ往ニ野嶋ニ、與レ妾相愛ヿ無レ比、既ニシテ而牡鹿來テ宿ニ嫡所ニ、明旦牡鹿語ニ其ノ嫡ニ云、今夜夢ラク、吾背爾雪零於祁利止見支。又日都

須久紀草生多利止見支、此ノ夢何ノ祥。其ノ嫡悪ニ夫復向レ妾可キレ往、乃詐テ相レ之曰、背ノ上ニ生草者、矢射ニ背上ヲ之祥、又雪零ハ者、白塩塗ル完ニ之祥、汝渡ニ淡路野嶋一者、必ス遇ニ船人一、射レテ死ニン海中ニ、謹勿ニ復往一。其牡鹿不レ勝ニ感戀一、復渡ニ野嶋一、海中ニシテ遇・逢行船一、終為メニ射死ルト云云。古今著聞集第十九曰、或は山ざとのかきねにさほしかのたちより。撰集抄曰、峯におきふすさおしかとしてはつまをこひ。狭衣曰、み山のさとのさびしさは、げにをしかのあとよりほかのよひろもまれなりけるを

○めが 矢開之記

漢名 麀 爾雅

今名 メジカ 爾雅曰、鹿牝麀、

麀於牛切、疏、其牝名レ麀。詩小雅云、麀鹿麌々、其跡名レ速○矢開之記曰、詞にめかと云べし。めかといへばとて、おかとは云まじき事之。犬をおかといふべし。又鹿とは云まじきなり。太平記ニ、女鹿孫三郎と云名ミエタリ

集註 曾我物語曰、さゑもんのぜうすけつねは、二ひきつれたるめじかにめをかけて、くだりざまにをとせしを、一め見たりし斗にて。古今著聞集曰、大成女鹿一疋ふしたりけり。蜻蛉日記曰、かたきしに草のなかに、そよ〳〵しらしたるもの、あやしきこゑするを、こはなにぞ、ととひたれば、しかのいふなり、といふ。などかれいのこゑにはなからざらんとおもふほどに、さしはなれたるたにのかたより、いとうらわかきこゑに、はるかにめなきたなり。きく心ちそらなりといへばおろかなり云々

○加呉 倭名類聚鈔

漢名 麛 説文

今名 カノコ 爾雅曰、鹿、其子麛

一名 鹿子 倭名鈔曰、爾雅集註云、其子曰麑、和名加呉。説文曰 鹿子曰麛、又曰麑。明月記曰、建暦三年七月廿五日、前駈云云童朽葉

麑子結水干小袴○按華夷花木考、牡丹華、釋名云、鹿胎華ハ多葉紫華有テ二白点一如二鹿胎之紋一

集註　延喜式卷第二十三曰、民部下。交易雜物、讚岐國、麑子皮十五張。古文正宗曰、以麑子皮爲弁　○

久之加（クシカ）　倭名類聚鈔　漢名　麑　玉篇　今名　二歳ノシカ　一名　久之賀　天文写本和名抄○

倭名鈔曰、麑。和名久之加
○麑ハノロ也、和產無之

安乎之之　本草類編曰、麂、和安乎之之

久自加　新撰字鏡曰　麞、久自加○字典曰、麞。音几。本草綱目曰、麞。即古麂字。宗奭云、麂小二於麞一、其口兩邊有二長牙一。時珍云、麂居二大山中一、似レ麞而小。牡者有二短角一、黧色豹脚、矮而力勁、善跳越、其行二草莽一但循二一徑一。此獸和產未詳。爾雅曰、麐大麢旄毛狗足。疏、旄毛猥長毛也。正字通曰、爾雅、麐旄毛狗足皆非

正誤　本草啓蒙曰、麂。和產詳ナラズ、古ヨリクジカト訓ズルハ麂下ノ几ヲ九字ト見誤タルト、此說臆度也。久之加（クシカ）ハ若年ノ鹿ヲ云、說文ニ鹿一歳曰レ麂。玉篇ニ、麂、胡官切、鹿一歳。此等ノ說ニ據テ、麂ヲクジカト訓ズ。字典曰、麂。集韻、胡官切、音桓。正字通曰、麂。音完、鹿三歳。品字箋曰、麂鹿二歳也。麂ハ麂ノ字也。卽蟫史ニ鹿兒一年角如レ釘ト云者也。紀州日高郡川又村獵人云、秋山ニ入テ笛ヲ以テ鹿ヲ呼ベバ、先ニ來ル者ハ二歳ノ鹿ニメ、多クハ一角也。此ヲタカズワイト云、亦角小クメ岐ヲナシタルモアリ。獵人不レ殺レ之、手ヲ揚テ追フ。大和本草曰、一種角ニ無レ枝アリ、形小ナリ、能傷ル物ヲ、常ノ鹿ヨリ性タケシ。按ニ一角ノ鹿モ始小ニメ年ヲ重テ大ニナル、和州吉野郡釋迦嶽麓花瀨村獵人云、鹿角一本ニメ枝ナキハ年經テモ一本ニメ、岐ヲ不レ成、コレヲズワイト云。皮至テ下品也。又一

枝雲本「枝」

方ニ二岐ヲ成、一方ニ岐ナキ者アリ。歳タケルマデ一方岐ニメ一方岐ナシ、三岐ヲ成左右ニ出ル者ハ何年ニ及テモ左右三岐ヲ成。蟫史ニ鹿兒一年角如丁、二年角二臺、三年三臺、至四臺ト云非也。タカズワイハ即筑前ノサヲシカ也。又本草類編ニ安乎之之ト云、今俗ニアヲ二歳ト云ルニ同クメ二歳ノ鹿也。玉篇ニ、麛所京切、鹿二歳ト云是也。字彙曰、麛鹿二歳也。後世奥州南部ニテ、ニクヲアヲシ、ト云、古ノ安乎之之ニ非ズ。本草類編曰、羚羊角、和加乃之之川乃、麑安乎之之ト云、觀此可知ルニ加モシ、ハ非ルヲ安乎之之ニ也。後世ノ書ナレモ秘傳書(文祿後金瘡書也)産前後ノ薬方ニ、ニケフクロ(五分アヲシ、ノ五分同青鹿)腹ノ中ニアリ(アラシゴ之コトナリ)(ト出産後ニ)用ルハ鹿胎子也。然則青鹿アヲシハ鹿兒ヲ云ルコト明也。○正字通曰、按鹿生山林、與家畜馬牛別リ、安ッ能ク察其生爲何年定其爲幾歳、既紀年則自二三歳後皆當有以名之、何獨一歳曰麛、曰麑、曰麜三歳曰麚餘皆無名也

○鹿のつの 平家物語

漢名 鹿角本草

今名 シカノツノ

證類本草曰、圖經曰、鹿年歳久者其角堅好煑以爲膠入薬弥佳。雷公云、鹿角其角要黃色緊重尖好者、蟫史曰、鹿牡有角無齒、牝有齒而無角、無ハ齒謂ニ上齶ニ無齒、有ハ齒謂ニト齶有齒、若キハ下齶則牝倶ニ有齒

集註

賦役令曰、其調副物、鹿角一頭。延喜式卷第一曰、祈年祭神云云座別鹿角一隻。三月祭。鎭花祭二座云云鹿角二頭。狹井社一座、鹿角四頭。三枝祭三座、鹿角一頭。風神祭二座、鹿角二頭。月次祭云云座別鹿角一隻。六月晦日大祓、鹿角三頭。同卷第四曰、伊勢太神宮。神寶云云鹿角六枚。同卷第五曰、齋宮。齋王入初齋院祓清其院料、鹿角四頭。造野宮畢祓料、鹿角四頭。野宮六月晦日大祓、鹿角二頭。凡齋王將入太神宮、八月晦日朝廷大

執ノ上一本拔アリ

枝、料鹿角四枝。同卷第二十三曰、民部下。交易雜物、尾張國、鹿角十枚。相摸國、鹿角十枚。上總國、鹿角十枚。常陸國、鹿角十枚。下野國、鹿角十枚。美作國、鹿角十枚。備前國、鹿角十枚。備後國、鹿角十枚。同卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物、鹿角二隻。同卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。攝津國、鹿角四具。丹波國、鹿角一具。播磨國、鹿角一具。美作國、鹿角一具。備中國、鹿角二具。讃岐國云云鹿角各五具。同卷第四十九曰、兵庫寮。鹿角一隻、弼料、長一尺。鹿角本末各五十四隻、伊多都伎料。常陸國風土記曰、角折濱。或曰、倭武天皇停ニ宿此濱一、奉レ羞ニ御膳一、時都無レ水、卽執ニ鹿角一掘レ地爲ニ其角折一、所以名之。駿河國風土記曰、烏渡郡矢田部山、貢ニ鹿角頭走兎血一

【形狀】平家物語卷第九曰、いのまたは八か國に聞えたるしたゝかものなり。鹿のつのゝ一二の草かりをばたやすく引さきけるとぞ聞えし。吾妻鏡卷第二十一曰、建保元年七月十一日、自ニ御所一被レ出ニ大鹿角二一、長三尺方七寸

【附方】明月記曰、建曆三年七月五日、喘招醫博士忠元朝臣令見腹、小熱云、雖非可恐、猶可加療治鹿角、仍雖欲參院不出行。六日、療治事即時有減氣、仍止鹿角了。十一月十一日、早旦問時成朝臣宅令見眉契猶可付鹿角。十二日眉腫猶付鹿角、今日膿汁頗出。嘉祿元年十月十四日、自昨日頗有雜熱、今日付鹿角、臨昏心寂房來見、不可有大事、鹿角宜由示之

○加乃知加都乃（カノチカツノ） 本草和名　【漢名】鹿茸 本草　【今名】シカノフク

ロヅノ

證類本草曰、圖經曰、鹿茸、四月角欲レ生時取ニ其茸一陰乾ス、以テ形如ニ小紫茄子一ノ者ヲ爲レ上。或云、茄子茸ハ太タ嫩ニシテ血氣尤未レ具不レ若カ分レテ岐ニ如ニ馬鞍形一者有モ力、茸不レ可レ鼻、其ノ氣能ク傷レ人。衍

知ハ和ノ誤ナラジカ醫心方和名抄延喜式傍訓凡テ「和」ナリ

義曰、凡用ルニ茸ヲ無レ須ルニ大嫩ヲ一、唯長四五寸、茸端如ク二馬瑙ノ一紅者最モ佳。本草綱目、說曰、鹿茸不レ可ニ以レ鼻嗅レ之、中有ニ小白蟲一、視レ之不レ見、入ニ人鼻ニ一必ス爲ニ蟲顙一、藥不レル及ハ也

[一名] 加川乃 本草類編○本草和名曰、鹿茸。和名加乃知加都乃

鹿乃和加豆乃 倭名類聚鈔曰、鹿茸。和名鹿乃和加豆乃

鹿乃和可豆乃 天文写本

和名鈔○萬葉集卷第四曰、夏野去、小牡鹿之角乃、束間毛、妹之心乎、忘レ而念哉。仙覺萬葉集註釋曰、夏野ゆく鹿とよめるは、五月夏至日鹿角解などいひてあり云云さてそのもとのありし角のおちて、今おふる角は、手にとる斗だにもおひぬるによせて、つかのまもとはよめるなり

[集註] 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥、美濃國、鹿茸七具。信濃國、鹿茸十具。播磨國、鹿茸一具。讃岐國、鹿茸鹿角各五具。

[製法] 本草類編曰、鹿茸、和加川乃、四月五月解角吃採陰乾、去毛二寸許、浸酒。福田方曰、鹿茸皮ト毛トヲ去テ、酥ヲ塗テ黄色ニ炙テ使ヘ。此者ワカツノ、三寸バカリナルガ毛ヲキテ血ヲフクメルヲ上トス。或ハ酒ニ浸ス。頓醫抄曰、鹿茸ケヲヤキステ、ウス〳〵トワリテ、酒ニヒタシテ、一夜ヲヘテアブルベシ。又曰、酢ニヒタシアブレ。毛ヲヤキ捨ヨ

○加乃川乃、乃々仁加波 本草類編

[漢名] 鹿角膠 本草 本草、頌曰、七月采レ角、以ニ鹿年久者ニ一其角更好、煮以爲レ膠○本草類編曰、白膠。和加乃川乃々仁加波、一名鹿角膠

○しろきかのしゝ 仙覺萬葉集註釋

[漢名] 白鹿 [今名] シロキシカ 名物攷曰、鱓

史云、鹿一千年爲蒼鹿、又百年爲白鹿、又五百年爲玄鹿

一名　**白きかのしゝ**　袖中抄曰、白きかのしゝのかぎりとられたれば云々。延喜式曰、白鹿仁鹿也、色如霜雪。○仙覺萬葉集註釋卷第七曰、しながとりゐなのといへる事、先達の釈さま〴〵なり。或人のいはく、しろきかのしゝをとりて、猪（ゐのしゝ）のなかりければ、しなかとりゐなと云といへり。詞林采葉抄曰、或云、攝津國猪名野ニテ狩ヲシケルニ、白鹿ヲ取テ、猪ハナシト云ケルヨリ申。袖中抄曰、白鹿をとるといひがたし

集註　日本書紀曰、仁德天皇五十三年、新羅不朝貢、夏五月、遣上毛野君祖竹葉瀨、令問其闕貢、是道路之間獲白鹿、乃還之獻于天皇。六十年冬十月、差白鳥陵守等充役丁。時天皇臨于役所、爰陵守目杵忽化白鹿以走。續日本紀卷第一曰、文武天皇元年九月丙申、丹波國献白鹿。同卷第三曰、慶雲三年秋七月己巳、周防國守從七位下引田朝臣秋庭等献白鹿。同卷第廿九曰、称德天皇神護景雲二年春正月乙卯、播磨國ヨリ献白鹿。同卷第三十曰、神護景雲三年十一月壬辰、詔曰、伊豫國和與白祥鹿乎献奉天在方禮有礼志與呂許保志毛止奈見流。寶龜元年五月壬申、先是、伊豫國員外掾從六位上笠朝臣雄宗献白鹿。勅曰、去歲、得伊豫國從五位上高圓（マトノ）朝臣廣世等進白鹿一頭。文德實錄卷第八曰、齊衡三年十二月丁酉、美作國献白鹿放神泉苑。三代實錄卷第六曰、淸和天皇貞觀四年九月廿七日癸巳、美作ノ國献白鹿（カセキ）。同卷第十五曰、貞觀十年十一月廿八日丁巳、太宰府献白鹿一、放神泉苑。同卷第四十三曰、元慶七年五月廿六日辛卯、大雨、神泉苑裏蕁有放鹿、是日生白鹿、遠客也勃海來朝、得此禎祥ヲ、豈不懿（ヨカラ）歟。日本記略曰、延曆十一年閏十一月壬辰、是日、伊豫國献白鹿。延曆二十一年春正月乙亥、美作國献白鹿。百練抄卷第四曰、後一條天皇長元二年七月十

二日、前大貳雅定卿獻ニ白鹿一、天覽之後縱ニ神泉苑一。扶桑略記廿三裡書曰、延喜十七年閏十月廿六日、備後國進ニ白鹿一頭一、奉覽後放ニ神泉苑一。同廿四裡書曰、延長六年九月四日、天台山捕ニ送白鹿二頭一、依レ勅令レ放ニ神泉一。仙覺萬葉集註釋卷第一曰、尾張國風土記云、葉栗郡川嶋社在河沼郷川嶋村奈良宮御宇聖武天皇時、凡海部忍命、此神化爲ニ白鹿一、時出現有レ詔奉齋爲ニ天社一

【形狀】 文德實錄卷第九曰、天安元年二月乙酉、宣制曰、同年十二月十三日宣命、美作國白鹿乎獻良久奏利禮。又曰、己丑詔曰、美作國貢ニ白鹿一頭一、色均ニ霜雪一、白絶ニ毛群一、性是馴良、足レ稱ニ仁獸一。三代實錄卷第三十曰、陽成天皇元慶元年三月三日甲辰、備後國獲ニ白鹿一ヲ、而獻レ之、毛白可レ愛、奏レ覽ニ太上天皇一、後放ニ於神泉苑一。同卷第三十一曰、天慶元年夏四月十六日丁亥、詔曰、閏二月二十一日、備後國貢ニ白鹿一一、或髗誤ニ曉ノ月一ト、羽毛映ニ於丹墀一ニ、或ハ幹凌ニ寒霜一、枝柯被ニ於青郊一 ○

八足鹿 日本書紀

柳河東集曰、撰レ髀脇ヘ。鹿云云注鹿神鹿舊注天撰十二神鹿。一身八足兩頭

【集註】 日本書紀曰、天智天皇十年夏四月、筑紫言、八足之鹿生而即死

於保之加(オホジカ) 倭名類聚鈔

【漢名】 麋

【今名】 オホジカ 和州十津川

【今案】 和州吉野郡西川村土人云、一種オホジカアリ、其角末二岐ニシテ身至テ大ナリ。其皮亦下品ニシテ用ヲナサズ。古ヨリ於保之加ト云者即此也

【一名】 於保白加

新撰字鏡○倭名鈔曰、麋。漢語抄云、於保之加。遵生八牋曰、麋角註、麋。鹿之大者、角丫又不齊、白如象牙、出水澤中、非山獸也。大者二十斤、一副生海邊。證類本草曰、雷公云、其麋角頂根上ニ有ニ黄色毛一、若ニ金線一ニ兼

收捉　一本

傍ニ生ニ小尖一也。色蒼白者。山堂肆考曰、埤雅、麋水獸也。青黑色。肉蹄。一牡能十牝。方氏曰、鹿好羣而相比、陽類也。故夏至感陰氣而角解。麋多慾而善迷。陰類也。故冬至感陽氣而角解。熊氏曰、鹿孕子于仲秋而生于春。麋孕子于仲春而生于秋。名物攷曰、埤雅云、麋四目其二夜目也。類從所謂麋目下有竅夜則能視是也。故淮南子曰、孕婦見麋而子四目〇本草啓蒙曰、麋按ズルニ臺灣府志ニ、大ヲ曰レ麋、小ヲ曰レ鹿ト云ノ文ニ從フベシ。伴存按ニ、皇淸經解卷第二十三曰、麋鹿如ニ大ヲ曰レ鴻小ヲ曰レ雁一出ニ毛傳一說文因而例レ之曰レ大ヲ曰レ麋ト小ヲ曰レ鹿ト。詿云、麋ハ鹿之大ナル者似タリ不レ可ニ說文一。麋ハ鹿ノ之屬耳、其別處在、麋ハ澤獸屬レ陰、鹿ハ山獸屬レ陽、至ニ哀十四年一逢澤ニ有ニ介麋一、馬麋一本作麋介大也、介麋ハ謂ニ麋之大者一、非レ謂ニ麋ハ大ナルト於鹿一ヨリ、此亦訓詁之未レ精者

【集註】日本書紀曰、允恭天皇十四年秋九月癸丑朔、甲子、天皇獵ニ于淡路嶋一、時麋鹿猿猪、莫々紛々、盈ニ于山谷一、焱起蠅散云云。三代實錄卷第二十五曰、淸和天皇貞觀十六年三月十一日庚午、麋鹿一入ニ宮門ノ內一ニ、於ニ神祇官ノ北門頭一ニ、有レ人收得、以テ放ツ神泉苑一ニ。同卷第二十七曰、貞觀十七年冬十月十二日辛酉、麋鹿一入ニ主殿寮ノ御湯ノ舍一ニ、有レ人捕獲、放ニ之北野一ニ。本朝無題詩曰、麋鹿時々馴不驚。又曰、蹄跡欒登麋鹿倶。明月記曰、建永元年六月二日、自去夜入ニ列卒於山崎山一、被追麋鹿、巳一點出御了

歌麻之之（カマシシ）日本書紀　【漢名】石羊　簷曝雜記　【今名】カモシ、　【正誤】

簷曝雜記曰、山羊似レ羊而大如レ驢、一種石羊身較小其膽在ニ蹄中一、凡山巖陡絕ノ處、能直ニ奔ニク
而上ル、力乏則曲ニ蹄於口ニ一齧之、力輙完復奔而上。羅浮山記、石羊色黑類ニ人家ノ羊一而蹻捷ヲ獸

出ノ下異物志アルベキカ

經ノ麢ニ充ル說アリ、非也。字典曰、麢。廣韻ニ、麢狼似テ鹿ニ而角向レ前、入レ林ニ則挂ニ其角ヲ、常ニ在ニ淺草中ニ、逐テ入レ林則搏レ之、出。廣東通志曰、麢狼大如レ麋、角向レ前有テ枝下ニ出テ反テ向フ上ニ、長四五尺、常居ニ平地ニ不レ得レ入ルニコト山林ニ。按異物志麢狼入レ林則挂レ角逐得レ之皮可レ作ニ履襪 角正四據南人因以作ニ踞牀ニ、カモシ、ノ角ト大ニ異也

一名 にく 家中竹馬記曰、にくの皮云々。後醍醐天皇年中行事曰、次に天地四方を拜する座につき給ふ、御座のうへににくをしく。江家次第曰、四方拜事正月鷄鳴ニ鋪レ褥。延喜式卷第十四曰、縫殿寮。年中御服、春季褥四條並白料、絹六疋五丈六尺、別一疋四丈四尺 綿廿屯、別五屯 絲二分、別二銖。夏季四月料、褥四條並白、五月料、褥六條並白。中宮春季褥三條料、絹五疋。別一疋四丈 綿十五屯。別五屯 絲一分二銖、別二銖。夏季四月料、褥三條。秋季七月料、褥三條。同卷第三十八曰、掃部寮。年料、褥席二枚。倭名鈔坐臥具曰、褥。而蜀反、辱同。此間迩久。今案、毛席名也。天文写本倭名抄曰、褥。此間音迩久〇伊勢雜記曰、羚羊皮にて作りたるしとねを、かもと云之。又褥と云字の音は、にくとよむ也。羚羊皮は褥になる故、羚羊の事をにくとも云也。拾遺和歌集雜の部ノ下に、能宣に車のかもをこひにつかはし侍りけるに、侍らずといひて侍りければ、藤原仲文〽かをさして馬といふ人ありければかもをもをしとおもふなるべし。かへし、能宣〽などいへばをしむかもとや思ふらんしかや馬ともいふべかるらん。右車のかもといふは、車に乘る時敷く羚羊皮のしとねをいふ

加萬之々 倭名類聚鈔曰、麢羊。和名加萬之々

加萬師之 天文写本和名鈔 加末之々 醫心方。本草和名曰、零羊角、山羊。和名加末之々乃都乃 カモ完 詞林采葉抄曰、又カモ完ト云

日本紀卷二十九。九月

モノハ、角ヲ岩ニカケテ臥スル之

かもしゝ

古今切紙次第曰、かもしゝと云もの、岩つゝじを見て舞をまふ之(ヘ)麢羊和產無之

【正誤】本草類編ニ、羚羊角、和加乃之乃川乃ト云誤也。加乃之之ハ鹿也。其證矢開記、曾我物語、平家物語ニ見エタリ

【集註】日本書紀曰、白鳳十四年壬戌、皇太子以下、及諸王卿幷四十八人、賜ニ云云山羊皮一各有レ差。延喜式卷第十五曰、內藏寮。諸國年料供進。羚羊角、諸國所レ進、其數隨ニ所出一。同卷第二十三曰、民部下。年料別貢雜物。遠江國、零羊角四具。駿河國 零羊角四具。伊豆國 零羊角四具。甲斐國、零羊角六具。相摸國、零羊角四具。近江國 零羊角四具。美濃國、零羊角六具。信濃國、零羊角六具。陸奧國、零羊角四具。出羽國、零羊角十具。若狹國、零羊角十具。越前國、零羊角十具。越中國、零羊角二具。越後國、零羊角六具。安藝國、零羊角四具。土佐國、零羊角四具。同卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。駿河國、羚羊角四具。飛驒國、羚羊角卅具。出羽國、羚羊角四十具。越中國、羚羊角四具。越後國、零羊角卅具。駿河國風土記曰、伊穂原郡、產零羊。井上、出ニ羚羊角猪皮狐狸皮一。山原、貢鹿革零羊角。家中竹馬記曰、うつぼには、何皮をも懸也。但犬の皮、にくの皮などは懸ぬなり。相國寺供養記曰、一色滿範、上帶引、貫羚羊

【形狀】日本書紀曰、皇極帝(童謠)多礙底騰褒羅栖、歌麻之之能烏膩。喩山背王之頭髮斑雜毛似ニ山羊一。○本朝食鑑曰、加萬之个。處々山中ニ有レ之、狀似レ羊而青色、腹白ク、帶ニ微黃一、毛粗兩角短小彎曲、性身輕ク捷躍、獨脚ニシテ粘ニ-着于巖壁山崖一而

垂

久萬（クマ） 倭名類聚鈔 【漢名】 熊 本草 【今名】 クマ

通雅曰、黒著熊。證類本草曰、圖經曰、今雍洛河東及懷衛山中皆有レ之。熊形類ニ犬豕ニ而性輕捷、好ニ攀ニ縁シ上高木ニ、見レ人則顛倒自投レ地而下、冬多入レ穴而藏蟄、始春而出。本草綱目曰、熊如ニ大豕ニ而竪目人足黒色

【一名】 口万（クマ） 日本靈異記曰、熊。口万。萬葉集卷第十八曰、保登等藝須、伊登禰多家口波、橘能。即口ヲ久ト云ル證也。新撰字鏡曰 熊。胡弓反、久萬。倭名鈔曰、熊。和名久萬

玖麻 古事記曰、以ニ丸迩臣之祖、難波根子建振熊命ニ、爲ニ將軍ニ、云云歌曰、伊奢阿藝、布流玖麻賀、伊多弖淤波受波云云

荒熊 萬葉集卷第十一曰、荒熊之、住云山之、師歯迫山。八雲御抄曰、熊、あらくま。藻塩草曰、荒熊とは、狩人の矢さきをもおそれぬを云也

久末 倭名抄國郡部曰、周防國熊毛、久末毛。伊勢國桑名郡熊口、久末久知。飯野郡乳熊、知久末。吾妻鏡卷第十一曰、くまのかわ、くつ、てぶくろ○久萬ト出ルハ、倭名鈔國郡部曰、丹後國熊野、久萬乃。遠江國長下郡通熊、止保利久萬。能登國能登郡熊來、久萬岐。周防國熊毛郡熊毛、久萬介。讚岐國三野郡熊岡、久萬乎賀

【集註】

三代實錄卷第二十一曰、清和天皇貞觀十四年五月十八日丁亥、勅遣ニ左近衛中將從四位下兼行備中權守源朝臣舒ヲ、向ニ鴻臚館ニ、撿ニ領楊成規等所レ賚渤海國王ノ啓及ヒ信物ヲ、云云其信物云云熊皮七張云云。延喜式卷第一曰、道饗祭云云熊皮各四張。同卷第三曰、宮城四隅疫神祭、熊皮云云各四張。畿內堺十處疫神祭、堺別熊皮云云各一張。蕃客送堺祭、熊皮云云各二張。障神祭、熊皮云云各四張。凡云云祭料雜皮、伊豆國熊皮五張、紀

伊國熊皮五張。同卷第五曰、齋宮。野宮道饗祭、云云熊皮各二張。造備雜物、熊皮七張。凡諸國送納調庸、云云熊皮八張、信濃國。同卷第十五曰、內藏寮。熊皮二十張、出羽國交易。同卷第二十三曰、民部下。交易雜物。出羽國、熊皮廿張。同卷第四十八曰、左馬寮。障泥熊皮一張、長六尺已上、並請ニ內藏寮一。同卷第四十九曰、兵庫寮。熊革一條、鞆料長九寸廣五寸。又曰、執鼓二人、以ニ熊皮一蓋ニ鉦鼓一。出雲國風土記曰、意宇郡禽獸有熊、仁多郡禽獸有熊、飯石郡禽獸有熊、大原郡禽獸有熊。三河國風土記曰、八名郡八名庄貢熊革。加賀國風土記曰、加賀郡貢熊鹿狸狐兎猿。駿河國風土記曰、廬河郡貢鹿猪熊狸之革。麴込貢鹿猪熊狸之皮革。扶桑略記廿三裡書曰、延喜二年九月七日、西京不意熊出來、咋ニ損人一、即於ニ淳和院北邊一、被ニ射殺一。同卷第廿四曰、延長七年四月二十五日、云云或云、北陣備士夜見ニ大熊十三頭入レ陣、越レ閫即不レ見云云。吾妻鏡卷第三十四曰、仁治二年九月廿二日、左親衞自ニ藍澤一被レ歸、數日踏ニ山野一熊猪鹿多獲レ之。其中熊一者、親衞以ニ引目一射ニ取之一。爲ニ先代未聞珍事一之由、諸人一同感申。隨兵日記曰、騎馬の衆は云々次にくまの皮のつなぬきを是もはくべし。天龍寺供養記曰、下部四人着ニ熊皮袴一。相國寺供養記曰、武田信在、上帶不レ引、貫熊皮。小笠原長秀、佐々木義綱、上帶引、貫熊皮。赤松義祐、上帶引、貫熊皮。餘畧之。曾我物語卷第一曰、くま三十七云々

【形狀】曾我物語曰、たきぐちはくまくらのきたのわきをすぐるに、らちのそとに、くまの大きなるを見つけて、もとのしげみへいれじと、ひらのにおひくだすところに云々くさばがくれにやごろすこしのびたりけるを、三人ばかりに十三ぞくの大かぶらやつがひ、こぶしうへにひきかけ、ひやうとはなつ。とをなりして、みぎのおりぼねふたつみつはらりとゐければ、かぶらはわれて、さつとちりければ、やじりはいわ

にがしとあたる。くまは手をおひ、たきぐちにたけりてかゝる云々たきぐち二のやをつがひ、しぼりかへして、月のわをはづさじと、ゐをかけていけれは、くまはすこしもうごかず、や二つにてとゞまりけり〇大和本草曰、熊胸上有二白毛一如二月形一、倭俗謂二月ノ輪一、常ニ手ヲ以テ掩レ之

【附錄】熊舘　宇津保物語俊蔭曰、山深く入て見れば、いみじういかめしきすぎの木のよつ、物を合たるやうにてたてるが、大きなる屋のほどに、あきあひてあるを見て、この子の思ふやう、爰に我親をすへたてまつりて、ひろい出んこのみをもまづまいらせばやと思ひて、よりてみるに、いかめしきめ熊、お熊子うみつれて住うつぼなりけり云々めぐまお熊あらき心をうしなひて、二の熊子共を引つれて、この木のうつぼを此子にゆづりて、こと峯にうつりぬ。太平記巻第二十八曰、かるも搔たる臥猪、朽木のうつぼなる荒熊共、人影に驚て城の前なる篠原を二三十つれてぞ落たりける云々。落行熊の跡を追て、遙なる麓へ下ければ云々熊狩しつる兵共は、熊をも不追跡へも不行散々に成てぞ落行ける。倦游雜錄曰、熊於山中行數十里必有二路伏之所在一石巖枯木中、山民謂二之ヲ熊舘一

〇久萬乃阿布良(クマノアブラ)　倭名類聚鈔　【漢名】熊脂　本草　熊白也

證類本草曰、熊脂。陶隱居云、此脂即是熊白、是背上膏、寒月則有、夏月則無、其腹中肪及身中膏煎取可レ作レ藥、而不レ中レ噉、食療ニ熊脂冬中凝白時取レ之

【集註】本草類編曰、熊脂。和久末乃安不良、十一月中採之。續日本後紀巻第十五曰、貢二云々熊膏云々等一使云々

〇熊ノ井　壒囊鈔　【漢名】熊膽　本草

證類本草、熊脂。註ニ、圖經曰、膽陰乾用、然亦多僞ル、欲レ試レ之取二粟顆許一滴二水中一、一道若レ線不レ散者爲

レ眞。本草綱目曰、按ニ錢乙云、熊膽佳者、通明毎ニ以ニ米粒ヲ點ニ水中ニ運轉シ如レ飛者良、餘膽亦轉但緩キ爾、周密齊東埜語云、熊膽ハ善ク辟ツレ塵、試レ之以ニ淨水一器ニ塵幕ニ其ノ上ニ、投ニスレハ膽米許ヲ則凝塵豁然而開也。銀海精微曰、熊膽眞者其色如ニ沙糖ノ樣ニ帶ニ潤濕色ヲ喫在ニ口內ニ味苦又凉即眞者〇倭名抄國郡部曰、陸奧國膽澤、伊佐波

集註　延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。美濃國、熊膽四具。信濃國、熊膽九具。越中國、熊膽四具。駿河國風土記曰、益頭郡西刀貫ヒノミ庭革豬肉熊膽等。塵添壒囊抄曰、日本ニテモ馬醫師ヲ伯樂ト云、內火藥云云熊ノ井榎子三種ヲ水ニ能々ヲロシテ

〇熊掌　延喜式

本草綱目曰、聖惠方云、熊掌難ニシ腼、得ニテ酒醋水三件ヲ同煮熟卽大如ニ皮毬ノ也

集註　延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。美濃國、熊掌一具。玉造曰、熊掌蒐脾

之久萬シグマ　倭名類聚鈔　漢名　羆　本草　今名　ヒグマ　一名　志久萬

新撰字鏡曰、羆。彼宜反、平、志久萬。倭名抄曰、羆。和名之久萬

合璧事類曰、羆似レ熊白紋、長頭高脚。通雅曰、大而黃白者羆。正字通曰、羆熊屬、郭璞曰、似熊而長頭、似馬有鬣、高脚猛悍力能拔木

集註　日本書紀卷第二十六曰、齊明天皇四年、是歲、越前守阿部ノ引ケ田臣比羅夫討ニ肅愼ヲ、獻ニ生羆二、羆皮七十枚ヲ。同卷二十九曰、天武天皇、白鳳十四年九月壬戌、皇太子以下、及諸王卿幷四十八人、賜ニ羆皮山羊皮ヲ各有レ差。續日本紀卷第十三曰、天平十一年十二月戊辰、渤海使已珍蒙等拜レ朝、上ニ其王啓幷方物ヲ、其詞曰云云幷附ニ云云羆皮各七張ヲ。延喜式卷第四十一

曰、彈正臺。凡羆皮障泥聽ニ五位以上著レ之。類聚國史曰、齊明天皇五年秋七月庚寅、高麗使人持羆皮一枚一称其價曰、綿六十斤、市司咲而避去。高麗畫師麻呂設ニ姓賓於私家一日、借ニ官羆皮七十枚一而爲ニ賓席一、客羞怪而退

○赤羆 延喜式曰、赤羆神獸也。正字通曰、陸璣曰、有黄羆赤羆大于熊、其指掌如熊而白而纍理不如熊美○三國通覧蝦夷產曰、山獸ニ羆熊アリ、羆ハ人畜ヲ害シ、熊ハ害セズ、又希ニ緋熊アリ、赤キヿ猩々緋ノ如ク、疾ヿ雷光ノ如シ、現ハルヽヿ希也。コレヲ見者ハ必病、實ニ神獸也

○黄羆 延喜式 祥瑞

○赤熊 延喜式 祥瑞 事物異名錄曰、赤熊、爾雅翼ハ如ニ小熊竊毛而黄、今建平山中有ニ此獸一、俗ニ呼テ爲ニ赤熊一

○青熊 延喜式 祥瑞

於保加美(オホカミ) 倭名類聚鈔

漢名 狼 本草

今名 オホカミ

證類本草曰、陳藏器、狼大如レ狗蒼色、鳴聲諸孔皆沸。本草綱目曰、狼豺屬也。處々有レ之、其形大ニシテ如レ犬而鋭、頭尖喙白頰駢脇高前廣後脚不ニ甚高一、其色雜黄黑、亦有ニ蒼灰色者一

一名 大狼 錄外書曰、此所ヲバ身延ノ嶺ト申、大狼ノ音山ニ充滿シ

おほかみ 宇津保物語俊蔭曰、虎おほかみ、むしけらとはいへども。倭名鈔曰、豺狼。和名於保加美。本草和名曰、豺皮。和名於保加美。狼血治ニ久疥一良 和名於保加美乃知。本草類編曰、豺皮。和於保加美○本朝食鑑曰、按、源順以豺狼一爲ニ一物一、不レ然。豺は山イヌ、狼はオホカミ也。曾我物語、平家物語倶曰、山門いよ〳〵あれはてゝ、こらうやか

んのすみかと成て、いしずへのみやのこるらん。藻塩草曰、〽世中にとらおふかみはならず人のくちこそ猶まさりけれ

集註

日本書紀雄略曰、今陛下以ニ嗔猪故一而斬ニ舎人ヲ一陛下ニ譬無レ異ニ於豺狼(オホカミ)ニ一云。續日本紀巻第三十三曰、光仁天皇寶龜五年春正月乙丑、山背ノ國言、去年十二月、於テ管内乙訓郡乙郡社ニ狼及鹿多、野狐一百許、毎夜鳴「七日而止。文德實錄巻第七曰、齊衡二年九月癸丑、是夕、東宮有レ狼害レ人、明旦有レ人射殺。三代實錄巻第二十七曰、貞觀十七年五月二日癸未、伯耆國言、有レ牛生レ犢云云既産之後、母爲レ狼被レ害。同巻第四十曰、元慶五年十二月八日壬午、地震。夜有下如ニ狼聲一吠中於太政官曹司廰上。同巻第四十九曰、仁和二年九月廿七日、壬寅、賀茂神社邊有レ狼、喫ニ殺ス人ヲ一、行人相逢、以レ刀刺殺。日本記略曰、延曆二十一年秋七月丙寅、有レ狼走ニ朱雀道ニ一、爲レ人所レ殺。天德元年九月廿五日、左京職言上、學舘院北町豺狼囓ニ殺女三人ヲ一。出雲國風土記曰、意宇郡禽獸有狼。出雲郡禽獸有レ狼。神門郡禽獸有狼。餘畧之。和泉國風土記曰、日根郡禽獸有狼兎狐狸。參河國風土記曰、寶飯郡貢鹿狐狼猪革。形原郡貢鹿猪狐狼。八名郡八名庄狼入藥用。安房國風土記曰、平群郡貢鹿狐狸猪狼等。陸奥國風土記曰、宮城郡貢狼。駿河國風土記曰、安弁郡芸野牧山出鹿猪狐狸狼兎。鷹河郡手越貢狐狸狼兎之皮毛。扶桑略記廿三裡書曰、昌泰元年閏十月十四日庚辰、狼入ニ西獄所ニ一齧徒打殺云云。源氏物語須磨曰、とらおほかみだになきぬべし。宇津保物語俊蔭曰、けだ物熊大かみならぬは見えこぬ山にて云々熊大かみを友だちにて云々抑けだ物といへどとらおほかみならぬはすまざるなり。壓添壒嚢抄曰、狼(オホカミ)ナンド居タル跡ハムサ〳〵トシタレバ云云。曾我物語巻第一曰、さい大かみのたぐひにいたるまで云々。同巻第十二曰、夜になれば、此ところにはおほかみと

中もの、みちゆく人をなやましけ云々。太神宮諸雜事記曰、仁壽元年八月三日、終日大風吹云々件大風夜豐受宮祢宜神主土主宅狼入來、生年十三歲之童男一人喰畢云々。狹衣曰、こけのむしろをしき、松の葉をたべて、とらおほかみといふものを友と見ならひ

形狀　○本朝食鑑曰、狼其聲大ニシテ而遠ク聞ヘ、口濶ク大拆而及レ耳、齒牙剛利ニシテ而噬ミ金鉄ヲ、故ニ一噬レ物無レ不レ斷、一噬レ物無レ不レ盡、四趾有蹼而能渡レ水。大和本草曰、狼豺ニ似テ異レリ、其毛色多クハ淡紅褐色ナリ。本草啓蒙曰、狼犬ヨリ大ニシテ喙長ク、口大ニ耳下ニ　ル。耳ハ小ナリ。全身茶褐色ニシテ微紅ヲ帶ブ、頰ニ小白斑點アリ。尾ハ最大ナリ。灰色ニシテ白毛雜ハル、脚ニ蹼アリテ能水ヲ涉ル。目ハ三角ニ見ヘテ暗夜ニハ光アリ、星ノ如シ。ソノ齒二重ニシテ齊整、犬ノ齒ノ齊カラザルニ異ナリ。全身黃褐色ナル者多シ。又虎斑ナルモ、黑色ナルモアリ

○白狼　延喜式曰、白狼金精也

太奴木（タヌキ）　倭名類聚鈔　漢名　貍　本草　今名　タヌキ

一名　多々介　本草和名曰、狸骨。和名多々介。倭名鈔曰、狸。和名太奴木。塵添壒嚢抄曰、狸事。タヽ、ゲノ筆ナンド云、タヽ毛ハ、タヌキノ毛歟。狸ノ字ヲ、タヽ、ゲトヨム。又子コマ共ヨム。只子コト同事也云々狸ハ猫ナルベシ。サレバ大日經疏ニモ、如ニ猫狸一侍ペリ、明ケシ猫ト狸ケ同類ト云事ヲ○言塵集曰、狸ふるたぬき、たぬきのつゞみと

集註　延喜式卷第二十三曰、

こち上ニひとりノ三字アルベクヤ

民部下。交易雜物。太宰府、狸皮十張。同卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。太宰府、狸骨二具。伊勢國風土記曰、員辨郡鞆尾森多狸狐鳥類。美濃國風土記曰、渥美郡姜婦山出狐狸等。山城國風土記曰、久世郡宇治野多狐狸而往還、西後又無見。大和國風土記曰、平群郡飽波庄貢狸。膽駒鄉貢鹿豬狐狸之革。和泉國風土記曰、日根郡禽獸有狸。伊賀國風土記曰、名張郡周知山有狸。安房國風土記曰、平群郡貢狸。陸奧國風土記曰、宮城郡貢狸。駿河國風土記曰、鳥渡郡草薙山出走兎薙雉狐狸等。伊穗原郡出鹿豬狐狸革等。餘署之。曾我物語卷第一曰、たぬき云云。四季物語曰、●こちたるねざめには、しらぬみやまのきつね、たぬき、ふくろうやうのものら云々。源平盛衰記卷第二十曰、鹿待所の狸(たぬき)とは此事にや。明月記曰、安貞元年十二月十日云々又經長左衞門佐等食狸云々。古今著聞集曰、火を打せて、ともしてみれば古狸之けり。あした村人に見せんとて、下人にあづけたりけるを、下人共いふかひなく燒くらひてげり。次日をきて尋ければ、かしら斗殘したりけり。正躰なくて其かしらをぞ村人に見せけり云々。又曰、殿原めんめんに狸をあつめ給へ。二水記曰、大永七年正月廿七日。朝飯於東隣下冷有之狸汁之。堂上歷々之。大永八年十一月廿一日、朝喰於勸修寺亭有之、狸汁之。三條亞相少納言等相伴之

【形狀】古今著聞集卷第十七曰、しばし斗有て賴慶がうへをくろき物がはしりこへけるを、下よりむずと取とゞめてげり。見れば古狸(たぬき)の毛もなきにてぞ侍ける。やがてをしふせて、さしぬきのくゝりをぬきてしばりて、いきながら院の御所へゐて參たりければ云々。又曰、毛むくむくと有物さしころされて有を見れば狸之けり云々すは見給へとて古狸をなげ出したりけり云々○本草啓蒙曰、虎狸ハ頭瘦セ虎頭ノ形ノ如ク狐頭ニ似タリ、肉ニ臭氣無ク、コレヲシバ

ヲリ豫州ト云、一名アナツボ紀州又貓狸ハ頭圓ニシテ貓頭ノ如ク肉ニ臭氣アリ、俗ニマミダヌキト呼フ、貒ヲマミト訓ズルトハ別ナリ

附方 小兒アカクサノ治方 頓医抄曰、アカクサニハ狸(タヌキ)ノアブラヲヌル フナノ骨ヲ喉ニ立タルヲ治ス 頓医抄曰、タヌキノ灰ヲ湯ニタテ、ノムベシ ○

白貍 源平盛衰記 集註 源平盛衰記巻第十二曰、明神白貍ニ乘給云云

牟士那(ムジナ) 日本書紀 漢名 貉 本草 今名 ムジナ

一名 無之奈 倭名類聚鈔曰、貉。漢語抄云、無之奈 牟奈志 新撰字鏡曰、貉。牟奈志 旡志奈

證類本草曰、衍義貉形如ニ小狐ニ毛黃褐色

本草類編 ウシナ 釋日本紀曰、貉(ウシナ)

集註 日本書紀垂仁天皇曰、昔丹波國桑田村有レ人、名曰ニ甕襲一、則甕襲家有レ犬、名曰ニ足往一、是犬咋ニ山獸名牟士那(ムジナ)一而殺レ之。又曰、推古天皇三十五年春二月、陸奥國有レ貉(ウジナ)比レ人以歌レ之○名物攷曰、玉榮記云、狐及狸狼皆壽八百歳、滿ニ三百歳一暫變爲ニ人形一。曾我物語曰、むじなきつねたぬき云々。律曰、於ニ塚墓一燻ニ狐貉一云云或於ニ他人塚墓一而燻ニ狐貉之類一云云燻ニ狐貉一者徒一年云云謂子孫奴婢等因燻ニ狐貉一而至レ燒ニ棺及ヒ屍ヲ者。大草家料理書曰、むじな汁の事。燒皮料理共云、但わたをぬき、酒のかすを少あらひて、さかはゆき程の吃、腹の内に右のかすを入

日本紀巻六八十七年

て、則ぬひふさぎ、どろ土をゆる〳〵として、能々毛の上を泥にてぬりかくして、ぬる火にて燒ゆ也。燒樣の事、下にぬかを敷、上にも縣て、うむし燒にして、土をおとしゆ得は、毛共に皆土にうつりゆを、其儘四足をおろし、なまぬる湯に能酒塩はいかにもかけしほしてさしゆ也

ヲ竊ミ食フ　○玄貉　延喜式　祥瑞　形狀　○本草啓蒙曰、貉。形狸ニ似テ頭尖リ、鋭ニメ鼻出、目ハ青色、身ハ黄黑褐色、晝ハ伏シテ出デズ、夜人家ニ來リ、味噌及油

美ミ　本草和名　漢名　貒　本草　今名　ミタヌキ　一名　末美　本草類編曰、猯、肉肥膏、和末美乃安不良。紫式部日記曰、

證類本草曰、衍義猯肥矮毛微灰色、頭連レ脊一道黑觜尖尾短濶、蒸食レ之極美。本草綱目曰、貒、團也。其狀團肥也　集註　倭名鈔坐

まみひたいつきなど、まことにきよげなる。落くほ物語曰、いとようほゝゑみたる目視口つき、瞪の明きに榮えて。本草和名曰、猯膏。和名美。倭名類聚抄曰、猯。和名美

臥具曰、褥。今案毛席名也。俗以猯皮等爲之。明月記曰、安貞元年十二月十日云云又貒ア近代月卿雲客之良肴云云少年之時、自越部庄時來苞苴、兎山鳥云云。常盤嫗物語曰、うさぎ、まみ、むじな、かはいりにしてくひた　形狀　○大和本草曰、貒マミ。ミタヌキモ云、野猪ニ似テ小ナリ。形肥テ脂多ク、味ヨクメ野猪ノ如シ、肉ヤハラカ也。穴居ス。其足四、足ノ指各五、恰如ニ人ノ手指一。本草啓蒙曰、貒マミやな

アリ刊本なし

狸ノ類ナリ、體肥テ小豚（ブタ）ノ如シ、淡黒色ニ〆淡褐毛ヲ雜ユ、脊ニ一道ノ黒色アリ、首ハ痩テ長ク、鼻ノ邊黒ク、目ノ邊白ク〆、狸ノ如シ。四足ノ指五ツニ分レ、長クシテ人指ノ如ニ〆野猪（イノシシ）ト異ナリ、體肥テ走ルヿ遲シ

岐都禰（キツネ） 本草和名

【漢名】 狐 本草

品字箋曰、狐、穴獸、似狗、鼻尖尾大、善爲妖魅、性淫、多疑先則首丘。證類本草曰、圖經、狐形似ニ黄狗一、鼻尖尾大

【今名】 キツネ

【一名】 木豆禰 倭名類聚鈔曰、狐。和名木豆祢。本草和名曰、狐陰莖、和名岐都祢。日本靈異記曰、狐爲レ妻令レ生レ子緣。昔欽明天皇御世、三野國大野郡人、應レ爲レ妻覓ニ好嬢一乘レ路而行、時曠野中遇ニ於妹女一、其女媚ニ牡馴睇（メカリ）之牡睇レ之言、何行、稚嬢之答言、將レ覓ニ能緣一而行女也。牡心語言、成レ妻耶、女答言聽、卽將ニ於家一交通相住比頃懷妊生ニ一男子一、時其家犬十二月十五日生レ子、彼犬之子每向ニ家室一而期尅眦皆嘷吠、家室脅惶告ニ家長一言此犬打殺、雖レ然患苦而猶不レ殺、於ニ二月三月之頃一年米舂、時其家室於ニ稻舂女等一將レ宛ニ間食一入ニ於碓屋一、卽彼犬子將レ咋ニ家室一而追レ犬、卽驚誤恐成ニ野干一登ニ籬上一而居、家長見言、汝与レ我之中子相生、故吾不レ忘レ汝、每來相寐、故隨ニ夫語一而來寐、故名爲ニ岐都祢一也、時彼妻著ニ紅襴染裳一（今之桃花裳也）而窈窕裳襴引逝也、夫視ニ去容一戀歌曰、古非皮米奈和我戸尓於知奴多万可岐留皮呂可迩美縁乎伊迩師古由惠迩也。故其令ニ相生一子名號ニ岐都禰一。亦其子姓負ニ狐直一也。其人强力多有、走疾如ニ鳥飛一矣。三野國狐直等根本是也。扶桑略記引靈異云、私云、聖武天皇時名三野狐者是子歟

きつ 仙覺萬葉集註釋卷第十四下曰、きつのようなすとは、きつねの夜啼（なき）するなり。奥儀抄曰、き

つとはきつねなり。伊勢物語曰、夜も明はきつにはめなてくたかけの。萬葉集第十六曰、狐爾安武佐武云云。於時夜漏三更所聞狐聲云云

いかたうめ　源氏物語曰、ちかきほどにこそ御文などを見せさせ給へかし、ふりはへさかしらめきて、心しらずのやうにおもはれ侍らんも、いまさらにいかたうめにやと、つゝましくてなんときこゆ。河海抄云、一說伊賀伊勢國には白狐をたうめ御前と云。私云、伊賀たうめ國〳〵に有也。たうめは狐の名也。言塵集曰、いかたうめ、狐の名と云說有、又の說には、はかせを云となり。藻塩草曰、いかたうめ、きつねの一の名也。或云、中媒の事と云々。新猿樂記曰、野干坂、伊賀專之男祭叩ニ蚫苦本ニ舞ヒ。倭名鈔曰、專。日本紀云、專領二字讀ニ太宇女、乎佐女ト。今按、專訓毛波良專一之義也。太宇女者、毛波良之古語也。今呼ニ老女ヲ爲ニ太宇女ト。三代實錄卷第十四曰、宗形小專神。康富記曰、寶德元年九月十三日、平野社神主兼種朝臣入來、語云、當社之末社塔名社ト申ハ、神頭ヨリ遙ニ東也、紙屋川ノ端之岸ノ上ニ森中一宇有ニ御座ス、然間馬場ノ鳥居ヨリモ各別東也。弄花曰、平野の社の末社に、たうめの社と申は狐なりと。倭姫命世記曰、御倉神專女也。御鎮座傳記曰 宇賀之魂神、亦名ニ專女三狐神ト。釋日本紀曰、專捕。私記曰、專又說美ツカラ。三代實錄卷第二十五曰、山城國稲荷上中下三名神。續古事談曰、イニシヘ野干ヲ神ノ躰トシタル社ノホトリニテ、キッネヲ射タルモノアリケリ。コノモノトガアリナシノ事、陣ノ定メニ及テ、諸卿サマ〴〵ニ申ケル中ニ、帥大納言經信卿申テ云、白龍之魚、勢懸ニ預諸之祭網ニトバカリウチ云テヰラレタリケリ。イミジキ神ナリトテモ、キツネノスガタニテハシリ出タラムヲ射タラムハ、ナニノトガ、アラムト云心也

陒天　源平盛衰記卷第六曰、山桑ノ弓ナマエノ矢ウリケル

〔原註〕熊好緣高木引氣謂之〔同〕佛經〔同〕老彭姓籛名鏗

者ト云ハ、他國ノ王幽王ヲ亡サン爲ニ、陁天ノ法ヲ祭リ付テ是ヲ賣セリ、陁天ハ狐也、山桑ナマエハ、陀天ノ三摩耶形也。太平記卷第二十六曰、仁和寺ニ志一房トテ、外法成就ノ人有ケルニ、吒祇尼天ノ法ヲ習テ、三七日行ヒケルニ、頓法立所ニ成就メ、心ニ願フ事ノ聊モ不叶云事ナシ。康富記曰、應永廿七年十月九日、後聞四人高天、昨日彼流讚岐國、俊經朝臣同國被流之云云但先俊經朝臣ハ於秋野道場出家云云是等皆狐仕之輩也

○海南日抄二十卷。驅狐文曰、邑中尹氏婦、爲狐所祟、符籙不能遂。霍陽山人代爲文祭之乃去。○狐亦似可以理諭者。詞曰、蓋聞神人不雜通久絕于地天、男女異途禮以別于窩曰、是以椓刑ハ蠶室王往重、淫奔之條、阿鼻犂泥森羅待風流之案、瓜田李下尙別嫌疑、暗室子身猶畏衾影、豈如羽族雖亂羣以無慙、寧比毛蟲、縱聚麀而不恥、又況鴟無兩匹、虎不再交、河洲無四處之鳩、桑枝有接卵之鵲。是雖異類猶有人心、至若猿以獺爲妻、或誌奇于藝苑、鳥與鼠同穴、會紀異于山經、亦形交氣感之、自然匪類聚羣分之。或爽爾等類應星精之象、符坎卦、參禪機而未悟、故墮野狐、煉仙丹以易形、宜收意馬、自可陽崖陰洞上吞日月之華、無雜鳥伸熊經、永獲松伶之壽、五百歲復返人身、十種仙斯成正果、而乃虛負三德全闕四維能、藏枯顱遂成假面、懷媚珠而不露思、蹭珠于江皐、帶名香以自防、欲偸香于青鎖重重門戶、難防鬼蜮之狂、且灼灼芳姿竟作槃瓠之怨、耦雄蜂雌蝶本不作雙、暮雨朝雲何殊入夢、具男女之兩體、自謂是攝提之精選、坎離于一身、且欲試籛鏗之術、九尾雖能變幼、千劫必厭輪廻、某家本清門、行無邪徑、慕相如之瑤琴、非有心慾、幼輿之狂

梭、還留齒匪惟平康巷裏、未寄紅箋、抑且青翰舟中曾無繡被、持身潔如玉、不應鬼關其門問情薄似雲、何至妖乘其釁、猶推速歸黑水、余則先放伯裘、如或恃禮斗之微靈效馮兇城之故智、燕王塚畔華表尙存、滄浠樹邊韓盧可畏、濡尾之濟、無及、淇梁誰許綏綏兩足之技、已窮妖嬈、非復紫紫、厲桓溫之矢帶此、絳囊安所逃乎、閉張華之門雖欲邸首不可得矣○中外抄曰、保延五年五月仰云、吾若かりし時は狐狩などしき、而炎魔天ニ奉仕之後ハ一切停止了。狐ハ炎魔天の御劵屬也。人家ニ狐鳴バ、食物を一前美麗調テ、淸淨僧可居折敷屋上などに置天令食つれば、其後不鳴也。多賀豐後守高忠覺書曰、狐狸其外魔緣の者など射る時は、右の足を前へ一足ふみ出して射る也。急成時は、足ぶみのさたにおよぶべからず、矢はとがり矢にて射也。鷹の羽、山鳥の尾にてはぎたる矢にて、右の足をふみ出して、魔緣の者を射るに、しりぞかずといふ事なし。大成祕說也

○野干

吾妻鏡卷第八曰、文治四年九月十四日、城四郎長茂云云亦謁惡心僧都、談往生極樂要須。繁茂生而則逐電。乍含悲歎、經四箇年。依夢想告、搜求之処、於狐塚尋得之、持來于家。其狐令變老翁、忽然來、授刀幷抽櫛等於嬰兒。於翁深窓令密音云、可爲日本國主、於今者、不可至其位云云。嬰兒者繁茂也。長茂繼遺跡、彼刀令帶之云云。同卷第十七曰、建仁元年五月十四日、出羽城介繁茂、自野干之手所相傳之刀、今度合戰之刻紛失云云。淸輔袋草紙曰、增珍ハ無止事學生被請野干者也。人來云、其日可修佛事導師可令渡給云云、增珍承諾、期日ニ教所ニ行向テ、車中ヨリヲリテ入堂中ニテ着座、堂莊嚴如法、但人僧膳ヲ出、從簾中少怖思テ不食之、先登高座修次第事之

臣ノ下他本魚名アリ

間、重テ神分ノ之時、御明之光リ黄ニ變ズ、簾中ニ有ル物忩氣、弥ヨ成レ怖ッテ不レ委カラシテ下ツ、布施又簾中ヨリ出セリ、綾羅錦繡之類也。增珍飯テ房ニ見レ之、皆牛馬ノ骨也。于レ茲知ヌ野干ノ所爲ナリ。後日令レ見ニ彼所一ニ無ニ人家一、空地ノ草深キ處也。佛經幷ニ佛具等又如ニ馬牛骨屎一也。增珍爲ニ恥辱一秘之云云○太平御覽曰、郭璞注、子虛賦曰、騰遠射干、張揖注曰、騰遠獸也、射干似狐能緣木。大和本草曰、詩經大全、犴ハ一作豻、胡地犬也。字彙豻ハ同ニ野犬一、似レ狐而小、出ニ胡地一。今按、國俗狐ヲ野干トス、本艸ニ狐之別名無ニ此稱一。然レバ射干ト狐トハ異ナリ。正字通曰、豻。胡犬似狐而黑、身長七尺、頭生一角、老則有鱗、能食虎豹、獵人畏之。又曰、法華經言野干體瘦無目、爲諸童子摘擲受苦痛。法苑珠林云、有說爲野干鳴無銳爲師子吼。百丈語錄云、但一切求心卽名射干。品字箋曰、獄。犴獄。拘雷罪人之所也。犴同豻 音岸。似狐之野犬也。以其能守。故獄名取之○高倉院嚴嶋御幸記曰、このとまりのあそびものども、ふるきつかのきつねの、ゆふぐれにばけたらんやうに、我もわれも御所ちかくさしよす

集註 續日本紀卷第四曰、聖武天皇天平十三年閏三月己巳、難波ノ宮鎭レ怖ヲ、庭中有ニ狐ノ頭斷絕ノ而無ニ其身一、但毛屎等散ニ落頭傍一ニ。同卷第三十二曰、光仁天皇寶龜三年六月己巳、有ニ野狐一、踞ニリ于大安寺講堂之甍一。同卷第三十三曰、寶龜六年五月乙巳、有ニ野狐一居ニセリ于大納言藤原朝臣ノ朝座一。八月戊辰、有ニ野狐一、踞ニレリ于閤門一ニ。續日本後紀卷第二曰、天長十年八月乙未、有レ狐、走入ニ內裏ニ到ニ淸涼殿下一ニ、近衞等打ニ殺之一。同卷第十九曰、嘉祥二年二月戊戌 狐入ニ內裏一、犬逐出ス、自ニ月華門一逃テ、昇ニ南殿ノ上一ニ、遂爲ニ犬所一レ噬クラハ。文德實錄卷第七曰、齊衡二年閏四月壬辰、有レ狐、晝見、命ニ近仗ニ斫、走週ニ御前一、帝射而獲レ之。三代實錄卷第七曰、淸和天皇貞觀五年十一月十四日癸卯、新嘗祭、天皇不レ御ニ神

嘉殿ニ、以テ下ナリ主殿寮有ニ狐ノ死穢一、而官人參リ入御在所上ニ。同卷第二十日、貞觀十三年六月廿日乙未、太政官ノ候廳、晝見レ狐牝二、有レ人捕得、放ニ河南ノ野中一。秋七月十九日癸亥、狐晝鳴テ入ニ太政官一候廳、捕得テ放ニ河南ノ野中ニ。同卷第二十七日、貞觀十七年冬十月九日戊午、紫宸殿前板上、狐遺屎。同卷第三十九日、陽成天皇元慶五年春正月廿五日甲戌、日晚テ有レ狐、登テ居ニレリ美福門東鵄クツカタ尾ノ上ニ。廿八日丁丑云云是月、諸衞陣多ニ恠異一、右近衞陣、大將以下將曹已上ノ座、狐頻ニ遺レ屎ヲ、府掌下毛野安世、宿ニ侍陣座一、狐溺ニス其上ニ云云近衞笠ノ吉人胡籙ノ緒爲ニ狐所ニ嚙去一、人執而引レ之、狐猶不レ放、遂嚙斷而去ル。左兵衞陣有レ狐、嚙ニ所レ納之劒ヲ一、而遁走、兵衞等追得取留。同卷第四十一日、元慶六年夏四月十日壬午、東宮狐晝鳴、自レ辰至レ申、其聲不レ絕。同卷第五十日、光孝天皇仁和三年八月七日戊申、散位從四位上文室ノ朝臣卷雄卒云云及レ爲ニ少將一ト、白晝ニ有レ狐、走ニ東宮屋上ニ、卷雄奔登、拔レ劒斬レ之云云。源氏物語夕顏曰、あれたる所は、きつねなどやうのものゝ、人をひやかさんとて、けおそろしうおもはするならん。同よもぎふ曰、宮のうちいとゞきつねのすみかになりて云々もしきつねなどのへんげにやとおぼゆれど。同若菜曰、まことにその人か、よからぬきつねなどいふなる物のたふれたるか。同かげろふ曰、おにやくひつらん、きつねめく物やとりもていぬらん。同手習曰、きつねの變化したるにくし、みあらはさんとて云々つねの人に變化するとは、むかしよりきけど、まだみぬものなりとて云々きつねこ玉やうの物のあざむきて云々きつねのつかうまつる也云々きつねはさこそは云々おにか、きつねか、こ玉か、かばかりの天の下の云々。四季物語曰、きつね山びこのあそびかけりし蘭菊の艸むらも、霜しろうおきわたし。日本靈異記曰、禪師永興者、諸樂古京興福寺沙門矣云云住ニ紀伊國牟婁郡熊

野村ニ而修行、時彼村有ニ病者一云云病者託曰、我是狐矣、无レ用不レ伏云云爾時有レ人繫ニ犬於禪師一而來、彼犬嘷吠狐脫レ柳斷レ鏁欲レ奔、禪師怪レ之告ニ犬主一言聽ニ放知ヲ由繼放走入ニ病弟子室一咋レ狐引出、禪師禁レ犬不レ免嚙殺、晰委斃。伊勢國風土記曰、員辨郡櫻谷貢ニ云云狐狸貎猿等一。日本記略曰、延曆二十二年十二月戊申、夜野狐鳴ニ禁中一。弘仁八年九月戊戌、有ニ野狐一登ニ於殿上一。天長四年十一月甲子、大內有ニ狐鳴一。扶桑略記第二十二日宇多天皇 相應和尙傳云、仁和四年、六條皇后有ニ御惱事一、和尙行年六十、依レ召參ニ於御加持一三个日夜、不レ動ニ居處一永忘ニ眠食一、四日曉、皇后擧レ音叫喚、屈レ身宛轉、寢殿殆欲ニ顚仆一、此間靈狐現レ形、出レ自ニ斗帳乾角一、東西南北、往反走迷。爰太政大臣、并諸人、恐懼戰栗、五情失レ之。於レ是、和尙誦ニ解脫咒一、震動已止、迷狐僅出。皇后御惱已以平復。勅賜ニ度者被物等一。又曰、寬平八年云云善家秘記云云一朝俄失ニ良藤所在一云云於レ是家中大小怪、即毀レ藏而視レ之、狐數十散走入レ山云云。同第廿三日、醍醐天皇昌泰元年十二月二日丁卯、辰刻、辨官東廳廊內、狐交接、連結不レ離、人見不レ去。裡書曰、延喜二年七月十二日、亥刻、辨官廳、結政所正廳、狐鳴怪也。延喜五年三月十一日、辨官結政所狐死爲レ穢否、猶豫停レ政、不レ可レ爲レ穢之由、被レ下ニ宣旨一。延喜九年六月十日、大雨。右大臣以下參陣。官申云、中院中門內、狐死、明日神事如何。外記令レ勘ニ申先例爲レ穢否一。年々記、皆以爲レ穢之由申、大臣奏レ之。不レ可レ爲レ穢者、是六畜之外、而不レ載レ式故也。九月廿四日、版位上、狐遺矢。廿六日、未刻、狐昇ニ結政所廳上一。同廿四日、延長五年十月十二日、卯時、見ニ狐遺ニ矢ヲ於南殿ノ御帳內御障子下一。同廿五裡書曰、承平二年六月三日、午刻、狐居ニ侍從所納言座一。曾我物語卷第一曰、きつねたぬき云々。同卷第五曰、さてもみかりの人々は、日のくるゝをも、ときのうつるをもしらずしてか

りけるに、きつねなきてきたをさしてとびさりけり。人〻是をとゞめんとて、やはづをとつておつかけたり。かく　らんぜられ、かれらをめしかへして、あきのゝのきつねとこそいへ、なつのゝにきつねなく事ふしぎなり。たれかゐ、うたよみゐへ、とおほせくだされければ云〻こゝにむさしのくにのぢう人、あいきやうの三郎、ゐだけだかに成、うかべるいろみえければ、げんださへもん、いかさまあいきやうがつかまつりぬと見えてゐ、はや〳〵と申ければ、やがて「よるならばこう〳〵とこそなくべきにあさまにはしるひるぎつねかな。と申ければ、君きこしめされて、しんべうに申たり、まことにきつねにおほせてきつけうあるべからず、とて、かうづけのくにまついだといふところにて、三百ちやうをぞ給はりける。同卷第八日、きつねの子は、こぎつねより、ちゝがそんをつぎて、このくわじやがつらのしろさよ。古今著聞集卷第六日、狐一疋來て供物等をくいけり云〻御夢さめぬ。うつゝに御手にものゝかにして有を御覽じければ狐の尾之けり。同卷第九日、或日義家朝臣宗任壹人ぐして物へ行けり。主從共に狩裝束にて、うつぼをぞおへりける。ひろき野を過るに、狐一疋走けり。義家うつぼよりかりまたをぬきて、きつねをおひかけけり。射ころさんはむざんなりと思て、左右の耳の間をすりざまにしりへ射たりければ、箭は狐の前の土にたちにけり。狐其箭にふせがれて、たふれてやがて死にけり。宗任馬よりおりて、狐を引あげて見るに、箭あたゝぬに死たる、といひければ、義家みて臆して死たる之。ころさじとて射はあてね、今いき歸なん、其時はなつべし、といひけり。同卷第十七日、大納言泰通の、五条坊門高倉の亭は、父侍從大納言の家にてふるき所之。相つゞきてすまれける程に、きつねおほく常にばけゝり云〻。同卷第二十日、承平の比、狐數百頭東大寺の大佛

を礼拜しけり。諸人これを追ければ、その靈人につきていひけるは、久しく此寺にすむ、今尊像をいたまし
めやかんとするが故に、礼拜をいたすゝ、とぞいひける。又曰、男あしたに武德殿に行てみれば、一の狐扇
をおもてにおほひて死てふしたり。宇治拾遺物語卷第一曰、利仁將軍のわかゝりしとき云々かくてゆくほ
どに、みつの濱にきつねの一はしり出たるをみて、よき使出きたりとて、利仁狐をゝしかくれば、きつね身
をなげて逃れども、をひせめられてえにげず。おちかゝりて、狐の尻足を取りて引あげつ云々狐を引あげ
ていふやうは、わ狐こよひのうちに利仁が家のつるがにまかりていはんやうは、にはかに客人をぐし奉り
てくだるなり。明日(あす)の巳の時に、高嶋邊にをのこ共むかへに、馬にくらをきて、二疋ぐしてまうでことい
へ。もしいはぬ物ならば、わ狐たゞ心みよ、狐は變化あるものなれば、けふのうちに行つきていへ、とては
なてば、荒涼の使哉といふ。よし御覽ぜよ、まからではよにあらじといふに、はやく狐見返し〳〵て前に走
ゆく。よくまかるめりといふに、あはせてはしりさきだちてうせぬ云々。同卷第三曰、家ざまに行ける道
に、狐のあひたりけるを、追かけて、引目してゐければ、きつねの腰に射あてゝけり。きつねゐまろばかさ
れて鳴わびて、こしを引つゝ草に入にけり。源平盛衰記卷第廿六曰、祇園林の古狐などが、夜更て、人を誑(たぶらか)
すにこそ在らめ。吾妻鏡卷第六曰、文治二年二月四日、營北山本、狐生レ子、其子入二御丁臺一。同卷第八曰、文
治四年十一月十八日、西風烈吹、雪降。今曉於二大庭平太景能宅庭一狐斃云々。同卷第九曰、文治五年十一月
十七日云々及二昏黑一狐一疋御馬前數十騎、相二逢於左右一。二品令レ挿レ鏑給。爰千葉四郎胤信郎從、號二篠山
丹三一者、弓箭達者也。引レ弓合レ鐙、進二寄於御駕一右、此間與二御矢一同時發之時、御矢不レ中レ之、丹三之箭、中二

狐之腰一。二品乍二知召一被レ發二御聲一。于レ時篠山丹三瞬之程、下レ馬、取二碧御箭於己矢一、立レ狐提レ是持參。二品則令レ問二彼名字於胤信一給。同卷第十六曰、正治二年正月十八日、中將家令レ出二大庭野一給云云到二彼野一、押立踏之。禽獸不レ知二其員一。此間、波多野次郎經朝、射二二狐一。同卷第二十一曰、建保元年十月十三日、入レ夜雷鳴。同時御所南庭狐鳴及二度々一云云。同卷第四十曰、建長二年十二月十一日、幕府南庭、連夜狐吟。今夜、大番衆中筑後左衛門次郎知定代官男以二引目一射レ之、仍走二出於東唐門一、吟聲到二于比企谷方一。つれ〳〵曰、狐は人にくひつくもの也。堀川殿にて、舍人がねたる足を狐にくはる。仁和寺にて、よる本寺の前を通る下法師に、狐三飛かゝりて、くひつきければ、刀をぬきて、是をふせぐあひだ、狐二疋をつく。ひとつはつきころしぬ。二はにげぬ。法師はあまた所くはれながら、ことゆへなかりけり。又曰、狐人のやうについゐて、さしのぞきたるを、あれきつねよ、ととよまれて、まどひにげにけり。出雲國風土記曰、意宇郡禽獸有狐。大和國風土記曰、平群郡飽波庄貢狐。和泉國風土記曰、日根郡禽獸有狐。伊賀國風土記曰、名張郡周知山有狐。三河國風土記曰、八名郡貢狐革。陸奥國風土記曰、宮城郡貢狐。加賀國風土記曰、加賀郡笠野鄕貢麑狐等之革。駿河國風土記曰、安弁郡木枯里、出麑狐富二兵庫寮武器一

○白狐　延喜式曰、白狐、岱宗之精也

一名　白專女　百練抄第五曰、後三條天皇延久四年十二月七日、藤原仲季勘二罪名一、配二流土佐國一、於二齋宮邊一依レ射二殺白專女一。同第八曰、高倉天皇治承二年五月十三日、於二齋宮御在所邊一、射二殺白專女一、院下北面下﨟源競所從所爲云云。閏六月五日、有二仗議一、去五月十三日、於二齋宮御在所邊一、院北面下﨟源競射二白專女一罪名也

白靈狐　扶桑略記廿九

曰、後三條天皇延久四年十二月七日、辛巳、前大和守藤原成資男三郎仲季、於二伊勢齋宮邊一依下射二殺白靈狐一之罪過上配二流土佐國一。

集註 日本書紀曰、齊明天皇三年、石見國言、白狐見。續日本紀卷第六曰、元明天皇靈龜元年春正月甲申朔、遠江國獻二白狐一。同卷第八曰、元正天皇養老五年春正月戊申朔、甲斐國ヨリ獻二白狐一。同卷第十三曰、聖武天皇天平十二年春正月戊子朔、飛彈國獻二白狐一。同卷第三十七曰、桓武天皇延曆元年夏四月乙丑、重閣門白狐見レタリ。北國紀行曰、淨妙寺に入て云々此山に杉の木たかき社は稻荷明神之。白狐あらはるゝ時は、寺家に佳瑞あり

○黑狐 和漢通名

延喜式曰、玄狐神獸也 集註 續日本紀卷第五曰、元明天皇和銅五年秋七月壬午、伊賀國獻二玄狐一、九月己巳、詔曰、况復伊賀國司阿直敬等所レ獻黑狐、即合二上瑞一

○赤狐 延喜式祥瑞

宇佐木（ウサギ） 倭名類聚鈔 漢名 兎 本草 今名 ウサギ

一名 宇佐岐 本草和名曰、菟。和名宇佐岐 宇佐支 本草類編曰、兎 和宇佐支 乎佐藝 萬葉集卷第十四曰、等夜乃野爾、乎佐藝禰良波里、乎佐乎左毛、禰奈做古由惡爾、波伴爾許呂波要

宇 倭名鈔國郡部曰、攝津國兎原、宇波良。職人盡歌合曰、筆ゆひ。うのけは、毛のうら面みえぬが大事にて云々。海南日抄曰、筆不レ始二蒙恬一。博物志、蒙恬製筆。按、

府ノ下他本前アリ
此ノ上如字アル本アリ

爾雅ニ不律謂ニ之ヲ筆ニ。或謂、古之筆乃以竹聿行漆、故字從竹、非今之筆也。然攷ニ韓詩外傳ニ周舍爲趙簡子臣墨筆操牘從君之後則又卽以墨書字之筆是筆不始蒙恬特異其範耳（）兎以晉事、倭名鈔國郡部曰、但馬國七美郡兎束、土都加（トツカ）。布帛部曰、兎褐。此間云、止加千（トカチ）

集註

扶桑略記第五曰、文武天皇慶雲元年十一月、越後國貢ニ菟毛布一張ヲ。

三代實錄卷第四十二曰、陽成天皇元慶六年十二月廿一日己未、勅、山城國葛野郡嵯峨野、元ト既不制、今新ニ加禁、樵夫牧豎之外、莫シ聽スコト放鷹ヲ追フコト兎ヲ。同卷第四十八曰、光孝天皇仁和元年十一月十日庚寅、左近衞、左衞門、左兵衞等ノ府所送ル釋奠祭牲云云其ニ應キ定牲代フ魚色ニ事。式ニ云、享日在ニ諸祭之前ニ及與祭相當ル、停用ニ三牲及兎ヲ、代ニ以ニ鮮魚ヲ云云其三應ニ停ニ六府送ニ兎ヲ、輪轉ノ令メ送ニ乾兎二頭ヲ事。式云、三牲及兎、六衞府各一頭供之ヲ。又云、豆實兎醢五合、今撿ニ、先聖先師ニ、獨リ供ニ兎醢ヲ、其ノ餘不供之、加以造醢之法、先乾ニスコト其ノ肉ヲ、百日卽成、謂ニ之乾豆ト者、是取レリ其ノ義ニ也。而今諸衞府ノ祭一日之夕、送ニ鮮兎ヲ、夜中造醢、豈ニ合ンヤ礼意ニ。自今以後、潔淨ニ乾曝、先ツ祭ニ三月、送ニ大膳職ニ、依礼令ヨ造ラ。其送致之次、左近ヲ爲ニ一番ニ、餘府依ノ次輪轉、終而更ニ始。此則豆實合礼、衞府省煩、先是ヨリ、大學寮申ニ請改行フ此事ヲ、至テ是ニ許シ玉之。延喜式卷第十三曰、圖書寮。凡兎毛筆一管寫ニ眞行書一百五十張、注一百張ニ。凡造筆ヲ、長功日兎毛十一管、中功日兎毛十管、短功日兎毛八管。同卷第十六曰、陰陽寮。兎毛筆十二管。同卷第二十曰、大學寮。釋奠十一座云云豆十、云云菟醢。三牲云云菟、醢料。云云其菟一頭、先祭三月致シテ大膳職ニ乾曝造醢ニ、祭日ニ辨貢ヌ。其ノ貢進之次ヲ、以ニ左近ヲ爲ニ一番ニ。諸衞輪轉シ、終而更ニ始。同卷第二十三曰、民部下。年料別貢雜物、太宰府、兎毛、鹿毛各五百六十管。同卷第三十二曰、大膳

日月ニ作ル本アリ

汝ノ下中略アリ

上。釋奠祭ノ料、兎醢一升。釋奠祭醢料兎一頭、先レ祭三月送レ職ニ潔淸乾暴造リ醢ニ、至ニ祭日ニ供レ之。其貢進之次ヲ、以ニ左近衛府ヲ爲ニ一番ニ、依レ次貢進、終而更始。同卷第四十五日、左近衛府、凡二月八月上丁進ニ釋奠三牲ニ云云菟二頭、醢料。潔淸乾曝、前レ祭二日送ニ大膳職ニ、其貢進之次、以ニ左近衛府ヲ爲ニ一番ニ、諸衛輪轉ノ、終ノ而更ニ始。若シ享在ニ祈年春日大原野園韓神等ノ祭之前ニ、停レ供ニ三牲ニ、代ルニ之以ニセヨ鯉鮒ヲ、諸衛准レ此。同卷第五十日、諸國釋奠式。豆實、菟醢五合。伊勢國風土記曰、員辨郡和田嶽、此山猿兎多焉。美濃國風土記曰、渥美那瑞龍山、狐兎多。日本紀略曰、延曆十七年正月丁未、是日有レ兎、出ニ朝堂院東道ニ、爲レ人所レ獲。古事記曰、時ニ於ニ大穴牟遲神ニ負レセ帒ヲ、爲ニ從者ニ率往。於レ是到ニ氣多之前ニ時、裸菟伏也。尒八十神謂ニ其菟ニ云汝隨レ乾、其身皮悉風見ニ吹拆ニ、故痛苦泣伏者、最後之來大穴牟遲神、見ニ其菟ニ言ニ何由汝泣伏ニ。菟答言、僕在ニ淤岐島ニ雖レ欲レ度ニ此地ニ、無ニ度因ニ故、欺ニ海和迩ニ言、吾與レ汝、競欲レ計ニ族之多小ニ、故汝者、隨ニ其族在ニ悉率來。自ニ此島ニ至ニ于氣多前ニ、皆列伏度、爾吾蹈ニ其上ニ走乍讀度、於レ是知下與ニ吾族ニ孰多上。如レ此言者、見レ欺而、列伏之時、吾蹈ニ其上ニ讀度來。今將レ下レ地時、吾云、汝者我見レ欺言竟、即伏ニ最端ニ和迩、捕レ我、悉剝ニ我衣服。因レ此泣患者、先行八十神之命以、誨下告浴ニ海鹽ニ當レ風伏上。故爲レ如レ教者、我身悉傷。於レ是大穴牟遲神、教ニ告其菟ニ、今急往ニ此水門ニ、以レ水洗ニ汝身ニ、即取ニ其水門之蒲黃ニ、敷散而、輾ニ轉其上ニ者、汝身如ニ本膚ニ必差。故爲レ如レ教、其身如レ本也。此稻羽之素菟(シロウサギ)者也。於レ今者謂ニ菟神ニ也。吾妻鏡卷第三十二日、曆仁元年十二月十二日、北條左親衛相ニ具若狹守以下人々ニ、逍ニ遙山內邊ニ、雉兎多獲。矢開記曰、矢開にせざる鳥の事。鶉鷭この二ッ也。又云、うさぎをもせざる者之。出雲國風土記曰、意宇郡禽獸有兎狐。餘略之。山背國風土記曰、

久世郡橫斧蹤猪猿兎革。大和國風土記曰、平群郡膽駒鄕貢走兎等。攝津國風土記曰、有馬郡貢兎之革。武藏國風土記曰、荏原郡蒲田貢鹿猪狐兎之類。陸奧國風土記曰、宮城郡貢猿兎。加賀國風土記曰、加賀郡田上鄕貢鹿狐兎等。駿河國風土記曰、烏渡郡玖乃出雉兎。富士郡貢鹿革兎毛菌蕈等。餘畧之。曾我物語卷第一曰、さるうさぎ云々。家中竹馬記曰、射取の物と云は鹿狐菟狸なと也。歌林四季物語曰、さくさいのやんごとなさよ云々むかしは、しゝ、兎なども、きじ、鷹などゝ庿供にたてまつりしを、白川のみかどの院にてわたらせ給ふ時云々しゝ、うさぎは、やめられたり。武家調味故實曰、くわい人の間いませ給ふべき物。かも、はと、すゞめ、うさぎ、是モ孃妊アリテヨリ誕生ノ百廿日ノ御祝過ルマデイムベシ

【形狀】塵添壒囊抄曰、兎缺事。クチビルノキレタルヲイグチト云心如何。本躰ハウクチト云ヲ、イグチト云ナセリ。イツクシト云詞ヲ、俗語ニハウツクシト云歟。兎缺ト書テウグチトヨムベキナリ。兎（ウサギ）ノクチビルハ、鼻ノシタツヾカズメ切レハナレタレバ、兎ノ缺（クチビル）ニ似タル義也

○白兎　和漢通名。古事記曰、素菟○延喜式祥瑞曰、白兎月之精也。其壽千歲。通雅曰、物之白者時ニ有ニ其種一、不ニ必異一也。顧遯園曰、癸丑見京口徐氏白兎雪毛赤眼云得之、天台洞中白物不ニ必ス長季一、不ニ必瑞一、自有ニ此種一、顧公知之、崇禎初白兎自外納來直百金、後漸多甚賤、姚有僕南海署中畜白兎、每月生子亦非吐出金、哀宗時邠州進白兎、柯古以爲瑞、而今日忽多邪

【集註】三代實錄卷第三十一曰、陽成天皇元慶元年五月九日己酉、太宰府言、肥後國獲ニ白兎一ヲ

○一頭二身兎　日本記略

【集註】日本記略曰、弘仁四年五月辛酉、攝津國獲レ兎、一頭二身

西ノ下贈カ歴アルベキカ

崇峻五年冬十月

久佐井奈岐（クサヰナキ） 倭名類聚鈔　〔漢名〕 **野猪** 本草　〔今名〕 **イノシヽ**、　〔一名〕 **佐謂** 日本書紀雄略天皇

證類本草曰、衍義 野猪甚多、形如ニ家猪一、但腹小脚長、毛色褐、作レ群行。肉色赤如馬肉。其味甘。本草綱目曰、野猪。其形似レ猪而大、牙出ニ口外一如ニ象牙一

御歌曰、佐謂麋都登、倭我陀々西云云。日本書紀武烈天皇紀、影媛歌曰、婀嗚伱與志、乃樂能婆娑摩伱、斯斯貳暮能 瀰逗矩陛御暮黎、瀰儺曾々矩、思寐能和倶吾鳴、阿婆理逗那偉能古

斯斯 日本書紀

居 萬葉集卷第十一曰、四長鳥 居名山響爾、行水之。同卷第十六曰、猪名川之。同卷第三曰、猪名野者、令見都。同卷第七曰、四長鳥、居名之湖爾、攝津國風土記曰、有馬郡西限猪名嶽。遠江國風土記曰、大井川、或大猪

山猪 日本書紀崇峻天皇曰、有レ獻ニ山猪一、天皇指レ猪詔曰、何時如レ斷ニ此猪之頸一、斷ニ朕所レ嫌之人一。姓氏錄曰、山猪子、連等仕ニ奉上宮豐聰皇太子、御杖代一。閩書曰、亦見ニ山猪一、但腰脚長毛色褐、牙利ノ如ニ鎌双一〇桂海志ニ山猪卽豪猪、身有ニ棘刺一、能振發以射レ人ト云ハヤマアラシニメ和產無之、蓋シイノシヽト同名異物也

久佐爲奈岐 本草和名曰、野猪黄。和名久佐爲奈岐。倭名鈔曰、野猪。和名久佐井奈岐

久佐伊奈支 本草類編曰、野猪黄。和久佐伊奈支

ゐのしゝ 古今著聞集卷第一曰、大學寮の廟供には、昔はゐのしゝ、かのしゝをゝそなへけるを、ある人の夢に、尼父の宣はく、本國にてはすゝめしかども、この朝にきたりし後は、太神宮來臨同レ礼穢食供すべからず、とありけるによりて、後には供せずなりにけるとなん。つれ〳〵曰、おそ

ろしきゐのしゝも、ふするの床といへばやさしく成ぬ

野ゐ

頓医抄○明月記曰、建永二年二月五日、今日野猪損列卒之輩、件猪義成郎從取得。扶桑略記、淸丸上表曰、至二豐前國宇佐郡一有二野猪三万許、狹レ路列徐歩纔十許里走入二山中一○按ニ閱書ニ野猪ト山猪ヲ分テリ

集註 日本書紀曰、雄略天皇五年春二月、天皇狡二獵于葛城山一云云俄而見レ逐嗔猪從二草中一暴出逐レ人、獵徒緣レ樹大懼。天皇詔ニ舍人一曰、猛獸逢レ人則止、宜逆射而且刺、舍人性懦弱、緣レ樹失レ色、五情無レ主、嗔猪直來欲レ噬ニ天皇一、天皇用レ弓刺止、擧レ脚踏殺。於レ是田罷、欲レ斬ニ舍人一。舍人臨レ刑而作レ歌曰、野須瀰斯志、倭我飫裒枳瀰能、阿蘇麼斯志、斯斯能宇拖枳、阿斯苔瀰、倭俄尼碍能裒利志、阿理嗚能宇倍能、婆利我曳陀阿西嗚。延喜式卷第十五曰、內藏寮。造御靴料猪毛十兩。山背國風土記曰、久世郡横產鹿猪猿黿革。古事記曰、是大怒猪出、堀ニ其歷木一、卽咋ニ食其香坂王一。又曰、茲山有ニ忿怒之大猪一、吾欲レ取ニ其猪一云云。出雲國風土記曰、秋鹿郡大野鄉、和加布都努志能命、御狩爲坐時、卽鄉西山、狩人立賜而、追猪犀、北方山之至ニ河內谷一而、其猪之跡亡矣。爾時詔、自然猪之跡亡矣。大和國風土記曰、宇陀郡貢猪革。攝津國風土記曰、有馬郡貢猪。三河國風土記曰、八名郡美知鄉貢鹿猪之革。駿河國風土記曰、伊穗原郡山原猪肉膏充主藥司。類聚雜要曰、供御御齒固云ゝ猪。完代用レ雞。曾我物語曰、ゐのしゝ六百云ゝ。大平記第二十八曰、かるも掻たる臥猪。八幡愚童訓曰、卽猪ヨリ飛下テ云ゝ。吾妻鏡卷第三十曰、不レ憚ニ男山境內一或射ニ猪鹿一

形狀 平家物語卷第十一曰、さやうにかたおもむきたるをば、ゐのしゝ武者とて、よきにはせずと申す。判官ゐのしゝかのしゝはしらず、いくさはたゞひらぜめにせめて、かちたるぞ心地はよき、とのたまへば云ゝ。宇治拾遺

物語卷十曰、かゝるほどに、あづまの人の狩といふことをのみやくとして、猪のしゝといふものゝにらだちしかりたるは、いとおそろしきものなり。それをだになにとも思たらず、心にまかせて、ころしとりくふことをやくとするものゝ。散木集曰、田上に侍りける比、むかひの山ぎはに、おほきなるゐのしゝのみえけるを、小牛とこそみつれ、と人のいひけるを聞てよめる云々。俊賴髓腦抄曰、かるもかきふするゐのとこのいをやすみさこそねざらめかゝらずもがな。是猪の穴をほりて、いりふして、上に草をとりをほひて、ふしぬれば、四五日もをきあがらずふせるを。かるもといふは、かの上に覆ひたる草をいふ之

制禁

日本書紀卷第二十九曰、天武天皇白鳳四年夏四月庚寅、詔諸國曰、自今以後、制云云凡莫食牛馬犬猿雞之完。以外不在制例。續日本紀卷第十六曰、天平十七年九月己巳、禁斷三年之內天下殺一切完。同卷第二十曰、孝謙天皇寶字二年秋七月甲戌、勅、又以猪鹿之類、永不得進御。同卷第二十五曰、天平寶字八年冬十月甲戌、勅曰、又諸國進御贄雜完魚等類悉停。延喜式卷第三曰、凡觸穢惡事六畜死五日、產三日、雞非忌限。其喫完三日。三代實錄卷第三十五曰、陽成天皇元慶三年春正月三日癸巳、僧正法印大和尙位眞雅卒。云云和尙自淸和太上天皇初誕之時、未嘗離左右、日夜侍奉。天皇甚見親重、奏請停山野之禁、斷遊獵之好。又云云陸奧國鹿腊、莫以爲贄奉御膳。百練抄第六曰、崇德天皇大治二年、此年以後、殺生禁制殊甚。大治元年六月廿一日、紀伊國所進魚網於院御所燒弃。此外諸國所進之羅網五千余帖被弃之。又除神領御供之外、永停所々網、宇治桂鵜皆被弃、鷹犬之類皆如此。此兩三年殊所被禁殺生也。今年五穀豐稔、野老擊壤、世以爲殺生禁斷之報。

○猪髮 延喜式

【集註】延喜式卷第十七曰、內匠寮。年料五尺ノ屛風骨五十帖料云云猪髮十把。牛革一具云云猪ノ髮ノ一把

○猪膽 山背國風土記

【漢名】野猪黃 證類本草

【今名】イノシ、ノキ　證類本草曰、衍義、野猪黃在ニ膽中ー

【集註】山背國風土記曰、久世郡白川庄貢猪膽。參河國風土記曰、寶飯郡貢鹿狐狼猪之革膽

○猪矢 中右記　正字通曰、屎本作矢

【集註】中右記曰、伊勢太神宮申猪矢在太神宮事

○斑猪 台記

【今名】イノシ、ノ子

【集註】台記曰 猪皮尻鞘。久季申云、須用斑猪 難得或用猪。江家次第卷第六曰、四月平野祭舞人十人云云但近衛着魚形用ニ斑猪ノ厚重云、少祭ノ時用ニ斑猪ー。用使儀云云舞人尻鞘或魚形或斑猪、大祭時ハ魚形、小祭時斑猪云云 ○車服制度記曰、斑猪トハマダラナル猪ニ候。マダラナル猪有レ之物ニハ。委不知候。若猪子ノ毛ハ筋ノゴトクニテ、マダラナルモノ、ヤウニ候ヘバ用ニ此皮ー候歟。按ニ今野猪ノ子ハ大ナル瓜ノ如ニメ、立ニ褐色ノ斑アリ。野猪老テハ此斑サル

○白猪 延喜式

【集註】延喜式卷第一曰、御歲社加ニ白馬白猪白鷄各一ヲ。同卷第八曰、祝詞。祈年祭。御年皇神能前仁白馬白猪白鷄種々色物乎備奉氐。古語拾遺曰、宜下獻ニ白猪白馬白鷄ーヲ以解中其怒上ヲ云云、今神祇官以ニ白猪白馬白鷄ヲ祭ニル御歲神ーヲ之緣也。百練抄卷第十曰、御鳥羽院建久三年二月四日丁未、祈年祭也。無ニ白猪ー云云。同卷第十五曰、後嵯峨院寬元元年二月四日、祈年祭也。近江國司不レ進ニ白猪ーヲ不當事也。江家次第卷第五曰、二月四日祈年祭云云、白猪入レ檻。頭書云、西宮勘物云、左右京進

白鶴、近江進白猪。類聚雜要曰、椸莒一双、甲莒、猪二榧擣白猪七

[形狀] 古事記曰、取伊服岐能山之神幸行云云、騰其山之時、白猪逢于山邊、其大如牛。尒爲言擧而詔、是化白猪者、其神之使者○寛政年間紀州日高郡船津村山中ニ、年老タル白キ雌野猪出テ、人ヲ害スルコ甚多シ。獵師多ク聚リ、鉄炮ヲ以テ射ル、數丸ヲ受テ死セズ。逐テ印南浦ニ至リ、海中ニ入ル。浦人聚リテ之ヲ殺ス。其大サ三歳ノ牛ノ如シ、白色也

○赤猪 古事記 [一名] あかきゐのしゝ 水鏡○古事記曰、已名謂引田部赤猪子

[集註] 古事記曰、赤猪在此山、故和禮共追下者、汝待取。扶桑略記第二曰、神功皇后云云麛坂皇子密企謀反、與弟忍熊皇子新狩之日、赤猪出來、咋殺

佐流 倭名類聚鈔 [漢名] 獼猴 本草 [今名] サル

詩經類考曰、猴、性不仁與猿相反、雖羣不善、食相噬。行無列、飲無序。有難則推其柔弱者以自免。好踐蹂稼、木實未熟則竊食之。其性動、每至林木皆振響。本草綱目曰、猴處々深山有之、狀似人、眼如愁胡而頰陷有嗛、藏食處也。尻無毛而尾短、手足如人亦能竪行、聲嗝嗝如欬。其性躁動害物

[一名] 佐屢 日本書紀曰、皇極天皇二年冬十月戊午、蘇我臣入鹿獨謀將廢上宮王等而立古人大兄爲天皇、于時、有童謠曰、伊波能杯儞、古佐屢渠梅野倶、渠梅多爾母云云。倭名鈔曰、猨字亦作猿。和名佐流

ましら 八雲御抄曰、さるをば、ましらといはんとこの

た木活版かニ作ル蓋シ衍字

む事、この道をしらぬ人の所存也。藻塩草曰、万葉に、申の字をましといふ詞につかへたり。申と云詞をば、まうしてなどもよめば、詞を畧して云なるべし。尙此申文字をば、ひよみのさるなれば、さるをば、ましと云歟と云々。萬葉集卷第七曰、標結(シメユハマシヲ)申尾。同卷第九曰、屋戸(ヤド)借申尾(カサマシヲ)。同第十一曰、地爾(ツチニ)有申尾(アラマシヲ)云々。有申物(アラマシモノ)尾云々。白水郞(アマ)有申尾(ナラマシ)云々。不生有申尾。同卷第十二曰、外見申尾(ヨソニミマシヲ)云々。不解(トケザラ)有申尾云々。海部(アマ)有(ナラ)申尾○幽怪錄曰、公佐曰、夫猴ハ申生也車去兩頭而言猴故申字耳。山家集曰、山ふかみ苔の莚の上にゐてなに心なくなくましら哉。義經記曰、上の山の端にましらのこゑのしげければ、きたのかたかくぞつゞけたまひける。ひきまはすうちばゝゆみにあらねどもたかやでさるをいて見つるかな

麻思　萬葉集卷第二曰、標結(シメユハマシヲ)麻思乎云云。花爾(ハナニ)有猿尾(アラマシヲ)。同卷第四曰、往而來猿尾(ユキテコマシヲ)。同卷第七曰、儘(ウレシ)有麻思。同卷第十曰、令見猿物乎。餘略之。五代帝王物語曰、淺猿とも云ばかりなし。明月記曰、建永二年五月九日記競馬、一番、同前ヲ久清追叓外にいたしこめて、淺猿く見ゆしほどに云々。

下麻思例

萬志。萬葉集第二曰、有萬志。一云有益○萬思。萬葉集第一曰、孤悲而死萬思○末思。萬葉集第九曰、折ラ末思物緒○麻之。萬葉集第三曰、吾乎召サ麻之。同第十六曰、還來麻之乎。同第二十日、都刀爾勢麻之乎○末之。萬葉集第三曰、涕(グ)具末之毛。又益ノ字ヲ用ルヿ第四第八第九第十一ニ見エタリ

麻志　伊賀國風土記曰、阿辨郡阿波山、昔日觀松彥香殖稻天皇御宇、出六足猿、于今有其洞号麻志野。萬葉集第四曰、出而相麻志乎

ましこ　八雲御抄。袖中抄曰、ましことは猿をいふ、ましとも云。太平記に猿子(ましこ)と云氏あり

猿丸　宇治拾遺第十曰、かゝるほどに、としごろ山につかひならはしたる犬の、いみじきなかに、かしこ

きをふたつえりて、それにいきたる猿丸をとらへて、明くれやく〳〵と食ころさせてならはす。さらぬだに猿丸と犬とはかたきなるに、いとかうのみならはせば、猿を見ては、おどりかゝりて、くひころすことかぎりなし

佐留 倭名類聚鈔曰、獼猴。爾雅注云、獼猴。和名佐留保々猿類内藏食處也○常陸國風土記曰、久慈郡、自郡西北六里河内里、本名古々之邑。俗說謂猿聲古々

山猿 伊賀國風土記曰、名張郡周知山有山猿狸狐○明月記曰、建暦三年五月十一日、夜前行房布衣着冠、候兩主御前、獼猴取其冠云云。例事也。又負獼踊進前之間、此燒亡出來云云。寛喜二年九月廿三日、辨俊示送云、二宮之後山杉木多生之由云云又獼猴生二子。此事先々凶事云云○猿和産ナシ、古書凡テ獼猴ニ猿ノ字ヲ用ヒ來レリ。本草綱目曰、尾短者猴也。似猴而長臂者猨也。又曰、猨善引、故謂之猨。俗作猿。

このみ鳥 藻塩草 さるのこ

こかのみこ 同上 異名

いそのたちはき 同上

集註

出雲國風土記曰、意宇郡禽獸有云云獼猴之族。出雲郡禽獸有獼猴、餘略之。日本書紀允恭天皇曰云云猿云云。又曰、皇極天皇三年夏六月乙巳、志紀上郡言、有人、於三輪山見猿晝睡。竊執其臂、不害其身。猿猶合眼歌曰、武舸都烏爾、陀底屢制羅我、儞古禰擧曾、倭我底鳴騰羅每、拕我佐基泥、佐基泥曾母野、倭我底騰羅須謀野。其人驚怪猿歎、放捨而去。古今著聞集卷第二十曰、越後の國に乙寺といふ寺に、法花經持者の僧住て、朝夕誦しけるに、二の猿來りて經を聞けり。二三日をへて、僧こゝろみに猿に向て云やう、汝なにのゆへに常に來るぞ、もし經を書奉らんと思ふかといへば、二の猿掌を合て、僧を頂礼しけり。あはれに不思儀に思ふほどに、五六日をへて數百の猿あつま

り、からぞの皮をおふて來りて、僧の前にならべおきたり。この時僧これを取て、料紙にすかせて、やがて經を書奉る。其間二の猿やう〳〵くだものをもちて、日々に來りて、僧にあたへけり。又曰、文學上人高雄興隆の比見まはりけるに、淸瀧川の上に大なる猿兩三疋有けるが、一の猿岩のうへにあふのきふしてうごかず、二疋は立のきてゐたりけり。上人あやしみ思ひて、かくれて見ければ、烏一兩飛來て、此ねたる猿のかたはらにゐたり。しばし斗ありて、猿のあしをつゝきけり。猿猶はたらかず、死にたる樣にてあれば、烏次第につゝきて、うへにのぼりて、目をくじらんとしける時、猿烏の足を取て、をきあがりにけり。其時殘の猿二疋出來りて、長きかづらを持て、からすのあしに付てげり。烏とびさらんとすれ共かなはず。扨やがて川におりて、烏をば水になげ入て、かづらのさきを取て、一疋ハ有。今二疋は、川上より魚をかりけり。人の鵜つかひけるをみて、魚をとらせんとしけるにや、ふしぎにぞ思よりたりける。烏は水になげ入られたれ共、其ふきなくてしにゝければ、猿共は打すてゝ山へ入にけり。ふしぎなりし事、まのあたり見たりしとて、則上人かたりける事也。又曰、近比常陸國多かの郡に一人の上人有けり。大なる猿をかひけり。又曰、承久四年の夏のころ、武田太郎信光、駿河國あさまのすそにて狩をしけるに、むら猿を町中へ追出して、面々に射けるに、三疋をころし、三疋をばいけどりにしてげり。其猿共を家に歸りていけ猿をばつなぎて、其前に死にたるさる共置たりけるに、一疋の猿死たる猿をつく〳〵とまもりて、其猿にひしといだき付、頓而是も死にけり。をのが妻などにて有けるにこそ、むざんなりける事也。召人にて武田があづかりたる、其狩にぐせられて、まさしく見たりしとてかたりし也。又曰、又同五郎信正が狩をしけるに、大成猿を一疋

木に追のぼせて、いころさんとしけるに、其猿ゆびをさして、物をしふる躰也。人心を得ずあやしみて、さうなくも射ころさで、しばし見ゐたるに、猶しきりにゆびをさしければ、其ゆびさすかたに、人をやりて見すれば、大成女鹿一疋ふしたりけり。あの鹿を射て、われをたすけよとをしへけるにこそ、をしへにつきて、鹿をばやがて射ころしてげり。猿をばゆるすべきに、それをもやがて射てげり。信正折く叶事のむざんにおぼゆるとて、如法經を書たりしとかたり侍りけり。又曰、豐前國住人太郎入道といふもの有けり。男なりけるとき、つねに猿を射けり。或日山を過るに、大猿有ければ、木に追のぼせていたりけるほどに、かせぎにいてげり。既に木よりおちんとしけるが、何とやらん物を木のまたにおくやうにするを見ければ、子ざるなりけり。をのがきずをおひて、地におちんとすれば、子ざるをおひたるをたすけんとて、木のまたにすへんとしける也。こざるは、又母につきて、はなれじとしけり。かくたびくすれ共、猶子ざるとりつきければ、もろともに地におちにけり。それよりながく猿を射る事をばとゞめてげり。又曰、足利左馬入道義氏朝臣、美作國より猿をまうけたりけり。其さるえもいはずまひけり。入道將軍の見參に入たりければ、前能登守光村につゞみ打せられて、まはせられけるに、誠に其興ありて、ふしぎ也けり。けんもんさのひたゝれ、こばかまにさやまきさゝせて、烏帽子をさせたりけり。はじめはのどかにまひて、すゑざまには、せめふせければ、上下目をおどろかして興じけり。舞はてゝはかならず纏頭をこひけり。とらせぬかぎりは、いかにも出ざりければ、興有事にて、まはせてはかならず纏頭をとらせけり。件の猿やがて光村あづかりて養ける(やしなひ)を、馬屋の前につなぎたりけるに、いかゞしたりけん馬にせなかをくはれたりけり。其後舞事

もせざりければ、念なき事かぎりなし。吾妻鏡卷第三十六曰、寛元三年四月廿一日、左馬頭入道正義自美作國領所稱將來之由、献猿於御所。彼猿舞踏如入倫。大殿並將軍家召覽于御前。爲希有事之旨、及御沙汰。致隆云、是匪直之事歟。海南日抄曰、猪舞。房琯擊鼓猪亦起舞應節、鼓聲止猪亦止、然則伯牙鼓琴櫪馬仰秣瓠巴鼓琴游魚出聽信不謬也。郁離子曰、燹人養猴、衣之衣而敎之舞、規矩折應律合節。五雜組曰、京師人有置狙於馬廐者、狙乘間輙跳上馬背、揪鬣搦項蹴之不已、馬無如之何。一日復然。馬乃奮迅斷繮載狙而行、狙意猶洋洋自得也。行過屋桁下、馬忽奮身躍起、狙觸於桁首碎而仆。觀者甚異之。又曰、置狙於馬廐、令馬不疫。西游記謂、天帝封孫行者爲弼馬溫、蓋戲詞也○常陸國風土記曰、行方郡、自池西山、猪猿大住。周里有山　猪猴栖住。久慈郡、其池以北謂谷會山、所有岸壁、形如磐石、色黃。穿腕獼猴集、常宿喫噉。山背國風土記曰、久世郡橫產猿。攝津國風土記曰、有馬郡貢鹿猪猿兎之革。世繼物語曰、陽成院位につかせ給ひて、物にくるはせ給やうにて、けうふしきのまつり事をせさせ給へば云々犬猿などをたゝかはしつゝ、ころさせ給て。宇津保物語俊蔭曰、尾ひとつをこえて、いかめしき女猿子共多く引つれてきて、此物の音を聞めでゝ、おほきなるうつぼ又らうして、年をへて山に出くる物を取あつめて、住ける猿なりけり云々此年來たゞこの猿共に養れて、こよなくたよりをえたる心ちするもあはれなり。水ははすの葉の大いなるにつゝみてもてく、芋野老くだもの、さま〴〵なる物の葉につゝみてもてきあつまる云々年ごろ養つる猿、なを此人をあはれと思ひて云々靑つゞらを大きなる籠にくみて、いかめしき栗とちを入て、蓮の葉にひやゝかなる水をつゝみてくる。撰集抄曰、夜るの鹿、あか

く群
本つ
なに同 同
ナシ
ら同の
まもり
同ナシ

つきさけぶ猿の聲、みやまおろし松の風、よに物あはれに心すごく侍り。又曰、長夜のあかつき、さびたる猿のこゑを聞。平家物語卷第五曰、それ高雄は山うづたかうして云云れい猿さけんで枝にあそぶ。曾我物語卷第一曰、その外きじ山どりさるうさぎ云云。榮花物語疑曰、只聞ニ溪鳥嶺猿一。走湯山緣起曰、猿猴數十爲群黨乘夜云云。赤染衞門集曰、日ごろこもりたるに、夜たにゝさるのなきしに〽たよりなきたびとはわれぞおもひつるきをはなれたるさるもなくなり。太平記卷第二十一曰、曆應元年四月、同二十五日、道譽山門訴訟により秀綱が配所の事定て、上總國、山辺郡へ流さる。道譽近江の國分寺迄、若黨三百餘騎、打送の爲にとて、前後に相順ふ。其蜚悉、猿皮をうつぼにかけ、猿皮の腰當をして、手毎に鶯籠を持せ云云。同卷第二十一曰、弦を鳴して、遙なる樹頭の栖猿をも落しつべし

【形狀】四季物語曰、ましらといふものは、つねはさる事にて、けうとき山路に、いくらこゝらもすだきゆすりて、のりの師のおもひの玉をつらぬきたるが如し。まいて、雨などうち降たる夕暮の聲、なに心なき山かつも、はらわたをたふべきぞかし。こゝろときものにて、いほりにはいつもなれきて、經などもよみつべし。ものらたつさふべきは、手にかなふべきまもり花ざら、あか桶などはもてきぬ。えせたるけだものぞかし

○白猿 三代實錄

【集註】三代實錄卷第三十六曰、陽成天皇元慶三年十一月廿七日壬午、石見國言、獲ニ白猿一、木連理六ヲ

【形狀】宇治拾遺第十曰、まことにえもいはず大なる猿の、たけ七八尺ばかりなる、かほとしりとはあかくして、むしりわたをきたるやうに、いらなくしろきが、毛はおひあがりたるさまにて、よこ座にゐたり。つぎ〳〵の猿ども、左右に二百ばかりなみゐて、さま〴〵

しハな
る云ゝ
トアル
ヲ斯ク
直セリ
トミエ

にかほをあかくなし、まゆをあげ、こゑ〴〵になきさけびのゝしる、いと大し。

○六足猿　伊賀國風土記、見上註

夜萬古（ヤマコ）　倭名類聚鈔　〔漢名〕玃　爾雅　〔今名〕ヒトツザル

爾雅曰、玃父善顧。註、貑玃也。似テ獼猴ニ而大、色蒼黑、能ク玃ミ持チ人ヲ好ム顧眄。疏、大猿也。本草綱目曰、玃ハ老猴也。生ス蜀西徼外山中ニ、似レ猴而大、色蒼黑、能ク人行シ善ク玃ミ持ス人物ヲ。又善ク顧盼ス。故ニ謂フ之ヲ玃ト。純牡ニシテ無レ牝。益部方物畧記曰、玃出ニ卭蜀閒ニ、與ニ猿猱一無レ異。但性不ニ躁動一、肌宮豐腴、蜀人炮蒸シテ以爲ニ美味一。○倭名鈔曰、玃。漢語抄云、夜萬古

〔今案〕抱朴子曰、獼猴五百歲ニシテ變シテ爲ル玃ト。夜萬古（ネマコ）ハ釋迦嶽深谷、及山上嶽小笹ノ南麓、神道寺天川杤尾山谷ニアリ。年經テ老大ナル獼猴也。高サ人ニ等シ。和州吉野十津川小川栗平ノ方言ニ一ツザルト云、群猴ニ不混、只一ノ大獼猴（サル）、深山中ニ居ス、人ヲ見レバ乃チ攫ミ食フ、故ニ山人此ヲミレバ畏レ隱ル。新撰字鏡曰、摑攫。同、才縛反。搏也。裂也。折也。言獸臏則攫、豆加弥波免（ツカミハメ）。詩經類考曰、猱善ク睡リ玃善ク攫ム。時珍曰、似レ猴而大者、玃也

萬太（マタ）　倭名類聚鈔　〔漢名〕黑眚　皇明通紀　〔今名〕シイ

皇明通紀曰、黑眚ハ其ノ疾キコト如シ風ノ、或自リ戶牖ニ入ル、雖トモ密室ト亦無シ不ルコト至ラ。則人皆昏迷シ、或ハ手足或ハ身面被レテ傷ラ出ニ黃水ヲ、數日徧城驚擾ス、暮夜多持シ刄ヲ張レテ燈ヲ自ラ防ク、見レテ有ルヲ黑氣來ルヲ輙鳴シ金ヲ擊チ鼓ヲ以テ逐フ、有ニ

見者ニ云、黒而小金睛脩尾狀類ス犬貔ニ。五雜組曰、至テハ於黒眚馬騾精之類ニ、似タ訛而實作レ恠。震澤長語曰、成化中京師相ヒ傳フ、有レ物如レ貔、或ハ如シ犬ノ、倏忽トシテ如シ風ノ、或ハ傷ニ人面ニ嚙ム手足ヲ、一夜數十發、名ヲ曰ニ黒眚ト

一名　麻太　天文写本和名抄〇倭名鈔曰、猱猨。漢語抄云、萬太〇本草綱目曰、猱、難逃切。猨毛柔長如レ絨可ニ以藉ニ可ニ以緝ニ、故謂ニ之猨ニ、而猱字亦從レ柔也。嶺南雜記曰、嶺南有猨、似猿猴而大、毛深厚而金色、以ニ猿猴ニ爲レ糧、此者和產無之

猫胯 明月記　ねこまた 徒然　猫狗 百練抄

今案　ねこまた二種アリ。明月記曰、天福元年八月二日、夜前自ニ南京方ニ使者小童云、當時南都云猫胯獸出來、ニ夜噉ニ七八人ヲ、死者多。或又打殺ス件ノ獸ヲ、目如シ猫ノ、其狀如ニシ犬長シ云云、二条院御時、京中此鬼來由、雖人称又称ニ猫胯病ニ、諸人病惱之由、少年之時人語之、若及京中者、極可レキ怖畏歟。即猫胯ハ爲ニ黒眚ニ可シ謂ト。つれ〴〵曰、奥山に猫またといふもの有て、人をくらふなる、と人のいひけるに山ならねども、これらにも、猫のへあがりて、ねこまたになりて、人とる事はあなる物を、といふ者有けるを云とかひける犬の、くらけれど主をしりて、飛つきたりけるとぞ。觀レハ此則畜猫年闌テ其尾爲ニ二岐ニ猫胯ハ金花猫也。大和本草曰、猫マタハ金花猫ト云。月令廣義ニ出タリ。本朝食鑑曰、凡老雄猫作レ妖、其變化不レ減ニ狐狸ニ、而能ク食レフ人ヲ。俗ニ呼テ稱ニ猫麻多ニ

集註　百練抄第七曰、近衛天皇、久安六年七月、近日京土訛言、近江美濃兩國山內有ニ奇獸ニ、夜陰群ニ入村閭ニ、食ニ損兒童ニ、俗謂ニ之猫狗ニ云云此事見ニ小野右府記ニ。實資 俗言不レ違也。吾妻鏡卷第四十一曰、建長三年三月六日丙寅、武藏國淺草寺如レ牛者忽然出現、奔ニ走于寺ニ。于レ時僧五十口許、食堂之間集會也。見ニ件之恠異ニ、卅四人立所

受₂病痾₁、起居進退不ㇾ成、居風云云七人卽座死云云。物理小識曰、癸未孟冬、亭太廟衛士夜驚、有黑物如牛高數丈、自手門奔端門出、此是黑眚

古名錄獸部卷第七十二　終

古名錄獸部卷第七十三

獸類　下

宇古呂毛知　鼷兒

天　黃鼬

○乎祢須美　牡鼠

乃良祢

木ねすみ　栗鼠

牟佐佐婢　鼺鼠

○白蝙蝠

○人穴蝙蝠　石燕

通計十四種

以太知　鼬鼠

祢須美　鼠

○白鼠

豆良祢古　鵂鶹

阿末久知祢須美　鼷鼠

加波保利　伏翼

水獸類

乎曾（フソ） 水獺

阿之加（アシカ） 海獺

阿左良之（アザラシ） 海豹

膃肭

美知（ミチ） 海驢

河ニ有レ物如レ人ノ 水虎

通計六種

古名錄獸部卷第七十三

紀藩　源　伴存撰

獸類　下

今名　ヲゴロ

漢名　鼹鼠　本草

宇古呂毛知（ウゴロモチ）　倭名類聚鈔

證類本草曰、鼹鼠。形如ニ鼠大一而無ㇾ尾、黑色、長鼻甚强、常穿ニ耕地中一行、討堀即得鼠。和名宇古呂毛知。兼名苑注云、恒在ニ土中一行、若シ見ㇾ三光ヲ即死

一名　**无久呂毛知**　本草類編○本草和名曰、鼹鼠。和名宇古呂毛知。倭名鈔曰、鼹

牟久呂毛知　新撰字鏡曰、蚡、一作蚡。牟久呂毛知。蚡、呼枚反、蔵鼠也。牟久呂毛知○字典曰、蚡。爾雅、蝎ハ蛣蚍、註、木中蟲也。正字通曰、蚡。渠勿切、音屈、亦作ㇾ蝠。又蚡蟋蝍蛛別名○蚡。字典、玉篇蟲名

ムグロミチ　壒嚢抄曰、博物志、鼹鼠ヲムグロミチト云リ。鼹鼠鼹此等常ノムグロモチ也。鼹ヲムグロモチト云フハ珍シキ說也○鼹鼠、ハツカネズミ也。爾雅、豹文ハ鼮鼠、註、鼠文彩如ㇾ豹者。和產無之

土豹　太秦牛祭繪詞曰、▲乃畔穿土豹（ウゴロモチ）○按ニ、此ニ云土豹ハ和名也。唐ニテ土豹ト云ハ豹ノ

一種也。證類本草曰、衍義豹肉毛赤黃、其紋黑如レ錢而中空比比相次、又有ニ土豹一、毛更無レ紋、色亦不レ赤、其形亦小

【集註】本草類編曰、鼶鼠。和名无久呂毛知、五月採令乾燔之

以太知 倭名類聚鈔

【漢名】鼬鼠 本草　【今名】イタチ

爾雅曰、鼬鼠。註、今鼬似レ鼦赤黃色、大尾、啖レ鼠

【一名】以多知 天文写本和名抄○倭名鈔曰、鼬鼠。以太知、漢語抄曰、鼠狼○爾雅、鼪鼬鼠郎也。太平御覽有ニ鼠郎一、邢昺以レ鼪爲ニ鼠狼一。字典曰、按、鼪即鼠狼也。今曰ニ狼貓一、江北曰ニ黃鼠狼一

玄獺 太平記卷第五曰、承塵ノ方ヨリ、其色朱ヲ指タル如クナル鼠狼一ツ走リ出テ、此鵂ヲ二ツナガラ食殺テゾ失ニケルト云云其ヲ又玄獺ノ食殺シケルモ不思議也。弁内侍日記曰、むばらこぎのうたに、いたちふえふく、さるかなづ、ことにおもしろくきこえ●

【集註】源氏物語東屋曰、いたちの侍らんやうなる心ちし侍れば、よからぬ物ども、にくみうら見られ侍と聞ゆ。同手習曰、いたちとかいふなる物がさるわざする。源平盛衰記卷第十三曰、五月十二日ノ午刻ニ、赤ク大ナル鼬ノ、何クヨリ來リ參リタリ共、御覽ゼザリケルニ、御前ニ參リ、二三返走リ廻リ、大ニギ丶メキテ、法皇ニ向ヒ參セテ、踊上々々、目影ナンドメ失ニケリ。平家物語曰治承四年おなじき五月十二日の午のこくばかり、鳥羽殿には、いたちおびたゞしうはしりさはぐ云云。曾我物語卷第二曰、しかるに、じやくしんよにましく／＼しとき、きんだちあまたなみすへて、しゆゑんなかばのおりふし、もち給ひたるさかづきの中へ、そらより大きなるいたち一つおち入て、御ひざのうへに、とびおりぬ、とみえしが、

いづく共なくうせぬ云々。家中竹馬記

日、いたち、これも射まじきものゝ事

天(テン) 倭名類聚鈔 漢名 黄猫 大明一統志 今名 テン

一名 てん 古今著聞集○倭名抄曰、貂。和名天○按、貂ハトッピ也。和産無之

集註 古今著聞集巻第九曰、天井にいたちよりも大きに、てんよりもちいさきものゝ音こそすれ、といひて。太神宮諸雑事記曰、永承元年、春之比、豊受太神宮御氣殿、貂(テン)参入シテ、二宮朝夕御膳物手巻喰散セリ。因レ之宮人神主内人等、相構天雖レ塞レ穴モ、件御膳猶毎日喰損。仍一貂ヲ狩出天雖ニ打殺一、五六十ヵ貂借来更不レ留。仍宮司兼日御材木造儲天、一時之内天井奉レ造レリ。是則雖レ有ニ非例事一、為レ防ニ件貂一也。駿河國風土記曰、烏渡郡八幡岡貢兎狐狸貂之皮毛

形状 源平盛衰記巻第卅三曰、十郎藏人コソ、鼬ノナキ間ノ貂(テンホコリ)誇トヤノ様ニ、院ノキリ人メ院宣ヲ給リ、木曽殿ヲ可レ奉レ誅、其間へ候ト申下シタリケレバ○大和本草曰、テン、鼬(イタチ)ニ似テ大ナリ。其毛長ク黄色ナリ。尾長大也

禰須美(ネズミ) 倭名類聚鈔 漢名 鼠 本草 今名 ネズミ

正字通曰、鼠、賞呂切、音暑、穴蟲善竊晝伏夜動、四歯無牙、前爪四後爪五、尾文如レ織無レ毛

一名 よめのこ 權中納言定頼卿集曰、尾上のはすのすゞを鼠のくひたりける

を見て〽よめのこの蓮の玉をくひけるはつみうしなはんとやおもふらん

毛シユウ　源平盛衰記卷第一曰、淸盛捕化鳥云云夜半許ニ及テ、南殿ニ鵼ノ音シテ、一鳥ヒメキ渡タリ。藤ノ侍從秀方、折節番ニテオハシケルガ、殿上ヨリ高聲ニ、人ヤ候〳〵ト被レ召ケリ。左衛門佐ニテ、間近候ケレバ、淸盛ト答フ。南殿ニ朝敵アリ、罷出テ搦ヨト仰ス云云取テ進セバヤト思ケレバ、畏テトテ、音ニ付ィテ踊懸ル處ニ、此鳥騒テ左衛門ノ左ノ袖ノ內ニ飛入、則取テ進セタリ。叡覽アレバ、實ニ小キ鳥也、何鳥ト云事ヲ不ニ知食一、癖物ナリトテ有ニ御評定一。ヨク〳〵見レバ毛ジユウ也。毛ジユウトハ、鼠ノ唐名也。加様ノ者マデモ、皇居ニ懸念ヲナシケルニヤ、博士召セトテ召レタリ。占申ケルハ、此事漢家本朝ニ希也、但垂仁天皇二年二月二日、毛ジユウ皇居ニ其變ヲナス、武者所蒙レ仰トラントシケルニ、不ニ取得一ヲ門外ニ飛出ヌ云云南臺ノ竹ヲ召シ、中ニ籠テ、淸水寺ノ岡ニ埋レタリ。御惱ノ時ハ勅使立テ、被レ含ニ宣命一時、毛朱一竹塚ト云ハ則是也〇正字通曰、俗稱レ鼠爲ニ耗蟲一。太平御覽曰、玉策記稱鼠壽三百歳滿者則色白、善憑人而卜名曰仲、仲能一年之中吉凶、及千里外之皆知也。通雅曰、鼠有施鼫。史記灌夫傳。有鼠兩端。後漢鄧訓傳。首施兩端。注猶首鼠也。西羌傳亦云、首施兩端。按古已呼鼠爲施矣。今呉中呼水爲矢。建昌人呼水爲暑卽此可推古鼠施之通聲〇太秦牛祭繪詞曰、聖教破留大鼠小鼠女。延喜式卷第四十八、左馬寮曰、鼠栗栖庄一處地十五町栗林一町〇籌海圖編、倭國事畧曰、鼠眠助米

集註　古事記曰、鼠來テ云ク、內者富良富良。外者須須夫夫云云其鼠咋ハ持其鳴ル鏑ヲ、出來テ而奉也。其矢ノ羽者、其鼠ノ子等皆喫ツ也。本朝無題詩曰、賦レ鼠。藤原敦光。相レ鼠無レ牙只有レ皮、穿レ垣奔走欲ニ何爲一、雲晴鳶翥心偸畏、燈暗猫來命殆危云云。日本書紀曰、天智天皇元年夏四月、

鼠産ニ於馬屋ニ。五年、是冬、京都之鼠向ニ近江ニ移。續日本紀第三十三曰、寶龜六年四月己巳、河內、攝津兩國、有レ鼠食ニ五穀及草木ニ。續日本後紀卷第二十曰、嘉祥三年三月庚寅、諸部八人之履共ニ爲レ鼠嚙ル。又內印印盤爲レ鼠喫ヒ乱サル。三代實錄卷第六曰、貞觀四年十一月廿日甲申、先レ是、少主鈴從八位上美和眞人清江言、鼠嚙ニ內印盤褥ヲ。同卷第三十九曰、元慶五年春正月廿八日丁丑云云左近衛府生佐伯安雄劒胡籙等緒有レ鼠嚙斷而將去云云右兵衛陣官人ノ劒胡籙等緒數爲ニ鼠所レ嚙。中右記曰、大治元年七月、外宮御裝爲鼠損。百練抄第七曰、長寛元年九月廿七日、被レ調ニ進八幡御劒袋ヲ、本袋依ニ鼠喰ニ也。同第十一曰、承元二年四月廿七日被レ行ニ軒廊御卜ヲ、是依 吉田社御裝束鼠喰損事ニ。扶桑略記第四曰、孝德天皇、白雉五年甲寅正月、衆鼠從ニ難波ニ遷ニ倭國ニ、是遷都之瑞也。同廿五裡書曰、承平二年五月廿五日辰刻、印盤丹綿鼠咋散。同廿九曰、治曆四年六月廿一日、行ニ幸神祇官ニ、可ニ即位ニ之由奉幣、告ニ伊勢太神宮ニ。但路次之間、鼠自ニ乘輿中ニ躍落、神祇陰陽等所レ占、爲ニ吉兆ニ者。人車記曰、嘉應元年五月十九日、藏人仲基來云、內侍所御座爲鼠被喰損。明月記曰、寬喜元年五月五日、午時、西而爲賓莚疊、鼠喰破。山槐記曰、治承四年八月廿七日云云八幡十五日、寅刻依放生會出御之間、西御前御劒錦袋幷御笥爲鼠被喰損事云々十月十四日、伊勢高宮御裝束、鼠喰損調改被獻之。世繼物語曰、陽成院位につかせ給ひて、物にくるはせ給やうにて、けうふしぎのまつり事をせさせ給ば云々猫に鼠をとらせ。枕草紙曰、ねずみのはしりありく、いとにくし。きたなげなる物、ねずみのすみか。催馬樂曰、にしでらの、にし寺の、おひねずみ、おんもつんづ、けさつむづ、けさつんづ、ほうしに。愚案抄曰、鼠にわかきと、老たるとあるべし。源平盛衰記卷第十曰、賴豪ガ死靈モイトヾ成ニ怨靈ニ、山門ト云處ガアレバコソ、我等ニ戒壇ヲバ

免サレヌ。サレバ山門ノ佛法ヲ亡サント思テ、大鼠ト成、谷々坊々充滿テ、聖敎ヲゾカブリ食ケル。是ハ頼豪ガ怨靈也トテ、上下是彼ニテ打殺、踏殺ケレ共、彌鼠多出來テ、夥ナンド云許ナシ。此事只事ニ非ズ、可レ宥ニ怨靈ヲトテ、鼠ノ寳倉ヲ造テ、神ト奉レ祝、サテコソ鼠モ鎭マリケレハ。同卷第廿六曰、此入道ノ世ノ末ニ成テ、家ニ様々ノサトシ有キ。坪ノ内ニ秘藏ノ、立飼レケル馬ノ尾ニ、鼠ノ巣ヲ食テ、子ヲ生タリケルゾ不思議ナル。舍人數多付テ、朝夕ニ撫餙ケル馬ニ、一夜ノ中ニ巣ヲ食、子ヲ生ケルモ難レ有。平家物語相同 又曰、淀河ニ落入テヌレ鼠ノ如ニメ。吾妻鏡卷第一曰、治承四年八月廿五日、景久幷郎從所レ帶百餘張弓弦、爲レ鼠被ニ喰切一畢。同卷第十八曰、承元々年八月十七日、所ニ用意一鎧、爲レ鼠致レ損之間、失レ度中レ障云云。同卷第二十六曰、貞應二年四月十一日、若君御衣、鼠喰ニ切之一。今日巳尅、石山禪尼奉ニ見付一。同卷第二十七日、安貞二年六月廿三日、將軍家百日招魂祭御撫物鼠喰ニ損之一。御成敗式目追加曰、起請文失條々、爲鼠被喰衣裳事。蜻蛉日記曰、世にいふなるねずみをいのほどにだにあらぬを

【形狀】 枕草紙曰、さかしらに、うへのきぬわきあけにて、ねずみのおのやうにて、わがねかけたらん程ぞ、にげなき。又曰、むつかしげなる物、鼠のいまだけもおひぬを、すのうちよりあまたまろばし出たる。吾妻鏡卷第九曰、文治五年九月三日、泰衡被レ囲ニ數千兵一、爲レ遁ニ一旦命害一、隱ルヽコト如レ鼠、退似レ鶂、差ニ夷狄嶋ニ赴ニ糟部郡一。新猿樂記曰、譬ハ如ニ鼠ノ含レ猫、雉ノ相ニ鷹

○乎彌須美 本草和名

【漢名】 牡鼠 本草

【今名】 ヲネズミ　【一名】 於彌須美 本草類編。按於當作乎。本草和名曰、牡鼠矢。和名乎祢須美

【集註】 本草類編曰、牡鼠、和於祢

須美、不拘時取

○白鼠 通名 【今名】シロネズミ 通雅。物之白者時ニ有ニ其ノ種一。不ニ必異一ト也。河男有ニ白鼠一、白物不ニ必スシモ長季一、不ニ必瑞一、自ラ有ニ此種一

【集註】續日本紀卷第九曰、神龜三年春正月辛巳、京職獻ニ白鼠一。同卷第廿九曰、神護景雲二年十一月壬申、美作ノ掾正六位上恩智主廣人獻ニ白鼠一。同卷第三十五曰、寶龜九年夏四月甲申、攝津國獻ニ白鼠一。十二月癸未、太宰府獻ニ白鼠赤眼一。同卷第四十曰、延曆九年九月己卯、攝津職貢ニ白鼠赤眼一。文德實錄卷第四曰、仁壽二年二月戊午、太宰少貳從五位下橘朝臣高宗獻ニ白鼠一頭一。扶桑略記廿三曰、醍醐天皇寛平九年十一月一日壬申、因幡國獻ニ白鼠一

乃良禰(ノラネ) 倭名類聚鈔 【漢名】野鼠 農政全書 【今名】ハタケネズミ

【今案】乃良祢ハ田野地中ニ居ル鼠也。形狀家鼠ニ似テ小ク、頭大ニシテ前足短シ。其尾亦短小也。色ハ家鼠ニ同シテ色淺シ。紀州海士郡ニテハタケ子ズミト云。本草啓蒙ニノラネト、ヒミズヲ混ズ非也。ヒミズハ鼠ニ不レ似鼹鼠(ヲゴツ)ニ同シテ小也。大和本草曰、鼹鼠(ウクロモチ)一種ヒミズト云物アリ。形小ニシテ長シ。本草綱目鼩鼱ニ似レ鼠而小、卽今地鼠也。農政全書曰、國陸上郊鼠爬泥主有水必到所爬處方止。物理小識曰、天啓時田鼠紺結如レ桴。張養蒙短尾方喙小ニシテ於レ鼠ヨリ而足方ニ長。觀レ此則田鼠地鼠野鼠ハ卽ハタケ子ズミニシテ、乃良祢此也。蓋シ田鼠與鼹鼠同名異物

【一名】能良禰 天文写本和名抄○倭名

鈔曰、鼸鼩〻漢語抄云、乃良祢

ノラネズミ

塵添壒囊砂曰、田鼠二字ハノラネズミトヨム○田鼠。本草綱目、鼸鼠。釋名ニ出、卽ウグロモチ也。時珍曰、月令、季春田鼠化爲レ鴽、夏小正八月鴽爲レ鼠。是二物交化如ニ鷹鳩一然也。鴽フナシウヅラ也

豆良祢古（ツラネコ）　倭名類聚鈔

漢名　鼸鼩　本草

今名　七郎ネズミ

本草綱目曰、鼸鼩〻孫愐云、小鼠也。相啣而行。時珍云、按、秦記及草木子、皆載群鼠數萬相啣而行、以爲ニ鼠妖一者、卽此也○倭名鈔曰、鼸鼩〻和名豆良祢古

集註　續日本紀卷第三十三曰、寶龜六年秋七月丁未、下野國言ス、都賀ノ郡有ニ黑鼠數百許一、食ニ草木之根ヲ一數十里所。三代實錄卷第二十七曰、貞觀十七年六月十三日甲子云云此日每夜有ニ鼠跡一無ニ方ニ數ルコト、滿ニ京路ニ一、或自レ北向レ南、或入ニ宮城一、或出ニ城外一。餘見古鼠注

古今著聞集曰、安貞の比、伊与國矢野保のうちに、黑（くろ）嶋といふしま有、人里より一里ばかりはなれたる所也。かしこにかづらはざまの大工といふあみ人有、魚をひかんとて、うかゞひありきけるに、魚の有所よりひかりて見ゆるに、かの嶋のほとりの磯ごとに、おびたゞ敷ひかりければ、悦てあみをおろし引たりけるに、つや／＼となくてそこばくのねずみを引あげて侍けり。其ねずみ、引上られて、みな／＼ちり／＼ににげうせにけり。大工あきれてぞありける。ふしぎの事也。すべてかの嶋には、鼠みち／＼て、畠の物などをもみなくゐうしなひて、當時迄もえつくり侍らぬとかや。くがにこそあらめ、海のそこ迄ねずみの侍らん事、まこと

如刊本大ニ於に作る

にふしぎにこそ侍れ。走湯山縁紀曰、難波豊崎宮御宇、白雉五年正月、鼠爲ㇾ群黨一損二亡五穀一。○物理小識曰、天啓時田鼠糾結如ㇾ桴、渡ㇾ江入二蘆葦一根啇立二叢

阿末久知禰須美（アマクチネズミ）　倭名類聚鈔

【漢名】 鼷鼠　本草

【今名】 ハツカネヅミ

本草綱目、藏器曰鼷鼠。極細、卒ニ不ㇾ可ㇾ見。字典曰、鼷。説文小鼠也

【一名】 阿末久知禰須美　天文写大和名抄○倭名鈔曰、鼷鼠。和名阿末久知祢須美。陳藏器抄曰、鼷鼠爭。アマクチネズミハ、毒アル者也。何ノ故ニカアマクチトモ云ンヤ如何。アマクチ鼠ハ鼷鼠トモ云、是ヲ釋ルニ食ニ人及鳥獸一、皆不ㇾ痛ト云ヘリ。毒有ドモ食シテ不ㇾ痛也

【形狀】 ○本草啓蒙曰、鼷（ハツカネヅミ）鼠、小鼠ナリ。肆中ニ多シ。土中ニ穴居シ靜ナル寸ハ出テ器物ヲ囓損シ、食ヲ竊ミ大ニ害ヲナス。形ハ常鼠ニ異ナラズ、大ナル者長サ二寸餘、子ハ小ニシテ殊ニ物ヲ害ス

木ねすみ　家中竹馬記

【漢名】 栗鼠　通名

【今名】 キネズミ

【集註】 家中竹馬記曰、射まじき鳥の事云々木ねずみ、むさゝび鼯鳥云々

【形狀】 ○本朝食鑑曰、木鼠山中處々多有、狀如二常鼠一而性躁、肥健捷

天台山志曰、栗鼠尾大疾、齒牙亦堅利。每穴ニ古樹之根株一、而食二菓及草根芝蕈之類一。本草啓蒙曰、栗（リス）鼠形ハ蓋常ノ鼠ニ同ジ、尾濶大ニシテ長ク、常ニ負テ頂上ニ藏ク「䶉（ヲカツギ）鼠ノ如シ。ソノ枝上ヲツタヒ走ル「速ニシテ飛ガ如シ。毛ハ淺黑色ト、

白色トノ細斑アリ

牟佐佐婢（ムササビ） 萬葉集　漢名　鼺（音壘）鼠 證類本草　今名　ノブスマ

證類本草曰、陶隱居云、鼺、是鼯鼠、一名飛生、狀如蝙蝠、大如鴟鳶、毛紫色、闇夜行飛生、人取其皮毛、以與産婦、持之令兒易生　一名　**毛三** 本草和名曰、鼺鼠。和名毛三　**無佐佐比** 倭名類聚鈔曰、鼯鼠。和名毛美、俗云、無佐佐比　**毛美** 見上註　**毛々加和** 本草類編　**牟射佐妣** 萬葉集　**木鼠** 言塵集曰、木鼠。是はむさゝひ　**武佐左妣** 萬葉集卷第七曰、寄獸。三國山、木末爾住（コヌレニスマ）歷（フ）、武佐左妣乃、待鳥如（トリマツガゴト）、吾俟（ワレマチ）將痩（ヤセム）　**鼯**（ムサヽビ） 源平盛衰記曰、梢ニツタフ鼯（ムサヽビ）。字典曰、鼯、爾雅、鵔ハ鷫鸘。註、今之鵕鸃。集韻、鶡鴠。カムリトリ也　**牟佐々比** 新撰字鏡曰、猶豫。隴西謂犬子。又猶如麂登木健上樹也。牟佐々比。字典曰、猶良犬也〇出雲國風土記曰、出雲郡禽獸有晨風鳩山鷄鵠鶇猪鹿狼兎狐獼猴飛鼠。倘湖樵書曰、徐鉉云、飛鸓飛鼠也。字典曰、鸓。說文鸓ハ鼠。弘景云、飛鼠狀如蝙蝠、大如鴟鶚、毛紫色、暗夜行。廣輿記曰、飛鼠、其物飛而生子、難産者以皮覆之、則易、故又名催生

集註　萬葉集卷第三曰、牟佐佐婢波、木末求跡、足日木乃、山能佐都雄爾（タマ〳〵）、相爾來鴨。同卷第六曰、十一年己卯、天皇遊獵高圓野之時、小獸泄（モレテ）走諸里（サト）之中、於是適値勇士生（ナカラ）而見獲、即以此獸

獸ニ上御在所ニ副歌一首。獸名、俗曰ニ牟射佐妣ー。大夫之、高圓山邊、追有者、里邊下來流、牟射佐妣曾此。右一首、大伴坂上郎女作レ之也。但未レ逕レ奏而小獸死斃。因レ此獸歌停レ之。出雲國風土記曰、意宇郡有飛鼯。嶋根郡禽獸有飛鼯。餘畧之。曾我物語卷第一曰、むさゝび三百云々。家中竹馬記曰、むさゝび。和泉國風土記曰、日根郡禽獸有ニ飛鼯ー。海道記曰、木々になく曉の鼯は、孤枕の夢を破る

形狀

本草類編曰、鼯鼠。和毛々加和。狀如ニ蝙蝠ニ大ナリ。又云、毛美如ニ鶡鳥毛紫色ー、晴夜行飛生人留息。宇治拾遺物語卷第十二曰、後鳥羽院御時、水無瀨殿に、よる〳〵山より、からかさほどの物のひかりて、御堂へとび入事侍りけり。西おもて、北おもてのものども、めん〳〵にこれをみあらはして、高名せんと心にかけて用心し侍りけれ共、むなしくてのみ過けるに、ある夜景かたたゞひとり中嶋にねて待けるに、例のひかり物、やまより池のうへをとび行けるに、おきんも心もとなくて、あふのきにねながらよく引て射たりければ、手ごたへして池へおち入物ありけり。そのゝち人々につげて、火をともしてめん〳〵見ければ、ゆゝしく大なるむさゝびの、年ふり毛などもはげ、しぶとげなるにてぞ侍りける。源平盛衰記卷第四十八曰、情隱シキ鼯モ、所ガラニゾ小澄。山槐記曰、治承二年十二月十二日、定成朝臣獻御乳付云々納ニ手箱一合所儲置之御藥雜物等、鼯鼠皮一枚、入道被レ獻レ之、其廣如ニ兎皮ー、其色薄香也○大和本草曰、鼯鼠。和名ムサヽビ。パントリ。ソバヲシキ。モヽグハ。モヽカ皆一物也。山中ニテ飛ビ來テ人ノ面ヲオホフ事アリ。不レ知人爲ニ怪物ー、高ヨリ下ニ飛ブ、下ヨリ上ニ飛コトアタハズ。鼬ヨリ大ナリ。本草啓蒙曰、鼯鼠、形猫ニ似テ瘠紫褐色、大尾身ヨリ長シ、腹下黄色喉頷雜白色、四脚肉翅尾ニ連ル、翅ヲ開ケバ傘ヲ張ルガ如シ、木梢ニ穴居ス。按ニ鼯鼠大小

ノ二種アリ、小ナルヲ和州吉野郡十津川ニテモヽト呼

宸上ノ秘藥也

附方 下腹ノ治方 萬安方曰、下腹ノ治方、ムサヽビヲ乾テ水ニテ煎テノムベシ。骨マデモ灰ニ燒テ煎テノムベシ。

加波保利（カハホリ） 本草和名

一名 加波保里　漢名 伏翼 本草　今名 カフモリ

倭名類聚鈔曰、蝙蝠。本草云、蝙蝠、一名伏翼。和名加波保里。蘇敬曰、天鼠矢。伏翼、矢名也。本草和名曰、伏翼。和名加波保利。新撰字鏡曰、蝙蝠。加波保利。蟟蜯蠑。加波保利○字典曰、蜯。玉篇與蚌同。干祿字書、蜯俗字。卽ドブガヒ也

加波不利 本草類編

かうほりの鳥 なぐさめ草曰、墨の衣のあさはかに、たゞゑびすのすがたにあらざるばかりにて、かうほりの鳥にも、ねずみにもあらぬがごとくにして

カハモリ 塵添壒囊抄曰、當時ノ扇ハ日本ニテ造始ル也。見ニ蝙蝠ノ羽ニ學レ之ト云リ。故ニ其形蝙蝠ノ羽ニ似タル也。爰ヲ以テ源氏ニハ扇ヲカハモリト云。文明写本下學集曰、扇。本朝ノ初無扇、見ニ蝙蝠之羽ヲ學レ之、故ニ形相ニ似蝙蝠羽ニ

集註 本草類編曰、伏翼。和加波不利、立夏後採陰干。

大和物語曰、時はむつき十日のほどなりけり。すのうちよりしとねさし出たり。ひきよせてゐぬ。すだれもへりは、かはほりにくはれて所々なし。狹衣曰、あなおぼつかなのわざや、かはほりの宮にやならん、と打

わらひ給ふ

○白蝙蝠 塵添壒囊鈔 **集註** 證類本草曰、伏翼、唐本注、千歲頭上有冠淳白大如鳩鵲 日本書紀卷第三十曰、持統天皇八年冬十月辛亥朔庚午、進ニ白蝙蝠ー

○人穴蝙蝠 吾妻鏡 **漢名** 石燕 本草綱目 **今名** イハヤカフモリ 證類本草曰、石燕在ニ乳穴石洞中ー者、冬月探レ之

集註 吾妻鏡卷第十七曰、建仁三年六月三日、將軍家渡ニ御于駿河ノ國富士狩倉ー、彼山麓又有ニ大谷ー、號ニ之人穴ー、爲レ令レ究ニ見其所ヲ、被レ入ニ仁田四郎忠常主從六人ヲ一云云。四日、巳尅、仁田四郎忠常出ニ人穴ー歸參、往還經ニ一日一夜ヲ一也。此ノ洞狹兮、不レ能レ廻レ踵ヲ、不ニ意ノママ、進ミ行ク、又暗ノ兮、令レ痛ニ心神ヲ、主從各取ニ松明ー、路次始中終、水流レ浸シ足、蝙蝠遮ニ飛于顏ニヲ、不レ知ニ幾千萬ト云云

形狀 ○石燕ハ、石洞中ニ生ズル蝙蝠也。諸國洞中ニアリ

水獸類

平曾（ヲソ） 本草和名　［漢名］水獺 本草　［今名］ヲソ

證類本草曰、衍義、獺四足俱ニ短ク、頭與ニ身尾一皆褊、毛色若ニ故紫帛ノ、大者身與レ尾長三尺餘。食レ魚、居ニ水中ニ、出レテ水不レ死也。世謂ニ之ヲ水獺ト

［一名］加波乎曾 本草類編 ○本草和名曰、獺肝。和名乎曾。倭名類聚鈔曰、獺。和名乎曾。證類本草曰、圖經、獺惟肝温主傳尸勞極惟此肝一月一葉十二月十二葉

ウソ 頓醫抄曰、咳嗽治藥、鹿ノズイヲ酒ニテ可食、又ウソノ肝ヲ燒テ可食

河うそ 大草殿相傳聞書

［集註］本草類編曰、獺肝。和加波乎曾、燒灰用之。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。下總國、獺肝二具。美濃國、獺肝三具。越中國、獺肝二具。播磨國、獺肝二具。備中國、獺肝三具。備後國、獺肝三具。大草殿より相傳之聞書曰、河うそうけみいりの事。やきやういかにも能燒て、毛の一ツもなきやうにやくべし。うそをやき候時、石を二ツ三ツも火にくべておき、うその腹をたてにわりて、わたをとりいだし、腹の內水を打候へば、腹の內のかくさき事もうせ候。其後腹の內の石を取いだし、こぬかを入て、內外をよくあらふなり。うそのつくり樣は、うそのなかりのごとくまさめにつくり候へば、すいく候、つくり候ながさは、三寸四寸程につくる也。つくりたるを其まムさかしほにつけておく。又しるの仕樣は、すましみそ一ぱいにすめ味噌小わん一ツいれ、かつをとけしと

十年

本草

を布の袋に入て煮だし、取あげて能時分にうそを入れ。うそのうはをきには、午房を四の一寸程にうすくへぎはりきりにしているゝ也。すい口は、うそのをゝ車切にきりて、塩と酒にていりて、其上にさんせうをすりて、それをさか塩にてこねて、いまのうその尾の車切の上に置て、汁の上にをくなり。うその尾は、をぐるまといふ也

【形狀】 山槐記曰、治承二年十一月十二日、定成朝臣獻御乳付云云納手箱一合所納置之御藥雜物等中、獺皮一枚、入濱被獻之、其色黃。袖中抄曰、獺といふけだものは たはぶれにくひあふほどに、はてにはくひころすといへり〇本朝食鑑曰、獺狀似小狐及狗短頭、與身尾皆平褊、毛色青黑膚ハ如伏翼長尾、四足、水居ノ食レ魚、川岸塘邊、或巖石ノ間爲レ穴

阿之加（アシカ） 倭名類聚鈔 【漢名】 海獺 本草 【今名】 アシカ

【一名】 葦鹿 倭名鈔ニ出雲國風土記曰、飯石郡葦鹿社

【集註】 倭名鈔曰、葦鹿。本朝式云、葦鹿皮。和名阿之加。見于陸奥出羽交易雜物中矣。本文未詳。 餝抄曰、大嘗會御禊女御代前駈鞍事。永治元年御禊、前駈廿人云々、六位四人、縁螺鈿鞍、葦鹿切付、泥障、楚鞦、棟緂手綱。諒闇鞍事。保元々十二十七、御方違行幸、或秘記曰、鞍縁螺鈿、葦鹿切付、淺黃手綱、無文革大滑等云々

【形狀】 〇大和本草曰、海獺（アシカ）。海中ニアル獸ナリ。獺ニ似テ大也。長四五尺、髭ハ長サニ比スレハ小ナリ。獺ノ形ニ似テ長シ。頭モ如水獺、遍身毛アリ、腹ニモ毛アリ、毛ノ長三分許、口小トガル、齒ハ如

犬ノ牙、耳甚小ナリ、ヒゲアリ、アラシ、腹ニハ足ナシ、ヒレ二アリテ、廣ク長ク、ウラニ皮アリ、足ノ如ナリ。尾ニモヒレアリ、岐（マタ）アリテ兩ニワカル、腹ノヒレヨリ廣ク、爪各五アリ、爪アル所ノ先指ノ如クニワカル、サキ（サキ）小ク薄シ、足ニハアラズ、是モウラニ皮アリ、岐（マタ）ノ中間ヨリハ短シ、獸ノ尾ノ如シ。尾ノヒレハ水カキナリ。足ノ如シ。海中ニテ立テバ、半身ハ水上ニアラハル、身ハ水獺ノ如ク柔ニメ回旋スルコト自由ナリ。海邊陸地ニ上リテ睡臥ス。

海人コレヲトル

阿左良之（アザラシ）　倭名類聚鈔　漢名　海豹　本草必讀　今名　アザラシ

山東通志曰、海豹出ニ寧海一、其大如レ豹、文身五色、叢居ニ水涯一、常以ニ一豹一護守如ニ鴈之類一、其皮可レ飾ニ鞍褥（韉）一。本草必讀膃肭獸註曰、有黑斑即爲海豹、海豹皮有黑斑點○雅輔裝束抄曰、五ゐ六ゐはしりざやをさす、五ゐはとら（虎）、六ゐはあざらし（水豹）。倭名抄曰、水豹。和名阿左良之○何氏類鎔曰、豹。大者如レ虎、小者如レ猴、有ニ水豹者一、以レ水爲レ巣。辨香集曰、廣博物志、水豹似馬銜而無角、能食人

集註　吾妻鏡巻第九曰、文治五年九月十七日、基衡建立之先、金堂號ニ圓隆寺一云云基衡令レ領ニ狀中品一、運ニ功於佛師一、所謂云云七間々中徑水豹皮六十余枚云云。同巻第十曰、次二位家云云水豹毛障泥。餝抄曰、保元々、或秘記曰、水豹尻鞘、無文青革裝束、左右衛門權佐維方・賴憲尻鞘、虎皮云々。隨兵日記曰、つなぬきの皮、とらの皮あざらしの皮熊の皮を用べし。百練抄巻第十曰、建久五年四月十八日、賀茂祭也云云馬八匹、置ニ黑鞍一、水豹切付。相國寺供養記曰、

治部大輔源義重、上帯貫水豹。人車記曰、嘉應元年云云水豹毛泥障。後三年記曰、新司を饗應せんことをいとなむ、三日厨といふ事あり云々。其ほか金羽あざらし絹布のたぐひ數しらずもてまいれり。隨兵次第曰、つなぬきの事、あざらしにても、くまの皮にても、へりうねをやりて履べし

附方 赤白痢病ヲ治ス 萬安方曰、赤白痢病ヲ治ス、アザラシノ皮ヲ灰ニヤキテ、膠ヲカタクトキテ、丸テ上茶ヲ衣ニスベシ

膃肭

福田方曰、膃肭臍(ヲツトセイ)、上烏沒切、又八乙切、下女骨切、又女滑切、試之法、臥犬ノ鼻ノ辺ニサシツクレバ、犬聞テ驚テ跳テ狂(モノニクルフ)ガ如ナル者眞之。酒ニ浸テ炙テ使へ。日本ノ賣買人文字ヲ不知メウン內サイトヨム、實ニアヤマリ之〇本朝食鑑曰、膃肭臍。奧之松前海上取レ之、狀似レ葦鹿ニ而色灰黑。有二大小雌雄一、雌多雄少。其牙齒有二內外二重一。本草啓蒙曰、膃肭獸ハ、形海獺ニ似テ小ク、頭微長、四鰭短クメ爪長シ。全身淡黑色、長サ二尺餘、重サ二貫目ニ過ギズ。吻鬚粗ク長クメ强シ。耳尾極テ短小、頭上ニ鹽吹ノ穴アレドモ、毛ニ隱レテ見ヘガタシ。其上齒二重ニメ、下齒一重ナリ。海獺ノ齒ノ上下倶ニ一重ナルニ異ナリ

形状 華夷鳥獸續考曰、海狗純黃形如レ狗大サ如レ猫。本草綱目曰、膃肭獸。釋名、海狗、蓋似レ狐似レ鹿其毛色斓、似レ狗者其足形也。似レ魚者其尾形也

美知(ミチ) 日本書紀　【漢名】海驢 山東通志　【今名】トヾ

山東通志曰、登州府海驢出ニ文登海中一、狀若レ驢常於ニ秋月一登島產乳、其皮製爲ニ雨具一、水不レ能レ潤

【一名】海馬 釋日本紀曰、海驢皮(ミチノカハ)云云先師云、驢者海馬也。日本書紀曰、海驢、此云美知

【形狀】○大和本草曰、海驢。今案トヾト云物海中ニアリ、岩屋ノ內ニアガリ好ンデネブル。其肉ヲ食フベシ。甘ク味クジラノ如シ。皮ハ馬具トス。其首馬ノ如シ。其大サ小馬ホドアリ、是海驢ナルベシ。奥州松前蝦夷(エゾ)及諸州ノ海濱亦稀ニアリ

河ニ有レ物如レ人 日本書紀　【漢名】水虎 通雅　【今名】ガハタロウ

通雅曰、水虎。卽水唐也。水經注曰、沔水水中有レ物、如ニ三四歲小兒一、鱗甲如ニ鯪魚一、射レ之不レ可レ入、七八月中好扗ニ磧中一、自曝ニ膝頭一、似ニ虎掌爪一、常ニ沒ニ水中一、出ニ膝頭一、小兒不レ知欲ニ取テ弄戲一、便殺レ人

【案註】日本書紀曰、推古天皇二十七年夏四月己亥朔壬寅、近江國言、於ニ蒲生河一有レ物、其形如レ人

【形狀】○大和本草曰、河童(カハタラウ)處々大河ニアリ、又池中ニアリ、五六歲ノ小兒ノ如ク、村民奴僕ノ獨行スル者、往々於ニ河邊一逢(ヘバ)レ之ニ則精神昏冒スト云。此物好ンデ人ト相抱キテ角(ヘ)レ力ヲ、其身涎滑ニメ捕リ定ガタシ、腥臭滿レ鼻ニ短刀(ワキサシ)ニテ欲(スレトモ)レ刺ト不レ中ラ、角(ヘテ)レ力ヲ人ヲ水中ニ引入レテ殺スコトアリ。人ニ勝コトアタハザレバ沒ス

レ水ニ而見エズ。其人忽恍惚トシテ如レ夢ノ而歸レ家、病コト一月許、其症寒熱頭痛通身疼痛爪ニテ抓タルアト有レ之、此物人家ニ往々爲レ妖、種々怪異ヲナシテ人ヲ惱ス事アリ。狐妖ニ似テ其妖災尤甚シ

古名錄獸部卷第七十三　終

古名録獸部卷第七十四目錄

蕃獸類

羖䍽羊　山羊
井猪（ヰ）　〇猪蹄　〇爲乃阿布良（キノアブラ）　猪脂
宇佐岐無麻（ウサギムマ）　驢　騾
良久太乃宇萬（ラクダノウマ）　駱駝　さかう　麝香
麝香猫　靈貓　麞
貘　白沢牛
可水角　奇耳
角端　天鹿
比肩獸　九尾狐
唐牛
通計四十三種

異獸類

鵺　　　　　　獨犴

雷　雷獸

通計三種

古名錄獸部卷第七十四

紀藩　　源　伴存撰

蕃獸類

象常シヤウジヤウ 天文写本 和名鈔　［漢名］猩猩 本草　［今名］シヤウジヤウ

廣東新語曰、猩猩ハ人面猨身、一名熊人、謂二其ノ熊ニシテ而人ナルヲ一也。曰人熊者、謂二其ノ人ニシテ而熊ナルヲ一也。一曰紅人、則謂二其ノ毛髮純紅ナルヲ一也。性機警通二ス八方ノ言聲一、如二ク幼女子ノ啼一カ亦淸越、間二學二フ蟲鳥ノ語音ヲ一、一一曲肖ス、蓋シ獸中ノ之百舌也。最モ嗜ム酒、滿二注甕中一ニ復タ置二高屐ヲ其ノ旁一ニ、猩猩見テ輒チ毀罵而去ル、去テ已ニ復還、姑ク以二指ヲ染レ酒嘗レ之ヲ、至レ醉テ著レ屐而笑、人因縛取テ問レ之、曰汝飲二我酒一須レ還ス二我血一ヲ、猩猩許シ以二テ血一升一、卽得二テ一升一ニ不レ能二多血一、以染レ緋久而不レ變、最可レ貴

［一名］象掌　倭名類聚鈔曰、猩猩。音星、此間云、象掌。天文写本和名抄曰、猩猩。所庚反又音星、此間云、象常

〳〵　義經記曰、酒を好みししやう〳〵は、樽のほとりにつながれ　しやう　［集註］義經記曰、猩々は血をおしむ、さいは角をおしむ

獅子

一名 師子 百練

西域記曰、湿都斯坦、其西隅有二巨澤一、圍數千里、澤中有レ山、圍逾二千里一、山中產二獅子一、於秋月皎潔輙負二雛於山中一往來、頭大而毛虬、尾形如二帚黃質黑章如虎皮長六七丈

抄卷八曰、師子七頭。同卷第十曰、建久六年五月廿日甲辰、貴布禰社立國司堀二出金獅子一頭一事。於二殿上一被レ議定一云云。管見記曰、巽坤角置獅子形。扶桑略記廿八日、長曆元年三月一日、攝津國獻二銅金獅子一堀出也。延喜式卷第十四曰、縫殿寮。師子鷹葦遠山等綾各一疋、料絲三斤八兩云云。吾妻鏡第四十二曰、小童二人。各著二唐裝束一、其形如二師子一。而赤、衣青。明月記曰、承元二年八月八日、後聞、亮弁親定朝臣等取入師子形後、女房見晝御座無師子形、奇求之處指入御帳之內隱之云云

集註 三代實錄曰、淸和天皇貞觀六年春正月十四日辛丑、延曆寺座主傳燈大法師位圓仁卒云云　開成五年、入二五臺山一云云垂レ至二北臺一、雲霧滿レ山一、徑路難レ尋、霧氣開霽、乃看二路前一、見二一師子一、形甚可二怖畏一、圓仁却走ルコト二三里許、經二於小時一、更復進レ路ヲ、見ル二彼師子一ヲ猶在二前路一、蹲居シテ不レ動カ、更復却走ルコト二三里許、弥〻增〻驚恐ス、數刻之後亦漸ク進行、師子猶ヲ不レ去、遙ニ見二人ノ來ルヲ一、則便起立ツ入二重霧ノ中一、無二復所レ見一。百練抄第八曰、承安二年六月十四日、祇園御靈會、上皇有二御見物一、殊被レ刷レ之、神輿三基、師子七頭、去四日自レ院被レ調二進之

岐佐（キサ） 倭名類聚鈔

漢名 象 本草

今名 ザウ

若狭國守護職次第八若狭國税所今富名領主代々次第ノ誤

雲南通志曰、異物志曰、象之爲獸、形體特詭、身倍數牛、目不踰豨、鼻爲口役、望頭若尾、馴良承敎、聽言則跪、素牙玉潔、載籍所美、服重致遠、行如邱徙

室町殿行幸記曰、御茶しやく、さうげ。

一名 ざう

永享九年行幸記曰、御茶杓、象牙。 榮花物語玉の臺曰、ふげんいとさゞやかにて、ざうにのりてたゝせ給へるも〇倭名鈔曰、象。和名岐佐。 天文写本和名鈔曰、象字亦與像同、和名岐佐。 萬葉集卷第一曰、太上天皇幸吉野宮時云云歌云云象乃中山呼曽越奈流。同卷第六曰、三吉野乃、象山際乃、木末爾波云云。同卷第三曰、昔見之、象乃小河乎、行見爲。又曰、昔見之、象乃小河乎、今見者

集註

日本書紀曰、天智天皇十年冬十月、是月、天皇遣使奉象牙云云於法興寺佛。延喜式卷第四十一曰、彈正臺。凡内命婦三位以上聽用象牙櫛。日本紀略曰、延暦十九年四月、庚寅、敕、象牙、陰陽之外、親王以下不得服用。弘仁六年冬十月、壬戌、是日、敕、親王、内親王、女御、及三位以上嫡妻子、並聽蘇芳色象牙刀子。

●若狭國守護職次第曰、應永十五年六月廿二日に南蕃船着岸云々彼帝より日本の國王への進物等、生象一疋黒

在（サイ） 倭名類聚鈔

漢名 犀 本草

廣東通志曰、犀出九德縣、其毛如豕、蹄有三甲、頭如馬有三角、鼻上角長、額上角短〇倭名鈔曰、犀。此間音在

集註

闘詩略記曰、必拾瑛犀象之牙角。三代實錄曰、貞觀十二年十二月廿五日壬寅、洞、文聽六位已下著烏犀帶。但有通天文者、不在聽限。 催馬樂曰、さいかくのとう。延喜式卷第四十一曰、彈正臺。凡烏犀帶、聽六位以上著用。但有通天文者、不在聽限。 類聚雜要曰、母屋調度日

録。犀角二枚犀角縣角二枚、今案亦久六年中宮立后時實ノ鼻角二枚被用之（本草綱目曰、鼻上者食角也。又名ニ奴角ー小而不墮。）宇津保物語俊蔭曰、犀出來てその山をこしつ。觀世音寺資財帳曰、犀角杯壹口。新猿樂記曰、唐物 犀生角

【形状】塵添壒囊抄曰、犀ハ角ノ生ヤウニ三ノ不同アリ。一ニハ鼻ノ上ニアリ、馬ノ鼻ノサキニ、爪ノ生ヒタル樣ナル事也。二ニハ額ノ上ニアリ。三ニハ頭ノ上ニアリ。藥ニハ頂ノ角ヲ用フ。物ニ登リタカル物也。ノケニ例レヌレバ、起キアガル事ナシ。サレバ朽テヨハキ木ヲ土ニ立置ケバ、犀是ニ登ル。朽木折レバ落テ起モアガラズ。足手ヲアガク時、大ナル杖ニテ打殺也。ムハラヲ好ミ食フ、故ニ常ニ口切テ血タル。山犀トテ二種類アリ。善キ犀角ハ水ヲ去ルノミニ非ズ、水底ヲテラス。福田方曰、犀角、鎊屑（コスリコニメ）掌中ニ在テ研碎テ末ト成之。コスルトハ、サメ或ハカンキニテコスリヲロス之。一說云、方牛寸許ニ切テ、紙ニ褁テ、人ハダニ近テ熱ク成マデ懷テ、アタヽメテ、臼ニ入テ急ニ舂（ハクケ）バ、手ニ應テ粉ノ如ニナル之。烏色（ゲロ）ノ者ヲ用ヨ。白色ノ者ハ惡シ

○通天犀角　塵添壒囊抄

【形状】通雅曰、通天者純白、而中有一線黒也。水犀角中一線光明、是眞駭雞犀也。證類本草曰、陶隱居云、又有ニ通天犀、角上ニ有ニ一白縷、直上ノ至レル端ニ

【集註】台記曰、久壽二年四月廿一日、皇后宮權大夫進憲親用鴛鴦通天、明日用小馬腦給

塵添壒囊抄卷第八曰、犀角事。犀角 水ヲ遠ク去ルト云フハ、寶事歟。ナペテノ角ハ去ル事ハナシ。通天犀角ト云ニ去ル德ハ有ルニヤ。角ノ本ヨリサキマデ白キホソ筋ノ通リテ、子リ糸ヲ引ケルガ如ナルヲ、通天角ト云フ。是ハ水ヲ去ル事三尺ト云ル也。ニハ鳥是ヲ見レバ必ズ驚云云。延喜式曰、駭雞犀及戴（延喜式卷廿一祥瑞）通。註、有ニ一白理ー如レ線、又其角有レ光通レ天、鷄見レ之驚駭、故一名通天犀

○はんさい　源氏物語

【漢名】

斑犀 本草 證類本草曰、唐本注云、特是雌犀、文理細膩斑白分明、俗謂二斑犀一

〔集註〕 源氏物語かげろふ曰、かの君に奉らんと心ざして、もたりけるよきはんざいの、おひたちのおかしきなどふくろにいれて、車にのるほど、これはむかしの人の御心ざしやとてをくらせてけり。人車記曰、保元二年五月六日、今日權中納言朝隆卿參入、得重服去月餘一今日初出仕、亮闇色裝束如常、斑犀丸鞆帶

貞觀三年八月十九日

胡摩犬(コマイヌ) 類聚雜要抄 〔漢名〕 兕 本草 〔今名〕 コマイヌ

〔今案〕 延喜式卷第四十六曰、左衞門府。凡大儀之日居(スヱテ)二兕像ヲ於會昌門ノ左一、事畢テ返收セヨ本府ニ。右府ハ居レ右ニ。本草ニ時珍曰、犀其ノ牸ヲ名クル兕ト、大抵犀兕是一物、古人多ク言レ兕、後人多ク言レ犀、北音多言レ兕、南音多言レ犀。又曰、兕犀即犀之牸者、止有二一角一。觀レ此則兕即犀ノ牝、今ノコマイヌナル一明白也〇古今原始曰、漢太祖漢以來帝王陵寢有石麒麟辟邪兕虎之屬、人臣墓有石人羊虎柱之屬、皆表墳壠如生前儀衞

〔一名〕 こま犬 枕草紙曰、御しつらひ師子こま犬など、いつのほどや入ゐるけんとぞおかしき　こまいぬ 榮花物語　駒犬 太平記三十四曰、師子駒犬を打破て薪とし

狛犬 帝王編年記曰、後深草院正嘉二年五月四日、住吉社第一神殿鳴動、狛犬形落地。倭名鈔國郡部曰、山城國相樂郡下狛、之毛都古末。三代實錄卷第五曰、欽明天皇時、百濟以二高麗之寇一、遣レ使乞レ救、狹手彥復爲二大將軍一、伐二高麗一、其王踰レ墻而遁、乘レ勝入レ宮、盡得二珍寶貨賂一、以獻之、珠敷天皇世、還來獻二高麗之囚一、今山城國狛人是也。續日本紀第五曰、和銅四年十二月壬子、從五位下狛朝臣秋麻呂言、

本姓是阿倍也。但當ニ石村池邊宮御宇聖朝ノ秋麻呂ニ二世祖、比等古臣使ニ高麗(コマ)ノ國ニ、因即號ニ狛(コマト)、實非ニ眞姓ニ、請復ニ本姓ニ。許之〇品字箋曰、狛獸似狼而善竊羊

集註　雅輔裝束抄曰、御丁のまへにしゝ(師子)こまいぬ(狛犬)こいし(御倚子)をたつるれうなり。榮花物語きさるは佗しと歎女房曰、御帳のまへに、いとこと〲しくて、むかひさぶらひし、しゝ、こまいぬの、人はなれたるかべのもとに、すてをかれたるをみるも、いとゞあはれにて。同布引の瀧曰、大嘗の日のありさま、師子、こまいぬもてまいり。又曰、しゝ、こまいぬのまひいでたるほども、いみじうみゆ

形狀　榮花物語日蔭曰、御丁のそばのしゝ、こまいぬの、かほつきもおそろしげなり。類聚雜要抄曰、后宮御料ニ用濱床云云他事如前、但立ニ師子形ニ時者、帳ノ前南方帷末之表ニ戶之左右之際ニ相向天立レ之、左師子於テハレ色ニ香(カウ)口ハ開(ヒラク)、右胡麼犬於テハレ色ニ白ク不レ開レ口。延喜式第二十一曰、治部省。祥瑞、兕。形如レ牛、蒼黑色、或青色、有ニ一角ハ、重二千斤

度良(トラ)　天文写本 和名鈔

漢名　虎　本草

本草、時珍曰、虎狀如レ猫、而大サ如レ牛、黄質黑章鋸牙鉤爪、鬚健而尖、舌大如レ掌生ニ倒刺ハ、項短鼻齆、夜視一目放火、一目看物、聲吼如レ雷風從而生、百獸震恐

一名　止良　倭名類聚鈔曰、虎。和名止良。本草類編曰、虎骨。和止良

集註　萬葉集卷第十六曰、韓國(カラ)乃、虎云神乎(トラチフカミヲ)、生取爾(イケドリニ)、八頭(ヤツ)取持來(キ)、其皮乎、多多彌爾刺(サシテ)、八重疊。日本書紀曰、乃保祢。萬葉集卷第十六曰、虎爾乘云云

欽明天皇六年十一月、膳臣巴提便還レ自二百濟一言、臣被レ遣レ使、妻子相逐去、行至二百濟濱一、日晚停レ宿、小兒忽亡不レ知レ所レ之、其夜大雪フル、天曉始求、有二虎連跡一、臣乃帶レ刀擐レ甲、尋至二巖岫一、拔レ刀曰、敬受二絲綸一劬二勞陸海一、櫛レ風沐レ雨、藉レ草班レ荊者、爲下愛二其子一令ム紹二父業一也。惟汝威神愛レ子一也。今夜兒亡、追レ蹤覓至、不レ畏レ亡レ命、欲レ報故來、既而其ノ虎進レ前開レ口欲レ噬、巴提便忽申二左手一、執二其虎舌一、右手刺殺、剝ヲ取皮還。天武天皇朱鳥元年夏四月、戊子、新羅進調從二筑紫一貢上云云虎豹皮云云。續日本紀卷第六曰、元明天皇靈龜元年九月己卯、詔、禁下文武百寮六位以下、用二ヲ虎豹羆皮、金銀飾ニ鞍ノ具幷横タ刀帶ノ端上。同卷第十三曰、聖武天皇天平十一年十二月戊辰、渤海使己珍蒙等拜レ朝、上ニ其ノ王ノ啓幷ニ方物ヲ。其詞曰云云幷附二大虫皮云云各七張一云云。三代實錄卷第二十一曰、貞觀十四年五月十八日丁亥、勅遣二左近衞中將從四位下兼行備中權守源朝臣舒一、向二鴻臚館一、撿二領楊成規等所レ齎渤海國王啓及信クニツモノ物ヲ一、云云其信物大トラ蟲皮七張云云。延喜式卷第十二曰、中務省。凡大儀日、各居二胡床一。其鋪胡床以二虎皮一敷レ之。同卷第四十五曰、左近衞府。少將以下胡床各敷二虎皮一。同卷第四十一曰、彈正臺。凡五位以上聽レ用二虎皮一。飾抄曰、或書曰、布衣騎馬、殊剛時、御幸已下、執柄宇治供奉、若親姓之人、如二公卿使相伴時一、帶二野劍一、或虎皮細尻鞘。扶桑略記第四曰、白雉四年、件年、元興寺道昭和尙隨レ使入レ唐云云和尙在二大唐一時、忽有二五百羣虎一、攢二耳聽レ之、虎衆之中、時有二一人一、以二倭語一請レ問云云又爲憲記云、道昭和尙渡唐之時、受二五百虎之請一、至二新羅山中一。宇津保物語俊蔭曰、せんだんの陰に虎の皮を敷て。又曰、夫より西を行ば、虎大かみひと山さはぐ所ありき。又曰、又とら大かみ熊けだものにまじり。五代帝王物語曰、別當隆行の下部はみな虎の皮をぞきせて侍し。八幡社參記曰、先馬置水干、鞍虎皮切

付。散木集曰、つくしよりのぼりけるころ、式部太輔正家が子の俊信が、こけいの前駈しけるれうに、とらのかはのしたくらや有と尋ねたりけるに云々。古今著聞集卷第九曰、十双はてゝ、虎皮をかけ物にて、一度射させられたりけるに、あたらざりけり。宇治拾遺物語卷第三曰、これも今はむかし、つくしの人あきなひしに、新羅(しらぎ)にわたりけるが、あきなひはてゝ歸みちに、山のねにそひて、舟に水くみいれんとて、水ながれ出たる所にふねをとゞめて水をくむ。その程舟にのりたる人の、舟ばたにゐて、うつぶして海をみれば、山の影うつりたり。たかき岸の三四十丈ばかりあまりたるうへに、虎つゞまりゐてものをうかゞふ、そのかげ水にうつりたり。そのときに、人々につげて、水くむものをいそぎよびのせて、手ごとにろをしていそぎてふねをいだす。そのときに、とらおどりおりて舟にのるに、舟はとくいづ。とらはおちくるほどのありければ、いま一丈ばかりをえおどりつかで、うみにおちいりぬ。ふねをこぎいそぎて行まゝに、この虎に目をかけて見る。しばしばかりありて、とらうみよりいできぬ。をよぎてくがざまにのぼりて、汀にひらなる石のうへにのぼるをみれば、左のまへあしをひざよりかみ食きられて血あゆ。鰐(わに)にくひきられたるなりけり、とみるほどに、そのきれたる所を水にひたしてひらがりをるを、いかにするかと見るほどに、沖の方より、わにとらのかたをさしてくる、とみるほどに、とら右のまへあしをもつて、わにの頭につめをうちたてゝ、くがざまになげあぐれば、一丈ばかり濱になげあげられぬ。のけざまになりてふためく。おとがひのしたをおどりかゝりて、食て二たび三たびばかりうちふりて、なへなへとなして、かたにうちかけて、手をたてたるやうなる岩の、五六丈あるを、三のあしをもちて、くだり坂をはしるがごとくのぼりてゆけば、ふねのうちなるもの

メの下皮威也アルベシ

ども、これがしわざをみるに、なからは死いりぬ。舟に飛かゝりたらましかば、いみじき劍刀をぬきてあふとも、かばかりちからつよく、はやからんには、なにわざをすべき、と思ふに、肝心うせて、舟こぐそらもなくてなん、つくしに歸りけるとかや。源平盛衰記卷第卅一曰、青山ト名ク、又此琵琶ノ造様云云虎ノ皮ノ撥面落帶ナリ。同卷第四十曰、一兩ノ鎧アリ、爐ノ匂ニ白ク黄ナル兩蝶ヲスソ金物ニ打テ、糸威ニハ非ズ、裏ヲ返テ見ルニ、實ノアヒ〳〵ニ虎毛アリ、圖知ヌ、虎ノ皮ニテ威タリト、故ヘニ其名ヲバ、唐皮トゾ申ケル。雲井の花曰、建久暦仁には、虎皮の尻鞘をそろへてはけるにや。撰集抄卷第六曰、此大和の國奈良の御門の太子、長岡の親王云云御かざりおろさせ給て、道詮律師の室に入て、眞如親王となん申ければ云云かゝる有智高僧の人々も、猶あきたらずやおぼしめしけん、もろこしに渡り給へりけるが、是には明師もなしとて、天竺に渡給へり云云さても宗叡は歸朝すれども、友なひ給へる親王は見え給はねば、もろこしへ、いきしにを尋給へりける、返事に、渡天すとて師子州にて村がれる虎の合て、くゐ奉らんとしけるに、我身を惜にはあらず、我は是仏法のうつは物なり、あやまつ事なかれとて、錫杖にてあばへりけれど、つゐに情なくくひ奉る、と側になん聞ゆ、と侍けるに云云。吾妻鏡卷第四曰、元暦二年六月十四日、參河守範頼、幷河内五郎義長等、受二品命、渡使者高麗國之間、對馬守親光、歸著彼嶋。去三月四日、令越渡高麗國之時、相伴姙婦、仍構假屋於曠野之辺、産生。于時猛虎窺來、親光郞從射取之訖。高麗國主感此事、賜三箇國於親光。已爲彼國臣之処、有此迎歸朝。件國主殊惜其餘波、與重寶等、納三艘貢船、副送之云云。同卷第五十一曰、弘長三年二月十日、又任點數分縣物、大掾禪門分被置虎皮上、韉元熊皮云云。隨兵日記曰、次にとらの皮

のつなぬきをはくべし

形狀　續日本紀卷第廿九曰、稱德天皇神護景雲二年十二月甲辰云云避ルヿ如レ逃レ虎。萬葉集卷第二曰、吹響流、小角乃音母、敵見有、虎可叫吼登、諸人之、協流麻低爾云云。宇治拾遺物語卷第十二曰、新羅のきんかいといふところの、いみじうのゝしりさはぐ。なにごとぞとゝへば、とらのこうに入て、人をくらふ也、といふ。この男とふ。虎はいくつばかりあるぞと、たゞ一あるが、にはかにいできて、人をくらひて、逃ていき〳〵するなりといふ云云人のいふやう、とらはまづ人をくはんとては、ねこのねずみをうかゞふやうにひれふして、しばしばかりありて、大口をあきてとびかゝり、頭をくひて、かたにうちかけて、はしりさるといふ云云をの畠あり云云まことに畠はる〴〵とおひわたりたり。をのたけ四尺ばかりなり。その中をわけ行てみれば、まことにとらふしたり。とがり矢をはげて、かたひざをたてゝゐたり。とら人香をかぎて、ついひらがりて、ねこのねずみうかゞふやうにてあるを、おのこ矢をはげて、をともせでゐたれば、とら大口をあきて、おどりてをのこのうへにかゝるを、おのこ弓をつよくひきて、うへにかゝるおりに、やがて矢をはなちたれば、をとがひのしたより、うなじに七八寸ばかりとがり矢を射出しつ。とらさかさまにふしてたをれてあがくを、かりまたをつがひ、二たび腹をいる。二度ながら土に射付て、つゐにころして云云。藻塩草曰、虎の口人をそんずる也。とら一口共云

藥製　福田方曰、虎骨、先研開テ、肉中ノ髓ヲ去テ、酥ヲ塗テ、反覆テ、炙テ黃赤色ナラシメテ使へ

奈賀豆可美　倭名類聚鈔　漢名　豹　本草

オは本のまゝナの誤なり書し古躰のナをオに誤れるなり

アはミの古躰

大矢翁の假名沿革資料法華文句にオに類似せるナあり

本草綱目、宗奭曰、豹毛赤黄、其文黒如レ錢而中容比比相次。時珍曰、其文如錢者曰ニ金錢豹一

一名 奈賀都可美 天文写本和名抄○倭名鈔曰、豹。日本紀私記云、奈賀豆可美○按、豹ヲ奈賀豆可美ト云ハ、萬葉集ニ、韓國乃、虎云神乎、生取爾ト云ル例也。日本書紀ニ、龍。此云ニ於可美、古ハ凡テ猛ク恐ル可キ者ヲ神ト云。東雅曰、豹ハ中津神ト云シハ似タリ。陰陽家ニ豹尾神アリ、其ノ位中宮ニアルナリ

奈加都加三 本草和名曰、豹肉。和名奈加都加三

•扁宇 本草類編曰、豹肉。和扁宇乃仁久

扁屋宇 異本本草類編

•オカツカア• 釋日本紀曰、虎豹皮。或引合テオ•カツカア•ノカハト讀也○平家物語曰、こゝに三位入道の年ごろのさぶらひに、わたなべの源三競のたきぐちといふもの有、ひやうもんのかりぎぬの、きくとぢ大きらかにしたるに。公方様正月御對始之記曰、ひやうもんの事は、いろをつくしてそめたるを、ひやうもんと申候。御きんせひにて候。只二いろをもつて色へ候事可レ然候也。大内問答曰、ひやうもんといふは、三色にゑとりたるをいふ之。二色はくるしからず候也。むかしは御きんせい也

集註 日本書紀曰、天武天皇朱鳥元年夏四月戊子、新羅進調從ニ筑紫ニ貢上云云、豹皮、及雑物之類。續日本紀曰、聖武天皇天平十一年十二月戊辰、渤海使已珍蒙等拜レ朝、上ニ其ノ王ノ啓并方物一。其詞曰云云并附云云豹皮六張云云。三代實錄卷第二十一曰、淸和天皇貞觀十四年五月十八日丁亥、勅遣ニ左近衞中將從四位下兼行備中權守源朝臣舒ヲ、向ニ鴻臚館ニ、撿ニ領楊成規等所レ貢渤海國王啓及信物ヲ云云其信物云云豹皮六張云云。延喜式卷第四十一曰、彈正臺。云云但豹皮者、參議以上及非參議三位聽レ之、自餘不レ在ニ聽限一。北山抄曰、內宴事

云云內藏寮鋪豹皮置漆筥。餝抄曰、殿記曰、四位用豹皮、五位用虎皮云々。永享行幸記曰、御引出物、關白豹之皮一枚。家中竹馬記曰、うつぼには、何皮をも懸也。又京都にては、虎豹の皮は、人に依て斟酌すべし。賞翫有故也。鋪皮と云は、鹿の皮にして、弓場始などの時敷を云。是はする樣あり。引敷と云は、何皮にてもして緒を付也。䩛豹虎の皮にてする事、京都にては貴人のめさるゝ間、大名の內者は斟酌する也。新猿樂記曰、唐物、豹虎皮。太平記第二十九曰、三尺二寸の豹の皮の尻鞘かけたる金作の小太刀と帶副て。人車記曰、久安五年十月十一日、日吉行幸也云々院御馬豹下鞍。仁平四年正月廿九日春日詣云々次牽御馬豹下鞍。明月記曰、建曆三年七月廿五日、前駈云々高左衞門大夫忠廣、豹皮切付、御馬二疋豹皮丸形切付。大內問答曰、豹虎の皮於二御座敷一茂可レ被レ進ルかの事。豹虎の皮、座敷ニ而爲レ被レ進事は、見及不レ申ル。左茂可レ在か。無二分別一ル。八幡社參記曰、豹皮泥障、同鞍覆也

竹豹

一名　筑豹　世俗淺深秘抄

集註　百練抄曰、堀河天皇寬治二年十月十七日、宋人張仲所レ獻竹豹廻却官符印。餝抄曰、仁安二九十五殿記曰、參二花山院一仰曰、尻鞘事、舞人之時、竹豹不レ憚之由、故法性寺殿被レ仰云々、可レ用二虎皮一之。廿日參殿。久我、申二承雜事一之次、申曰、舞人之時、可レ入二虎皮尻鞘一之由、內府被レ命否如何。被レ仰曰、必不レ入二虎皮一、竹豹ヲ入也。予勤二仕舞人一之時、故

●●橘鷹入道尻鞘ヲ借用、是竹豹之。雖レ然虎皮又神妙之。仁安二十廿一賀茂臨時祭、同三石清水臨時祭舞人之時、故殿用二竹豹尻鞘一給之。又曰、雪見御幸上皇御騎馬鞍。云々豹切付。不二竹豹一之。天德三年八月十六日鬪詩行事略記曰、當日、清涼殿云々士敷用二竹豹皮一。世俗淺深秘抄曰、凡尻鞘ハ、四位豹、五位虎之。但行幸之時、五位次將用二豹皮一、四位不レ入二尻鞘一故歟。舞人時、四位入二尻鞘一、然而猶五位輩或用レ豹、行幸之時、用二虎皮一人有之。時人難之云々。筑豹、小豹、虎次第如レ此。而御賀時、殿上人奉二仕舞一、左用二小豹一、右用二筑豹一是頗不審也

小豹 世俗淺深秘抄

【集註】物具裝束抄曰、切付号下鞍 小豹公卿及四位用レ之 竹豹ハ、小豹ヨリモ勝物也。一条家裝束抄曰、鞍具足事、下鞍、水豹、竹豹、小豹、切付同事也。人車記曰、久壽二年二月六日、春日祭、次乘馬云々小豹下鞍

○赤豹 延喜式 祥瑞

久佐布(クサフ) 本草 和名

【漢名】猬 本草

本草時珍曰、猬之頭觜似レ鼠、刺毛似二豪豬一、蜷縮則形如二芡房及栗房一攅毛外刺、尿レ之卽開

【一名】**久佐不** 本草類編○倭名類聚鈔曰、蝟。說文云、蝟、虫似二豪豬一而小者也。和名久

佐布。本草和名曰、蝟皮、和名久佐布

集註 本草類編曰、蝟皮、和久佐不。不拘時採之、日本自西國出之

麟 日本書紀　**漢名** 麟

路史曰麟底言其狀則曰麕身牛尾曰狼項馬蹄曰黃色圓蹄曰狼額赤目而五蹄高丈二尺身備五色腹下茹黃角端帶肉云云且諸傳記麟有蒼白黃紫班駮之異不可不知也

形狀 日本書紀曰、天武天皇九年二月丙午朔、辛未ヒ、有レ人云、得ニ麟ノ角ヲ於葛城山ニ、角ノ本ハ二枝エダニシテ而末合有レ宍シヽ、宍ノ上ニ有レ毛、毛長サ一寸トキ、則異以獻レ之。蒼麟ハ角獸。歷添壒囊抄曰 麟ハ麒麟也。牡ヲ麒ト云、牝ヲ麟ト云。牡ヲバ、ヲケダモノ、牝ヲバ、メケダモノトヨム也云云身ハ麞鹿ノ類ヒ、尾ハ牛、足ハ馬也 馬ノ蹄ヒヅメアル故ニ、青馬ノ類トス。額ニ一角アリ、角ノ先ニ肉アリ、此故ニ、角アレ共物ヲ突事ナシ。但麒ニハ角ナキ歟

布流木フルキ 倭名類聚鈔　**漢名** 貂鼠 本草　**今名** トッピ。朝鮮

天工開物曰、凡取ニ獸皮ヲ製レ服統名曰レ裘、貴至ニ貂狐ニ、賤至ニ羊麂ニ、値分ニ百等ヲ。貂產ニ遼東ノ外徼建州地及朝鮮國ニ、其鼠好食ニ松子ヲ、夷人夜伺ニ樹下ニ、屏ツメ息ヒソメ悄レ聲而射取レ之。一貂之皮方不レ盈レ尺、積ニ六七十餘貂ヲ僅成ニ一裘ヲ、服ニ貂裘ヲ者、立ニ風雪中ニ、更煖ニ于宇下ニ、眯入ニ目中ニ、拭レ之即出、所ニ以貴ニ也。色有ニ三種ニ、一白者曰ニ銀貂ト、一純黑、一黯黃。黑而毛長者、近値ニ一帽套巳五十金

一名 布流岐 天文写本

和名鈔〇倭名鈔曰、黑貂。和名布流木

ふるき 源氏物語末摘花曰、うはぎには、ふるきのかはぎぬ、いときよらにかうばしきを云〻ふるきのかはならぬきぬ、あやわたなど、おい人のきるべき物のたぐ、ひ

【集註】 續日本紀卷第十曰、聖武天皇神龜五年春正月、甲寅、天皇御二中宮一、高齊德（渤海也）等上ル二其ノ王ノ書幷一方物ヲ、其詞曰云云幷附二貂皮三百張一云云。三代實錄卷第四十七曰、光孝天皇仁和元年春正月十七日癸酉、是日始禁レ着ルコヲ二貂裘一。但參議已上非二制限一。延喜式卷第四十一曰、彈正臺。凡貂裘者、參議已上聽レ著二用之一ヲ。江家次第卷第五曰、內ノ之人人更纏頭、小一條大將爲レ使脫二黑貂裘一ヲ給二兼時一、後有二悔氣一、上代以二此裘一爲二重物一之故也。兼時得二其心一ヲ、後日令三レ人賣二レ之。昔蕃客參ノ時、重明親王乘二鴨毛ノ車一、著二黑貂裘八重一見物ス、此間蕃客纔以二件ノ裘一領一ヲ持來テ、爲二重物一、見二八重一大慙ツト云云

比禰須美（ヒネヅミ） 天文写本 和名抄

【漢名】 **火鼠** 本草

【今名】 **ヒネズミ**

關小紀曰、火浣布又有下以テ二火鼠毛一爲ル者上。寄園寄所寄曰、至於火中生虫則火鼠也。極南方有之、其毛則爲火浣布。倘湖樵書曰、魏書南荒之外有火山、火中有鼠、重百斤、毛長二尺餘、細如絲可以作布。郁離子曰、鼠毛之布挾レ之炎炎振ヘバレ之如レ霜

【集註】 竹取物語曰、今独には、もろこしにある火鼠の革ぎぬをたまへ云〻左大臣安倍のみむらじは、寶ゆたかに、家廣き人にておはしける。其年きたりけるもろこし船の、わうけいといふ人のもとに、文を書て、火ねづみの皮といふなる物買ておこせよとて、つかふまつる人の中に、心たしかなるを撰て、小野房盛と云人をつけてつかはす。もていたりて、かのうらにをる、わうけ

いに金をとらす。わうけい文をひろげて見て、返事かく。火鼠の皮衣、此國になき物也。音にはきけどいまだ見ずさふらふ物也。世にある物ならば、此國にもゝて詣來なまし。いとかたき商也。然ども若天ぢくに逅にもて渡りなば、若ちやうじやのあたりにとぶらひもとめんに、なき物ならば、使に添て、かねをば返し奉らん、といへり。彼唐ぶねきけり。小野房盛詣きて、まうのぼると云事を聞て、あゆみとくするむまをもちて、はしらせむかへさせ給ふ。時に馬に乘て、筑紫より唯七日にのぼりまふで來り。文をみるに、いはく、火ねずみの革衣、からうじて人を出して取て奉る。今のよにも、昔の世にも、此皮はたはやすくなき物之けり。昔賢き天竺の聖、此國にもてわたりて侍りける。西の山寺にありと聞及て、おほやけに申て、からうじてかひ取て奉る。あたひの金すくなしと、こくし使に申しかば、わうけいが物くはへてかひたり。今金五十兩たまはらん、舟のかへらんつけてたび送れ。若金たまはぬ物ならば、彼の皮衣のしち返したべ、といへる事をみて、なにおぼす、いま金少の事にこそあなれ、うれしくしてをこせたる哉、とて、唐のかたにむかひて、ふし拜み給ふ。此革衣入たる箱をみれば、草〴〵のうるはしきるりを色へてつくれり。皮衣を見れば、こんじやうの色也。毛のすゑにはこがねの光しさゝりたり。寶とみえ、うるはしき事並ぶべきものなし。火に燒ぬ事よりも、けうらなる事双なし。うべかぐや姫、このもしがり給ふにこそありけれ、との給ひて、あなかしことて、箱に入たまひて、ものゝ枝に付て、御身のけさう(化粧)いといたくして、やがて、とまりなむ物ぞとおぼして、哥讀くはへて、もちていましたり。其哥は「かぎりなき思ひにやけぬかはごろもたもとかはきて今日こそはきめ。と云り。家の門にもていたりてたてり。竹取出できて、取入て、かぐや姫に見す。かぐや姫の、皮

衣をみて云く、うるはしき皮なめり。わきて誠の皮ならんともしらず。竹とりこたへていはく、とまれかくまれ、先しやうじ入奉らん、世中にみえぬ皮衣のさまなれば、これをと思ひ給ね、人ないたく侘させたまひそ、と云て、よびすへ奉れり。かくよびすへて、此たび必あはん、と女の心にも思ひをり。翁はかぐや姫のやもめなるをなげかしければ、よき人にあはせむと思ひはかれど、せちにいなみいふ事なれば、えしゐぬはことはりなり。かぐや姫、翁にいはく、此皮きぬは、火にやかんに、燒ずばこそ、まことならめ、と思ひて、人の云事にもまけめ、世になき物なれは、それをまことゝうたがひなく思はんとの給ひて、猶是をやきてこゝろみむといふ。おきな、それさもいはれたり、といひて、大臣にかくなん申と云。大臣こたへていはく、此革は唐にもなかりしを、からうじて取尋えたる也。何の疑あらん、左は申ともはや燒て見給へ、といへば、火のうちに打くべてやかせ給ふに、めら〳〵とやけぬ。さればこそことものゝ皮也けりといふ。大臣是を見給ひて、かほは草の葉の色してゐたまへり。かぐや姫は、あなうれし、とよろこびていたり。かのよみ給ひけるうたの返し、箱に入てかへす。余波(なこり)なくもゆとしりせば皮ころもおもひのほかに置て見ましを。とぞ有ける。されば歸りいましにけり。よの人ゝ、あべの大臣、火鼠の皮きぬもていまして、かぐや姫にすえ給ふとな、こゝにやいます、などとふ。ある人のいはく、皮は火にくべてやきたりしかば、めら〳〵とやけにしかば、かぐや姫逢給ず、と云ければ、是を聞てぞ、とげなき物をば、あへなしと云ける

山馬 若狭國守護職次第

若狹國云々八若狹國稅所今富名領主代々次第ノ誤

廣東通志曰、山馬形似レ鹿、千百爲レ羣、角彎繞、後按肇慶志、凡深山皆有レ之、而陽江尤多、似レ馬而有レ角、毛似レ牛、肉味美、皮可レ爲二臥具一能禦レ濕。○若狹國守護職次第曰、應永十五年六月廿二日に、南蕃船着岸、彼帝より日本の國王への進物等、山馬一隻

水牛 日本書紀　【漢名】番牛 廣東新語　【今名】スイギウ

廣東新語第十五曰、諸番貢物、大坭稱隷暹羅助貢國其來貿易有云云番牛角

【集註】

日本書紀曰、天智天皇十年六月、新羅遣レ使進レ調、別献二水牛頭一云云。吾妻鏡曰、文治五年八月廿二日、著二御于泰衡平泉舘一、有二一字倉廩一、令レ見レ之給、其内所レ納云云水牛角云云。十訓抄曰、村上帝月あかき夜、淸涼殿の上の御座にて、水牛の角の撥にて、玄象を引すまして云々。𫝶本影供記曰、其器如二唐合子一。菓器以二水牛角一作レ之。太平記卷第二十四曰、慈惠僧正モ、比叡山西坂下、松ノ辺ニ、車ヲ儲サセテ、下洛シ給フニ、鴨河ノ水漲出、逆浪浸レ岸茫々タリ、牛童扣レ轅如何ト立タル処ニ、水牛一頭、自二水中一游出テ、車ノ前ニゾ喘（アヘ）キケル。僧正此牛ニ車ヲ懸替テ、水中ヲ遣トゾ被仰ケル。牛童、隨レ命水牛ニ車ヲ懸ケ、一鞭ヲ當タレバ、飛ガ如ク走出テ、車ノ轅ヲモ不レ濡、浪ノ上三十餘町ヲ游アガリ、內裏陽明門ノ前ニテ、水牛ハ搔消樣ニ失ニケリ。新猿樂記曰、唐物水牛

蜀狗 續日本紀

集註 續日本紀卷第十一曰、聖武天皇天平四年夏五月、庚申、(渤海)金長孫等拜朝、進種々財物、幷蜀狗一口

唐の狗 つれ〳〵 漢名 獒 本草 今名 タウケン

本草綱目曰、高四尺曰獒

集註 つれ〳〵曰、あれほど唐の狗に似ゆなんうへは、といひたりしに

紫驃馬 續日本紀

集註 續日本紀卷第七曰、元正天皇靈龜二年六月辛亥、正七位上馬史伊麻呂等、獻新羅國紫驃馬二疋、高五尺

犛牛 今 今名 カラノカシラ

正字通曰、西南夷、牛長髦者謂之氂牛、或作犛字、又曰按犛犨犤竹犤一牛而異名、又名毛犀、又名貓牛、旄牛亦多長毛、身角如犀、故曰毛犀。字典曰、犛。說文本作氂、長髦牛也。玉篇、獸如牛而尾長、名曰犛牛。上林

犛 刊本

賦、犛一音茅、或以爲二貓牛一。集韻、或作二氂犛㲖一、通作レ貓。本草、時珍曰、犛者髦也。其髦可レ爲二旌旄一也

【一名】めうこ　假名文字遣曰、めうこ。犛牛、牛之。尾に劔有。本草、時珍曰、周書作二犛牛一、顏師古作二貓牛一

【集註】令義解曰、謂凡節者以二犛尾一爲レ之使者所レ擁也。さゝごおちのさうし曰、とうごくにて、われらにゆみをひかん物は云〻みやうこ（貓牛）のをゝふむごとし。ながおゝちのさうし曰、むねもりきこしめし、あるもんをひいてのたまわく、みやうこしんざんにあるときんば、ひやくじゆこれをおそるゝ、みやうこあなにあるときんば、をゝひいてしよくもとむる。むねもりも、いにしへは、へいけのみやうしやうとて、くんむのをそれをえたりしが、いまげんぢのくわいきやうにをちて、みやうこのしよくをもとむるふぜいなり、とのたまへしも、いまのぶやすが身のうへに、おもひしられてあはれなり

比豆之（ヒツジ）　倭名類聚鈔

【漢名】羊　本草

【今名】ヒツジ

【一名】比都之　天文写本和名鈔〇倭名鈔曰、羊。和名比豆之　比川之　本草類編曰、羖羊角和比川之乃川乃

【集註】日本書紀曰、推古天皇七年秋九月癸亥朔、百濟貢二羊二頭一云云。日本三代實錄卷第十七曰、淸和天皇貞觀十二年三月廿九日辛巳、從五位下行對馬守兼肥前權介小野朝臣春風奏言ス、故父從五位上小野朝臣右雄ガ家ノ羊ノ革ノ甲一領、牛革甲一領在二陸

奥國ニ、去弘仁四年、賊首吉弥侯部ノ止彼須可牟多知等逆乱之時、右雄着ニ彼甲ニ討ニ平残賊ヲ、歿後兄春枝進レ之、望請給ニ羊革甲ヲ、以充ニ警備ニ、歸京之日、全ク以テ進レ官ニ、詔メ許レ之。其ノ牛ノ革甲給ニ陸奥權守小野朝臣春枝ニ。延喜式卷第二十三曰、民部下。交易雜物。武藏國、履料羊皮二枚。同卷第三十二曰、大膳上。釋奠祭料、羊腊十三斤八兩、代用ニ鹿腊ニ。日本紀略曰、弘仁十一年五月甲辰、新羅人李長行等進ニ云云白羊四云云。百練抄卷第五曰、承曆元年二月廿八日、引ニ見大宋國商客所レ献羊三頭ニ。同卷第八曰、承安元年七月廿六日、入道大相國進ニ羊五頭於院ニ。十一月、近日称ニ羊病ニ、貴賤上下煩ニ病患ニ、羊三頭在ニ仙洞ニ、人傳、承曆之比有ニ此事ニ、件羊返ニ却之ニ。扶桑略記廿二裡書曰、延喜三年十一月廿日、大唐景球等獻ニ羊一頭ニ。義經記曰、したんのどう羊の革にてはりたるつゞみの云々

形狀 水左記曰、承保四年六月十八日、自殿被獻唐羊於高倉殿、件羊牝牡子三頭、其毛白如ニ白犬ニ、爷有ニ胡髯ニ、又有ニ二角ニ、猶如ニ牛角ニ、身躰似レ鹿其大々ニ於犬ニ、其声如猿動、尾纔三四寸許〇本草啓蒙曰、羊形馬ニ比スレバ小ク、狗ニ比スレバ最大ナリ、多クハ淡褐色ナリ、白色ノ者モアリ、頭ハ畧馬ニ類メ短シ、喉下ヨリ胸ニ至テ長毛アリ

羖䍽羊 日本紀略

今名 ムクヒツシ 綿羊也

本草、時珍曰、多毛曰羖䍽羊、蘇頌曰、毛長尺餘、亦謂之羖䍽羊、宋爽曰、羖䍽羊毛最長而厚

集註 日本紀略曰、弘仁十一年五月甲辰、新羅人李長行等進ニ羖䍽羊一ニ云云

山羊 日本記略　　和產無之

本草、吳瑞曰、山羊似羚羊、色青、其角有掛痕者、爲羚羊、無者爲山羊。時珍云、山羊有二種、一種大角盤環肉至百斤者、一種角細者、說文謂之莧羊、音桓。陸氏云、羱羊狀如驢而羣行、其角甚大、以時墮角。弘景曰、山羊卽爾雅羱羊。粤西偶記曰、山羊大者百餘觔、小者六七十觔、跳越山頭、如飛鳥、非千百人不可得一、須遂入叢中張網捕之

集註 日本記略曰、弘仁十一年五月甲辰、新羅人李長行等進云云
山羊一

井 倭名類聚抄

漢名 豬 本草　今名 ブタ

本草綱目、頌曰、凡豬骨細筋多高大有重百餘斤、食物至寡、甚易畜之、甚易生息

一名 爲　本草和名曰、豚卵、和名爲乃布久利。豚、和名布留毛知乃爲。猳猪肉、和名爲乃古。倭名鈔曰、猪、和名井。豚卵、和名爲乃布久里

爲乃之　本草和名曰、猪、和名爲乃之。新撰字鏡曰、豶豶、同甫堯反、豕肉䐹、爲乃肉乃阿豆毛乃

伊乃之々　本草類編曰、豚卵、和伊乃之々乃不久利〇按、伊乃之々與野豬同名也〇豕ヲ亥ニ用ル例、山槐記曰、治承四年三月九日、豕二尅、今上皇遷双嵗殿、十一日癸豕天晴、十二日豕尅、東方有火、廿三日乙豕天晴。平治物語曰、木星詩命豕ニア

リ。籌海圖編、倭國事略曰、猪豕豕

【今案】延喜式卷第一曰、道饗祭。猪皮云云各四張。同卷第三曰、宮城四隅疫神祭云云猪皮各四張。畿內堺十處疫神祭、堺別云云猪皮各一張。蕃客送堺神祭云云猪皮各二張。障神祭云云猪皮各四張。凡云云祭料雜皮、伊豆國猪皮十張。紀伊國、猪皮五張。同卷第五曰、野宮道饗祭、猪云云皮各二張。同卷第二十三曰、民部下。交易雜物。伊豆國、猪皮十張。同卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物、猪脯云云各一斤、猪鮨云云各一斤八兩。紀伊國、中男作物、猪鮨。阿波國、中男作物、猪脯。豐前國、中男作物、猪鮨。同卷第三十五曰、大炊寮。竈神八座云云猪完云云各二斤八兩。同卷第四十曰、造酒司。四座、竈神、座別猪完雜腊各二斤八兩。式ニ載ル猪ハ凡テ野猪(イノシ)也。蓋シ猪ハ總名ニメ、家猪(ブタ)、野猪(イノシ)ヲ分テリ。正字通ニ、豬豕也。又野豬羣ヲ聚深山中ニ、形似家豬而大、牙出口外腹小脚長、毛褐ト云

【集註】續日本紀卷第八曰、元正天皇養老五年秋七月庚子、詔曰、宜下其云云諸國雞猪、悉ニ放ニ於本處ニ、令上レ遂ニ其性一ヲ。同卷第十一曰、聖武天皇天平四年七月丁未、詔、和ニ買畿內百姓畜(ヤシナフ)猪四十頭一、放ニ於山野ニ令レ遂ニ性命一。伴存按ニ、野豬ハ猛烈、人家ニ可ニ畜養一者ニ非ズ、畜養スル者ハ即家猪(ブタ)也。經國集卷第十四曰、雜詠。雜言、鮑膓、一首。仲雄王。鮑膓肉、赤凝脂、白登俎、更待ニ庖丁手一、鸞刀磨レ石刃如レ霜、坐客看レ之相嚼久、濕梅初和入爭喫、口餉情閑何欲有、君不レ見漢家一莊士、拔レ劍寧辭一杯酒。延喜式卷第二十曰、大學寮。釋奠十一座云云豚脯三牲云云家豆實豚拍五合

○猪蹄 通名 【一名】丼

ノツメ 延喜式傍訓。倭名類聚鈔曰、切韻云、蹢曰レ蹄、和名比豆米。岐曰レ甲、今案爪甲也。和名豆米。袖中抄曰、はたをゐ女の、しりまきとて、おけのかはのやうなるものを、こしにあてゝ、ゐのつめと

いふ物にむすびつくるを、しづはた帶といふべきかと申せど云〻

〔集註〕延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。相摸國、猪蹄一具。美濃國、猪蹄十具。飛驒國、猪蹄二具。上野國、猪蹄四具。備中國、猪蹄二具。備後國、猪蹄五具。按ニ、延喜式諸國ニ出ル猪蹄ハ野猪(イノシシ)ノ蹄(ツメ)也

〔藥製〕頓医抄曰、猪懸蹄十器ニ入、泥ニテヌリ寒テ、黒ヤキニスベシ

○爲乃(ヰノ)阿布良(アブラ) 本草和名

〔漢名〕猪脂 本草

〔今名〕ブタノアブラ 本草綱目曰、凡凝者爲レ肪爲レ脂、釋者爲レ膏爲レ油、臘月煉淨收用

〔一名〕圓長猪脂 延喜式卷第二十三曰、民部下。交易雜物。信濃國、圓長猪脂一斗。甲斐國、猪脂一斗。美作國、猪脂一斗。太宰府、猪膏一石。同卷第五曰、齋宮。凡諸國送納調庸云云猪膏三斗○本草和名曰、脂膔、和名爲乃阿布良。令義解曰、膏油謂ニ肉脂爲レ膏、白餘爲レ油。塵添壒囊鈔曰、猪肪ト云ヘルハ、ヰノシヽノ腰ホドナル脂(アブラ)也ト云リ。色シロキ物ニヤ

〔集註〕賦役令曰、其調副物、正丁一人、猪脂三合。延喜式卷第三十四曰、木工寮。瑩ニ太刀ヲ猪膏五合。同卷第二十四日、主計上。凡中男一人輸作物。猪膏一升。甲斐國、中男作物、猪脂。信濃國、中男作物、猪膏、脯。同卷第三十六日、主殿寮。云云兵庫寮猪膏五合。造ニ大祓太刀幷神宮ノ鞍ニ料。猪膏小二十斤。造ニ鼓吹生等ノ藥ニ料。內匠寮、猪膏十五斤、造ニ雜工等藥ニ料。木工寮、猪膏五合、造ニ年料雜物ヲ料。猪膏三十斤、造ニ雜工已下仕丁已上藥ニ料。左右馬寮季料、猪膏六升四合、寮別三升二合。凡量ニ收諸國ノ進ル中男作物ノ雜油ハ、中男一人猪膏五合。同卷第三十七曰、典藥寮。元日御藥、猪膏十斤。臘月御藥、猪膏一斤十兩三分。中宮臘月御藥、猪膏五斤。雜

給料、猪膏五斤。諸國進ニ年料ニ雜藥。陸奥國猪脂二斗。同卷第四十八曰、左馬寮。凡馬藥得レ季猪脂三升二合五勺。按、延喜式諸國ニ出ル猪脂ハ野猪(イノシシ)脂也

【附方】 明月記曰、嘉祿三年二月廿九日、予終許心寂房來見足疵、非殊恐、相構不可臆。自夜予令付猪油、又加寸留、則歸西郊

宇佐岐無麻(ウサギムマ) 倭名類聚鈔

【漢名】 驢 本草

品字箋曰、驢。長耳也、形類馬、尾似牛、身極小而聲頗大。本草綱目、驢。釋名、驢ハ臚也。臚ハ腹前也。馬力ハ在レ膊、驢力ハ有レ臚。集解、臚、長頰廣額磔耳、修尾夜鳴應ス更ニ、性善ク駄負、有ニ褐黒白三色一

【一名】

宇佐支宇麻

本草類編曰、驢屎。和宇佐支宇麻乃久曾。倭名鈔曰、驢。和名宇佐岐無麻

うさき馬

大原山家記曰、谷川ながれて驢上岩をひたせり。長嘯へうさぎ馬の昔の望いかならんいはほにもさく花の曙。言塵集曰、うさぎ馬とは驢馬之。漢塩嚢曰、うさぎ馬、ろばゝ

【集註】 日本書紀曰、推古天皇七年秋九月癸亥朔、百濟貢ニ云云驢一疋一。齊明天皇三年九月、西海使小華下阿曇連頰垂、小山下津臣傴僂自ニ百濟一還、獻ニ云云驢(ウサギムマ)二箇一。續日本紀卷第十一曰、聖武天皇天平四年夏五月、新羅使金長孫等拜レ朝、進ニ種々財物、幷驢二頭一。日本紀略曰、弘仁九年正月丁酉、太宰府言、新羅人張春等十四人來獻ニ驢四一ヲ

【形狀】 ○本草啓蒙曰、驢。形馬ニ似テ小ク、褐色、脚短シ、耳長ク上立ス

騾

本草、時珍曰、騾。大於驢而健於馬、其力有腰、其後有鎖骨下能開、故不孳乳、其類有五、牡驢交馬而生者騾也。牡馬交驢而生者爲駃騠。牡驢交牛而生者爲馲䮕。音它陌。牡牛交驢而生者爲騗𩧉。牡牛交馬而生者爲駏驉。今俗通呼爲騾○青騾、白騾見字典

【集註】日本書紀曰、天武天皇白鳳八年十月甲子、新羅遣阿飡金項那、沙飡薩纍生朝貢也。調物云云騾。朱鳥元年夏四月戊子、新羅進調從筑紫貢上云云騾一頭。續日本紀卷第十一曰、聖武天皇天平四年夏五月新羅金長孫等拜朝、進種々財物、幷騾二頭

【形狀】園太曆曰、延文元年十月廿四日、天晴、只存來雜談之次云、武家遣關東使者歸京來鹿毛馬、其躰似牛尾如例、又鳴聲如牛、起伏自後足獻宰相中將、即立厩賞翫、而又有辰可然之沙汰追出云々

良久太乃宇萬（ラクグノムマ） 倭名類聚鈔

【漢名】駱駝 本草

爾雅翼曰 駝外國之奇畜、背有兩峯如鞍、其足三節、其色蒼褐負物至千斤、凡有負載輒先屈足受之。本草時珍曰、駝狀如馬、其頭似羊、長項垂耳、脚有三節、背有兩肉峯、形如鞍形、有蒼褐黃紫數色

【一名】

良久太乃無萬

天文写本和名抄○和名鈔曰、駱駝、洛陁二音、良久太乃宇萬

【集註】日本書紀曰、推古天皇七年秋九月癸亥朔、百濟貢駱駝（ラクダノムマ）一疋云云。同二十六年秋

八月癸酉朔、高麗遣レ使貢ニ方物ヿ因以言、隋煬帝興ニ三十萬衆ニ攻レ我、返之爲レ我所レ破。故貢ニ獻俘虜貞公普通二人、及鼓吹弩拋石之類十物、幷土物駱駝一疋ヿ。齊明天皇三年九月、西海使小華下阿曇連頰垂、小山下津臣傴僂、自ニ百濟ニ還、獻ニ駱駝一箇ニ云云。天武天皇白鳳八年十月甲子、新羅遣ニ阿飡金項那、沙飡薩藟生ニ朝貢也。調物云云駱駝之類十餘種

さかう 薫集類抄 〔漢名〕麝香 本草

本草、弘景曰、麝形似レ麞而小、黑色 〔一名〕しやかう 室町殿行幸記曰、御引物、しやかうのへそ十、女中よりの御引物、しやかうのへそ三十。永享御幸記曰、麝香へそ十。從ニ御臺ニ參る物、御沈、御麝香のへそ卅。新猿樂記、蘭麝薫レ衣。玉造曰、翠麝之薫（ニホヒ）招ニ百花ヲ而餘ニレリ室中ニ。弁内侍日記曰、丁子しやかうすりつけ○頓醫抄曰、麝香當門子大ナル麝香ノ大豆ナリ。本草集要曰、當門子、麝香中如小豆作丸者是也 〔集註〕 明月記曰、正治二年十一月廿七日、私相示云、此御手箱內有薫物、是ハ靈香、麝香など不淨物ハ不交、供養香トテ別被合可レ也。健仁三年十二月十日云云銀薫物筥三、入薫物麝香兩三褁、紅薄樣爲火鉢下、納綿五百兩。寛喜二年六月廿一日、十三日行幸、被置物、薫物沉麝。十一月十四日云云又有射香。十二月十一日、仁和寺內ミ御贈物相門被調獻、錦埋火桶。銀鉢砂金、以紅薄樣褁之、麝香二十臍爲火。百練抄卷第八曰、承安元年七月廿六日、入道大相國進ニ羊五頭麝一頭於院ニ。類聚雜要曰、乙筥納香壺銀壺四口、納一口麝香、手筥一合、麝香加口。十訓抄曰、武正と云舍人の、かなしくしけろ子の頬

ふ事ありて、麝香を求めけるに、善を盡得ざりければ、とかく思ひまはしけれど、さるべき人も心のそこさばかりにこそと、をしはかられて、色に出ざりけり。思かねて侍從大納言(行成)ばかりこそ優(ゆたか)の人におはすれ、さり共と思て、かしこに參りて、中門の方にたゝずみ見入たれば、ことのほかに古くからさびたる家の、寢殿のすみ所〴〵破れたるに、空だきの香心にくゝかほりて、まことに優なり。とばかり有て、扇をうちならして、はしがくしのまにすゝむ。何事にきたられたるぞと問給ければ、しか〴〵事の侍る也、と聞えけり。まづ世中の物語などし給けるほどに、みすの破より見ければ、白き衣赤き袴き給て、うやゑぼししてぞ居給たりける。出むとしける時、紫の七重うすやうに、藥つゝみにをしつゝみて、なげいだされたりし。心にしみて優に覺えしと語り侍りける。東大寺別當次第曰、永曆元年云々次、依宣旨麝香五兩進上、其代銀提一口被施入、其數二百五十兩。太平記曰、三番の頭人は云々麝香の臍三充副て置。雲井御法曰、しやかうのへそ、いろ〳〵のこそでども數をしらず

形狀

薰集類抄曰、ざかうは、くじりたるに、はひしれたるやうなるはわろし。くじりあつめて、かはや毛などのまじりたるを、よくえりて、茶碗のつきなどにいれて、いしのすりこぎなくば、やなぎのきの、かれたるして、すりくだきて、ふるひて、香どもみなあはせふるひて、うへにかきまづる人も有、されども、ことものども、あまづらにひぢくりて、すこしつきて、のちにちいさくひきゝりつく、まさなきたとひなれども、もちゐるとてくふものゝあむに、さすやうにさしあつめて、をしまろがして、のちにつきあはすべし、いたくつきあらがすれば、かうすといふ、香なきざかうをば、水にひたして、久しからずして、くちなはのかは(皮)をもちて、まきつゝみて、きよきつちをはらひて、ざかうをゝきて、その

うへにちいさき茶碗をうつぶせて、ところ／＼に火をつきて、ひさしからずしてとりすてゝ、すなはちあたたかなるわたにつゝみて、これをおさむれば、かをます。塵添壒囊抄曰、麝香事。江師ノ記曰、麝香ハ非ス猫ノ形ニ、鹿ノ類也。仍文字モ、鹿ヲ随ヘタリ。臍ヲカユガリテ、足ニテカクニ落ル也。其落タル所ニハ、草モ不レ生ト云テ、實ニ此ノ麝香ハ希ナル者也。此麝香ニ心結香トアリ、是上品ノ香也。縦ヘバ人ニ逐レテ走ルカ、水ニ落入テ死ヌ。其人不レ知レ之ヲ、久成テ餘ノ所ハ、皆解失タルニ、心ノ臓固リテ、水ノ底ニ殘レルヲ、心結香ト云、譬キ事可レ喩レ物ナシト云云。福田方曰、麝香世ニ眞者アルコト万ガ一ナリ。紅紫二色アリ、味苦而辛者ヲ佳トス。又云、研テ須ク少水ヲ着ハ自然ニ細ナリ。必シモ不レ羅

麝香猫 塵添壒囊抄

漢名 靈貓 本草

形狀 塵添壒囊抄曰、唐ノ繪ニ猫ノ姿シタル獸ヲ畫ルヲ麝香ト云、字ノ作異ナリ、如何。誠ニ不審ノ事也云云

西使記曰、香猫似土豹糞溺皆香如麝。本草藏器曰、靈貓、狀如レ貍、其陰如レ麝、功亦相似

然ニ今繪ニカケル如ノ猫姿シテ香シキ獸ヲバ、靈猫ト云。又蛉狸共云。其陰殊ニ其香麝香ノ如シ。此獸ハ雌雄別ニ无シテ、只陰ヲクホメテハ牝トナリ、陰ヲ顯シハ牡ト云リ。喩ヘバ五種不男ノ中、半月ノ類ナル者歟。昔シ麝香トテ、日本ヘ渡ルハ皆是也。其別ヲ不レ知者ハ、偏ニ此ノ靈猫ヲ、麝香ト思ヘリ。尿ヲ拭ヘル紙モ麝シカリシ也ト云云。明月記曰、嘉祿二年二月七日、朝宗清法印送ニ生麝一。其ノ休偏ニ似タリ猫ニ、其ノ頭細長シ、於テ

レ尾ニは口虎毛ノ猫也

麞

本草、時珍曰、麞似レ鹿而小、無レ角黃黑色、大者不レ過ニ二三十斤ハ雄者有レ牙出ニ口外ハ俗稱ニ麞牙ハ其皮細軟勝ニ於鹿皮ー

【集註】日本靈異記曰、牛羊麞鹿驢馬等中 ○白麞 延喜式曰、白麞、白鹿之流

貘

爾雅曰、貘ハ白豹。註、似レ熊小頭、庳脚黑白駁能舐ニ食銅鐵及竹骨ハ骨節強直中實少レ髓皮辟濕

【集註】類聚雜要曰、鞆莒。乙身納銀小莒廿一合ノ內、十合、師子形二、貘一。犀熊鹿靈羊鶴龜鳩、已上銀造之

白澤牛　古今著聞集

小知錄曰、白澤軒轅本紀、黃帝登恒山、於海濱得白澤、神獸能言、因問天下鬼神之事○延喜式第二十一曰、治部省。祥瑞、白澤、一名澤獸、能言語、知ニ万物情ー

【集註】著聞集卷第十一曰、又鬼間の壁

に、白沢牛をかゝれたる事は、むかし彼間に鬼のすみけるを鎮られける故にかゝれたる事とは申つたへたれども、たしか成説をしらず

可水角 寶物目錄

集註 阿弥陀院寶物目錄曰、可水角、一口徑三寸五分、長一尺六寸

酋耳

通雅曰、酋耳騶吾、瑞應圖云、酋耳似虎絕大、不食生物、見虎豹卽殺之、太平則至、晏純曰、卽騶虎也、白虎黑文、尾長于身

集註 延喜式曰、酋耳。身若二虎豹一尾長二於身一食二虎豹一

角端

物理小識曰、又有二獨角獸一能二人語一蓋角端也。外國竹枝詞曰、濁石元始祖駐レ師見二一角獸一作二人言一耶。律楚材曰、此角端也

集註 延喜式曰、角端、日行万八千里、能言語曉二四夷言一

天鹿 延喜式

物理小識曰、阮霧靈曰、辟邪天祿蓋天鹿也。水經註曰、有二天鹿辟邪一、小學紺珠曰、六獸熊虎赤羆天鹿辟邪云云。華夷鳥獸考曰、天祿獸也。案今鄧州南陽縣北二有二宗資碑一、旁有二兩石獸一、鐫二其一一曰二天祿一、一曰二辟邪一、據レ此天祿辟邪並獸名。正字通曰、天祿獸名。西域傳烏弋山離國有二桃拔一、一名符拔似レ鹿長尾、一角者爲二天祿一、二角者爲二辟邪一

集註　延喜式曰、天鹿。純靈之獸也。五色光耀洞明、一角長尾

比肩獸

爾雅曰、西方有二比肩獸一

集註　延喜式曰、比肩獸。前足鼠、後足兎、不レ比不レ行

九尾狐

集註　延喜式曰、九尾狐。神獸也。其形赤色。或曰、白色者如二嬰兒一

唐牛　水左記

集註　水左記曰、承保四年七月廿三日、早旦參高倉殿、今日御逆修御念佛始也云々、金色阿弥陀三尊、豫有佛壇、彫唐牛象鏤螺鈿

異獸類

鵼 平家物語

字典曰、鵼。唐韻苦紅切。集韻、枯公切、並音空。唐韻、鵼怪鳥出字統。正字通曰、鵼。舊註音空、怪鳥。按怪鳥皆謂之怪、不必以空立名、篇海曰、鵼見字統誤也

〔集註〕平家物語巻第四曰、鵼の事

云〻ことに仁平のころほひ、こんゑのゐん御ざい位の御時、主上よな〳〵おびへさせ給ふ云〻御なうは、うしのこくばかりの事なるに、東三條のもりの方より、くろくも一むら立きたつて、御殿の上におほへば、かならずおびへさせ給ひけり云〻源平兩家の兵の中をえらませられけるに、此よりまさをぞえらび出されたり云〻ちよくせんなれば、めしにおうじてさんだいす。よりまさたのみきつたるらうどう、とをとふみの國のぢう人、いのはやたにほろのかざきりはいだりける矢おはせて、たゞ一人ぞぐしたりける。我身はふたえのかりぎぬに、山鳥の尾をもつてはいだりけるとがり矢二すぢ、しげとうの弓に取そへて、南殿の大床にしこうす云〻あんのごとく、日ごろ人の申すにたがはず、御なうのこくけんにおよんで、東三條の森のかたより、黑雲一むら立來て、御殿の上にたなびいたり。よりまさきつと見あげたれば、くもの中にあやしき物のすがた有云〻よつひいて、ひやうとはなつ。手ごたへしてはたとあたる。えたりやおうと、矢さけびをこそしてんげれ。いのはやたつとより、おつる処をとつてをさへ、つかもこぶしもとをれ〳〵と、つゞけざまに、こゝ

の刀ぞさひたりける。その時、上下てん手に火をともして、是を御らんじ見給ふに、かしらはさる、むくろはたぬき、尾くちなは、手あしはとらのごとくにて、なくこゑ、ぬえにぞにたりける云々さてかのへんげの物をば、うつぼ舟に入て、ながされけるとぞ聞えし

獨犴 延喜式

倭名類聚鈔曰、獨肝。今按、和名未詳。但本朝式云、葦鹿皮獨犴皮云々犴音如簡、此名所出未詳

【今案】覺二菴筆記曰、獨肝牛肉食之殺人牛食蛇者獨肝。農圃六書曰、河豚魚其毒在肝、若有斑痕及獨肝燕尾之類俱當棄之

【集註】延喜式卷第五曰、齋宮。造備雜物、獨犴皮二張。同卷第二十三曰、民部下。交易雜物。陸奧國、獨犴皮數隨得。出羽國、獨犴皮數隨得

雷 扶桑略記

【漢名】雷獸　【今名】カミナリニ附ケモノ

倘湖樵書曰、雷獸骨擊鼉鼓、聲聞五百里。寄園寄所寄曰、霹靂之中亦有物焉、其形猴而小、尖嘴肉翅、雷收隨後亦入蟄。雷民傳曰、嘗有雷民因大雷電空中有物豕首鱗身狀其民揮刀以斬。其物踣地。血流道中而震雷益厲云々雷民圖雷以祀者。皆豕首鱗身也。詩經類考曰、雷公形猪首手足各兩指執一赤蛇嚙之、貞元四年大雷雨墮于宣州民見之俄而雲晴失去時圖而傳之。群芳譜曰、語錄扶風楊道和于田中鉏禾天雷雨止桑樹下靂下擊道和

舟ノ下大系ノ太作レ便アリ

以鉏格ノ斫其左股遂落地不得去長三尺餘色如丹目如鏡角如牛狀如畜頭如獼猴。物理小識曰、雷乃太陽之氣。升于雲中爲陰気所束陽気屬火雲気屬水。以水淬火。與相激爭。故發爲震撼而觸之者碎。以其陽気。或云雷有如鳥如豕如猴諸異相。能殺人此乃陽気所生之物。乘陽而出故渾身屬火。正字通曰、王充論衡曰、圖畫之工圖雷之狀如連鼓形、又圖一人若力士謂之雷公、左手引連鼓、右手椎之○寄園寄所寄曰、豹班車賊戕殺老少江畔閩殺天忽皆黑大雷雨獻賊怒曰咱老子欲殺人天不肯耶燃巨砲向上擊之雷雨遽止殺人如故蜀碧卷二曰六月二十日天大雷雷晝晦獻怒架飛礮向天擊之天爲之霽

集註 扶桑略記第三曰、敏達天皇。此天皇時、尾張國阿育智郡、有二一農夫一。夏日漑レ田、于レ時、天曀々雷雨、避二雨樹下一、支レ耒而立、俄而雷墮二其前一、狀如二小兒一、擧レ耒將レ擊、雷語レ夫曰、汝莫レ害レ我、々必報レ汝、夫問レ雷云、汝何以報レ恩、雷答云、我令三汝生二異兒一、以レ此報レ汝、今所レ望、爲レ我造二一楠舟一、其中盛レ水、泛以二竹葉一、急速與レ我、遂如二雷言一、以レ舟与レ之、雷得レ舟須臾登レ天、居數月、又妻有レ身、及レ期生レ男、其體可レ驚、靈虵纏二繞兒頭一凡二匝、首尾相垂、併垂二於後一、父甚異レ之、童子年十有餘、甚有二膂力一、能擧二方八尺石一、投二之數丈一、及レ投二其石一、作レ力、足迹入レ地三四寸許云云

形狀 源平盛衰記曰、二町許隔テ見給ヘバ、黑雲經俊ヲ引廻シ、雷ハタト鳴カトスレバ、又雷ノ音ニハアラデ、ハタト鳴ヲトシテケリ。ヤガテ空ハ晴ニケリ。其後小松殿人々相具シ給テ、近ク寄テ見給ケレバ、經俊ハ散々ニサケキレテ、ウツブシニ臥テ死ニケリ。太刀ニハ血付テ、前ニ猫ノ足ノ如ナル物ヲ切落タリ

古名錄獸部卷第七十四　終

古名錄 六　日本古典全集之內

編纂者　正宗敦夫

發行者　東京市豐島區長崎東町三丁目一六一
合資會社 日本古典全集刊行會
代表社員 長嶋東一

印刷者　東京市豐島區長崎東町三丁目一五八
不二製版印刷所 高瀨淸吉

發行所　東京市豐島區長崎東町三丁目一六一
合資會社 日本古典全集刊行會
振替東京七三〇三二

昭和十一年五月十五日印刷
昭和十一年五月廿五日發行

【非賣品】